
たまごどんぶり

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たまごどんぶり

【Nコード】

N4237M

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

『ザ・ライダー・プール』でゴールデンクルーとして再結集した、霧島飛竜、斉藤歩、高柳優美。これは、まだ操船学校の学生だったころのそもそもの出逢いの物語。

NexGass（新香港航空宇宙船操船専門学校）では、三年次履修生から、全校挙げての実習訓練に参加することになる。

実習期間を通して生死（成績？）を共にするクルーが発表されたその日、シミュレータでの成績は抜群なものの、実習は初めてで、

サードシーターに本来なるべき筈の霧島飛竜の名前は、Sランク
ルコマンダーのCDRだった。

強烈な個性の航空科の先輩たちが、離脱言したり威しをかけた
りする中、苦勞知らずの御曹司、霧島飛竜を筆頭に、初実習組みは
離れの瞬間を夢に駆けずり回る。

ルビ多めにつきChrom、IE 又は縦書きPDF推奨です。

Vol.1 『ザ・ライダー・プール』

Vol.2 『たまごどんぶり』（本作）

Vol.3 『トラブル・バーゲン』（未公開）

Vol.4 『モグラ叩き』 課題提示編、暗中模索編、課題提出編

本編は『まぜまぜのべる』でノベルゲームとして書かれたもので
す。物語の連続性を楽しみたいというリクエストにより、ノベライ
ズ決行。がしがし更新します。

ゲーム作成時には、コンクールのお題として『学園モノ』『冬の
イベント』『ぶざまだな』の三縛り付き。

尚、この『まぜこん』において、優秀賞をいただきました。

ブローグ 独りたまどん

たまごどんぶり。

それは悲しい現実を僕につきつける最強のメニュー。
僕は思う……。

いつか……

きつといつか……

目の前にある、小さいフライパン。

水と出汁^{だし}、それから手製のなんちゃってカエシを適当に入れて火をつける。

ぷつぷつと泡が上がってくるのをじっと待つ。それほどの時間は待たされない。

だって……所詮は悲しい一人前。

それから、ゆつくりと僕は卵を割る。（こっそり・・・を入れる）

卵黄と卵白を切るようにかきまぜる。ふつふつのフライパンに回し入れる。菜箸でかつかつとかきまぜる。ふちから卵が固まってくるのを見極める。

ゆつくりと十まで数えて、火を止める……。

* * *

極東アジア国所有のスペースコロニー・ネオシャングン（新香港）
。そこには極東アジア国立で五つしかない航空宇宙船舶操船専門学校
の一つがある。

そこは極東アジア国にある公立の操船学校の中でも、ずば抜けて
就職率が高いことで知られている。その理由は単純だ。その卒業生
たちが即戦力たりうる高いクオリティを有しているからだ。だから
そこそ航宙業界の方も安心して求人を出せるということに過ぎない。

高い技術レベルの卒業生を安定して供給する学校。ということは、
その一方には凶悪とまで言えるほどの充実したプログラムを、直球
勝負でガンガン学生に打ち込むという学校の教育指導理念に気持ち
いいまでに貫かれている。

数少ない公立の操船学校の入学試験という超難関を突破したから
といって、学生たちはのんびり気を抜く隙き間もない。入学式どこ
るか、オリエンテーションに行ったその日から、容赦なくカリキュ
ラムはスタートし地獄のようなと表現すべき日々が始まるのだ。

そんなわけで、せっかくこの学校の門戸をくぐったところで、生
半可な覚悟でいればその多くが討ち死にするしかないという厳しい
世界。結局は道半ばで挫折し去っていくことになる者も少なくない。
だからこの学校は、入学生と卒業生の数の差がとんでもなく多いこ
とでも又、有名であったりする。

『極東アジア国立新香港航空宇宙船舶操作運用技術者育成専門学

校』という。漢字が延々と続くこの学校の正式名称は、まず普通は在校生にすら認知されていない。皆、Neo Xiang-Gang Aerospace Special Schoolの頭文字を適宜繋げてNexGasと呼ぶのが普通だ。ネックスギヤス

ここでいう「航空」というのは、一般に言う大気圏行く飛行機のことではない。宇宙から地球へ降りる、また、地球から宇宙へと飛び立つスペース・シャトルの操作技術に特化したものことだ。一般的に地球と宇宙都市間の物流は、大砲のようなもので地球でしか入手できない諸物資を打ち上げるマストライバー・システムが担っている。

人が運転手として搭乗するバージシャトルと呼ばれる小型の貨物船で、大事にそして丁寧に運ばれるのものは、ヒト・生物・貴重品・精密機器などがあるが、地球 大気圏外行路における全物流量の数パーセントに過ぎない。

総物量そのものがそれほど多くの担い手を必要としていない分野の仕事であるということは、その育成機関も多くある必要がないということになるし、もちろん就職先の企業にしても限られてくるということだ。

それなりの人口規模を持つ極東アジア国といえども、そんな訳でNexGasと呼ばれるこの学校は、『バージシャトルの操船技術』を習得することができ、極東アジア国内で唯一の存在ということになる。

つまり、地球の重力圏と、宇宙空間を行ったり来たりするシャトルの運転がしたかったら、難関だからといって尻込みしている場合ではない。何かなんでもこの学校を目指すしかないのだ。

僕 きりしまひりゅう 霧島飛竜は、宇宙船乗りではなく、バージ・シャトルに乗

って地球に突っ込んでいくライダーになりたかった。だから、必然としてここを目指すしかなかった。正直な自覚として記憶力にも思考力にも、どうがんばっても平均的という水準に甘んじるしかない持ち物しかない。だけど珍しく、諦めたりなんかしなかった。難関を目指すには、努力と努力と努力しかなかったけれど、無事この学生になったことで、努力は報われたのだという確かな自信を彼は手に入れた。

一般にはあまり広く知られていないことだが、バージシャトルというやつは、大気圏内専用飛行機と似て見えるが、実は推進装置として搭載している液体ロケットエンジンは、行くにも帰るにも、離床時（発射台から打ち上げられること）にしか使用されない。大気圏突入後はグライダーのように滑空する。

それからシャトルってやつはとがった方に進んでいくようにしか思えないが、紛らわしく飛行機と似た形をしていることによるイメージを裏切って、大気圏突入時には頭からではなく、空気抵抗を利用して減速するために、耐熱タイルを貼った腹から進むのだ。

もう一つついでに言っておくと、飛行機みたいな部分をシャトルと呼ぶと思っている者も多いけれど、あれだけを指す場合はオービター（軌道船）って呼んでみるといい。

途端に操船学校の生徒っぽくなると……思わないかい？

* * *

これから僕の生まれて初めての総合実習訓練 正確には、飛び立つ前 が、どんなだふうに始まったかを聞いてもらいたいと思

ってしゃべろうとしてるんだけど、それを始める前に、これがうちの学校の三つの柱っていうやつについて、ちょっと話しておくことにするね。

NexGASSってところで具体的に僕らが何をやってるのかを知つてもらうと、何かと話しやすいからね。まあ、細かいことを気にしない人は、この辺りはさらっと流しておいてくれた構わないけどね。

僕にかかわってきた連中が、どういうことをやってるのか分かってると、思いつくままにあちこちぶっ飛ぶことが多い、僕の話もちょっと分かりやすくなるかもしれないからね。

NexGASSには大きく分けて、操船、船舶、運行という三つの専攻部がある。いわゆる三本柱と言われているアレだ。

一本目の柱にして、一番ウチの学校らしい花形（多分）の部が、航宙と航空の船舶の操作技術を学ぶ、僕が所属している操船技術部。当然、宇宙空間での船舶運航に特化した航宙船舶操船技術は必修科目なのだけれど、専攻として、航空機（大気圏と宇宙空間を往復するバージシャトルのことだ）操船科と、大型貨物操船科と、旅客船操船科に分かれる。

実際の船舶の運行は、基本的に自動航宙プログラム（オートクルーズさま）がやっていることだけれど、モノが人工物故に、時たま重大なトラブルが発生する緊急事態が起きることは実際として避けられない事実だ。そのときに冷静に対応できるがために、人間を乗り込ませているわけであるから、宇宙空間だの、大気圏突入などを実際に手動でクルーズできなければならぬ。

今までの一、二年次履修課程では、理論を教室で学ぶほかに、当然操船実技もあったけれど、当然専らシミュレーターで行うのみだった。失敗したら、場所が場所だけに命にかかわる。本来宇宙というところは、生身のイキモノが生存するのに適した環境ではないのだ。これが地球の海を行く船だったら、座礁したり沈没したりして海に投げ出されても、救助が到着するまで何とか粘れるかもしれないけれど、宇宙空間とか大気圏突入時とかいうのは、船外にそもそもヒトが存在できるようなところじゃない。たかが訓練で学生を死なせるわけにはいかないから、もちろんシミュレーターでガンガン死ぬ体験をすることになる。

うちは女生徒もそこそこいるけれど、肉体を鍛えてナンボの乗船クルーを育てるところだけあって、非常に逞しい個性的な人が多い気がする。

そして、他部の連中は、基本的に僕たちのことを『運転手さん』と呼んだりするけど、僕が専攻している、大気圏への往復船を扱うシャトルライダー養成機関である航空科に限っていえば別の渾名あだなが存在する。難しいシミュレーターで毎日のようにだれかがデータの死んでいることを揶揄からかってだらうけど『墜落科』。

それから二番目の柱が船体整備士や微細重力下作業士を養成する船舶機械部。大きくは、微細重力下での活動に特化したミッションスペシャリストを養成するMS養成科と、船そのものや推進装置（車でいうところのエンジンだ）を整備・保守する宇宙船舶機関士養成科がある。

MS科はもちろん、人工物である以上、劣化などから免れる術を

もたないスペースコロニーの保守に、新しい技術の開発の実験支援に、老朽化前に築造されなければならないスペースコロニーの建設現場に、人間可住星上でのテラフォーミングドーム建設にと、本当に活躍の場はそれこそ数えきれない。

微細重力下作業は多岐にわたって活躍の場があり、養成のための専門学校も多く存在する。けれど、うちに来る連中がやっていることは、航行中の船舶の外で修繕や保守作業を行うのだ。察するに多分難易度として操船学校のMS科は、微細重力空間建造物取扱技術者を養成する学校にあるものよりも、多分優秀に違いない。本当に多分ね。

MSの連中は、僕たちが余程のことがなければ出ることがない宇宙空間に、薄皮一枚に等しい宇宙服スベジャケを着込んで命綱だけでつけて出て行くのだから、もちろん、事故も多いし危険な職場だ。

そんなわけで、コロニーなどの宇宙空間に存在する大型の人工物の建築そのものについて学ぶ学校にあるMS科には、そこそこ女学生もいるそうだけれど、うちの学校のMS科は、過去も現在も、女学生の卒業者数はゼロ記録を更新している。

別に女学生の受験を認めていないわけでないから受験生はたまにいますし、実際数年に一度くらいは女の子も合格するらしいのだけれど、全六年の課程がおわるまでもうも保たないらしい。どれだけ過酷な訓練をしているのか、考えるだけでげっそりする。

機関機械科の方には、女の子も若干いるらしいが、それでも、おぞましい男の園であることは間違いなく、潤いに欠けていること甚だしい。近寄りたくないとはまでは言わないけれど、混ざりたいとは思えないな。

それから、逆に女の子がいっぱいいる、うちで唯一華やいだ雰囲気のある運航管理技術部。下品でいささかキタナイ響きだけれど、学部蔑称はウンコ。

船舶に搭乗したりあるいは管制室での通信業務全般を学ぶ通信技術科。管制技術を総合的に学ぶ管制技術科。それから、船舶の運行制御や軌道計算による行路確定、そしてそれをオートクルーズにプログラムとして組み込む総合情報技術科。

彼らが生息している棟は、完全に自分たちがいるシミュレーターで満たされた棟とは別になっている。普通の大学みたいにも見えなくないメンバーの顔つきをみれば、殺伐としたものの気配は少なそうに見えるけれど、実際の中に入ったことはないから実体はいま一つ掴めない。

彼らが書く運行プログラムは、僕たちのシミュレーターに入れ込めるらしい。実際に人間が必要になる場面は、オートクルーズ様では制御しきれない「何か」がおこったときなのだから、操船科の指導陣は、初学のものが書くエラク酷いプログラムも平気でシミュレーターに送るように情報科の教授に内々に依頼しているという噂がある。

それが本当なら、シミュレーターで元気に死んでいる僕たちを殺している元凶なわけで、僕たちは連中を、情報の連中のことを特別に『死神』と呼んでいる。

そして、死神と闘う僕たちを、常に支えてくれるのが、管制技術科の連中だ。彼らは全ての情報を把握して、その局面でどうしたらいいか、何をすべきなのか、そしてどうすべきかでないかを的確に指示してくれる。

僕たち運転手は彼らを、古の地球で航空輸送華やか^{いにしえ}りしころ、空港の管制塔にいたときの、そのままの名称で彼らをこう呼んでいる

司令塔タワー

と。

1・クルー組み

シミュレータが並んだ廊下を一気に駆け抜けて、勢いで学部棟の階段を駆け下りた。最後の三段は、面倒だったので飛び下りた。

踊り場に着地すると、そばを歩いていた女の子が、野蛮なケダモノを見るときのだれかという表情になった。彼女はきっとコロナー育ちなのだろう。細身で幼い印象からすると、1年生に違いない。Gアップしきれてないコロナー出身者がこんなところで不用意に飛び下りたりしたら、下手をしたら骨折してしまうことは想像に難くない。

地球^{テラ}Gが支配する大気圏と、微細重力が支配する宇宙空間を行ったり来たりする運転手の育成機関の新香港航空宇宙船操船学校（NexGASS）は、ルナGとテラGの中間ほどより心持ち地球に近い人工重力で生活圏が構成されている。ただの操船学校ならいざ知らず、怪力極まりない我等が故郷の重力件にがつり抱きしめられようって連中も育てていることは、重力環境的に他のコロナーより相当、重量感たっぷりに作られている。

なぜすべての都市がテラGで営まれないのかと考えたやつは、人工物ってものの耐久性というものに対する過信を止めた方がいい。

SFでお馴染みの人工重力発生装置は待望されるものの、まだ実現していない夢の（絵空事の？）技術のひとつだ。遠心力という手っとり早い擬似重力発生装置が天然に存在しているのが、その開発が急がれない状況を生み出しているに違いない。ぐるぐるぶん回せば、バケツに入った水がこぼれないというアレと同じ原理で、宇宙都市は作られている。

幾ら空気抵抗がないとはいえ、発生させたエネルギーに巨大人工物の回転という力に伝えるためには、作り出されたエネルギーを回

転させる装置に伝えるという過程が必須になる。そこは接触している必要があるから、地球なみの重力を作ろうとすれば、機械部に掛かる物理的負荷が当然増えて、接触部の磨耗は速くなるし、劣化速度は当然加速する。維持に掛かるコストが莫大なものになる。

じゃあ、微細重力で統一したらどうか。家の中の一切のものが置いた場所に留まらずに、好き勝手にふわふわしているという力オスな状況を想像すれば簡単だ。幾ら片づけるのが嫌いでゴミ屋敷に住める人間でも、適当にものが床に落ち着いている環境の方がずっと住み心地がいいのだ。ちよつとしたものを、ちよいと仮置きすることとが一切できない生活というのを考えてみれば、微細重力下の都市なんてどれだけナンセンスがよく分かんと思う。

おつと話が盛大に逸れた。

地球育ちの僕にしてみれば、宇宙育ちの彼らにしてみればずつしりと重いこども、随分身軽に動けて、すわスーパーマンかと錯覚しなくなるってほどに体が軽く動く快適な環境だ。

まあ、ここにきて三年目。Gダウンは完全に完了しているから、今故郷に帰ったら、二年以上もここにいる所為で、骨密度も激減した上にめつきり重量化した体を持て余すことになるのは間違いないけれど、ここにいる間は地球育ちの特権が満喫できる。

テラグルームでのしんどくて単調な訓練を欠かさないでいる効果もあって、二、三段でなく階段の半分ほどの高さからダイビングしたところで、どこの骨もびくともしないはずだ。

幸いなる少数（地球の居住許可をもっている者のこと）を両親に生まれてきたせいで、僕はテラG育ちだ。自力で勝ち取った地球居住権でならば、胸を張って呼吸ができるんだらうけど、たまたま両親がそうだっただけで特権を享受してきたっていうのは、些かなら

ず居心地が悪いものだ。

僕は今、大気圏と宇宙生活圏を往復する解シャトルライダー^{バージ}を目指している。夢がかなえば、僕は自信を持って地球に立てる。

さてと、そろそろ話をスジに戻そう。僕があの日そんなふうにいっていたのには、訳がある。

放校処分をくらわない程度の、真つ当な成績を持って三年次履修生にコマを進めることさえできれば、実際の宇宙船を使って実習訓練するという、総合実習訓練への参加資格ができるんだ。この先、学校にいる限り、卒業までの毎年、上半期はシミュレーターと実践理論を学び、下半期は今まで培ってきた専門を活かして、それぞれの自分の専攻分野でのプロとして、他の能力を持っている仲間と協力しながら船を運行する。

本当の航宙。

ホンモノの地球。

僕たち運転手にとって、憧れはもちろん、操船の全てに対して配する権利を持つコマンダーシートに座ることだ。そして、コマンダーに何かあったとき、その代わりを務めることができるパイロットシート。そして、完全に見習的な立ち位置にすぎないサードシート。

シミュレーターは凄くよくできていて、大気圏突入時に襲われる荷重までもリアルに再現する。だから、筋肉弱者のコロニー出身者が、大気圏突入シミュレーターをしようとしても、体力的に限界がある。僕は重力強者という利点を持っているせいで、体力的な意味でだけなら大気圏突入シミュレーターをハンパでない数繰り返せる。

実際のバージシャトルライダーと同じ、法定許諾時間をオーバー

ーすることはできないけれど、時間一杯いっぱいまで、僕はコックピットで鳥になる。これで飛んでいる時間数だけでいえば、僕是谁にも負けない自信がある。

もちろん直接船を操作しなければならない状況に追い込まれた場合、操縦桿を握って『運転』することができるのは、コマンダー（略号CDR）だ。その席は、一年目の僕にはとても遠い存在だ。

けれど、二人シフトの三交代、コックピット・クルー六人の中の顔触れ次第では、訓練の終わりには待ち望んだ大気圏突入イベントを経験できる。まずはそれだけで十分だ。

地球育ちだから、当然、あの瞬間は知っているけれど、コックピットの中で、その瞬間を体験できるというのは、憧れであり、夢でもある。確かに遠い。だけど、今の僕には手を伸ばせば届くところにある現実だ。ようやくここまで来た。

同じクルーに墜落科（あつと、自分で言っちゃダメか）のメンツが三人以上いれば、ほぼ確実にどこかのステーションで受け荷をして、地球へ向かう航路が割り当てられるはずだ。そうであってほしいと祈るようなキモチだ。

十二月も終わろうとしている今、普通の学校ならクリスマスを迎えた年越し休暇に入るところで、浮かれているところだろうけど、うちの学校は旧大陸風に年度始まりは九月。だから十二月というのは第一四半期がちょうど終わった辺りになる。どの科を専攻していても学年の初めは、個人的なやり方でシミュレーターにどっぷりお世話になる。

そして五月前までの第二四半期は、操船実習で実際にクルーとなる人たちとクルーとしてのシミュレータ訓練が始まる。

そしてその後の半年は、ホンモノの船に乗る。今日発表になるク

ルーがこの年次の最後まで生死（成績？）を共にするクルーというわけだ。今日は、その組分けが発表される、まさにその日だったんだ。

チームわけ、クルー組み、人によって言い方は違うけれど、それはSランクから始まってA、B、Cというようにランクわけされている。つまり、だいたい同じような成績の連中と組まされるのだ。

教授陣はクルーを組んだら、その後は完全にサポートに回ってしまふ。課題として設定されている目的地（destination）のどこを、どういう航路を組み立てて、どのクルーにやらせるか、それらはウンコ野郎ども……もとい、運航管理の連中の腕のみせどころになる。

目的地と構成されるクルーの顔を見て、ウンコの連中は、目的に至るまでの航路を計算しトリップチャートプログラムを作り上げる。そう、クルー組みが発表になるこの日から総合実習は始まるのだ。このレベル毎のクルー組みというのが、実は大きな曲者^{くせもの}で、それぞれのできることにっぱいっぱいより、ちよつと難しい航路と目的地が示されることが殆どなのだ。つまり、個人能力の足し算以上の結果を出せないと、課題の遂行ができないように最初から仕組まれている。

クルーになったメンツの顔を拝むのに気が逸^{はや}るのは、やっぱりどんな人たちと組むことになるのかという興味が一番だけれど、そのクルーを見ることが、どういう課題が来そうか、それと教授陣からみて自分だどう映っているのかを測る絶好のバロメータにもなる。だれだって、自分の位置を知りたいと思って当然じゃないか。

僕の目的地は、シンプルが総てというコンセプトで構成された校

舎とは違って、威厳というものを意識した重厚な作りになっている教官棟の入り口だ。その掲示板に、実技クルーの顔触れがレトロなことに 貼り出される。時間は正午きっかり。

そんなのはメールでいいと思うのだけれど、直接他のメンバーと顔合わせする、そのきっかけであることが大事で、つまり、これでもいいのだそうなのだ。

チームプレイ。チームプレイ。はつきりいつてやつかいだ。どんなに個人として優れていても、特異な能力者であつても、
「チームプレイができないやつは、現場で役に立たん」というのが、教官サマたちの口癖だ。

だけど、言い返すようで何だけれど、宇宙船乗りになろうなんて人間の集団なんだから、先輩、同級生、どこの顔色を見ても個性的すぎる奴の含有率は異常に高いんだよな。

そう、何だかんだ言つて、チームプレイで事に当たらないといけないという、そもそのそこが、一番難しい課題じゃないかと、そう僕は思ふんだ。

ともあれ、悪名高いウチの現場実習は、とにかく、クルーとしてミッションクリアすることが条件で、ミッション時に役に立とうが立つまいが、団子に評価されるのだからたまらない。

無能な奴と当たらないで済むかどうかは運次第。自分が無能の一番手で、できる人をひっぱるやつかいものとしての役割が当たっていないとも限らない。

本当に緊張する。

チームとしての評価しかないんですか。不公平になりませんか？
無能とガチあつたら悲惨じゃないっすか。

かつてそう、あの佐久間教官に食ってかかった強者が居た。厭味で切れ者然とした悪魔のシムサップの一人、佐久間教官はこのたもったそつだ。

君はエスパーだな。外宇宙で自船が大破しても、君は一人で歩いてここまで帰ってくるって、そう言うんだね？

やっと教官棟に辿り着いたとき、重厚な木製に見える扉が、ちょうど軽い動作音を立てて、消失するように開くところだった。レトロな外観と、普通に浮かれたコロニー仕様のインフラ。ちぐはぐさがウケる。

この教官棟を設計した奴は、きっと洒落がわかる奴だと僕は思う。慣れればどってことないけど、こいつを最初見たときは、笑いが止まらなくなつて苦労した。

扉が消えてゲート状になった入り口から、背の高い用務員さんがすたすたと出てきて、脚立も使わずに手を伸ばしただけで、人の名前がびつしり印刷された紙つぺらを、壁に高々と貼り付けた。

三々五々集まつて固唾を呑んでいた、たくさんの顔が緊張と期待と……多分、不安と強がりもまぜこぜにして、彼の手元を見つめている。

こいつは、ここでしか貼り出さないし、これから1時間しか存在しない。これから半年の生活と、それからついでに成績と、全てを左右するこの組分け発表の場所なのにもかかわらず、たまに、ここにやってこない強者が居るらしい。

そついう奴は、探し出して強引にクルーであることを納得させな

いと、そもそも現場実習という土俵に上がらせてもらえないそうだ。

……僕の名前。……僕の名前。僕がSランクなんて、無理だろうけど、まあ前期の総合評価シートからいって、まあ、Aくらいが妥当かなと思って、忙しくなく表の中に自分の名前を捜す。全く、ケイタイ端末にさくつと自分のチームだけ入れてくれれば楽なのに。

「何だよ。オレんところ、最悪だあ。墜落科の御曹司がいやがるじやんか。実習のオチ、墜落つてので決定じゃん、これじゃ」

背後で素っ頓狂なようできて、毒にまぶされた発言が聞こえる。墜落科というのは、もちろん事故時の乗組員死亡率がダントツ高いシャトルライダーをなんかを指摘している航空科の僕たちを揶揄した表現にほかならない。そして、そこで御曹司などと陰口をたたかれてるのは、間違いなく自分だ。

最低、最悪というのは、こっちのセリフだ。振り返ってやはりと思う。甘ったるい可愛い顔をしているくせに長身で、ニコニコ笑顔で辛辣な口をきく、MS科の名物男、高柳優美って奴がいた。オレのところには御曹司がいるという発言でいくと、僕はこの女たらしと同じクルーということになる。ほんとうに実習一年次から最低に運が悪い。

「俺さあ、宇宙植民地育ちだから、テラGアップ訓練って、いやなんだよねえ。時間かかるし……、しんどいし」

何を甘ったれたことを言ってるんだか、税金泥棒組みのくせして……。

今では「幸いな少数」と呼ばれる人たちしか住むことが許されない人類発祥の地。母なる大地　地球^{テラ}。

宇宙空間で長く暮らしてきたものにとって過酷なものであるその重力環境であっても、譬え大気圏突入というのが、いまだに一番事故多発地帯だとしても。

命をかけて地球へと降り立ちたいと願う者は少なくない。僕たちは母なる星に抱き取られるために、その分厚い大気の中へ飛び込んでいく。

シミュレーターでだけ知っている、そのときのコックピット。隣の人間の声も聞こえないほどの耳を塞ぐ轟音。オービターが軋んでいる確かな気配。上下左右前後ろ。あらゆる方向からやってくる重力という暴力。一番強く感じられるのは上から押さえつけてくるようなやつだ。

窓の外の景色がオレンジ色に縁取られている。機体の外がぐんぐんと温度を上げ、やがて紅く燃え上がる光りを帯びているのが、窓越しに見える。

闇色と群青の境目を越えていく。

通信は生きているけれど、轟音にかき消されてぼそぼそと遠い。それが永遠に続くかのような錯覚さえ覚える。重苦しい時間……。そして突然あの瞬間がやってくる。あの轟音に包まれた直後だからこそ感じる、真の静謐。無音にも似た世界。明るい日差し。

眼下に果てし無く広がるかにみえる雲の波。静けさは、えも言われぬ歓喜に充ちる。地球の、大気圏。　ここは、人類の故郷なのだ。と確信できる瞬間。

そう、僕の大好きな……

大好きな空。

雲の波を突き抜けると、海が見えてくる。シャトルのオービターは、グライダーの要領で滑走路を一路目指して滑空する。静寂は暫く続くのが常だ。皆、大気圏突入の山場を乗り越えたという言い様もない実感を体に染み込ませる。

軋んでくる重力。声を絞り出すために肺をふくらませるのも苦勞する圧倒的な大気の濃さ。全てに潜んでいる命の気配。何もかもが宇宙と違う。

そして、眼をもう一度来し方に向ける。そこには、一点の曇りもないどこまでも続く、

青

* * *

真つ暗闇で、単調な無に近い世界で、機械を弄ったりするのが好きなんてヘンタイ野郎どもから、航空科の生きがいというか、花形訓練である大気圏突入実習を『墜落実習』なんて呼ばれるのは、全く我慢ならない。

「優美ちゃん。墜落科とは言ってくれるわね。私も仲間みたいだから、あんたもしっかり墜落してもらおうよ。最悪の可の評価だっ

て、全員生還が最低条件だから、あんたもGで申し餅にならないように、せいぜい訓練しとくんだね」

と、僕が高柳に突っかかる前に、頼もしいセリフを靴音とともに響かせ、人込みから颯爽と抜け出してきたのは、最高年次である六年生のシェリル真木さんだった。

「真木さんっ」

僕は高柳幸先の良さに興奮しそうになる。我が航空科の最上級生で、大手のシャトル運航会社に就職も決まっている真木さんは、冷静沈着で、姐御肌で、ついでに態度とガタイだけじゃなく、頼りがいももちろんでかくて迫力がある人なんだ。長めの真っ直ぐな黒髪はサラサラストレートなどとソフトに表現するよりは、『真っ直ぐで悪いか馬鹿野郎』と宣言しているみたいな感じだ。荒目の櫛なら刺したところでストーンと床まで直行で落ちるかもしれない。（一応、綺麗な黒髪だと褒めてるつもり……）

肉体訓練が欠かせない航空科のそうでなくても激しい訓練においても、真木さんに付いて行ける奴は滅多に居ない。

ミッシェンのヘッドを結局誰がとることになるのかわからないが、真木さんがいれば、少なくともコックピットクルーに関しては、見苦しいヘッド争いなしだ。

「あゝん、飛竜^{ひりゅう}ちゃん。そのだらしないニヤニヤ顔、許せないわね。あんたには覇気ってもんがないの？ 悪いけど、私、今回のコックピットクルーのヘッドはとらないわよ」

僕の考えを読んだ様にあっさりヘッドは取らないと宣言した真木さんの言葉に、僕はすっかり仰天する。

「何ですか？」

つい怒った様な口調になった。

真木さんときたら、まるで教官連中みたいな達観した笑顔になって、このうたもうた。

「我が校恒例の、世代交代。今回は新人にヘッドとらせるようにつてのが、私たち最終学年のプラス課題なのよね。川瀬教官ときたら、『全部の仕事を自分でやらなきゃ気が済まない奴が現場に出たら迷惑だ』って、こうだもん……」

「真木さんが一緒なんだ。凄くラッキーだなあ」

真木さんのヘッド奪取争い不参加宣言に面食らってる僕のキモチなどまったく無視して、ことさらに明るいう高柳の声がした。

ヘッドを取らないという真木さんに、僕がちよつと虚を衝かれた感じになってるなんて思いの端っこにも引つ掛かってこないに違いない、頓狂なまでに明るい声がする。墜落科の僕と一緒に最悪だと断言した、その軽口の舌の根も乾かぬ内に、高柳優美が満面の微笑みで真木さんに近付き、ついでにその天使もとろかせそうな微笑みのまま、あやつは真木さんの頬に軽くキスをした。

「全くもう、油断も隙もないんだから、優美ちゃん。普通の野郎がそんなことしたら、問答無用で床にめり込ませてやるんだけどねえ」

そう言いながら、ちゃっかり奴の反対の頬に、真木さんは挨拶のキスを返している。

そう。こいつ高柳優美が誰より何より気に入らないのは、フランス人やイタリア人でもないくせに、恋人でも何でもない女性陣と、

挨拶としてキスやハグができるって異能力の持ち主だってことだ。

本当に日系なのかと疑いたくなること甚だしい。

僕なんか、真木さんと握手すらしたことがない。もっとも、格闘技訓練と称して、気まぐれに通行人をぶちかます性癖がある真木さんに、バックをとられてねじ伏せられたことは、一度や二度ではないので、背中に胸の感触をいただいたことはある。

「いつも言ってるでしょ。真木さん。俺は自分の名前嫌いな。ちゃんと、タカって呼んでくれなきゃ怒るよお」

甘ったるい顔をして、しっかり真木さんとのハグに移っている奴の言葉を、真木さんは豪快に笑い飛ばした。

「優美ちゃんは、優美ちゃんでもいいの。で、顔が広いタカちゃんは、ウチのクルーの計器読みは誰だか知ってる？ 斉藤……あゆみちゃんって読む女の子かしら、それとも、あゆむって名前の野郎かな？」

「げつつ。斉藤歩……っ？」

後から女の子の悲鳴が聞こえた。声の方を見ると、ちょっと小柄な女の子が、掲示されてる紙の前で凍りついている。彼女がああ雄叫びの主に相違ない。彼女はしばらく絶句したあと、思い出したように……

「最低だ……」

と、ひと言追加した。

細めの手足は見るからに華奢で、こんな子に大気圏突入させたら、Gショックで死んじゃうのではないかと不安になる。大丈夫なんだろうか。

その彼女は、見た感じから言つて、あんまり年長つて感じがしない。ということは多分、科をまたいでのクルーとしての実習訓練は初体験か、いいところ2年目ぐらいという感じだと思う。

ただ、まったく見かけた事がないし、筋肉のなさそうな華奢な体つきからいって、ウンコあたりで間違いないだろう。

「憧れの真木さんと一緒なんて、超ラッキーと思ってたら、何であいつとなのよお。私って不幸だわっ」

女の子は「あゆむ」と呼んだから、多分、野郎だ。この斉藤なにがしとやらは、そんなにハズレくじなんだろう。僕はちよつと不安になる。

「斉藤……歩が、なんで計器読みなんだ？ あいつなら、どう考えても、来年か再来年あたりのフライトディレクター候補で、飛行管制室クルーに決まりだろ」

高柳の顔が、こころなしか怪訝といった面持ちになっている。ナンパとナンパでできているやつにも、こんな引き締まった顔ができるのかと思うと不思議な気がする。

「知ってる奴か？」

まあ、高柳の知り合いなら、ろくでもないだろうということだけは、想像できるけれど一応後学のために聞くことにする。

「俺と立場は一緒だからな。お前さんたちが蛇蝎だかつの如く嫌ってる、無駄飯食いの税金泥棒組だよ……」

蛇蝎なんて表現が、このキワメツケのアホから出たので、ちよつと面食めんくらった。だけど、僕の口から洩れたのは、ちよつと控えめな愚痴ぐらいだった。

「こいつも……有給野郎かよ」

高柳が言つところの税金泥棒組とは、つまるところ極東アジア国の軍から給料をもらって、出向という形でこの学校に来ている連中のことだ。

軍人というのは防衛大学などへ行ったり、政治や経済、防衛といった分野でトップクラスの学業を修めてから採用試験を受けたりして、未来にその運営を担うべく訓練されている連中と、ただめしを食らいたいためだけに一般公募される枠へ応募する連中と完全に別れている。

もちろんドンパチ組は、それ専用の施設で訓練を受けるのが普通だが、戦艦も商船も宇宙船というガタイは一緒だから、戦闘要員として採用された者以外は、ウチのような民営の学校に適正試験と基礎訓練を兼ねてやってるのが普通だ。

ウチの学校は、国内トップクラスの実績を誇る。その難関と違って、軍の公募試験は、受験票を出して、当日机の前に座ってる程度の落ち着きがあれば受かると噂される程度の広き門だ。それにしたって本当なら、軍の公募試験の成績でふるいにかけられて、それなりに見るべきところがあった奴等だけがうち来ている筈なのだ。

それでも、悪い成績が退学勧告に繋がる自分たちと違って、奴らはそこそこ真面目に出席していれば待遇は安堵だし、就職も既にしてくているのだから、卒業後に少しでも自分が活躍できる職場につくために、なんていうモチベーションを保ち続けるような勤勉さとは無縁だ。

無事に実習クルーになれてるってことは、授業こそは真面目に出てるんだろうけど、実際どうなんだかしたもんじゃない。ともかくこいつの噂は、女の子にちょっかいかける名人ってことしか、他科の僕には聞こえてこない。

「有給でのんびりやってんのが羨ましかったら、いつだって公募受けるよな。仲間は歓迎だぜ。だいたいウチは万年人材不足に泣いてるからなあ、優秀でなくなつて全然平気だぜ」

だから、こいつらは嫌いなんだ。こういう向上心のないところが、いやなところだ。どうして、こんなふうに必要な最低限の努力だけで、手を抜いて生きていこうなんて思うんだろう。

僕たち航空科の名物、川瀬教官がよく言う。『宇宙は待ったなしだ』って。突発的なトラブルがあっても、外からの助けがこないのが宇宙だと。信頼できるのは、自分が積み上げてきた経験と、運と、それからクルーへの信頼だと。

「クルーの面子がそろう前に、仲間割れの種まいてんじゃないわよ、優美ちゃん。あたしの栄光の成績に、卒業前に記念の赤点おまけにつけようなんて、冗談で済むと思ってないでしょうね」

若干脅しが入っている口調で真木さんが凄むと、高柳はひよいと首をすくめた。

「真木さんってば、いつもながら、おっかないなあ。美人だからサマになるけど。俺はね、リアル・ヘッドが誰になるかは蓋開けてみなきゃわかんないけどさ、真木さんは引退直前組だからほっとくとして、ウェイさんと、亮二さんみたいなのをコックピットクルーに入れといて、オフィシャルCDRがこいつだってのが、断固、納得できないわけよ」

そう言いながら、こっちを指さす。ということとは、その指の指し示す方向るCDRサマがいらっしやるということだ。高柳なんかは『コイツ』呼ばわりされるってことは、余程の名前に違いない。ちよっと、確認するのが怖い気もする。

でも、船に乗る以上、CDRはあらゆる意味で絶対になる。ふん、誰なんだろう。高柳の親指が僕の方を向いている。ウチの学校は専門職が強いから、自然、ウチの学校でしか通じない用語が發生してくる。

クルーを組んでの現場実習では、もちろん専門性を鑑みて（成績も考慮して）、役割を任命してくる。この紙で貼りだされた奴に書いてあるのがそのオフィシャルということだ。

そうはいつても、成績とか学校の評価とは別口の、言葉にできない何かで、その場の核になる奴が現場では出てくる。そいつがヘツドと呼ばれる奴だ。

念の為に繰り返すと、CDRというのはコマンダーの略語で、船長のことを指している。もちろん学校サイドもちゃんと分析して役割を振ってくるから、CDRが結局ヘッドだというのが、もちろん一番ありがちなパターンということになる。

僕は、高柳の親指で示された方向、つまり僕の背後に居るらしいオフィシャルCDRのツラを拝むべく振り返った。

2・仲間割れミッション？！

振り返った僕の視線を受け止めたのは。

壁と……。

亮^{りょうじ}ニクロスフィールドさん。

真木さんより一学年下で、慣例的にいつて訓練では中心的役割を荷なう五年次履修生だ。去年二つあったAチームでCDRをしていた真木さんのチームでパイロット^{パイロット}でPLETをしていた人だ。彼は細身の長身で、いわゆるイケメン系な上に、メンズファッショ^{ファッション}ン雑誌にグラビアを飾っていても可笑しくないほど着こなしのセンスがいい人だ。

それから、ウェイ ソヨンさん。去年の操船訓練の最後を飾った、三回目のミッションで仕掛けられた緊急避難訓練において、役立たずだったオフィシャルCDRを足蹴にしてミッションを遂行したとかで有名になった人だ。彼女も亮二さんと一緒の五年生。

ふわっふわの髪を高々とポニーテールにして、小柄な体を大きく見せようとするかの様に、腰に両手を当ててえらそうなポーズで立っているけど、結い上げた髪の毛の毛のてっぺんが、やっと亮二さんの肩に届くか届かないかというくらい小柄だ。けれどきりっと引き締まった目つきが、『運転手』を指しているだけの気の強さを証明している。

真木さんだけじゃなくて、亮二さんも、ソヨンさんも墜落科の上級生だ。ということは……、大気圏突入がフライトプランのシメの部分に、間違いなく組み込まれてくるはずだ。

でも、五年生のこの二人が、うちのクルーのCDRじゃないってことは、高柳の言葉から明白だ……。

となると、もう一人は……誰なんだろう。

「コマンダー」

CDRであるはずの、もう一人を捜して僕の視線は人込みの中を泳いだ。この人込みの中で、それがだれか分かるはずもない。パーフェクト真木さんに、今期のシミュレータ・ハイスコア保持者の亮二さん。そして、ソヨンさんというメンツなら、僕は、もう自分の所属するクルーのクラスを疑う必要はない。おっかなびっくり揭示の真ん中辺りを捜すのを止めて、一番上に書かれたSランクの欄に目を走らせる。

と、一番上に、とんでもない表示を見つけて、僕の思考は完全にフリーズした。

R A N K S 【 C D R 】 H ・ K I R I S H I M A

へ？

ということは、とどのつまりが、え……………っ……………と……。

「実習初体験でCDR、しかも御丁寧にSランクつてのは、かなり、異例だよなあ」

と、明るい亮二さんの声。トゲがある様に思えるのは、僕の被害妄想だろうか。

「めっちゃくちゃ、臭くない？ これだけの面子揃えておいて、ついでに、御曹司なんかCDRだってさ。ああ、厭だ、厭だ。なん

か……めっちゃ、気に入らないわア。ウチの教授陣エグ過ぎよねえ
……」
と、続いてソヨンさん。彼女はトゲを隠そうともしていない。

「もう一人のコックピットクルーが性懲りもなくネツドで、おまけに計器読みが、春花ちゃんしゅんかはいいとして、極めつけの変人、斉藤でしよ。これどう見たって、仲間割れ爆弾セット完了ってとこじゃない。あーあ、パーフェクト真木さん、黒星決定。可哀相に」

可哀相という単語をソヨンさんが発したところで、真木さんの顔つきが変わった。

「ソヨンちゃん。可哀相って、それ、どういう意味かしら」
真木さんの溢れるほどの笑顔が怖い。

「まっしろな成績表ひっさげて去っていきたい真木さんには悪いけど、このメンツ駄目駄目じゃないのさ。リアル墜落決定。でしょ？私の成績表はまだ不可の刻印なしだし、アナタみたいにむやみなパーフェクト志向者ってわけでもないの。ってことは、まだ3本チヨンボしても大丈夫ってことじゃない。ミスタ・シミュレータ坊やがCDR？ ふん、馬鹿馬鹿しい。やってらんないわよ」

ソヨンさんのとげとげの言葉が次々と僕に突き刺さる。

「そういうわけで、悪いけど、私、この勝負降りるわ。たかが学校の実習で、命掛けるなんて真っ平御免よ。たかが訓練なんかで死んだら、高い学費払ってくれてる両親おやが泣いちゃうもんね……」

……いきなり、ウェイさんの離脱宣言。

えっ。それって……？

と、僕は思いつきり焦る。

もちろん、不発のミッションには、漏れなく不可の刻印がついてくる。

僕がCDRつてのが気に入らないなら、ミッションが始まってから去年彼女がネッドさんにしてみたみに、足蹴にしてぶちのめしてサードシートにくくりつけて、ミッション・コンプリートを目指せばいいのだ。一度離^り棧^{さん}してしまえば、タワーにだってコックピットクルーの動向に手出しはできないのだから。

なのにメンツを見ただけで、全く最初から戦線離脱宣言って、絶対普通じゃない。知らなかったけど、もしかして……ソヨンさんって、僕をダシにして、パーフェクト真木さんに黒星付けるのを狙っていたり……する？

あはは、強烈に……ライバル心を燃やしてて、彼女の黒星を目論んでるんなら、僕は言いがかりを付けるのに絶好のキャラだったってわけで……えーと。

冷やかに睨み合う、真木さんとソヨンさんに、掲示板の前にどよどよと集まっている学生みんなの視線が集まっていることが分かる。そして、一番上に偉そうに君臨している名前の持ち主である僕にも、じろじろとあからさまに重い視線が注がれているのが分かる。

操船技術部の連中はみんな気が強い。中でも大気圏にツッコみたがっている連中の巢窟、航空科つてのは、MSに負けないぐらい危険なところだから、はっきり言って航宙科の連中より数倍以上アクが強い。実習一年目のガキの名前がそんなところにあることは、その場にいる操船科の面々のプライドをえらく傷つけているに決まっている。

それにしても、初の僕の現場実習が、始めもしない内に内輪もめで墜落つていたら泣くに泣けない。1時間でも現場実習船に乗って、それで何かチョンボをしでかしたなら泣きようもあるけど、これじゃああんまりだ。

こんなんじゃ、他科の連中が言うとおり、正真正銘の墜落科じゃないかつ。

ソヨンさんが、もう話は済んだとばかり真木さんから露骨に視線を変えて、高柳の方を睨み付けて満面の笑顔になった。

「はろっつタカちゃん。一緒できて、私は不幸だわつ。大好きな可愛いタカちゃんの初ミッションが、黒星スタートなんて可哀相すぎて……泣けてくるわあつ」

そう言いながらつかつかと高柳の方へウェイさんは歩を進め、そのまま強烈な勢いで高柳をハグすると……、長身の奴の首根っこをがしつとトツ捕まえて確保した。そして、さつき真木さんとやらかしてたような挨拶のなんかじゃない、あからさまに深く舌と舌が絡みついてる様な……激しく濃厚なキスをかました。

わざとらしく音を立てて、ソヨンさんが高柳を解放する。

「これ、可哀相なタカちゃんへのプレゼント……メリークリスマス」

「……ソヨンさあ……ん。今の力……ン……ペキ」
真っ赤になって呟きながら、高柳が床に沈んだ。

やっぱり……果てしないアホだ。こいつ。

腕と唇で高柳をノックアウトして、背中越しに爽やかに手を振り

つつ立ち去っていくウェイさん。その後ろ姿を途方に暮れて見送る僕。

本当に、天国から地獄にまっさかさまとは、こういう気分を言うんだろうか。

「まったく、墜落科の女どもときたら……」
呆れる様につぶやいてから、亮二さんは、大きく吼えるように笑った。

「雄牛でもあるまいし、角付き合わせちゃって、やだなあ……まったくもう」

クルー組み発表後に、船に乗らないと宣言したソヨンさんにも、どこ吹く風の亮二さんは、飛べなくてもいいんだろうか。僕はその端正な顔を窺う様に見つめてしまった。

目が合ったとたん、亮二さんは、笑い声だけきっちり納めた。

凶悪な笑顔は全開のまま続ける。

「そうそう、御曹司の……飛竜クン」

……クンって、亮二さん、その呼び方コワイ。

「おっと、今日からはマイCDRって呼ばなきゃ蹴飛ばされるかな
僕は必死に頭を振る。とんでもないっ。

「あらら……、今までどおり、飛竜クンって呼んでもいいのかなあ。
度量の深いことで結構、結構。そうそう、初ッはなからなんだけど、CDRサマ。このメンツ、ちょっと問題があるんだよねえ」

これまでの展開だけでも、十分に問題があると思うんだけど、そ

の上にまだ何かあるんですかつ。僕はどうにでもなれという気分になって、じつと見つめることで亮二さんに先を促した。

「去年までは、ゆくゆくは最優秀CDR受賞間違いなしだろうって噂が高かったネッド・ソンホくんってやつのこと、名前ぐらい知ってるだろ？ ソヨンにやられた去年のあれが相当トラウマになっているみたいでよ、カレシ、可哀相に学校の半径3メートル以内に近づかないんだよねえ」

えっ。残りの一人は……ネッド・ソンホさん？

「言つとくけど、お前なんかヘッドさせる気はないけどよ……オフィシャルCDRは飛竜クンだからな。ミッション招集日までに、登校拒否の奴を引っ張り出してくるのは、お前の仕事だからな」

ネッドさんというのは、技能優秀で航空科ピカイチの飛行センスを持つと言われてた人だ。だけど緊急避難訓練でなぜかパニックをおこして、役立たずだった……らしい。

いま登校拒否してるのは、それですっかり自信を失ったからというのが専らの噂で、ソヨンさんのおかげでミッションはコンプリートしてるから、黒星の一つもない。パーフェクト真木と並んで、航空科のエース争いをしてても、全然奇怪しくない人なのに。

「いいか。俺は黒星なんか、我慢ならねえからな。オフィシャルCDRサマ。ミッション招集日までになんとかしといてくれや。無事栈橋から飛び立つ事できたら協力してやるけど、ミッション流しやがったら……がっこから、追い出してやるからな」

それだけ言つて、爽やかな笑顔のまま、亮二さんがきびすを返した。亮二さんの足音が遠ざかっていく。

がつこつて……やっぱり、学校のことだよねえ。

いつもはファンキーな空気を醸し出して、ごつごつした航空科の雰囲気を探みほぐしてくれる亮二さんまでが、氷よりも冷たい。

あのパーフェクト真木さんに、真向から反対意見を述べても、床のお友達にならなくて済む希少な人材。チャラチャラした外見を裏切る、真面目で気配り屋の亮二さんにまで捨てられて、僕は今度こそ泣きたくなった。

「あーっビックリした……。マジで死ぬかと思った……。ソヨンさん、めっちゃスゲー」

赤い顔して、なんだか純情な男の子って雰囲気で起き上がったきた高柳優美は、照れ臭かったのか、自分をからかうような口ぶりでそういった。

「情けないなあ……。アホ柳い」

さっきの女の子が短く言い捨てる。でも、言葉はキツいけど、口調の方は高柳を馬鹿にしているというよりは、親しみを込めたジャブって感じた。こいつ、ミッシェンスペシャリスト科の癖に、顔広いなあ……。

「そりゃあ、公衆の面前であんな強烈なのやられたら、倒れるよ。俺、そういうのあんま好きじゃないし……」

床に伸びたままの高柳が、情けない声で答えた。キスとハグは通常コミュニケーションと見做みなしているようにしか見えない、似非えせラテン系男とも思えない発言をする。

「あはは、アホ柳つてば、ああいうの基本的に苦手だもんね。ガキ柳には刺激強すぎるかあ」

へ？

この女の子の言葉はよくわからない。こいつほど女好きって滅多に居ないと思うけど。

「ガキで悪かったね……。ところで、春花はこいつがCDRでも、練習船、乗るつもりでいるわけ？　こんな命でも、捨てるには惜しくねえ？」

こいつ、マジでむかつく。

確かに、実務経験ゼロだけどさ……。墜落死が確定している様にならないでほしい。それでも、幾らシミュレータの記録だけとはいえ、今期ランキングは、真木さん、亮二さん、ソヨンさん、抑えるんだから……。

「大丈夫だよ。真木さんたちいるし、バックアップ船もついてくるもん。御曹司、つまりミスタ・シュミレータ君が現場でパニックって『あらあ』なボカやらかしても、成績評価落とすだけだってえ。命惜しくないか、なんて、おおげさだよ、アホ柳は」

よく知りもしない、この子まで『御曹司』だ。本当に疲れる……。
「あのなあ……。お前お気楽すぎ。人間なんて簡単に死ぬんだぞお」
にこやかな笑顔で身も蓋もないことを言う。まあ、宇宙空間で仕事を
する者にとって、事故は死に直結している。ちやらかな見かけを裏切る
シリアスなセリフも、こいつがMS科なら当然の覚悟なのかもしれない。
ミッシェンスペシャルリスト

「薄皮一枚での船外作業が得意のくせして何よその繊細ブリっ子発言は。微細重力下実技だけで落第免れてる、MSのアホ柳のくせに、どうしたのよお……」

「あのねえ。それでも俺だつて頑張つてんのよ。落第したら、人殺ししなきゃなんないからさあ」

不貞腐れたように寝ところがつたままで、更に穏やかじゃないセリフを高柳はさらつと吐いた。

そついや、こいつ、こんな顔して税金泥棒 軍人だつたつけ。

……ん？　なんか、真面目な顔して……ない？　こいつ。

「ほら、俺スタートが悪すぎるじゃん、今まで学年落としてないだけでも褒めてよ」

高柳の『スタートが悪すぎる』という意味は分からなかったけど、女の子は、こいつが頑張っているという自己申告に、特に異議はないようだ。彼女はかけっこを頑張った子供にするような相槌を打った。

「そだねえ。頑張ってる、頑張ってる」

馬鹿にしているのか、応援しているのか微妙な口調だ。

「ま、しゃーないな。どっちにしろ俺は実技で頑張るしか後がないからなあ、一つ、よろしく頼むわ。オフィシャルCDRサマ」

高柳がそう言って微笑んだ。女の子にもてる理由が、実感として分かる様な底無しに明るい笑顔が眩しい。

女の子もかわいく声を立てて笑いをもらしてから、僕に向き直る。

「もう……今回ホントに、サイアク。斉藤は居るし、オフィシャルCDRは、ペーパーで命預ける気になれないしい、ウェイさんは、

来ないって言うし。只でさええらいこつちなのに……」

上級生の角突き合いに吞まれて停止していた思考回路が、そのぼやきを含んだ女の子の口調で復活してくる。

「全員が招集日にあつまないと、実習にGO出ないのに……。登校拒否なんかしてる、もとエース・コマンダー引っぱりだしてくるなんて、あんたみたいな御曹司にできるの？ それに、あんたなんかコマンダーだったら、エースを撃墜したウェイさん参加しないって言ってるし。どーしてくれんのよ、初ミッション、墜落ならまだしも、始動せずじゃ、泣くに泣けないわよ」

僕のキモチと同じようなセリフ。でも……。

そんなん、こつちの言いたい事だよ。

「君も僕のクルー？」

気を取り直して聞いた。航空科専攻の先輩たちのことは分かっても、ウンコの中身は存じあげない僕が、何気なしに言った言葉で、女の子は、いかにも『むかついた』って表情になった。

「ええそう、その通り。とーっても、不本意だけど『あんた』のクルーよ。はじめまして、御曹司、ご高名はかねがね。まあ、十中八九、飛び立てないだろうけど、万が一、無事にカウント・ダウン始まったら、少なくとも私は、協力は惜しまないよ」

言ってることは随分なままだったけど、僕なんかを苛めても、何の得にもならないといった、さばさばした感じの表情に女の子はなつた。

「でもまあ、あんたの所為でもないもんね。協力して何とか元エース引っぱりだして、ウェイさんその気にさせないと、いけないよね。」

卒業間近かな老人たちはともかくとして、これから成績積み上げなきゃなんない私たちは、この際お互いに協力して、頑張ろうか。初ミッション、初黒星じゃ、幸先悪すぎるもんね」

そういつて、ちょっと顔をしかめてながら笑った女の子は結構可愛い。

「これ、絶対に、あのおねえさま方に、協調性とは云々っていう、カワセの悪巧みだよなえ。巻き込まれて、災難。操船部の奴ら、アク強いもん。ちつとは協調性つてのを学ぶべきなのよね。きつと」

こういう発言を聞くと、今回から他学部と協働体制をとって、実際に船を飛ばすんだという気分になる。

我等が操船技術部の面々で、それが航空科だろうと航宙科だろうと、シムサップの川瀬教官を、公の場で呼び捨てにする度胸がある奴は居ない。

もともと、彼女たちだって、管制科の教科主任である、別嬪熟女のウインスレイさまを、学部校舎内で呼び捨てにする命知らずは居ないはずだ。

容赦がない課題をあびるほど放り投げてくる教官たちだから、どっちも内心はドツキ倒して、殺してやりたいと思っている奴が五万と居るはずだけだね。

操船部の教官陣は個性派揃いで、それぞれが形は違えど、御し難いことでは一様にやっかいなご面々だが、中でもシムサップの凶悪加減は別格だ。

シムサップ……そいつは、悪魔の拷問を考え出すのが仕事だから、ドSな性癖をもってる奴にしかできないと確信するね。

シムサップの正式名称はシミュレーション・スーパーバイザー（Simulation Supervisor）。単語の頭を数文字取ったのをくつつけたその名称は、人間が作り出した機械にのっかって、空を飛び始めたころから存在しているらしい。ぶっちゃけた話、トラブルを乗り越えるためのトレーニング・シナリオを考える人だ。

もちろん、頭の陰険さだけでシムサップをやってる人もいるけど（他にもない、佐久間教官のことだ！）、川瀬教官は、海千山千のもと宙空軍でエース・コマンダーだったそうだ。というわけで、実地でトラブルを乗り切ってきた古強者の、経験という引き出しから飛び出してくる、彼が描くシナリオの凶悪度は飛び抜けている。

操船科に半年以上在籍していて、カワセにデータ上殺された覚えがないやつは、一人だって居ないだろうと、僕は断言できる。

シムサップ、ミスタ・カワセ。

墜落科の僕たちには、語彙的には悪魔とほぼ均等の意味を持つその名前。

無事に3年次から課される現場実習船訓練には基本的に学生主導で全てが行われる。

けれど、緊急救助隊を兼務する操船科の教授陣で構成されるバックアップ船は言うまでもなく、学生が運営する管制室の段取りを見つつ、いざというときにその事故を起こさせないように、学生が運営する第一管制室の機能を強制剥奪できる、管制科の指導教官陣で構成された第二管といったように、一応バックアップ的に安全対策はしっかりなされている。

それでもだ。ミスタ・カワセ　彼が作ってくる残酷なストーリーは、今まで死人を出していないのが奇跡とも言われるシロモノだ。

エンジン・トラブル、油圧系や電気系統の異常、航法装置やコンピュータ、燃料漏れから、耐熱タイル剥離だの尾翼損傷だのといった、一つ起こっても命取りになる事故を、次々とたった1回の上昇訓練でしかけてくるかもしれないし（操船部では、こいつのことをトラブル・バーゲン・ミッションと呼んでいる）、メンタル面で起こりがちなトラブル耐性をつけるためだと思うけど、いつもいがみ合っている人間を寄せ集めて、長期航宙ミッションに送り出したり（こいつが、ダントツに悪評が高い仲間割れミッションだ）する。

「ねえ……御曹司」

女の子は悪気はなさそうだが、そう呼ばれるのが僕は一番嫌いだ。

「その言い方、止めてくれ。キリシマは関係ない」

僕はここで霧島の名前を使って楽しようとしたことは一回もない……。

僕の言い方に不愉快を感じ取ったのか、女の子は、ちょっとときよんとした表情になってから、あと、すんなり謝ってくる。

「ごめん、操船部での愛称かと思った。御曹司なんて、セレブっぽいじゃん。霧島って……あんたの苗字って以外に何かあるの？」

僕はこけそうになった。

僕が宇宙開発最前線に物資を届ける星間輸送船や、地球と軌道上にある衛星港湾都市とシャトル輸送業を営む、民間では大手に分類される船会社の、創業者一族に連なっているということは、操船部の中では有名すぎる事実で……。

彼らの就職先の候補としても、キリシマというのは捨てがたく魅力があるところになる。だから、一、二年生なんか、意味もなく絞

られて当たり前なんだけど、僕にそういう意味でストレートにちよつかいかけてくる人間はあんまり居ない。

今回僕のクルーになっている、操船部の姐御であるシェリル真木さんとか、彼女といつもつるんでる（ように見えてた）ウェイ・ソヨンさんとか、あの辺の女性陣にも、別に苛められた覚えもないけど、かといって可愛がってもらった覚えもない。

今回、どの部においても花形の五年次履修生でありながら、一年坊主のペーペーな僕のクルーという不幸を引き当てている、もう一人のコックピットクルーである亮二クロスフィールドさんなんかは、たまにシュミレーターから出てきた僕に……。

なかなかやるじゃん、御曹司〜

なんて声をかけてくれるけど、そんなのは少数派、ほかには滅多にない。

亮二さんは去年、一昨年と真木さんのクルーで、パイロットをしていて、万年パイロットなんて陰口を叩かれている。

パイロットというのはあくまで控えて、重要な局面で操縦桿を握ることはまずないから、操船部にいる人間なら誰だってコマンダーになってナンボだと思ってる。

彼だって五年次履修生だから、今年こそはコマンダーと意気込んでいたはずだ。Sランクのパイロット・シートより、Aランクのコマンダー・シートに絶対座りたかったはずだ。

ソヨンさんの指摘を待つまでもなく、今回のシムサップ、ミスタ・川瀬が仕掛けた悪さの第一弾は、間違いなく、オフィシャルCDR

が僕だつてこと。そして、第二シフトの時にCDRシートに座れる、チーフ・コ・パイロット（副操縦士長）に名前があつたのは、ウェイさんだつた。亮二さんが、幾ら人がよくても、この配役は気に入らなくて当然だ。

無事棧橋から飛び立つ事できたら協力してやる。

あれだつて、航空科では稀少な資質である温厚な彼だからこそできる、最大限の譲歩が言わせたセリフと見て間違いがない。多分……。

がっこから、追い出してやる

あつちが、ホンネに近いはずだよなア。どう考えたつて。

シムサップは基本的細胞構成が悪魔だつて聞いてたけど、初っぱなからこれというのは、相当にえぐすぎる。操船学校なんだからさ、せめてトラブルはコックピットに乗り込んでからにしてほしい。離棧前にここまで重厚な罨を張るのは勘弁してほしい。

贅沢なのかなあ。

ミスタ・カワセだつて、僕が霧島だから、そんな横暴をしかけたんだろう。航空科の連中はみんな、僕には遠慮する義理はなくても、霧島という名前に普通に構える。

ただ、普通の学生としてやっていきたいなんて思うのは、そこまですで贅沢なことなんだろうか。

キリシマの名前つて……僕には重すぎる。それはいつも僕の胸に

つかえている思い。

「霧島運輸って……知らない？」

僕の説明に、女の子は、何をいきなりという顔になった。

「船会社の大手さんの？　知らないわけじゃないじゃない」

「現社長が、僕の姉だよ」

「へーっ。セレブっぽいじゃなくて、セレブじゃん」

彼女はなんだかテレビの収録現場に居合わせた、物見高い野次馬みたいな表情になって続けた。

「あそこ古くさい一族経営書いてるもんね。現社長って創業者の孫娘でしょ？　雑誌とかによく載ってるよね。綺麗な人なんだけど、確か独身だったわよね。じゃん、あんだこんなところなの？」

ここ、現場の兵隊さんを育てるところだよ。霧島一族ならそれらしく、経営大学でも行って親孝行するんじゃないの？」

僕がしたいのは……家業を既に継いでる姉から親孝行を剥奪することじゃない。僕は、ほんとうに単純にただ……。

「飛びたかったから……」

臭いセリフだなと思った。操船部の人間にはとてもじゃないけど、言えない素直で偽りのない気持ち。飛びたかったから、なんて、幼稚園児じゃあるまいし。

「へへっ。やっぱ、操船部の連中は違うなあ。飛びたいってだけで学校選んじゃうんだ。私は、本当は管制室でぬくぬくしてる方が、飛ぶよりいいんだけどなあ」

通信技術者であろうとも、墜落実習に加わるなら対Gトレーニングの苦行が待っている。こんなに華奢そうで、基礎耐性があるんだ

ろうか。

「君は飛びたくないの？」

「飛ぶのも良いけど、所詮事務屋だもん。何か特別なことするわけじゃなし。だったら、シヤワーも満足に使えないようなところより、フライト管制室の方が快適じゃん。しかも、墜落訓練確実な組へだなんて、とんだ貧乏クジだよ」

大気圏突入訓練があるチームへの配属が貧乏クジ。へえ世の中には、そういう考え方もあるんだと思うと不思議でならない。僕はそれがやりたいのに。

「まあ、でも、あんたたちの方がまだ快適だよ。そこでしつこく転がってるアホ柳なんて、おむつ野郎だし」

「おむつを馬鹿にするな。糞尿垂れ流しよりマシだろうが」

足元から、高柳優美の腑抜けた声が、恨みがましい響きたつぷりに湧き上がってきた。いつまでする気なのかしらないが、彼はしつこく床に転がっている。それを女の子は無視した。

「で、それ嫌だったら、なんて呼んだらいい？」

女の子が、僕の名前を度聞いてくる。それで、彼女のピーイン（発音記号）表記の『チュンファ』と多分読むべき横文字と、高柳が呼んでいる『しゅんか』との整合性がとれてなかった僕は、自分をどう呼んでほしいか答える前に、質問してしまった。

「君は、しゅんかさん……でいいのかな？」

彼女は腕組みを解いて微笑んだ。

「うん、それでいいよ。私は変人の斉藤だの、アホ柳なんかと違って、その他大勢体質だから目立ってないし、知らなくて当然だよ。ね。崔^{チュ}、分かるかなあ、山に進むって字のによろがないやつ。それと春の花って書いて、正確にいうと、チュンフウアって感じに発音するんだけど、日系の連中、使える音種少ないからねえ。呼びにくかったら『しゅんか』で全然構わないよ。慣れてるし」

女の子　春花の微笑みは、やっぱり野郎なんかと違って柔らかくて可愛かった。スレンダーな体型はちよつと僕の好みから外れてはいるんだけど……ね。

3・百聞は一見にホントに如かずだろうか

「だまってりや可愛いのに……。毒舌大会つてのがあったら、プリンセス間違いなしだよな……」

とは、高柳の言。

まあ、よくは知らないけど、さっきからの勢いをみれば、多分普段もそうなんだろう。一応、僕もその意見には同意することにしよう。

「ええっ？ 私なんか操船の連中の毒舌に比べたら可愛いもんよ」
……その意見にも、反論はできない。

「MSは？」

止せばいいのに、自分も混ぜるとばかりに高柳が聞く。

「理系馬鹿ばつだから、言語能力低いし。問題外だね。予選落ち確定っていうか、勝負にならないっていうか、男ばつだから品はないし」

「さっきのおむつ野郎つてのも、相当品がなかったとは思いますがあ……」

高柳、めげない奴……。

「品がないとかじゃなくて、単なる事実を指摘しただけじゃない」
春花がにこにこ笑っているのに、高柳が反論した。

「えーっ、違うぜ。俺、おむつ派じゃねえもん……」

こいつは……おむつ派じゃない……。と。まあ、MSミスタ高柳が、おむつを愛用してるかどうか、今、なぜ問題になっているのか訝いぶか

ってるのを気にせずに、その理由を述べ始めた。

「あれ、汗かいたら蒸れるからキライなの。俺はコンドーさんの愛用者」

コンドーさんというのは、マジックテープでがっちり止めるタイプのサック状の男性用採尿器の俗称だ。

「だいたい、墜落ミッションだったら、最後はみんなで仲良くおむつ仲間だぜ。もしかして、赤ちゃん時代以来初体験？ 材質もよくなってるみたいだけど、まあ、常用するもんじゃないしね。ま、ボケた時の練習になっていいってことにしとく？」

高柳の言う通り、地球大気圏への突入と離脱というミッションの場合は、誰だつてどっちかのお世話になる。ここだけの話、僕は高柳となぜかお揃いで、コンドーさんの愛用者だ……。

「ほんと……、MSって下品」

「こっちの話にもってつたの、お前じゃんか」

「うるさーい」

喧嘩をしているというより、じゃれあっているという雰囲気で、ちよつとだけ……羨ましいような気がした。

こいつら……楽しそうだな。

「で、御曹司のこと、なんて呼ぶか」

春花がまたしても、僕をどう呼ぶかという話を蒸し返す。

「飛竜でいいじゃん。普通に……。俺が名前キライなのと同じで、こいつはどうも苗字のキリシマっての嫌がつてるらしいからなあ」

高柳が考えるまでもないというばかり思い切りのよさであっさり言った。

……え？　僕はこいつにそんなこと……言っただけ？

自分が霧島という名前に対して拘こたわりというか、ある種の引け目に近い感情があるのを、こいつに悟はんすうられる様な失言をしただろうかと少し前からの会話を反芻はんすうしてみる。

「おーっここだここだ。飛竜、見てみるよ」

いままで歩いてきた通路のどんづまりを曲がったところで立ち止まった高柳が、アクリル・ガラス（多分）でできている見学者用の窓の向こうを指さして僕を呼んだ。

今、こいつは……僕のことを、本当にまったく普通に、名前で呼んだ。サマでもさんでも、君でもちゃんでもなく。聞き慣れた御曹司でもなく。

ただ……名前で。

ちよつと呆然となった僕には全く気付かないふうで、彼は自慢げな声色で言った。

「ほら……こつちこつち。ここ、見学したことある？　見てみるよ。ウチらのマザー・コンピュータ……の、インターフェースってやつ。本体の全部じゃアないらしいけど……でかいよなあ……。普通の連中はこんなとこ見学できるって知らないから、多分、初めてだろ？　なあ……めちゃくちゃ……キレイだと思わないか？」

データ蓄積型AI。

知識としては知っているけど、直接は初めて見たそれは……。

むちゃくちゃなほどデカくて（巨大な一部屋を埋めつくしている）
……。

夢のようにキレイだった。

巨大な天球儀のような透ける外壁を通して、複雑に入り組んだ組織のようになっていて細い糸が綾になっている。

複雑に見えても、規則正しく関わり合う様にできている、ウェブ、まさに蜘蛛の巣然とした糸ほどに細いそれは、人工ニューロンに間違いなく、それらが立体的にめくるめくように折り重なっている。

電気が走っているのか、どこかでそれが出会っているのか、忙しく考え中なのかケースの向うに展開するネットのこここで、火花が散っている。あちらこちらがぼわっと光り、そして所々がまばゆいほどの閃光を放つ。うつすらと発光しているそれは、乾燥を防ぐためなのか、それとも重力で下方向にへたらないように浮力というものを利用してバランスをとっているのか、その球体のケースの中は何か液体のようなもので満たされている。発光する場所場所は離れた場所に見えるけれど、たまに青い光りが流れていくようにニューロンを伝わっていくのが見える。

液体。そして丸みを帯びた球体の外壁。そして、中に広がる森。

おびただしい数の人工ニューロンが複雑に絡み合って形成している森を内包している、そのものは、保健の学習で使われるビデオで見せられる、羊水に満たされた子宮のイメージさえ纏まとっている。羊水　液体は、それ自身が蓄光してしまうのか、単にあちらこちらで起こっている反応を示している発光が、周りを染めるのか、それ全体が淡く発光しているように見える。

いや、見えるではなく、多分本当に発光している。なぜなら、高柳の顔も、春花の顔もショーケースのように見える壁越しに明るくなって表情までよく見えるけれど、頭の後ろは薄暗く廊下を満たした闇にそろそろと溶けていきそうだ。

「凄い……。キレイだ……」

しばらく息を詰めて見入っていたのだと分かったのは、僕の口が勝手に溜息と一緒に言葉を吐き出して、息ができたことに気が付いたからだ。

「思うだろ？ 俺も斉藤につれてきてもらって最初に見たとき、すんげー感動したんだ」

なんだか、自分のものを自慢するみたいな高柳のしゃべり方が可笑しい。

「私も、びっくりした一人だよ。ほら、マザコンがこんなにキレイだなんて……考えてもみなかったもん。なんかこういう、箱みtainのにびつちりシリコンが詰まってるようなイメージあるじゃん」
春花の言葉に僕は頷く。僕は完全にマザコンの存在感到圧倒されていた。

春花が続ける。

「斉藤がさ、この学校をデザインした人はすごいセンスが良いって言うってたわよ。あの教官棟の妙に重厚でレトロ臭い外見をしたいろんなものが、ハイテクでちゃかちゃか動くこととだか、ただのゴッイ箱に放り込んでおいていいようなこんなものを、こんなふうに綺麗に『見せる』ようにしてたりとか、配慮の方向がニクいつて言ってたね」

「つまり遊びごとと、オシャレゴコロと、機能性のベストマッチングを、マニアックに究めようとしてる……その辺が、あのヒネクレ大将のツボに填^はまったんだろぅな」 高柳が春花のあとを引き取って続ける。

「こんなにデカくても、まだこいつはマザー・コンピュータ本体ですらないらしいぜ。こいつは技術者とトークするために作られてる本体の出向機関みたいなもなんだとさ」

「こんなに大きいのに、本体ですらないの？」

僕の聞き方は、社会科見学にやってきた小学生並みに単純だった。

「こいつは、自己成長する人工ニューロンが複雑に絡みあって、ただデータを溜め込むだけじゃなくて、その因果関係をストックして行って、先を予測することができるんだ。だから、人間みたいに多くの人と関われば関わるほど、複雑な要素を組み入れて考えて意志決定できるみたいなんだ」

「意思決定するの？」

じゃあ……これ、考える力があるってことなのかな。その機械演算的な思考ってことじゃなくて、人間ヒューマンライク的な方の意味での。

「うん、だから、ここの総合端末のトークロイドって、すごい人間的な感触あるだろ、ほかの普通のよりも……ずっと」

それは僕も何度も思ったことがある。案内や注意や、もろもろのことと、ここのマザーコンピュータの人工ボイスによるトークを聞かない日など殆ど存在しない。けれど、あらゆる場面で非常にこのコンピュータは人間臭いのだ。

「多感な……まあ、一般的にね。斉藤だとか、春花みたいな図太いのも中に入るけど、成長期真っ只中の学生は揺れやすい……」とか言

つてたな。だから、そういう不安定な連中を相手にするのに、ちょっと親しみを持てる入り口と、深い複雑な会話ができるＡＩというのは多分有効で、この部分に関しては、経験値蓄積型の新人っていわれているＡＩとほとんど一緒なんだって言ってた。違いは行動できないってことで、ちゃんと擬似人格もあり、彼だけの個性を持ってるんだそうだ。人間的な感情の揺らぎが負担になったときは……冷静な判断が不可欠なホストは……こいつを切り捨てるとか言ってた」

切り捨てる。

冷たい響きだ。永遠に生きることができない人。変わらないでいることができない人。揺らぐ未熟な僕たちを支えるために擬似人格を持たされて、揺るぎが大きくなったら捨てられる。人という使い手から見たら、それは単純な必然なんだろうけれど、人の価値を思考して他者の気持ちに寄り添えることにこそ見出すのならば、まさしくそうしているこれが、捨てられていくために日々の成長　変化を受け入れているという現実は、残酷に感じられるような気がした。

春花がショーウィンドのような、廊下と部屋を隔てている透明な壁をコツコツとノックしながら言った。

「これに、人体のような見るからにマンライクなインターフェースと、親しみを持てる『顔』そのものを与えなかったセンスも光ってるって、斉藤は言ってたよ……。長くこれに関わるユーザが、これの擬似人格にシンパシーを持ってしまうことを、上手く防止できてるって。世の中に認められる天才もいるけど、全く認められない場所ですミに仕事をこなした天才、モノを言ったり大声で叫んだりしない、そんな天才に触れ合えるのが、たまらないとか何とかって、アレ撫で撫でしながら、うっとりしてるんだもん。絶対に危ないよ

ね。アイツ」

これは確かに綺麗だけれど、それは……。あの本体青い球の壁に頼ずりしている男を思い浮かべてしまつて、頬が苦笑いの形になつてしまつた。

たしかに、その斉藤という男は、かなりイッチャってそうだ。

「なんかあいつこれを設計した人に、すごく興味持つてみたいだつたつけ。マニア全開だよねえ、このこと話すとき」

春花がいう。

「まあ、あれだけ毎日ずーっと、学業もおっぱらかしてコレに嵌まり込んでるからなあ。これにばかりのめり込んで、学生生活のほとんど全部注ぎ込んでるみたいに見える癖に、あいつ考査の解答、いつもカンペキなんだろう？」

「そうよっ、メツチャ腹立つのよね。なんで、真面目にイエス・ミズ・ウィーしてる私たちより、良い成績なのか、頭ガチわつて見せてもらいたいと思うわよ」

「何？ その イエス・ミズ・ウィーつての」

僕が聞くと春花じゃなく高柳が答えた。

「管制科の主任教官のウインスレイ女史のことだよ。知らないの？」
「何でMSのお前が知ってるんだよ。僕はつつこみたくなる。」

「普通の学生は他の科の教官のことまで、あんまり詳しく知らないつて。タカみたいに、女がいる場所が全部生息域なんて方が変わつてるんだつて」

僕も女の子は普通にスキだけど、やっぱりこいつのラテンぶりは、僕みたいに掃いて捨てるほど存在するありがちな女好きとはスケールが違うらしい。

「ミズ・ウィーは管制^{タワ}の連中からは神様みたいに尊敬されてるからね。彼女のシンパはみんな、あの人の指令に『ノン』なんて言わないらしい。イエス・ミズ・ウィーって、ウインスレイ教の連中をからかうとき言うらしい」

「いまみたいに自虐的に使うんじゃない？」

「バカねえ」

春花が言ったのでちよつとだけカチンときた。

僕は面と向かって馬鹿呼ばわりされるほど、まだ彼女を知らない。けどまあ、ちよつと普通よりは強烈な個性を持つてる種類の姉つてのが三人もいて、バカ呼ばわりには慣れてることもあつて、憚然とするよりも、春花までが僕を普通に名前で呼んだ。そっちの方により多く驚いていた。

「管制科の人間は、基本的にミズ・ウィーなの。教団とか、ウィー教だとかつて、こつやつてからつてくるのは、外の連中なの。タカみたいだね。だつて、ミズ・ウィーの言うことは大概、私たちが言うことより正しいんだもん。そりゃあ、尊敬しちゃうよ。怖いけど。管制科にいる癖に、ミズ・ウィーに『ノン』が言える強者なんて、先生の存在を見事に無視してここにいて、超ヘンタイしかないと思うわけよ、私は」

外の連中が……管制をからかうときの言葉。じゃあ、普通に友達付き合い合えてきたら、僕も当然知ってるはずの言葉なんだろうか。

……やばい、落ち込んできそつだ。

そんなふうな気持ちで、激しく盛り上がりつつ盛りに下がるのは、僕の悪い癖だ。怒ると見境なくカツとくるけど、ずつと激しく怒り続けるほどの根性もない。だから、性分のままに暴れる感情に振り回されるのはごめんだ。僕は僕の主でいたい。

「こいつがキレイなのは、普遍で永遠じゃないからだ」

まるでだれかの言った言葉をそのままなぞっているような高柳の声。それが少しだけ遠くで聞こえる。

僕は感情が揺さぶられているとき、落ち着くんだと言い聞かせることにしている。そう、怒って突っ走って、何度も失敗してきた。少しだけ待てば冷静になれる。だから、呼吸を整えて気持ちちが落ち着くことに集中する。

「変化して……成長して、失われていく刹那の魂。だから、同じ刹那の存在でしかない人間にとって、意味ある何かに思える……。だからこそ、美しくて、魅力的な……だったかな」

刹那の……、魂……。

足音がした。

何かとても意味があることのように思えるのだけれど、素直に心に染み込んでくれなくて、その言葉は僕の中をただガンガンと、遊ぶかの様に反響していた。

「よくできました、高柳^{タカ}……。お前は、記憶力も抜群にいいように思えるんだけど……どうしてそう、下らないおしゃべりはさくさく吸収して、肝心の講義が覚えられないんだろうな……」

硬い床に響いてコツコツと規則正しいその足音が僕に近付いてくる。どこか遠かった声も近付いてくる。僕は顔を足音の方に向けた。細身の　管制の連中の制服のグレーのジャケットを着ている僕よりも少し年上みたいに見える青年がいた。

怒っているとか不機嫌とかでなく、表情をどこかに置き忘れてきている様に見える。それは多分、辛辣だったりイヤミだったりする言葉とは裏腹に、どこまでも明るい陽性の表情をのびのびはりつけている高柳と春花が、彼を視界に入れたことでもう一段階明るさを増したのに、まるでそういうふうには動いていないからそう見えたのだろう。

出来の悪い、旧型のアンドロイドのような無表情。特別整っているわけでもなく、高柳のようにとびつきり甘くかわいらしい造作と
いうのでもなく、普通なら人込みにあれば埋没してしまいそうに平凡な顔立ちなのに、多分、彼はどこにいても人目を否応なく引きつけるに違いないような……そんな気がした。

僕は人間というものは、人の顔に見えるものには、表情をつけて認識したがるものだと思っている。同じように叱責しっせきされているときでも、その人が単に怒っているのか、諭そうとしているのか、それとも愛想を尽かしかけているのか、微妙に揺れ動く表情から必死に推し量おはかろうとしてしまうものだと思っている。

人は人の中でしか生きていけないから、人がどんなふうに自分を捕らえているのか、気になって気になってならない……そうできているのだと思う。

丸い鍋やフライパンに表情はなくても、そこに卵を二つ落としたら、笑ったり泣いたりしている目玉に見たくなる。多分そういうものじゃないかな……。

だけど、初めてみたときの斉藤に、僕は表情のかけすら見つけることができなかった。だから……苦手なタイプだと直感した。

これが……斉藤歩？

どうにもこうにも難物だという第一印象。そして、僕はそのとき確信した。

絶対にシムサップ・カワセは、パーフェクト真木とは正反対で、対人スキルが致命的に低い僕に……、シミュレータに逃げてる僕に、この局面をどう料理するのか聞いている。

腕組みをしたまま、僕を見つめている視線を感じた。

僕は飛びたいんだ。

その思いはいつにも増して強烈だった。あれがいやだ、これが気に入らないって、クルーの顔合わせもできずに終わるのか。墜落するどころか、失速するどころか、一歩踏み出すそれができずに、挫折するのか。

そんなのは、絶対に嫌だ。

僕は思った。

4・友達未満のはずなのに

人を容易に寄せつけないというヨロイでガチガチに固められているかのような雰囲気の斉藤という男に対しても、高柳はまるで含むところがないらしく、ごく自然に斉藤の肩をばんばんと叩いて大声で言った。

「おー、斉藤く、生きてたか？　どっから湧いて出た？　お前、いつも中で茹だつてるんじゃないか？　たっけ？」

多分大声だったんじゃないくて、大きく聞こえただけなのだろう。静かすぎる場所だから、だれもがマザコンの威容に打たれて声をひそめてしまいたくなるこんな場所で、教室にいるときみたいな普通の調子を維持してるから、頓狂^{とんきやう}に響く。

高柳は誰に対しても、こんなふうになaturallyに話しかけるのだろうか。

「うん……大丈夫だと思う。一応、今までのところは、死んでるという自覚症状はないからね」

……。予期していない種類の答え方。

まさかとは思うけど、冗談？　そう思ってマジマジと斉藤という男をみたけれど、彼の無表情はまるで動かない。

そして、まったく意外すぎる言葉をさらりと口にした。

「シムサップの川瀬教官の陰謀で……、私も飛ばされることになったらしいな……」

どこかが絶対におかしい。僕はとっさに思った。何でこんなところにいるのに、発表は掲示でしかされていない筈なのに、こいつはこんなふうに確信をもって言うのだろうか。それとも背後から湧いて出たということは、時間差で掲示コーナーまで足を運んでいたということだろうか。どっちにしる、何かが決定的に間違っている。

「記憶力をほめてもらっちゃって、照れるなあ。でも、俺、斉藤先生には、いつもお世話になってるから、お前の声でしゃべられると、覚えなきゃスイッチが入るんだなあ、これが……」

穏やかな笑顔になって、高柳が斉藤に微笑みかけながら続けた。会話が全然かみあってない。

君たち二人ちよつと待て、と言いたかった。

教員棟の掲示板でしか発表されない筈のクルー組みについて、斉藤は、ただの事実確認しただけみたい、つまり既に知っているらしいって勢いなのが、間違いなく奇怪いだろう、一般的に言って？そこに高柳と春花は、もっと驚いて、どうして知ってるんだとか、そもそも何でクルー組み発表を見に来なかったんだとか、そこはひとつきつちり突っ込むべきじゃあないのか？

だけど高柳は全ての斉藤のセリフそのものをものの見事に無視して、最初に発した『覚えが悪いくせに』という部分にだけ、突っ込み返している。この会話、目と目を合せて交わされているのに、一般回線を使ってコロニー間通話してるほどに、タイムラグが存在してないか？

「それに……印象的な言葉だったし。刹那の……。刹那って何か……いいよね」

ついでに脱線する方向に向かって進んでいるし……。『刹那』が
イイというのはどっちにしろ、僕には何だかよくわからない言語感
覚だ。本当に彼らは会話つてものを、日常生活においてしてるんだ
ろうかと、そこはかたない疑問が湧いてくる。

「100年生きようが、1000年生きようが、一つの命にとって
与えられた時間は刹那だ……。うーん、文学。えーっと、刹那とは、
指を弾く時間の65分の1とも言われて……。えーっと、たしか、
漢字文化圏の単位では、10マイナス18乗……」

予測に違^{たが}わず、更に激しく高柳が脱線した。こいつは、どこまで
果てし無く脱線していくんだ。いや、そもそも最初から想定されて
いるべき会話の進む方向、つまりレール自体が存在していない世界
にいるのかもしれない。

「ふうん……。なかなかちゃんと覚えてる。すごいな……。タカ……
正解」

斉藤……。全く動かない表情で、それ言っても、怖いよ。とりあ
えず刹那の表す大きさが非常に小さいことは感触として分かった。
一つ利口^{リウ}になったよ、感謝する。でも、やっぱり会話の流れとして
どこか壊れてないか？

僕はそう言いたかったのに、呆れたことに、高柳がクイズ番組の
難問に答えて、まさしく正解であると保証されたかのように、にこ
にこ顔になった。

「当たりだった？ やったね。オレさあ、どうもお前の話は楽しい
から覚えちゃうんだよねえ。もつともですね、文句を言わせていた
だくならば、……。試験に全然役に立たねえのよね。もうちょっと話

題を厳選してほしいとは思うわけ」

ちよつと待て、高柳。こいつはウンコ野郎だろ？　なんでMSの理論に関しての試験対策ができるんだ？

「理論に関しても、落第しない程度のポイントが取れるように、要点だけはちゃんと整理してあげてるでしょう？」

「まあね。だからいつも感謝してるって……。あゆみちゃんは野郎だけど、スペシャル特別に愛してるぜ。で、……お前、飛ぶの？」

ここまできて、会話の帳尻がようやく合った気がする。僕は不思議なものを見た様な気がした。順番めちやくちやいいかげんで、お互いが自分のペースで話してるみたいだけど、これはこれでどうやらちゃんと、落ち着くべきところは落ち着いてるらしい。

さつき衛星間通話と言ったのは訂正する。これって、対面して会話してるのにチャット（ネット経由の文字会話）モードなんだ。一つ一つの流れでは入り組んでいるけれど、ちゃんと質問に対してはどこかで答えが挟まれている。

春花はこういう会話のノリに慣れっこなようで、水族館で水槽を覗いている小学生みたいに、マザコンを半分うつとりした表情で見つめて、我、関知せずモード全開だ。

「いくら私が、普通の成績に興味がないといったって、パーフェクト真木は……怖いですからね。頑張ろうかと思ってますよ」

相変わらずの無表情のまま、さして怖くもなさそうに斉藤が言う。同じクルーにいる真木さんが、どういう種類の人かということまで知っているような響きだ。

別に難事件を解決してみせてくれたわけではないけれど、安楽椅子探偵アームチェア・ディテクティブという言葉が思い浮かんだ。現場をばたばた駆けずり回らな

くても、斉藤という男は、見てきたように物事を把握しているらしい。

何だか得体が知れないと、僕なんかは気味悪く思うんだけど、高柳はそのところは相変わらず気にならないように見える。

高柳という男にとっては、斉藤があらゆることを承知して心得ているということを前提に物事を進めるのは、宇宙建造物の中には地球とほぼ同じ成分の大气になるように『だれか』がメンテナンスしてくれていることを、疑いようもなく知っているのと同じぐらい当たり前のことのようにだ。

「怖いとか、頑張るって……、お前の口からそういう言葉が出る方が余っ程、怖いよなア。ひょっとして何かたくらんでる？」

そう聞いておきながら、それに対しての答えを斉藤が口にする前に、高柳は勝手にこれまでの会話を総まとめした。

「まあ、ミズ・ウィーの隠し子、明日のスタジヤケを狙ってる斉藤が、ミスタ・カワセの暴走にヘソ曲げてなきや、オレは別に文句は無いのよ……。忙しいのに邪魔したな」

これで、斉藤見物は終了？ 今度こそ僕はこけそうになった。

「隠し子って何よそれえ。秘蔵っ子の間違いじゃないの？」

やっと会話に乱入してきた春花も、突っ込む場所が随分ズレている気がする。僕たちは斉藤の協力が得られるのかどうか、確認するためにわざわざ来たんじゃないのか？ これで話を終了にするって、どっかおかしくないの？ 僕の思いは疑問符に埋めつくされる。

「隠し子でいいのよ。だって、斉藤、二年間とちよっと、管制技術科の常に首席にいるくせに、授業の出席率一割切ってるんだぜ。税

金泥棒だから放校処分の対象にそもそもならないけど、本当なら試験受験資格だってないはずじゃなか。ここに斉藤が住んでることを知らないやつも多いから、本当に斉藤歩いて人間が学校に存在してるかどうか疑ってるやつもいるらしいぜ……。だけど結果発表みれば試験も受けてるって分かるわけだし、そうしたらこの特別待遇はナニサマってなるじゃん。で、隠し子」

「……住んでる？」

僕はうつかりそこに突っ込んでから、ちょっと後悔した。もっと別のところに聞きたい話があった気がする。つまり、話の大きな流れでなく瑣末さまつのところに、突っ込むべきじめやところに疑問をぶつけた確信がある。

この連中の独特のコミュニケーション・スタイルに、早くも毒され始めているような気がした。

けれど、僕の口から零こぼれた疑問文は、斉藤によってももの見事にスルーされた。

「隠し子っていうのは、血の繋がりが無い子供には、基本的に使えない言葉だよ。隠すという表現を敢えて選択したいなら、百歩ほどゆずって『隠し玉』ぐらいまでが適当かな。もつとも、私は常に自主的にサボってるだけであって、ミズ・ウィーに隠されてる自覚はないけどね……」

斉藤の言葉に、高柳という男が深く何度も頷いた。

「なるほどね。隠し子を使えるのは血縁だけ……うん、なるほどね」

何かなるほどなんだか、よく分からない。

「……私もタカも、霧島飛竜のクルーってことになるだろ？ だから私が乗る乗らないの問題は、私とお前の問題でもあるけど、間違

いなく霧島飛竜の問題でもある」

……へ？ 僕？

と、不意打ちに等しい唐突さで、前後の脈絡をふらずに斉藤が断言した。ふと顔を向けると、指まで指されている。僕は断言できる。斉藤という男とは今日が初対面だって。なのに、高柳や春花が紹介もしてないのに、何で、僕を僕だと断定するんだ、こいつは。百歩譲って、彼が僕を知ってたとしてもだ、はじめましての挨拶から入るのが当然じゃないのか？ いきなりこんなふうになにに、何で僕が名指しされるのか、さっぱり分からないし、少なくともマナーという観点からみたら、最低限に常識外れだ。

「そして、私たちがまともな成績をとるためには……」

私たちと斉藤に一つくりにされて、僕の腹立ちはかわされる。

「斉藤が成績云々だなんて、ますます気持ち悪い」

高柳がぷくくつと笑う。

「まぜつかえすなよ、タカ。どこまでも凶悪なクルー組みには、多分教官の悪意というより、愛の鞭がやさしく仕込まれたことだと確信していますけど、私は生徒として単純に今回の現場実習訓練に挑戦する気がある者は、みんなで協力することが必要だと思うということを言っているんですけどね。ね、飛竜君。君は……どう考えてます？」

飛竜君という響きにぞつとしながら、それでも聞かれたからには考えてみる。

このミッションはほぼ遂行というより、発進不可能な気もする。

けれど、少なくともここにいるみんなは飛ぶ気にいる。彼らが協力してくれば、どうにか乗り越えられる気もする。できないというのはカンタンだけど、そんなふうに始まる前に何もかも捨ててしまふなんて我慢ならない。

やらないうちから、やってもみないうちから諦めるなんて、絶対にいやだ。

そりゃあもちろんやれることはなんだってやるさ。やれることが一つもないって分かるまで、どんなことだってやってみる。僕は……つまり、なんて言うかな……。

「僕は……飛びたいんだ」

* * *

……なんで、こいつらと僕は歩いてるのかな。

歩きながら僕は思う。クリスマス・イルミネーションで飾られた十二月の街は、キラキラが充満して鬱陶しいぐらい現実感を虚仮こけにしている。大きな店の前を通り掛かるたびに、様々なクリスマスソングがこぼれてくる。

さっきは、サンタクロースがやってくる。こっちは、ホワイト・クリスマス。それとかぶるように、年末セールの総決算とばかりに、客を呼び込もうとする威勢がよい掛け声。

本当は、僕は一人で、自宅に向かって歩いていたはずだ。だけど、僕は……一人じゃない。

僕があのもザコンの青白い光りが淡く点滅する光りの中で、ただ飛びたいんだと言ったとき、表情は殆ど変っていなかったのに、確かに斉藤が微笑んだように見えた。

「その言葉が聞きたかったんです。安心しましたよ。飛竜君、今回私は、君に最大限の協力をするから……」

斉藤の無表情は相変わらずだったけど、僕はその言葉になんとか、頼もしさみたいなものを感じていた。

「あゆみちゃんが協力してくれるなら、百人力だな」

確信に満ちた高柳の言い切りがなぜか眩^{まぶ}しい。データに基づいた根拠なんか、とてもじゃないけどあるとは思えないけど、多分経験則で高柳が斉藤に対して持っているのが、無条件の信頼感。

高柳の笑顔は相変わらず、甘々のシュガーフェイスに似合う。冬の寒さなんか、ちっともものともしてなくて、あつたかくて楽しそうだ。

「本当に頭わるいな。私の名前は『あゆむ』と読むんだよ。ゆうびちゃん」

わざわざ高柳の下の名前を斉藤は使った。

斉藤の名前を高柳が、女の子の名前ふうわざと間違えて呼ぶ。そうするといつも、まさしく女の子の名前であって全然構わない高柳の名前をそのままに斉藤が呼び返す。

その呼ばれ方はいやだと言言しているのだから、それを殊更に使うのは、いたぶり合っているのと等しい。それをしつこく使って、律儀に訂正しあう。まるであほみたいなやり取り。

だけどここまで続けると、多分きつとそれは僕たちにとっての歯磨

きと顔洗いたいなもんならうと思った。そりゃあしなきゃしないで済むものだろうけど、やらないと何だか落ち着かない、何か忘れた様な気がするほどにルーチンに組み込まれた習慣ってほどの意味で。

「アホ柳も、斉藤も、呼び方なんてどーでもいいじゃん」

春花がそのやり取りに終止符を無理矢理打って、僕を見てにっこりと微笑む。

「ほらほら、よく言うじゃん。目的が一致したら、何はともあれ仲間だって……ね」

言葉尻に音符が浮かんで見えるようなしやきしやきした口調で、春花はあの二人に背中を向けて、僕に微笑んだ。

「なんか私たち、難題だらけのクリスマス・プレゼントもらっちゃったよね。でも、がんばろ〜ねえ」

春花にも、僕は『私たち』に組み込まれた存在みたいだ。何かひどく不思議な感じがした。

「さてと、今日はイブなんだし、なんか一緒に食べに行こうよっ」
春花が笑った。

「どーせ、ここには、彼女とデートの予定ありなんて甲斐性持ち居ないでしょ」

高柳と斉藤と、それから僕。情けないことに、だれもその断言に反論する素材を持ち合わせてないみたいだった。

そうして、僕たちは、クリスマスの宵につるんで街を歩いている。だれがどんな食事が好みなのか、未成年は僕だけなのか。飲めるのかどうかによっても店のチョイスは当然変わってくると思うんだけど、今のところそういうことを誰も口にしない。

調子っぱずれに賑やかな町の中を、こんなふうにぞろぞろと歩く

のも悪くない。

ふと気が付くと、斉藤の奴ときたら、露店にシルバーアクセサリを並べている人から、小さい星型のストラップチャームを買っている。意外となよっぱいのが好きなんだなと思ったそばから、斉藤は勝手に春花の携帯を取り上げて添加して春花の掌に戻した。

「あ、かわいい。斉藤これ、クリスマス・プレゼントのつもり？」

春花が言っと、斉藤は今度は口の端を心持ち持ち上げる。多分、奴の表情レベルからいえば、満面で微笑んでるつもり……だと思う。「呪い……みたいなもんな……」

「何それ。お礼言う気失せちゃうじゃない」

文句を言った春花は、けれどストラップに新しく加わった星を軽く指先で突ついて揺らしてニッコリすると、そのままバッグの外ポケットに戻した。

いつも持つものだから、いやなやつからのプレゼントなら、絶対にそんなところにあるのは許せないだろう。微笑みもそうだし、そうやってそのままにしていると、彼女は斉藤のことを嫌ってなどいないことは確かだ。

そうすると、あの掲示板のところ、さんざん斉藤を貶^{けな}していたのは、何だったんだろうと不思議な気もする。

「クリスマス・イルミネーションって、いつ見ても本当にキレイだア。あんた達みたいな変わったのとじゃなきゃ、もつといいのに……」

殆ど並んで歩いていた斉藤と高柳の間に割り込んで、二人の男のそれぞれ腕に、両の腕をすいと絡めた春花がはしゃぐように言った。斉藤のプレゼントでめちゃくちゃ喜んでるように見える。……

……ひよつとして、彼女は……斉藤のこと好きなのかな……。

「だったら、自分でいい男ゲットしてデートしてりゃあいじゃん。」

食事行こうって誘ったのお前だろ？」

高柳が肩をすくめる。

「だって、あんたたちみたいなのでも、たった一人でクリスマス・サパーよか、ぜんぜんマシじゃん。ねえ……飛竜もそうでしょ？あ、それとも誰かとかか食べる予定だった？」

自分たちは花という感じじゃないけど、春花は、花から花にひらひら舞う蝶みたいな感じで、高柳と斉藤の腕から飛び立って、僕の腕にとまった。柔らかい胸がちょっとだけ腕の外側に触れて、僕の心臓は一つだけとくとんと驚いた。女の子が一人いるって、悪くないと思う。ちょっと毒舌プリンセスらしいのが難点だけ。

……あ。御曹司じゃなくなってる……。

「別に特には。……部屋帰って、何か食おうと……」

ちよつとだけどぎまぎしているのに、多分気付いてもいない春花が、折り重ねて聞いてくる。

「どつかで出来てるの買って帰るの？ それとも自炊？」

「基本的に……つくるかな。簡単なのしかないけど」

「へーっ。凄いな。どんなのつくるの？」

「寒いから……今日はたまごどんぶりでも作ろうかと……思ってたけど」

変な気分だ。僕が女の子と普通にしゃべってる。

「あーっ、それ食べたい。みんなでシェフ飛竜のたまどん食べに行こうよ」

春花……。君は、どうしてそうなる？ それとこれとは別問題だ。知り合ったばかりで、まだ友達でもなんでもない人間を、何で家に呼ばなきゃいけない？ それに女の子なんて、とんでもない。

僕が拒否しようとする前に、高柳が湧いて出て、春花に確保されてない方の腕を問答無用で組まれる。野郎とスキンシップは……ちよつと、勘弁してほしい。甘すぎるマスクとやさしい微笑みに彩られている高柳は、かわいいと表現してやつてもいいと普通なら思うところが、横に立たれると圧迫感があるほどに長身なのだ。僕だって体格的には絶対小柄じゃないのは、普通サイズの春花の頭が、僕の肩辺りってことからだけ見ても、まず間違いないと思うんだけど……。

「お……、それいいね。あゆみちゃん、なんか文句ある？」

高柳……、まずは、斉藤にじゃなくて、僕に都合を聞くべきじゃないか？

「あゆむと読むべき点以外に、特に問題はない……」

……斉藤まで。

「おーし、決定。孤独なたまごどんぶりディナーが人数ふえたけど、シェフ飛竜サマ。卵とか御飯、足りる？ 買物してった方がいいかな？」

春花の言い方は、僕が拒否するなんて、これっぽっちも疑ってないみたいだ。

おかしいじゃないか。どうしてだよ。なんで、そんなに簡単に、話が進むんだよ……。まるで、親しい……、ずっと前からの友達みたいじゃ……ないか。

「なんとか……足りる……と、思うけど」

断ろうと思っていたはずなのに、僕の口から出たのは、そんな言葉。

「おーっ、いいね。急ごう、急ごう」

僕の両腕を確保した春花と高柳は、そのまま僕を連行するような勢いで前に向かって歩きだす。食べ物屋さんがよりどりみどりの繁華街に向かうならそっちだけど、僕の家はちよつとそっちではないような気がする……。

「ところで、飛竜。おまえんち、どっち？」

そういうことは、歩きだす前に聞けよ……。僕はため息。

「わぁあっ……」

春花が奇矯な声をあげる。女の子って、みんなこんなに唐突なのかな……。

「なんだよ……春花。いきなり、奇声をあげて。病気か？」

こういうところは、さすがに高柳も理解できないらしい。

「違うよ……見て……」

春花が、空を見上げる。開いている方の指が空を指す。

僕も、つられて上を向く。ふわりふわりと漂い始めたそれは……多分。

「あ……、雪……」

「寒いはずだね。急ごうよ……」

どっちを向いて急いだらいいかわからないからなのか、足踏みをはじめた崔春花　運行技術部通信技術科三年次履修生。

「これは、遠慮なくくっついて過ごせというイミで、恋人たち向け

の、特別サービス天候だな。迷惑なことだ……」

クールなんだか、なげやりなんだか微妙な発言は斉藤歩　管制
技術科特習生。このときの僕は斉藤が無表情なくせに、勘弁してく
れなほどに賑やかなマシンガントークの持ち主なんてことは、まっ
たく知らなかった。彼がなぜ、春花の裏シフトになる通信員として
のフライトクルーに組み込まれているのかは、あらゆる意味で謎に
包まれている。それから……。

「天気変わるの面白いじゃん。俺が育った町なんて、いつつもいつ
つも温いんだぜ。暑くもなく、寒くもなく、ずーっと」

エセ・ラテン男で悪評たかい高柳優美　MS訓練生。ここまで
が、CDR HIRYU KIRISHIMAのクルーのうち、現
段階で条件なしの参加表明をしている面々。

「どおりで……温つたい、惚けた頭になるんだな」

不肖、僕　コマンダーCDRを務めさせていただきます。まあ、ひと言ぐ
らい、厭味を言っただっていいよ……ね？

「お……、言いますな。御曹司……って、ごめ〜ん」

春花が舌を覗かせて、ちょっと頭をさげる。

「うちはこっち」

両腕を確保されているから、指さしなどという器用なこととはでき
ず、無理矢理行きたい方向に歩きだした僕。あたふたと引きずられ
て歩きだす二人。それから、三步分ぐらい遅れて、斉藤がまったり
ついてくる。ほんとうに不思議な気分だった。

なんだか、みんな……僕の、友達……、みたいじゃないか……。

5・たまごどんぶり作りましょう

幸運すぎる人生を持って生まれてきたものの奢りかもしれないけれど、

平穩で退屈な人生と。

波瀾万丈で飽きない人生と。

どちらか一つだけを自分で選べといわれたら即決するのは存外、難しい。

人間というのを、持てるものと持たざるものに仕分けしたら、僕は間違いなく、持てるものの方に生まれてる。

家族は特別ハズレを引き当てたわけでない、本当にごく普通。姉弟も今どきにしては笑えるぐらいに多いから、多少恥ずかしいってことはあるけれど、両親もそろってるし、不仲なんかじゃないし、家の中で暴力が蔓延していたわけでもないし、同居していた祖父母だって、元気に引退後の第二の人生を謳歌していた。

まあ古いタイプの健全なる家族って感じだったといえいいか。とにかく、ドラマの要素はゼロに等しい。

不幸に憧れる自虐趣味はないけれど、まあ、どうひっこころがしても斜めになつたら、テメエの了見が悪いとどつかれても文句は言えない。

ただ、民間では大手になる方で宇宙船輸送会社キリシマの創業者一族の現会長にして前社長の一応長男という、いわゆる銀の匙さしをくわえて生まれてきただろつと言われかねない立場であることも否定できない。

ただ『銀の匙』って表現は、血筋がいいことも兼ねてないといけ

なかった気もするから、適当な表現だとは思えないけどね。

うちの場合は、先々代の創業者（つまり、僕のじいちゃん）が、人類の大多数が地球という生態系を守るために強制的に宇宙移民させられた時代、宇宙物流というものが只事でなく必要とされた時流に乗ったのし上がっただけだ。言ってみれば戦争景気で勝ち上がった企業だの、火事場泥棒で一財産築いただのというのがと大差ない。

地球居住権を持っているのだから、単に地球と宇宙との間のマスドライバーではなく、^{バージ}艇シャトルを運行している必然からにすぎない。

ついでに、現社長を張ってるのは「松ねえ」こと霧島松姫。

本当なら長男としての僕が、企業経営でも学んで、次期社長を賢く狙うものなんだろうけど、ガキの頃から、僕たち人類の母なる地球^{ラテ}の豊かな天然物資を宇宙に散在している宇宙植民地に向けて打ち上げる、バージ（艇）シャトルのライダーさんたちに遊んでもらっていて、シャトル・ライダー以外のものになるなんて、考えられなくなっていた。第一、年がそこそ離れてる長姉である松ねえが、すっかりそういう方向で頑張ってるんで、今更僕がそこに乱入して醜い骨肉の争いの種を蒔いたってつまらない。

ただどクソオヤジときたら、シャトルライダーになりたいといったら、「何を考えてるんだ」と頭ごなしに激怒しやがった。実際問題として、彼らに食わせてもらってるようなもんなのに、なんてやつ。

そんなだから、僕は恵まれた平凡というのを、生まれてこの方ずっと体感してきて、その退屈さも十分に味わってきた。

幸福は、間違いなく退屈だし、劇的な展開なんてものは、幸福っ

て奴とは無縁だ。

だけど、それは物語の中の冒険を夢見る、ガキの贅沢な戯言。しんどい思いをしたことがない、坊ちゃんのノウテンキな贅沢。そうさ、そんなのは、分かってる。

だけど、何もかもが自分の掌に収まってる人生なんてどこが楽しいんだろうつて思ってしまう。

「シャトル・ライダーを目指すんなら、俺は一切金はださねえ」というクソオヤジ。売り言葉に買い言葉で「父さんの世話にはならない」と口を滑らせたなら、「わかった、金輪際、金の世話はしない」ってなことになった。

自分が家計を握っているくせに、「お父さんがダメっていうなら私が甘やかしちゃダメよねえ」とこれ見よがしにため息をついた母さんは、僕が危険な現場労働者になるのに間違いなく反対ということだろう。本当にきつぱりと財布の口にミシン掛けしてしまった。さっさと挫折しろと、つまりはそういう事なのだろう。僕が一日も早く弱音を吐いて泣きついてくる様に、お星さまに願いをかけているに違いない。

そういうわけで、その日に至って、僕は生まれて初めて、お金ってもんが暮らしてくための必要不可欠なモンだって知ったんだ。

間抜けというか、何というか。

そんなわけで、僕は航空宇宙操船専門学校の馬鹿高い学費を、無利子の長期ローン返済で借りるタイプの奨学金でまかないつつ、生まれて初めての貧乏暮らしを楽しんでいる。ここ二年とちよつとの間、独り暮らしをしていたネオシヤンガンは華僑が活発な都市だけあって、色々な意味で華やかな都会だ。遊ぼうと思えば、多分毎日散財していても遊び尽くせないほどに、刺激にあふれた都会だ。

けれど、きついカリキュラムのせいでバイトをする気力もなく、仕送りがあるわけでもない僕には、繁華街は敢えて近寄らない様にしている場所の一つだった。

だからクリスマスに浮き立つ街中を、傍目に友達みたいに見える人たちと、ただ歩いているだけで楽しかった。なのに……。

どこを、どうまちがって……こうなった？

ただ、年が離れているせいか、まあプチ母親みたいなノリで僕を可愛がってくれてた松ねえは、「住むところぐらいいは、武士の情けね」とか何とか（あの人が武士というのは冗談にしても……）と、シングルタイプのワンルーム・マンションを一つ、景気よくポンと、（地価が馬鹿高いネオ・シャンガンなのに！）貸してくれた。

下手に費用を気にしたら負けというか、完全な藪蛇になるから、突っ付く危険はもちろん冒さず、素直に有り難く、お姉様の好意には甘えている。

その部屋は松ねえが学生時代に買ってもらったとかで（エライ待遇の違いだ）、ネオ・シャンガンには友達も多いからと処分せずにとっておいたものだそうだ。だからリユック一つと着替え段ボール二つだけで引越してきたときから、この部屋はすぐに暮らせる状態だった。

とはいえ……、最初からあったベッドはなぜかキングサイズ……。それから、無駄に豪華な設備のオープンキッチン。ワンルームなのに「ホームパーティーでも開けというのか？」という感じ。松ねえは学生時代に男の1ダースでも引きずり込んで遊んでいたんだろうかと疑いたくなってくる。

それから、多分細かく仕切ったらちやちな作りの2LDKならすっぽり入るほどのだっ広いフロアの真ん中には、これまた身分不相応の、一瞥で贅沢オーラを感じられるような応接セット。

それから、レンタル料がバカ高いはずのホンモノの観葉植物の大鉢。こいつは契約業者が半年毎に鉢を入れ換えにやってくる。面倒なんだけど、ここの持ち主は松ねえだし、勝手にルールを変えるわけにもいかない。

松ねえいわく、「卒業したら返してもらってから、綺麗に使いなさいよ」とのことで、僕にあの人に逆らう度胸があるわけもなし……。メイドは人間もロボットも、面倒なのでそれは頼んでお引き取り願ったけれど、掃除の手間を考えてスイーパー・ロボットだけは置いてあるから床だけはいつもぴかぴかだ。

ロボットゲートでも、オートロックでもなく、アンドロイドでもなく、本物の守衛さんがホテルのドアマンよろしく立ってる入り口に、まず、春花が驚いたようだった。

「どついう家よ……ここ」

小さく文句を言うのが聞こえる。家に警備がいるのは、ずーっと当たり前だった僕は聞こえないふりをする。これが世の中のスタンダードじゃない知識ぐらいは、僕にもある。

「すんげー広い部屋だなあ。お前、一人暮らしたろ？」

高柳の言いたいことは、よくわかる。金持ちのお坊っちゃまは違うねって……よく言われるアレだ。

「たしかに、どこをどう見ても単身者用のコンパートメントだけだなあ、こんなにただっ広い必要あんのか？」

無視、無視。

これを口にしたらどんな人間関係おしまいだって分かっているから、我慢して黙ってるんだけど、貧しい子供に、何の罪も責任もないのと一緒に、うちが金持ちなのも僕には何の責任もないはずだ。

どうしてたまたま持ってたことを、どうこう言われなきゃならないんだろ。いつも僕はこれについては、文句を言いたいんだと常々思っている。……言えないけどね。

「だいたい、こんなとこ一人で住んで寂しくない？」

人が聞こえないふりをしているのに、こいつ本当にしつこい。やつぱり、高柳つてのは僕がちょっと腹が立つ言い方をする人が多い。どうも、こういうタイプ、苦手かもしれない。

「姉の持ち物だから、金要らないの……」

言っていて腹が立ってきた。何を言い訳してるんだ。別にいいじゃないか、金持ちの苦労知らずお坊っちゃん扱いされて、遠くに避けられるのなんか、いつものことだ。いいかげんに慣れないといけない。

「へええ……、ここ、ただなの？」

とたんに、高柳の瞳が怪しく光る。

「……一緒に住んでやろうか？ この際、男だろうと勘弁しといてやるぞっ！」

おい、冗談言つなよ……。勘弁するのはこっちだろうが。だれかと住むとしても、断じて高柳、お前なんかとじゃないからな。僕は心の中でだけ尊大に切り捨てるように言っても、顔の方は少しだけ苦笑するのに留めた。

「ここはシングル用に出来てる」

「まあまあ、飛竜のくせに、ケチくさいこと言わないの。取り敢え

ず、座るところには不自由しないな。下手な店より絶対豪華じゃん」

飛竜の「くせに」という言いぐさにムカツ腹をたてようと思ったのに、座ると言いながら高柳は床に隅にリュックを放り出し、それを枕にいきなりフロアに寝ころんだ。

「うつん、快適。今日はここで野宿もいいかな……」

野宿って冗談なんだかどうかよく分からないけど、奴には官給の単身者用コンパートメントがあるはずで、つまり、野宿などする必要はゼロだろう。それにも関わらず、あのマザー・コンピュータの部屋、斉藤が住んでいると表現されるほどにつつまっているらしいあの部屋を出てくるときに、奴が担いだリュックは（なぜあそこに奴の荷物があるのかは気が付かなかったことにしよう）、デイベックというより旅行に行けそうなサイズで、ついでにそいつには、どうみてもマミー型の寝袋（^{シュラフ}体に密着するから、そいつを使うとちようどミイラみたいになる奴のこと）がくくり付けてある。

つまり奴は、いつでもどこでも、眠りたいときにその辺で眠りますという状態で、常に暮らしているらしい。冗談で転がったのでも何でもなく、単に寝心地をためした様だった高柳は、ぴょんと跳ね起きて叫ぶ様に言った。

「俺、手伝う。シェフ飛竜さま」

の毒があるのか……ないのか、全くよくわからない。キッチンにどたどた踏み込んで、興味深そうにくるくると辺りを見回す。

「うつん、キッチンもむっちゃ広くておしゃれじゃん。ここで、お前、いつも一人でたまどん食うの？　かわいそ〜っ」

可哀相で悪かったな。独りたまどんのどこが悪い。独りだからこそ、どんぶりなんじゃないか。だいたい、天井だってカツ丼だっ

てマグロ丼だつて作るんだ僕は。一人モンがどんぶりもんと仲良しで、文句があるっていうのか？ だいたい、だれかが来るって分かっただら、もつとちゃんと料理の下ごしらえしといたよ……。

それでも、僕はそのままを口にはできなくて。

「いつもじゃない。たまたま、今日はたまどんな気分だったただけだ……」

ああ、本当に飛竜なんてゴツイ名前、僕には似合っていないんだよね。

「たまたま、たまど〜ん」

僕を指さして、めっちゃウケたというように、高柳が叫んだ。つたく、いったい何千年前の駄洒落だよ……おい。

「主夫〜。卵いくつ割る？ 単純に人数かける2、足す1ぐらいかな？」

さっきまでシェフで、今回しゅふかよ。高柳が頭の中でどういう字を割り振ったのか想像できて、疲れる……。

「かける3でもいいんだけど、卵足りなくなるから、かける2たす2で」

「1パック丸ごとかいっ。さすがセレブ、贅沢〜。使いすぎじゃねえ？」

一度に卵10個使ったらセレブなら、世の中セレブだらけになっちまうじゃないか。まったく。彼の基準が随分低いことが分かって嬉しい。

「たまどんだから、いいんだよ」
軽くスルー！。

「開けるぞ。いいよな」

僕はちよつとだけ驚く。このままずうずうしく振る舞うのかと思つたら、こんなところでエクスキューズを入れてくるなんて、ちよつと意外だった。

「もちろん」

僕の言葉が終わると同時ぐらいに、奴はにまっという感じで微笑んでから、超大型の 大人の死体が楽につっこめるぐらいの冷蔵庫を開けて、開口一番に……。

「おおーっ。ホントに自炊してる冷蔵庫だあ」
と、叫んだ。うその自炊って何だよ

「冷凍庫に御飯の塊^{かたまり}発見」

こいつ、なんだか、単純に面白がってないか？

「なるほど、なるほど。見かけによらずまめな飛竜君は、一週間に一回ぐらい、まとめて たま どりーんって炊くわけですか。まめなやつだなあ。妻にしたいよっ」

酷い駄洒落だ。……それに、僕のどこが妻だ。

「これ、あつためるなあ。レンジ借りるぞお」

どっちがまめなんだよ。お前が妻になりやがれ……。

「なんか……人数多いと……どの鍋使つか悩むな」

いつもの独り言。の、つもりが、応えがのんびり返って来た。

「たまどんなんで、直ぐ火が通るから、一人分ずつやった方がよくねえ？」

ああ、そう言われりやその通りかも。やっぱり、高柳、お前の方が主夫適正度、断然高そうだぞ……。

小さいフライパン。

ダシにカエシを適当に入れて火をつける

ぷつぷつと泡が上がってくるのをじっと待つ

それほどの時間は待たされない

……所詮は一人前……ずつ？ 今日の場合は。何か……調子狂うな。

それから、ゆつくりと僕は、高柳が割って丁寧に卵白を切る様にかきまぜてくれた卵のボウルから、目分量で一人前、小さめの茶碗に移す。それから、いつものアレをほんのちよつと。

ダシの温度を見極めて、茶碗をつかむ。いざ。

「ちよつ、ちよつと待ったあああっ！」

高柳、なんだ、その絶叫は。

「ん？」

卵入り茶碗を掴んだまま、僕は戸惑う。

「なんで、いきなり、卵だよ」

「へ？」

何を高柳が言いたいのか、ちょっと分からない。

「タマネギは？ ニンジンのは？ シイタケは？ 三つ葉とか、海苔とか、そういう色々なもんはどこだ？」

具材の話を言ってるのか。

「僕はたまごどんぶりを作るって言っただろ」

「たまごどんぶりだったって、卵しか入れない奴があるかあッ」

人の家にずーずーしく、上がり込んで何を言う。人の料理の作り方に文句をつけるとは太い奴だ。

「黄^{かしわ}鶏入れたら親子丼になっちまうし、牛肉だの豚だの鮭だの入れたら他人丼になっちまうだろ？ メインが卵だから『たまごどんぶり』で何か間違ってるんでも？ それとも高柳君。包丁握ってるシエフに対して、なんか文句でもあるんでもいうのか？」

多分、これまでに僕がしゃべった中で一番長いセリフ。

一瞬、高柳が怯む。ざまみろ。

「野菜はっ！ 万能のたまねぎさまは？ ニンジンさまは？ 別に連中は入っただけでも、タンパク質ファミリ―とは血統が違うから、問題はないはずだ。それからついでに言わせてもらうけど、今日のシェフは包丁は持ってないと思いますっ」

なおも食い下がる様に言い募る高柳は、僕の俄^{にわ}か多弁なんかに、意地でも負けるつもりはない……みたい。

野菜？ たまごんに？

「そんなん、邪道だ……」

「邪道でも何でも、彩りつてもんとか、栄養バランスつてもんとか、色々あるんでねえの？ 独り暮らしに必要なのは、健康管理だぞ」

フライパンで出汁^{ダシ}が僕を呼んでいる。

ぐずぐずしてたら風味が飛んじまうじゃないか、ボケ。

僕は構わず卵の入ったちゃんわんを見つめる。

卵が分離してきてるから、もう一度かきまぜる。

ふつふつのフライパンに回し入れる

菜箸でかつかつとかきまぜる

ふちから卵が固まってくるのを見極める

……十秒数えて、火を止める

チーンっ

レトロなベル音がして、レンジがとまる。

御飯ができた。まったくナイスなタイミング。ちゃんと熱くなってるか指で確かめながら、どんぶりに御飯を移して……フライパンの中身を移す。

「飛竜君」

高柳の声が陰しい。高柳が、僕に『君』を添えたのは生まれて初

めてかもしれない。

「手早いのは認めよう」

「ありがとう」

別に褒めたんじゃねえよ、と書いてある顔で睨んでくる。負けるもんか。

「だけど、クルーの意見を聞かないで暴走するってのはどうかと思うな」

「どんぶりものは、手早さ一番だ!」

「それも認めよう」

……じゃあ、まったく問題無しじゃないか。

「できたよ。一番手誰が行く?」

高柳を無視して、僕は、リビング 兼 寝室 兼 応接間にいる残りの2人に声をかけた。向うの二人は多分、僕たちの険悪な雰囲気気付いてない。

「私行く〜! おなかすいてるの。この際、具無しだって、許す……」

許すとは、失礼な。こいつはなあ……

「まじりつけないしの純血種たまどん、おまちい〜っ」

なんだか、僕のキャラではない、浮いたセリフを吐いて、キッチンスペースにひつついてカウンターになっているところに、どんぶりと箸を置いた。

「うわっ、なんか、美味しそう」
春花が微笑む。

当たり前だ。

僕の好物なんだから。そう、誰が（クルーの一人だから高柳を名指しするのは止めておく）何とおうと、たまごどんぶりには、美学と宇宙がある……。

ダシと卵のハーモニー。

銀河系宇宙誕生時のような混沌という言葉そのものの景色。

薬味に袖胡椒とか、わさび、七味唐がらし、山椒なんかをお好みで添えてもいいし、海苔をちぎってかけてもいい。

これを美しいと言わずして、何をして美と冠すればいいのだろうか……というほどでは無いにしろ……だ！

「うわぁ……何これ」

一口食べた春花の表情の方がとろけるようになった。やったね。料理を褒められるのは昔から大好きだ。

「たまごふわふわっ。ダシとろとろっ。めっちゃ絶品。お料理上手さんなのねっ、ぜひぜひ、お嫁さんに欲しいわ……」

隣の高柳が無然とする。

「冗談でしょ。卵とダシしか入れてないぜ……こいつ」

たまごどんぶりが卵とダシだけで、文句あるってのか？

「マジだってば。すごく美味しいっ」

「お前ね、腹減ってるだけだろ〜きつと。空腹は最高の調味料ってね……どれ、味見」

文句を言いつつ、キッチンからカウンターを回り込む様にして春花のところに移動して、奴は春花のどんぶりを取り上げて無造作に口に入れる。女の子の箸を使ったら、普通はなぐられそうな気がするけど……。

高柳君よ。

ちゃんと驚けよ……。

カエシはちゃんとみりんと醤油を合わせて寝かしてあるし、ダシはアゴ入りだつ。

と、一口食べたたん、何とも言えない奇矯な表情になってから、苦虫を舐めていた様な眉間のしわが見る間にとろけて……うっとりとした表情になった。大袈裟な奴。

「……ごめん……。俺が悪かったあ……。マジで、めっちゃ美味〜」

こいつは、自分ってものがないのか？ さっきまでさんざん言ってたくせに。だいたい、なんだ、そのめっちゃくちや可愛い顔つきは。マジに怒るぞ。

「……分かればよろしい」

僕はいつにも増して短く尊大に……頷いた。多分、顔は笑ってい

たと思っけどね。

6・ゴールデンたまごどんぶりの活用法について

「マイCDRサマ、俺……、マジで荷物まとめて引っ越してこようかなあ」

そういつて、心持ちうるうるした瞳で、高柳が流し目をくれる。うつ、気持ち悪い。勘弁してくれ、なにが哀しくて、シングル仕様の部屋に男と住まにやあなんのだ。この僕が……。

「本当に美味しそうだな。シンプルっていうのは、誤魔化しが利かないってことだからなあ。春花、悪いけど、僕にも一口味見させてくれないか？」

斉藤までカウンターに湧いてきている。

「おーっ、もちろんだぞ。食べなきゃ勿体ない」

まるで自分の取り分か、はたまた自分が作ったかのような口ぶりで高柳が言った。

遠慮なく伸ばされるところだった斉藤の手を、春花がぴしりと叩いた。

「ダメ、これ私の。斉藤、ちょっとぐらい待てないの？ 犬以下じゃん、それじゃあ。だいたいアホ柳、あんたも図々しい。さっきから文句ばかり言ってたくせに」

春花サマ、よくぞこいつらを突き放して下さいました。どうぞ、冷めないうちに召し上がってください。二つ目のたまどんに取っ掛かる前に、思い立って入れ始めていたお茶を、まず春花のところにカウンター越しに置いた。カウンターっていうのは、こうやってどれかの顔を見ながら料理ができるんだなあ……、当たり前のことなんだけど、今更ながらに思う。

ここで暮らしてたとき、松ねえも誰かの顔をこんなふうに見たりしたんだろうか。

「だから、ちゃんと謝ったじゃ〜ん」

しれっとした高柳。でもまあ、基本的常識人である僕は、彼の前にもちゃんと湯飲みを置いた。音を立てないままだったけど、高柳の唇がサンキュっていう形に動いたのが見えた。

「なんか、ふつうじゃない食感だ。なんか妖しいことしてるだろ。呪いを掛けるとか、まじないをするとか……」

春花のアホ柳というネーミングは絶妙だ。

僕は確信とともにそう思う。呪いだなんて誰がそんなことするか。卵にちよつと細工はしてるけど、別にそれだって大したことじゃない。隠し技までいかないちよつとしたコツ。

「春花、人間の器官で一番カロリーを消費するところはどこか知ってるかな？ 脳味噌なんだよ。私は、優美ちゃんの数倍は空腹で当然だと思わないか？」

斉藤……、こいつも、けっこうない性格をしてそうだ。春花が「よくいうよ」みたいな顔つきになったけど、彼女が何か言う前に、高柳が割り込んだ。

「名前で呼ぶなといつも言ってるだろ？ ホントはコンピュータに考えさせるしかできないバカなんじゃない？ あゆみちゃん」

そんなに名前がキライなのか「結構変わった奴」と、僕は思った。まあ、女みたいなのが嫌なんだろうけど、それをいうなら僕だって

飛竜だ。どこの時代劇だつて突っ込みたくなるけど、普通は呼ばれ続けて無理矢理慣れるものだ。だいいちガタイはともかく、顔だつて女顔なんだし、普通にかわいいし。それは男にとってほめ言葉じゃないとは思うけど、いちいち過敏に反応しなきゃ、斉藤だつてそんなところで遊ばないと思う。

「私は、優美ちゃんのそういう反応が楽しくて遊んでるだけだよ」
やけにきつぱりと断言したのが可笑しい。それから身も蓋もなく付け加えた。

「漢字が読めない君とは、基本的に違うよ」

高柳は、何かうまいこと言い返そうとして口を開けたものの、とっさに何も思いつかなかったのか、凍りついてエアー不足の金魚状態になっている。

どうやら、語彙力と、言い回しの組み合わせ能力は斉藤の方が、一本上みたいだった。

一応斉藤にも 湯飲みが足りなかったのでマグカップに入れてお茶を渡す。外は寒かつたら春花や高柳のように普通に飲むと思つたのに、鏡を見た蝦蟇がまがえるみたいになって、カップとにらめっこをしたままだ。ひょっとして、こいつはネコか？

御飯が冷めないうちにと、僕は構わずフライパンに向かう。不思議な気分だ。誰かのために料理するつてのは……、まあ、たまどんなんか料理のうちにも入らないけど、それでもなんか、ちょっと特別な気分だ。ひとりじゃない部屋。誰かと過ごす三年ぶりのクリスマス。家族じゃない誰かと過ごすのは、多分生まれて初めての……。

僕は人数分のたまどんを仕上げて、ついでに冷蔵庫に入ってた糠漬けを少し切つて（乳酸菌は体調を整えるのにいいのだ！）出して、

それから自分のどんぶりとお茶を持って、リビングの豪華版応接セツトに移動した。もちろん、いつもカウンターでさっさと済ませるから、こんなところでメシを食うのは初めてだ。クツションが効きすぎてソファだとローテーブルに遠いので、床に胡座あぐらをかいた。カウンターでお茶と熱々どんぶりを目の前に、相変わらず凝固している斉藤など無視して、春花と高柳が食べかけのブツをもって移動してくる。

一緒の部屋にいるんだから、当然、同じテーブルで食べると確信しているような感じで、テーブルにどんぶりとか湯飲みを置くと、二人は僕と同じように床に座り込んで　ちなみに日本人習慣が抜けない僕の家は土禁どてきんしだ　いそいそと続きに舌鼓したつみを打っている様子。カウンターに取り残された斉藤は、カップ麺の出来上がりを待つ雰囲気きふきで相変わらずにらめっこをしている。間違いない……ネコで決定だな、うん。

暫く、部屋には沈黙しんもくが居すわっていた。もくもくと食べる音だけが静かに籠かごもる。うん、きょうのは我ながら上手くできたと思う。

「ここまで美味いと、なんかただの『たまごどんぶり』って言うの勿体ない気がしてきた」

箸を休めて高柳が言い出した。

「まった、アホ柳がわけ分からないこといいだす」

「ごちそうさまみたいな感じで手を合わせた春花を見て、彼女は華僑わぎョウじゃなかったっけと不思議な気もした。まあ、これだけ日本語うまいから、驚くまでもないんだろっけど。」

「だって、この芸術作品をただの『たまどん』でいいと思うわけ？春花は美を理解しないわけ？」

大袈裟な。

「はいはい、分かった分かった。で、なんて呼ぶの？」

春花は突拍子もない高柳発言には慣れっこなのか、たまどんに美学を追究する無駄を指摘することなく、取りあえずといった感じで先を促す。

「ゴールデン……たまごどんぶりっ！」

勝ち誇ったような顔つきで、高柳が宣言した。あ、頭痛い……。

「センス悪〜。なんだ、タカちゃん、最悪なの頭だけじゃなかったんだ。気の毒にい」

春花が一刀の下に切って捨てる。まるで容赦がない。

「これはこれで絶品だけどさあ」

高柳は彼女から貶^{けな}されているのには慣れっこなのか、それとも自分の思いつきを披露するとき他人の言葉が聞こえないタイプなのか、まったく変わらない口調で淡々と続ける。

「やっぱりタマネギ入って、ニンジンとかキノコで彩り入れたのも食べたいなあ」

しつこい……。

「でもそれは、多分クッカー飛竜に言わせると、野菜丼になっちゃうんだろうなあ」

斉藤、そのクッカーてのは、僕のことか？ もの問いたげなはずの僕の視線の前で、斉藤はようやくおっかなびつくり箸をつけてみて、少し考えるふうになってから、やっと、徐^{おもむ}ろに食べ始めた。面倒くさい奴。

「なんだよ、肝の小せえ奴だなあ。いいじゃん、タンパク質ファミリーとは違う、その他大勢にまで目くじら立てなくても」

僕はたまどんと宣言した以上は、たまどんを作ったただけで、具材をタンパク質ファミリーとその他大勢に分けて差別してる訳じゃ無いんだけどなあ……。

「それでさあ、このゴールデンたまごどんぶりのいい活用法思いついたぞ。……俺」

高柳が自慢そうな顔つきになって続けた。どうやら僕のたまどんは、そういう名称で確定することになったみたいだ。それに、いいこと思いついたって……。

なんだか高柳の発言は僕の予測とはいちいち見当違いの方向に飛んで行くので、何をいいだすのか……、怖いやら、聞きたいやら。

「何だね、高柳君、言ってみたまえ」

箸を休めて芝居がかった斉藤が言う。何の真似か見当もつかないけど、探偵風な口調とでも言うのだろうか。

「あのさ、美味しいもん食べるとみんな気が和むじゃん。お姉様方をゴールデンたまどんパーティーにご招待申し上げて、こんな一流シェフの乗る船なら、まあ乗ってやってもいいかと言わせるっつのどう？」

……真木さんと、亮二さんと、ソヨンさんが……たまどんなんかで懐柔かいじゅうされるのか？ そう思いつつ、僕たちは実習宇宙への発進を目指す、呉越同舟……じゃなくって、何だっけ……何かどっかに一緒に乗ろうとしている、仲間だったんだと思ひ出す。

「なるほどね。ふむ、馬鹿にしか思いつかないアイデアだとは思いますが、何もすることがないってことに比べれば、多少の芸はあるかも

しれないな」

相変わらず斉藤の言い回しはまだるっこしくて気に入らない。

「まあ、一蓮托生仲間だったと思い出してもらえるためにも、とりあえず、第一弾としてやるだけはやってみるか？」

それっ。僕が言いたかったのはその言葉。そうとつさに思っただけから凍りつく。それって、僕にあの人たちをご招待申しあげるたまどんパーティーのホストをしろって、そういうことになるじゃないか。だいたい、あの冷静な人たちが、どうやってただのどんぶりめし一杯で気が変わるんだよ。

……さ、斉藤って本当にアタマいいのか？

「さて、諸君。それでは尊敬すべき先輩方に、たまごどんぶりパーティーへのご招待状を出すに当たって、差し当たって相応しいと思われるイベントを各自挙げよ……」

……へ？ ちょっと待て、斉藤。たまどんパーティーの開催って、決定事項なの？

「はいっ はいっ」

元気よく手を挙げる春花。あ、頭痛い。こいつら、絶対に変だ。

「どうぞ、春花さん」

斉藤がクイズ番組のアナウンサーになって言う、春花は自信たっぷりに答えた。

「バレンタインデーがいいと思いますっ」

高柳が肩を派手にすくめて、いわゆる「オー・ノー」のポーズになった。

「前に聞いたことあるんだけどさ、バレンタインデーってさ、元はいえは昔々のローマの昔に」

高柳、「昔」多すぎだ。

「バレンタインだかなんだったかっておっさんが、結婚を禁止されてた兵隊さんを結婚させて、殺されちまったんでなかったっけ、確か。そんな日にチョコ食って祝うって、それだけでもあやしかねえ？」

世間一般の日本人の感覚だと、だれもそんなこと知らないで、知ってても気にはしないで、好きな人にチョコ爆弾を送りつけるイベントの日だと思ってるはず。

「あのね、チョコ渡すのに何秒もかからないし、だいたい、たまどん食べるのにだって普通は一時もかからないじゃん。デートの待ち合わせぐらいのノリで使ってもらえばいいじゃない。若者なんだから、イベントはしごはのぞむところじゃないの？ 平気平気。わたしたちは、どっちにしろ学業熱心が行き過ぎてフリーなんだからさ、そういう日こそ、誰かと遊ぶ予定を入れとかないとなんか寂しいし……」

その言葉を聞いたとき、僕は春花がバレンタインデーをこの二人多分斉藤がメイン？ と一緒に過ごしたいのかな、なんて、そんな気がした。

「チョコとたまごはあわねーと思うぞ。このすばらしきゴールデンたまごどんぶりを、そんなもんと一緒に食うのは反対だね」

高柳……だれと一緒に食うって言ったよ。

「俺は別に彼女いないから平気だけど、今日のクリスマスと一緒に、本来は恋人同士が水入らずでべったり過ごしたい日じゃないのか？ ラブ適齢期のあの人たちを呼んでもこないんじゃないの？」

その瞬間……斉藤のマシガン・トークが炸裂した。

「バレンタインが聖バレンタインに因むってというのは、流布している説だけど、多分、正しくないんだよ」

僕はテーブルに額をぶつけたくなつた。話はすでに真木さんたちがバレンタインデーに呼び出して応ずるかどうかってところまで行つてるのに、バレンタインデーそのものについて解説をはじめるとは……、相変わらずのタイムラグ野郎ぶりだ。

「二月十四日というのは、もともとは古代ローマで信仰されていた女神ユノーの祭日だよ。Juno 英語読みにするとジュノー、つまりJune、六月という言葉はこの女神様に由来するんだ」

こいつらの話はわけのわからん方へ行くのが、ひょっとしてお約束なんだろうか……。

「六月の花嫁、June bride というだろ？ これも実は結婚と家庭の女神様 ユノーの守護をいただけるから、この月に結婚すると幸せになれるってのが発端だったらしい。テラのヨーロッパは六月まで花が緑に咲かないからとか、古代ヨーロッパでは、三、四、五月は結婚を許されてなかったから、結婚解禁月に、待ちわびた恋人たちが雪崩込んだのが始まりってのも、聞いたことがあるよ……」

へえ。確かに、こいつの蘊蓄話の切り口って面白いかも。僕は初めて、見直したいような気になってきた。

「なんで、六月の名前の由来になつてる女神さんの祝日が二月なんだよ。変じゃんか」

おっと、高柳、なかなか鋭い指摘、確かに。

「優美ちゃんだって、誕生日もあれば、そのうち結婚でもすれば結婚記念日だって持つことになるだろ？ 一人の神様に因んだ日がつしかないということもないだろう？」

「お前の話は、いま一つ分かり難いんだよな。じゃ、二月十四日って、ユーノさまとやらの何の日だよ？」

僕も聞きたい。

「ルペルカーリア祭」

淀みもなく、よくもまあ、次から次へと。この自信たっぷりの言葉の中に、嘘が八百混じってても誰も気付けないだろうねと僕は思う。

「なんだそれ？」

と、高柳。

彼は「知ったかぶり」という悪癖とは、どうも無縁の御仁らしい。ごくごく素直に思ったことを口にする。何でとか、どうしてとか。

「今年も実り豊かでありますようにって祈る、春の豊穰祈願祭だな。ローマのね」

他人から何も知らない奴と思われるのが嫌で、ちよつとした事を聞くのを躊躇うことが多い僕とは違う。こいつは確かにただのガキなだけかもしれないけど、見習った方がいいよなあ。

「チヨコともキリスト教の坊さんとも関係ないじゃん。それじゃあ」「だからさ、宗教弾圧だったんだよ、もとは。キリスト教としては、昔から信じられてた地場産の女神様が邪魔だったんだ。それで、ローマ軍が結婚を禁止していたなんて記録もないのに、そういう法律

をでっちあげてまで、ヴァレンタイン、つまり聖バレンタインの伝説を捏造した」

「ややこしいことするなあ」

呆れ声の高柳にかぶせる様に、斉藤は続けた。

「でも、このルペルカーリア祭ってお前好みだと思っぞ。何でも、若い女が名前書いた紙入れて、それを引き当てた男と祭りの間過ぎさなきゃいけなかったらしい。春の祭りで、男女ランダムにペアにしたら、道程とかそういうの一切省いて、高確率でゴールインするみたいだね……」

「あゆみちゃん。そのどこが俺が好きそうだって、おっしゃいますのかなあ？」

思いつきり……好きそうじゃないか？

「あゆみさんというのが何方かは分からないけど、代わりに答えてあげよう。優美ちゃんは、女性の誰がいいとか、どんなんじゃないかなきゃいやだとか、取り敢えず言わないだろ？ その辺がもろに合うと」

「だって、女って……誰だって、取り敢えず、女じゃん？ 毒舌プリンセス春花だって、そういう点では可愛いし……」

やっぱ、こいつはルペルカーリア祭とやら向きで、間違いなしだ。普通女の子の前で、こういう言い方はしないよなあ。女だから可愛いっての、ジェンダー運動家からタコ殴りされそうなセリフだなあ。

「まーったく、アホ柳、マニア斉藤！ いい加減にこの世界に帰ってらっしゃい」

春花が笑った。

「バレンタインデーが殺されたキリスト教の坊さんだろうが、ユーノのランダム男女組み合わせ祭りだろうが、そんなん今は関係ない

でしょ。たまごどんぶりの日に、適当なのかどうか、問題はそれでしょう？」

「ああ、それなら、不適當だと、僕。」

「何でよ……」

春花がかみつく様に睨み付ける。僕の答えはシンプルかつ、誰にも反論できないもの。

「ミッション招集日が2月1日だから」

「あ……？ イベントってのしか頭になくて、しょっ……招集日のこと忘れてたあっ」

彼女も、斉藤たちといい勝負……かもしれない。

「し、知ってたんなら……早く言ってよ……」

……今まで忘れてたし……。ごめん。

「じゃあ、初詣は？」

気を取り直したように、高柳が言う。

「初詣……って何？」

春花の言葉に僕はとまどう。

「春花って、そういえば日系じゃなかったな。なんだっけ、ちえーさんとかちよーさんとかだったっけ。で、ホントに知らないの？」
と高柳。

「日本民族の伝統行事だが……、シントイズムが基本で、ブッテイストにも波及した、言ってみれば紛れもなく宗教行事だな」

齊藤はローマから古代日本へ、ふわあつと自然に話題をシフトした。

「えーっ、学校絡みの行事で宗教色持ち込むのって、御法度じゃない？ 宗教絡みのことは話題にするなつての、MSじゃ、よく言われたりしないの？」

「初詣って、年中行事じゃなくて、宗教行事だったのかぁ！ また一つ賢くなったぞおっ！」

言い出した割に、高柳は屈託がない。僕も、一つ賢くなったみたいな気がする。そもそも、その選択はだなぁ、出掛ける口実にはなつても、呼ぶ口実にはならないんじゃないか？

「だいたい、出掛けていく行事であつて、家に呼ぶものでないというところが基本的に間違つてるな……」

齊藤が話を落とした。

「じゃあ……間とつて女正月めしやうがつ」

思いつくままにぼつそりと言つてから、激しく後悔した。この意見を言つた瞬間に、僕は、たまどんパーティー開催の方向に軸足を完全に置いたのと同じ……になるかも。

「め……め、めしやうがつつて、なにそれ？」

春花が言つた。

「正月つてつくからには、1月の行事……か？」

疑問符を背後に貼り付けて、高柳が道に迷つていた。

「ふむ。時期的には、悪くないね」

齊藤。お前、ただけトリビア知識あるんだよ。こっ、こやつは、

女正月まで、蘊蓄たれるつもりか？

「日時的に適當かなくて思っただけで、別に採用されようと思って言っただけじゃ……」

女正月、たまどんパーティーのホストになるのは、自分で言っておきながらなんだけど、ご遠慮申し上げたい。ここはちゃんと訂正しとかなないといけないと思って、僕は頑張っただけよ。

「だからあ、二人で分かり合っていないでよ。めしよーがつって何よ」春花さん……、僕は別に斉藤と分かり合えたつもりは金輪際ない。

「中国の行事に……女正月が……あつたかどうか、さすがに私の記憶バンクにもないもんでね……、説明し難いけど、まあ、今度調べておくよ」

と、珍しく滑り出しが滔々（とうとう）といかない斉藤。変なところで引掛かるんだと不思議なものを見たような気がした。

「いいから、知ってる範囲で簡潔に述べよ。いい？ わざと簡潔にっつて聞こえ落としたら、殴るわよ」

斉藤の口の端が上がっている。さっきの星のときも思っただけど、すごい微妙だけど、やっぱり斉藤は春花のことを好きなんじゃないかなと、そんなふうに思った。こんな微妙なやり方で、女の子に伝わるもんなのかどうか、ちょっと疑問だ。

「殴るといふのは、穏やかじゃないね。本当に殴る気があるなら言わない方が有効だし、殴る気がないなら、脅しとしての効力をそもそも持たないし」

やっぱり、突っ込む場所が違う。春花がぴしりと言った。

「斉藤……、簡潔に」

「女正月めしょうがつってのは俗称でね、正式には小正月といって、基本的には旧暦でいかないと意味がないんだけど、正月、つまり一月の十五日、満月を祝う祭りだよ」

（へえ、そうなんだ……）

「中国で、女正月として祝うかどうかは知らないけど、元宵節、つまり春節祭と言ったら分かると思うな」

「えっ？ 春節祭？ それって私の誕生日だよ」

ああ、春節祭生みだから、それで春の花……か。ふうん……。

「いい名前だね」

僕が言つと、春花が微笑んだ。

「ありがとう」

「小正月に対して、元日のことを大正月って言ったりもするんだけど、こっちは祖神、つまりご先祖様を祭ったり、その年その年の年神様を迎える神事が中心なんだ。逆に小正月ってのは家庭的なというか、人的な祝いをするんでね、大昔の元服なんてのはこのときにやってた。元服ってのは、成人式のことだよ、念の為。それで、松がとれて正月行事はお終いつてことなんだけど……」

斉藤……。こいつ……何か知らないけど……すごい……かも。

「お正月はかまち竈を休めるはずなのに、何だかんだで主婦は忙しいだろう？ だから、このときに女性だけで酒盛りをしたり、小豆粥食べたりって、まあ地方によつて違つたらしいけど、女性が存分に骨休めする日になったところもあってね、それを女正月って言つたのさ……。どう、簡潔に済ませただろ？」

無表情は相変わらずだけど、言葉の端々に自慢そうな色が滲み出てる斉藤は、ひょっとしたら……可愛いかもしれない。

「まあ、斉藤にしてはね」

春花は言葉でだけ斉藤につれないけど、表情はやっぱりあったかい。だから彼女は斉藤を好きなんだろうなと……何となく思った。僕は伊達に姉さんたちが三人も持っているんじゃない。

結局、女の考えてることなんかはよく分からないけど、機嫌か不機嫌かぐらいは非常によく分かる自信がある。女から本能的に嫌いだと判断されちゃった場合その場でおしまい、そのあと、男は何をどうフォローしてもずっと気に入られないで終わっちゃうんだよな。

「まあ、さいと焼き、どんと焼き、どんどん焼き、さぎつちよ、とか、正式風に左義長とか呼ばれる、正月飾りか書き初めを焼く行事も……コロニーじゃできるわけじゃないけど、そんなんとか、成り木賣めって言つて、果樹に『なるか、ならんか』、ならねば切るぞ』とかって、鎌持って脅して、豊穣を約束させるなんて行事、そんなのも、この十五日の代表的な行事だね」

春花が納得顔になった。

「へえ。あたしのとこじゃ、どっちかっていうと、夜に灯ともしで大騒ぎして、お団子食べるってイメージだけだね」

「春花の家のご先祖さまは、じゃあどっちかって言うとお大陸でも南の方だね。北だったらきつと餃子だよ」

「あたし、餃子も好き」

餃子は僕も好き。そろそろ餃子でも大量に作って、冷凍させとこうかな。僕はそんなことを何となく頭の隅っこで考える。

「たまごどんぶりオンリーだったのが、なんかひねりがないけど、広く捉えて、日ごろがんばってる女性に、男がねぎらいを込めて食事を振る舞うって意味でなら、女性をご招待申し上げるのに、まあ、悪くないね」

斉藤のお墨付き……つまり、それで、先輩たちを釣ろうっていうのだろうか。見通しが大甘な甘ちゃんな気がする……。それにひねりがないとはなんたる言いぐさ。ちゃんと指令を飛ばしてくれれば、正直、僕はもうちょっとマシなもんが作れるんだけどな……。

「呼出しネタが女正月だったら、例のネッド・ソンホとあの亮二クロスフィールドだって、こっちサイドで働いてもらって然るべきってことが、まあ釈然としないといえられないけど。それで呼び立てる理由になるのかな……」

「でも、中国じゃ、春節祭って、夜に灯ともして、みんなで浮かれるじゃない？ 恋人たちには、今日のクリスマスみたいな日だからその路線でどう？ バレンタイン、ラブラブ作戦は却下だったし」

春花は集まる方向で乗り気みたいだ。

「別にバレンタインも却下はしてないよ。その日も集まればいい。騒ぐ名目が欲しいだけなんだからさ……」

あ、そ……そうなんだ。斉藤こんなしけた面^{つら}してて、お祭り好きなんて、笑わせてくれる。

「あははっ、いいねえ、そういう考え方って」

君たちが分かり合って、和気あいあいとしてるのはいいけど、僕はクルーのみんなにその気になってもらえればそれでいいわけで、実習が始まったらその先は、シェフを買って出る気はないからな。いいな。

「さてと、クルーのメンバーに、ご招待状をだすのに、幾らなんでも「女正月」じゃ、さえないし『元宵節の夜、親睦会のお知らせ』

なんて、どうかな」

斉藤はちやかちやか話を進める气らしい。

「かたくるし〜っ。でも女正月よりや、マシだわね」

春花は何事であっても、とりあえず突っ込んで異議を唱える主義らしい。

「俺は、『ゴールデンたまごどんぶりを食べる会へのご招待』の方が分かりやすいと思うぜ」

高柳が強引に割り込んだ。

「拝啓。大好きなおねえさま方と親愛なるクルーの男性諸氏に告ぐ！」

僕はすっこけそうになる。

「文法めちやくちゃだぞ……」

斉藤……こいつ、冷静っていうより、単に空気が読めないだけか？

「いいのいいの」

斉藤や春花に異議を挟まれることに慣れきっているのか、それとも本来どこまでも自分の主張を押し通すタイプなのか、高柳は全く取りあわない。

「めっちゃくちや美味い、ゴールデンたまごどんぶりを食べる会を開催いたします。日にちは、ちょうどクルーの一人の誕生日とということが判明したにつき、1月15日としたいと思います。この、たまごどんぶり、絶品なおかつ、具なしにつき、彩りご希望の諸兄は、タンパク質ファミリーを除く具材候補をもって、鋭意集まられまし。どーお？ こんなの」

春花が目を閉じて、高柳を見ないようにして、重々しく頷いた。

「馬鹿にしか、書けない文章で、めっちゃ味があるわ」

春花のいつもの舌鋒が鋭い。……まあ、僕も同感だけどね。

「分かりやすい方がいいじゃん。賢そうな奴らだって、結構よく見ると馬鹿だったりするからさあ」

高柳の言葉は、なんだかただの馬鹿のような、含蓄があるような微妙な路線を走っている。

「なるほど。たしかに、優秀な先輩方とはいえ、馬鹿である可能性を排除することはないな。どうせ、発起人、つまり招待状署名者はホスト・シェフ・キリシマだしなあ」

…… 斉藤。 そのむちゃくちゃな文章を僕の名前でだす気か？ 本物の頭痛がしてきそうなのは、決して気のせいじゃないと思う……。

7. すわっ、トラブル・バーゲンか 川瀬教官の災難付き

驚いたことに、僕が空いた器をさげようとすると、高柳は速攻で立ち上がって、一緒にキッチンについて来た。それから辺りをちょっと見回して、食器洗い機を回すまでもないと判断したのか、ちゃつちやと洗いだす。

「食器洗い、あとで回すよ……」

「何枚でも無いし。乾燥だけ使えばいいじゃん」

……だそうで、うん、やっぱり主夫適性高いとみた。

春花も隣に残っていた湯飲みなんかを運んできて、ちゃかちゃかと高柳の邪魔にならないような場所をえらんで、シンクに置いていく。

クリスマスケーキはないけれど、やっぱりデザートがあったほうがそれらしいと思い立った僕は、冷蔵庫にマスカルポーネも生クリームもあつたことを思い出して、超絶手抜きなんちゃってティラミスでも作るうかと、生クリームをひっぱりだして泡立て始めていた。

「あれ？ シェフ……デザート？」

春花の目の色が変わる。やっぱり女の子は甘いもの好きだよな。僕も好きだけど。

「うん、簡単やつただけだね。すぐできるよ……」

「嬉しい。何か手伝う？」

と聞いてきた。まあ、自分でやってもいいんだけど……。

「そのパントリーの真ん中へんに、にグラムクラッカー入ってるから持ってきて」

「りょーかい」

春花が肘を曲げて、身体の横っちょで軽くピースサインをつくっ

た。

「一つだけ……聞いていい？ 春花」

棚に向いかけた春花の後ろ姿に僕が言うと、彼女は振り向きざまに、くりつとした大きな目を真っ直ぐ僕に向けると「何か？」というような表情になった。

「最初に……斉藤のこと……最低って言っただろ？」

ちよつとだけ春花が考え込むふうになった。黒目が天井に移動している。

「掲示板の前で……。あれは……どういう意味？」

「ああ、あれね……」

春花は、何を聞かれているのかようやく分かったみたいだった。

「あいつ協調性ゼロだもん。クルーとしてやってくには難物だよ。

はつきり言って……。でも、それだけじゃなくて、ほら、適材適所って言うじゃん……。だから斉藤は鴛田さんときたみたいに……」

「去年のスターの？」

スターというのは、チーフフライトディレクター（CFD）のウチの学校での通称のことだ。

管制もだいたいスリーシフト（三交代）で動くから、そこその人数は必要で、つまり頭も一つで済むというものじゃない。管制を支配するのがフライトディレクター（FD）なんだけど、だいたい十人前後いるみたいだ。そして、その中の総責任者、何かトラブルが起こったときに最終判断を下せる人間、つまりぶっちゃけて言えばFD軍団ときたを支配するトップを張る人間がチーフということになる。スター鴛田ときたと言ったら、去年の学生が運営する第一管を仕切った男で、背が高くて迫力があって、いかにもあの管制室を支配するに

相応しい男という雰囲気たっぷりの人だ。

因みに、スターという名称の由来はひどく単純だ。うちの学校には専科によって制服があったりなかったりする。

操船は基本的にはフライトミッション中は、いわゆる全方位視認型のヘルメット（通称金魚鉢）を装着し、グローブとブーツを密着させれば簡易宇宙服にもなるスペジャケが制服だけど、実際に飛んでないときまで、そんなものを着たがる人間は稀少。だから、普段校内では私服でふらふらしていることが多い。もちろん、街に出掛けるときは、未来のアストロノーツにナンパされたがってる女の子を引っ掛けるために、スペジャケを着て出かける人間もいるらしい。それから、船舶の連中は持ち場によって様々な形の作業服を着るから、逆に普段着として標準服っていうのがあって、これは開襟シヤツの襟に、青のラインが入っている、通称ブルーラインだ。これも特に着用義務はないので、半分ぐらいの人間が着ているような感じかな。高柳もブルーラインを着ているのを見掛けること多い。

そして運行の連中は、白のワイシャツにネクタイをしめ、いわゆるポーツ・ジャケットと呼ばれる種類のブレザー着る。まあ、うちの学校で唯一の年がら年中制服で過ごしている組みだ。

彼らは、そろいのドブネズミ色のブレザーを着ているが、第一管に入れない一、二年次履修生ぐらいまでは、青いネクタイ。そして、第一管制に入る人間のネクタイの色は赤になる。

その赤いネクタイの中でFDだけは、襟の縁取りに白いラインがクッキリ入った、目の覚める様な空色のジャケット（こいつらがいわゆる青ジャケ）なのだ。その中でも総責任者であるチーフには、胸のPATCHポケットに、大きな星型のエンブレムのワッペンが縫いつけてあるんだ。星を胸に付けているからスター。まあ、分かりやすく単純な呼び方だ。

春花も上手く言えないのか、説明がたどたどしい。

「うん、その鵜田さんみたいだね……、現場の雰囲気を経験してみ
るなんて悠長なこと言ってるんで、最初っから、管制に当然置いと
くもんだと思ってるから……。あいつは、軌道計算プログラムもで
きるし、来年の総合訓練では青ジャケだろうなって……。なのにな
んで、管制室に配置になってないのか……。絶対……奇怪しいと思
ったから……。ミズ・ウィーが運行の人員配置は決めてるはずで、
だったら第一管でも、フロントじゃなくてバックに近い方なはずで
……。」

ああ、つまり。春花は斉藤が青ジャケ候補生だって疑ってなかっ
たから、あの配置の方を最低だと思ったんだ。斉藤が最低の奴だか
ら怒ってたんじゃないくて、乗船クルーというポジションが不本意な
はずの、斉藤のために怒ってたんだ。

そういえば、いつもだらけた笑顔をしている高柳も、斉藤の名前
がクルーに入っていることを知ったとき、珍しく真面目な。険し
いといってもいいぐらいの？ 顔で、管制室配置でないことに、
疑問を投げかけていた。春花だけでなく高柳も、斉藤が来年度が再
来年度には、必ず青ジャケを着ていることを疑ってない……。という
ことなんだろうな。そこまで確信を抱かせるだけのものが、斉藤に
はあるんだと思うと、この男のことを、何となくもつと知りたいと
いう気になってくる。

「斉藤は、バタバタ駆けずり回って働くタイプじゃないもん。今だ
って、ホント役立たずだと思ってると思うけどさ、あいつが下手に
動く方が邪魔だから、あれはあれでいいんだよ……」

いつまでも言い訳よろしく言い募っているのが、何だかおかしか
った。

「あーそうだ。忘れてた。俺も飛竜に言つとかなきゃいけないことがあったんだ」

食器を洗っていたはずの高柳が突然叫んだので、僕の思考は中断された。

名指しされた以上は、仕方なく高柳を見る。と、じつと僕を見て（見下ろされてる角度になるのは気に入らない）、高柳がごく真面目な顔つきでいた。頼むから、僕の予測の範疇内の発言にしてくれと、まあ半分祈る様な気分になったと言ったら大袈裟かな……？

「うちのクルーにさ、結城さんっての居ただろ？」

ああ、そういや、そんな人がいた。あの場にいたかどうか分からないけど。確かにMSも一応三名の名が挙がっていたような記憶がある。確か、三年の高柳と、四年の須賀さん。それから確か五年の……。

「ゆづきはる結城昂という名前だったね。MS科の五年次履修生。うちのMSには六年が入ってなかったと思う。で、優美ちゃんの、知ってる人？」

ようやく食べ終わったのか、斉藤が空いたどんぶりを手に、キッチンに乱入してくる。幾ら広いキッチンでも、4人も詰まると狭苦しい感じがしてくる。

それにしても、斉藤の頭の中というのは、どういうつくりになっているんだろう。いろんな物事を覚えるだけでも大変なのに、よくもまあそう検索性を高く維持して使えるもんだなど、不思議になる。

「めっちゃ、問題あるんだよなあ。あの人」

高柳に問題があると言わせる、そんなのまでいるのか？ クルー組みの総責任者、ミスタ・カワセ……。幾ら悪魔と同義語のシムサ

ツプとはいえ、今回はやりすぎじゃないか？

「物騒な御仁なのか？」

恐る恐る確認する。これ以上は勘弁してというのが、心からの正直な気持ち。

「結城さん自身がじゃなくて、彼の専門のことだけだね。あの人、微細重力下、船体整備専攻だよ」

「船体……整備？」

「かなりの高確率で、大気圏突入がはいつてくるってお前だっただろ、飛竜」

「ああ」

「それは航空科の常識が言わせる言葉だよな。それと同じでMSとして言わせてもらえれば、船体整備専攻が入ってるってことは、高確率で、実習中に船がどっか壊れるぜ」

「へ……？」

船が……どっか壊れるって……それは。勘弁してくれっ。

「あの人、ああ見えてむちゃくちゃ、腕いいの。船体故障一力所で済んだら御の字だと思っという方がいい」

ま、まさか……

こわごとと口にする。仲間割れミッションを、招集日前にしかけるほどの悪辣あくらつの上に、まだそんなものを……マジか？

「船体故障確実って……本当に？」

僕ははつきりいって、ちゃんとマトモに動く船だって、ナマモン（表現変だろうか）は初めてなのに、こういう凶悪さだよ……川瀬

教官。

「多分ね」

高柳の断言は容赦がなかった。そして、とても明るい口調でお続けになった。

「結城さんの神業、目の前でじっくりみれるなんて、俺的にはめっちゃくちゃラッキーなわけ。だから、今からすんごく楽しみなんだけど。……運転手さんには、船体故障って、多分、結構つらいよね」

「あつたりまえだ」

無然とするしかない。

「それから斉藤までいるだろ。アイツさあ、守備範囲無茶広くてさ、運行プログラムの書き換えから、メイン・コンピュータ相手に、トークモードじゃなくて、強制執行指令出せる言語まで使えるんだぜ。アレを順当に管制に置いとくんじゃなくて船乗せるんなら、もう一段階上のトラブルがあるかもしれないよ。下手したら管制からの指令をぶったぎる通信系統遮断もさあ、……可能性としてはあると思うんだよな……俺は」

泡立て器を持つ手が震えてくる。

何の冗談だ？

最初にあのスーパー上級生たちのプライドに砂かけまくって分裂当然の仕掛けを施しておきながら、万が一上手くクルーをまとめ上げて離れできたなら、今度は、船体故障に、管制との通信断絶に、航路変更を余儀なくされるほどの何かを……って。

「トラブル・バーゲン……？」

につこりと微笑んだ高柳が、親指をたててグーサインを作り、クイズ番組よろしく叫んだ。

「ピンポン」

その反応……。八つ当たりを三百ぐらい承知で蹴り倒したくなる。

「高柳……頼む……ちつと黙ってる……」

つくつく。シムサップ川瀬……殺してやりたい。

* * *

我等がCDR、霧島飛竜が、和やかな楽しい会話を、高柳たちと楽しんでいたころ、殺したいと彼に願われていた人物の部屋をちょっと覗いてみたいと思う。

川瀬^{かわせり}凌^{りょう}^ロ。彼は、元極東アジア国軍の航空宇宙部隊でエースPLTであり、退官後、依頼されてNexGasの操船技術部技術教官とシミュレーション・スーパーバイザー（SimSup）を兼務している。

三年前から、操船技術部主任教官として、一大イベントでもある総合実習訓練の総括を務めている。

川瀬教官　ミスタ・カワセと呼ばれることが多い彼は、各専攻科の専任教官から上がってくる配置案と、膨大量になる学生のパーソナルデータを突き合わせ、首っ引きになってクルー組みを終わったところだった。最終段階の詰めはこの二週間ほどは、通勤の時間も惜しいほどだ。毎年のことながら、丈夫なはずの胃がキリキリ痛

んでくる気もするほどに、いろいろな意味でやっかいな仕事だった。今日晴れてクルー組みにGOサインを出した今、もう、実習ミューズに
おいての課題内容を、各ランクごとに告知する招集日まで、しばしの
休息を楽しめるはずだった。

川瀬がここ数日来、夢にまで見た楽しみは、ゆっくり家族と過ごせるクリスマスの休日だ。妻が娘にクリスマスプレゼントぐらいは用意してるだろうけれど、普段甲斐性なしのダディーとしては、ぬいぐるみの一つも物色してやりたいし、何よりも喜ぶ娘を膝に寄せながら、美味しいとは思えないターキーを食べる程度の父親仕事はしてみたい。日ごろ育児も家事も丸投げしている妻のご機嫌取りにも、何かプレゼントを物色して帰るべきだというぐらいの優しさは持っているつもりだ。

性根の底から戦闘機乗り気質の川瀬には、戦闘機乗りの定年（体力的な問題で、他の部署より現役から追い出されるのが早いのだ）を以て軍を退役するのは特別苦痛ではなかったし、操船学校の教官職に転職して以降、毎日家族の下へ帰宅できる環境というのは、新鮮で楽しいものだった。

さつさと荷物をまとめて、帰宅しようといそいでいた川瀬だったのに、今は目の前に同僚というか、なんというか……。シムサップという同じ属性をひっさげた佐久間教官が居る。Simulation Supervisor（シムサップ）シムサップというのは、学生のトラブル経験値を上げるべく、死なない程度のトラブルをガンガン考えては投げつけるのが仕事という、まあ、ドS属性の人間にしか務まらない商売だ。

戦闘機乗りあがりの川瀬は、実際の自分の経験値抽斗ひきだしが豊富だから、さまざまパターンのトラブルを考え出す。けれど管制官上がりの佐久間教官は、天然のイケズ度の高さを武器に、シムサップとい

う立ち位置を心の底からエンジョイしているように川瀬には見える。
ありてい有体に言つて、どこがどうというのではなく、本能的にいけ好かない人種というか、どこをどうやって矯めても、反り^そは一向に合いそうにないというか。

「やあ 川瀬さん、なかなかエグい事やるじゃないですか。隠し問題として、トラブル起こしそんな人間を抱き合わせてクルー組みるつてのは、私だってやりますけどねえ。あそこまでは露骨に出来ませんよ、普通」

川瀬だけでなく、佐久間にしても、クルー組みを発表した今は、戦士の休息ほどでないにしても、一つ仕事をやつつけた充実感に浸っていいところだし、一応あんな奴でも家族持ちなんだから、ちゃんとファミリーサービスに一目散に、クリスマスの賑わう町中に飛び出して行けばいいものを、なんで、ここに湧いて出るんだ？
川瀬は思う。

だいたい人間というのは、相互作用があつて、自分だけが気に入らないと思つているケースは滅多になく、多分、佐久間も自分のような男は好きだと思つていないだろうという確信が川瀬にはある。
なのに、このタイミングで、目の前で厭味タツプリに微笑んでいる佐久間は、不気味というか謎というか。

ついでに川瀬は、佐久間が何を言っているのか一瞬分からなかった。

「普通だつたら……、まあ、いいとこ、CDRはウェイ・ソヨン止まりでしょ。順当に行つたら、亮二クロスフィールドが妥当だと思いますしね……」

そうした筈だが。間違いなく。

川瀬は鉄面皮との誉れも高い無表情を崩さないまま、佐久間のいやつたらしい気障がかった顔を見つめた。

佐久間はウンコの教官みたいな、地味な色味の茶色いブレザーを着て、わざわざ銀縁のメガネを掛け（視力は多分よさそうだし、老眼にも早そうだというのに）、操船学校の指導教官というよりは、保険のセールスマンか、百歩譲ってもホテルのドアマンといった風情でいる。

「幾らシュミレーターの結果が、不動の一番だつてつたつて、一度もホンモノに乗ったことない一年坊主を、よくもまあ、コマンダーに据えたもんですなあ」

「ミスタ佐久間には、私のクルー組みが不満だと、そういうこと……」

言い掛けて、川瀬は凍りついた。一年坊主が……CDR？

この気障野郎、なんて言った？

「いやあ、教官室もねえ、川瀬が狂ったのか、それとも霧島運輸から御曹司のために袖の下でも貰ったかつて、随分な大騒ぎでしたよ。まあ、貴方という人に残念ながら慣れてしまった私ですから、今更大胆不敵なミスタ・カワセが何をやるうが、大抵のことでは驚かない自信があつたんですけどね……。もう、だめじゃないですか、自らのキャリア犠牲にするようなことしちゃ、エアロスペースのエース、冷静沈着でならしたミスタ・カワセの名が泣きますよ」

だから、何といった。この気障野郎っつ

川瀬の内心のパニックは、しかし長年培ったポーカーフエイスを崩すほどの強いものではなかったらしい。それが面白くなかったのか、佐久間が冷静な川瀬の反応を少しでも乱そうとするのかのよう

に、にんまりと笑った。

「可哀相に、掲示板の前で早速修羅場だそうですね。ウェイが降りる宣言するわ、霧島御曹司に亮二が殺す発言するわ……」

一年坊主のCDRって、霧島の御曹司か？ あいつは確かにSランククルーに置いたが、けど……きつちり、くつきり、はつきり、俺はサードシーターとしてぶち込んだぞ。どこをどうやったら奴がCDRになるんだ？ そりゃ、幾ら温厚な亮二だって……当然ブチ切れるよな？ どこがどうして、そんなぶつとんだオーダーになるんだ？

川瀬が真剣に悩んでいるのに気付かず、佐久間は続けた。

「あれ……、そこまで言っただけでなかつたかなあ。学校追い出してやるとか、その程度の可愛い発言だったかなあ」

だあ……かあ……らあ……。

言葉にする前に、内容を吟味する性癖がある川瀬は、心の中でだけ、素つ頓狂な声を出して、口から出る言葉は普通に醒めたトーンだった。

「……そうですね。まあ、いろいろな意味でいい経験になるでしょう」

やっとの事で冷静な声がでる。

「ネッド・ソンホを、ここに入れるのは、幾らなんでも、凶悪が過ぎると思いますか？ ミスタ・カワセ。かつての撃墜王かもしれないけど……、生徒の未来を撃墜しちゃ、いかんですよ。ああ、余計なことでしたな。名物教官殿」

ウェイんとこに、ソンホだとおおっ。

ウェイのそこには、真木がいるんだぞおっ。

だあれだあ、そんな凶悪なことしやがったのはあつ。

「ま、余計な口出しでしたすかね。川瀬教官」

言いたいことだけ言い置いて、ツカツカと靴音までぎざに響かせながら、佐久間が帰っていく。その背中を呆然と見送りながら、川瀬は半ば呆然としていた。だれがどこをどういじって、そんなことになったんだ？

いつたい何なんだ。

川瀬は溜め息をつく。そして、自分が送ったはずのデータと、公式発表になったはずのデータを突き合わせようかと、さっき落としたばかりの端末を立ち上げようとした。

そのとき、川瀬の趣味でレトロなベル音になっている電話が、賑やかな着信音をたてた。

無意識の習い性で、通話ボタンを押す……やいなや……。

『か~~~~わせ~~~~。居たわねっ』

と、スピーカーから、聞き慣れた女の声が溢れ出て、容赦なく川瀬の耳を直撃した。

管制技術科の……ウインスレイ教官？

『もちろん、用件は分かっているはずですわね。今から行くから。』

逃げ隠れしたら許さないわよっ
』

へ？ ミズ・ウィーを怒らせるようなことを、何かしたか？

川瀬は誰かに教えてもらいたかった……一体何が起きているのか
を。

8・川瀬教官の苦悩

逃げ隠れしたら許さないという、不穏な言葉。一方的に切られた通話を知らせる、非常にトラディショナルなツーツ音を聞きながら、逃げ隠れしなかったところで、既に彼女が「許さない」と思っていることは確実に思われた川瀬は思った。

なんで、私が、ウインスレイ教官から逃げにあならんのだ？

実際に手加減なしに、難コースを与えた上で、そちらがメイン課題ともいうべきトラブルを投げて、まあ命に別状なさそうな人間はいつもうじゃうじゃいるというわけではないので、実際にAランクより上のSランクを指定することができない年も当然ある。今年は豊作といえば豊作で、AランクのCDRを務められそうな人材が揃っている。

Sを設定してしまえば、Aのヘッドが人材不足になるが、そこはそこ、まとめる立場を任されるというのは、人の能力を否が応にも底上げする。

対人スキルというのは、やはり単純な技術スキルとは違うということは、分かっていても、つい意識から欠落されがちなファクターだ。それをすっかり失念すると、去年のような悲惨な事件が起こる。未だにあのことを引きずっている学生がいるのだから、死傷者が出なかったのだから事なきを得た……と、素直に思える状況にない。今年のクルー組みに関して、川瀬自身は「我ながら神経質な」と自虐したくなるほどに、気を配ったつもりなのだ。

佐久間に厭味を言われたり、ミズ・ウィーに突き上げられたりするような小細工を、この段階で弄ろうした覚えはない。というか、糞あつものに

懲りて膾^こを吹くの典型と笑わば笑え。今年は人間関係にトラブルを持って来るとしても、まあ、小競り合い^{こせ}レベルで収まるものに限定了らつたりだ。

パーフェクト真木こと、シェリル真木をいざという時の保険に入れて、順当なら亮ニクロスフィールドをCDRにするとところを、ウェイ・ソロンを配置。完璧主義で上の無能に容赦がなさ過ぎるウェイに、上に立たせてみて有能な部下を使うっていう経験をさせたかったからだ。亮ニクロスフィールドは、Sランクでソロンの下にくよりは、BランクのCDRの方がましだと思っているだろうけど、あいつにそんな低い航路を飛ばさせるつもりはない。

火星を過ぎて木星へ至る前に頑として存在するアステロイド・メイン・ベルトをつつきらせるつもりだ。ちょうど太陽と木星とのラグランジュ点を担って十二年周期で動くトロヤ群が、ちょうどいい位置でじゃましてくれる。

細かいそういうものはともかくとして……、この三人 真木、ウェイ、亮二 がいれば、遠慮なく非常事態回避訓練を発動できるし、あのシミュレーター^{シミュレーター}の天才君が、本当に現場でも天才ぶりを発揮できるのか、のんびり観察できる。

「オートクルーズ様メインで、コックピットクルーが、2名シフトで2組。あれに補欠クンの霧島を足して、向上心がありすぎない奴を1名配置。どうだ、完璧なクルー組みじゃねえかよ」

シムサップという立場の職業病なのか、いけ好かない伊達^{だて}気取り野郎の佐久間のような、もったいぶった丁寧口調でしゃべることがめつきり増えている川瀬^{つが}だったが、持ち前のべらんめえ節になつて、ぶつくさと声に出して、一人呟く。

ホンモノの宇宙船だのバージ・シャトルだのを使う、現場実習訓

練は、NexGassの実績を箔付けしてくれる、内外ともに評判が高いプログラムだ。

現物の機体から後方支援である飛行管制室まで、実際に船を飛ばすときに必要なだけのシステムがそろってますというのが、この学校のうたい文句で、複数学部にまたがって行われる故に講師陣の気合の入れてき方も半端なものは^{ハンパ}ない。運転手^{ドライバー}の配置に主に気づかうだけでいい筈の川瀬だが、他科の教授陣の顔色も窺わなくてはならない。

組分けの総合責任者である川瀬は、いつも何度も漏れが無いが、齟齬^{そご}をきたしていないか、入念にチェックしている。今回も何度も何度もチェックしてから、最終決定したデータを、マザコンに転送した筈だ。どこが悪かったか川瀬は反芻する。

俺だって人間だ。遺漏はあるかもしれないが……。

川瀬は思う。今のネットを、あのウェイがシメてるところに、真木とケツで入れるなんてこたあ、断じてしてねえぞつ、と。

心の底から少し落ち着いて考えてかった川瀬は、どうせ既にミズ・ウィーがトサカにきているなら、逃げ隠れするのも一つの方策とばかりに、自分のIDが入っている携帯端末だけひつつかむと、三十六計逃げるに如かず、スタコラとばかりに執務室を逃げ出した。

ミスタ・カワセが向かった先は、通称『第二管』。総合訓練時のみでなく、部科単位の演習のときにも、教授陣が安全確保の為にここを拠点とする。戦闘機乗りの定年は過ぎたけれど、貨物船程度なら後十五年は乗れる自信がある川瀬は、バックアップ船とか、その色をとってグリーンシップとか呼ばれる高速艇に乗って、実習現場

近くをうろちよろしていることも多いのだが、目と耳でかき集めた情報が集まって来る脳味噌とも言つべき第二管のブースに座ることも当然ある。

現場実習船の総合演習が始まると、ここは戦場になる。学生たちが操船もし、管制もし、ミッション・チャレンジもするのだから、事故が無いように目配りしなければならない方向も多岐にわたる。万が一、計算された以外のトラブルが発生したときには、フォローを適格なタイミングで入れられるように、ありとあらゆる異常それが微細なものであつたとしても　を発見し、対処するために、ここが稼働するときは、ピリピリした緊張感に支配される。けれど、今は誰も居ないことが約束された安住の地。

携帯端末のIDを読み込ませるとあつさり扉が開く。ミズ・ウィーに位置検索されるのを恐れて、位置情報発信機能を遅らせながら切る。

人気のない第二管の、総合モニターブースの一つに、どっかりと腰を落着ける。ため息を一つついてから、端末を立ち上げる。壁の向うで大量の情報機器が使用可能になるように、一つ一つ起き始めているのだろう。ぼうとしていけば多分気付かぬほどの、けれど感覚を研ぎ澄ませていけば確かに感じ取れるほどの変化。第二管に息吹がやどっていく、あるいは眠っていた巨象がゆったりと目覚めていく……そんな感触がある。

第二管ニイの現在の支配者は、今のところの力関係では、男ではなく女神様だ。運行管理技術部の親玉にして、専科は管制科技術教官である、メグ・ウィンスレイ女史だ。学生からも、運行はウンコなどといささか口にするには抵抗がある俗称で呼ばれているが、その親玉であるミズ・ウィーは、運行部の親玉というほどの意味で、ウンコ玉と影では呼ばれている。管制技術管の総括者、つまりFDをフライトディレクター

張れるほどの人間の情報処理能力というのは、はつきりいつて異常のレベルにある。

何かが起こったときの対処マニュアルとして常に積み上げられていくせいで、既に数千種類に及んでいる上に、常に増殖していく手順書から、たった一つの今の状況に対処するに相応しい行動を選択し、それを分かりやすい言葉に置き換えて、的確に指示していくのだ。

それがどんな微細なものであろうと、トラブル発生は人間と機械が関わっている以上、ゼロにできる様なものではない。その何かが起こったとき、それを芽のうちに摘んでいく、大事になる前に蹴散らしていく必要がある。繊細な感知能力を持ちつつ、関わっている人材の全ての能力を過不足なく把握して、一番的確に対処できる場所を見つけて、がんがん振っていく。自分でなにもかもやつけたいなどという勤勉さを発揮しては、逆に全てが回らなくなるという不思議なポジションだ。

上手に荒い人使いができること。そういう人種が、普通に存在することの不思議を、むしろ自分が動きたいタイプの川瀬はつくづく感じる。

平時にあつてさえ恐ろしい量の情報と、余りにも少ない時間をもつともせず、全てが順調に回るように采配していく　まさに、管制室の女神。

その彼女が怒鳴り込んでくる。一級の非常事態だ。

（私の執務室が空で、彼女が私を捕まえようとしたとしてもだ……）
意地悪く勝ち誇ったような気分で川瀬は考えた。

おそらく、最初に操船部教官室や食堂、カフェテリア辺りを搜索するだろう。まさか、彼女の聖域に逃げ込んでいるとは思ひもすまい。我ながら、なかなかいい選択だ……と、川瀬はほくほくと思う。

（まああの人は異常にするといから、背後から襲われる覚悟だけはしておこう）

とにかく、ウェイのところのクルーがどんな風になっているのか把握しなくては、何も始まらない……。現場実習訓練のクルー組みは、一度、最終決定としてマザコン（このホスト・コンピュータの通称）に送ってしまえば、組み上げをした当人であっても、容易に弄れなくなってしまう。

ベースが固まっていないと、他にこのデータを使う連中が困惑するからだ。プロテクトは厳重で、それは情報機器のエンドユーザに過ぎない川瀬では、自身の裁量で決定したことだといえ弄ることは不可能になる。その自分が最終の決定をしたあと……。データが変わる……。なんてこと、あり得るのだろうか。

自分でさえ、ゴーサインを出して以降のクルー組みについては、照会することはできるが変更することは困難だ。ミスがあったとしたら、始末書を添付して、このように変更してくださいと、総務部のシステム管理に頭を下げていくことになる。ましてや、弄られているなんて……。どう考えても有り得ない。

本当にウェイのクルーにネッド・ソンホ・アフマドの名前があるとしたら……。

RANK S 【CDR】 H・KIRISHIMA

（……はあ？）

佐久間の言ったことは、しゃれや冗談じゃなく、本当のことなのか？ 川瀬は焦る。どうして、いったいいつこんなことになった。ウェイはどこだ？ 亮二は。

RANK S 【1ST PLT】 S・WEI

RANK S 【2ND P LT】 R・CROSSFIE
LD

RANK S 【3RD P LT】 S・MAKI

RANK S 【1ST BUR】 N・S・AHMED

手にじんわりと汗が滲んで来る。生徒の未来を撃沈したら駄目ですよとか何とかほざいていた、ミスタ佐久間のにやつき顔が、川瀬の脳裏をぐるぐるする。

BUR Backup roleの略 つまり、俗称三番目の席、サードシーター、補欠。なんとも呼べるが、よりによってその位置だとすると、万が一にもネットの耳に入ったら、そうでなくても傷ついている彼のプライドは、今度こそズタズタになる。

ネットを押しつぶして、楽しみたいのは誰なんだ。そして、思ったとして、ここに悪さができるだけの、情報スキルがあるやつなんか……いるのか？

得をするのは一体……誰だ？

川瀬の思考はそこで止まる。誰が得するのか、彼には全く分からなかった。いつまでもこそそ隠れている場合ではない。一刻も早く手を打たないと手遅れになる。けれど、このクルー組みをしたのは、川瀬自身ということになっている。これは自分ではないと異議申し立てをするなら、悪戯をしかけた奴をあぶり出して、放校処分にするところまで徹底対決する覚悟で臨まなければならないだろう。こんなところでコソコソ隠れてる場合ではない。

激しく動揺している川瀬の背後で、非情にも扉が開く音がした。

コツコツコツ……。

規則正しく堅い足音は、女性用踵高仕様靴の立てる音に相違なく、川瀬はそのままフリーズする。ばれるにしても早すぎる。自分がここに逃げ込むことなど、女神様には想定済ということなんだろうか。

「先程は……私^{わたくし}の思い違いでなければ、川瀬先生の執務室にご連絡差し上げたように思いますけれど……こちらにいらっしやいましたの？」

穏やかでやさしい言葉づかいが……嵐の前の静けさモードを全体にまわりつかせている。

コツコツコツ。

音は大きくなって背後でピタリと止まる。川瀬の背中を湧きだした汗が筋になって伝い落ちる。

「説明してもらいましょうか。一体何を考えていて、どういっつもりなのか。私は……納得するまで、帰りませんからね」

だからこのスクールの配置は、佐久間など操船の教官につつまれこそすれ、管制技術科のウインスレイ教官を怒らせるようなものではない。管制に関しては彼女のオーダーを入力し直すことすらせず、そのまま流し込んだ。タイプミスの発生する余地すらない。お望み通り、イエス・ミズ・ウィーをした自覚がある川瀬は、諦めて椅子ごと回って振り返り、仁王立ちという雰囲気まさにそのままのウインスレイ教官に向き直った。

「何のことかな」

「しらばつくれるのもいい加減にしてくださいな。川瀬教官の考えるお力は、今回のクルー組みでは、お留守だっただけでなく、狂気に支配されてたとか、陰口をたたかれてますわよ。傍で見ている操船の教官室に爆弾投下なされたに等しいですけど、そんなことはそちらで完結していただけるとありがたいですね。なぜに運行のすることにまで、悪戯なされたのか、説明していただきましょう……それとも、全く心当たりがないとでもおっしゃるのですか？まさか、若年性急性アルツハイマーで、ご自分のなされたことにすっかり身に覚えがないとでも言い抜けられるおつもり？」

ないよつ。何でみんなして、こんな。

「正直、見当もつかないですね。ミス・ウィー」
「ばんつと、手近にあったコンソールパネルの端っこを、ミス・ウィーが強打した。」

「斉藤歩のことよ。彼は、何年に一度の人材だと思ってるんですか。私は、彼に関しては、去年の鵜田や今年の森崎同様、三年後には、訓練船現場実習時に総合運営の指揮をとらせるつもりですと、はっきり申し上げていますよね」

はい、聞いてますよ。

斉藤歩という、あの変わり者の軍所あすかりもの属訓練兵のことについてなんか、自分が全く関知するところでないというのが、川瀬の正直な気持ちだ。斉藤というのは、確か……。

「フライトディレクター候補……でしたね」

「ノン！」

打ち終わるよりも早く響く勢いでミス・ウィーが否定した。

ノンって……、お得意のおフランス語モードですか。

ミス・ウィーは怒りゲージが上がって来ると、フランス語が飛び出して来る。英国系のファミリーネームの持ち主の彼女だけれど、彼女をお育てになったとかいうお祖母様とやらが、どうもフランス語・ネイティブだったらしいのだ。

「チーフ・フライトディレクター候補です」

ぴしりと付け加える。ウンコ玉の迫力満点で、その気迫は戦闘時の自分とためを張るだろう。もっとも、川瀬のような戦闘機乗りはオンとオフの温度差が激しいものなので、というかそうしないと神経がすり切れてしまうので安全のための必要が鍛えた能力だ。コックピットに居ないときの自分で、ミス・ウィーに対抗できると思う方が間違っている。

「学生にクルー組みを発表してしまったら、取り消せないって、そういう魂胆で黙ってらしたんでしょうけれど、その意味するところを納得させてください」

「納得も何も、どう説明したらいいのかな……」

「切れ者のミスタ・カワセとも思えない歯切れの悪さですこと。いいですか、一つや二つのフライトを管制できる人間なんか世の中にゴロゴロいます。複数のフライトを総合的に俯瞰して、管制に至らないまでも、状況把握ができる人材というのは、そのゴロゴロの中に幾つ見つかるか御存じですか？」

だあかあらあつ。貴方が斉藤に目と唾つばを付けてるのはわかりま

したよ。だけど私がウインスレイ教官の秘蔵っ子に何をしたって言うんですかつつ。

そう言いたいのを我慢する。何がどうなっているのか分からない状況で、ジタバタするのはいい結果につながらないというのが、川瀬のポリシーだからだ。

「都合が悪いと、黙ってらっしゃるの？　こそこそ逃げ隠れするのもそうだし、ケツの穴が小さいと言われても文句はいえませんかよ」

ウンコ玉（運行の親玉）に面と向かってほざく勇氣はないものの川瀬は思う。自分は健康体で快腸、快便には自信があるから、普段はちゃんと引き締まった肛門でも、いざことに及べば立派なブツを致してるんだと。そんなに小さい小さい言うなら、今度またすばらしいモノを生み出した暁には、プライベートルームにご招待申し上げたいぐらいだと。

ミス・ウィーはかまわず続ける。

「管制室のブースでパーツになる人間も、ミッション制御にはもちろん不可欠よ。でも、その部分の人材育成は困難じゃありません。でも」

もう一度バンッとコンソールパネルの隅を掌で叩きつけて景氣のいい音をさせてから、神託よろしく宣言した。

「管制室の神になれる人間は、……そう滅多に居ません」

神。そう言い切ったウインスレイ教官に、ちよつと川瀬は突っ込みたくなる。CFDが神だというなら、彼女は自身も神様だと自負してるってことにならないだろうか。

「いろんなことを経験する。それが……大切なのでは」

「馬鹿なことおっしゃらないで下さいませんか？ そんな陳腐な言葉がオールマイティーだと思われるなら、了見違いも甚だしくてよいのですか？ クジラは海で生息するものであつてそれ以外では巨体を持て余して何の役にも立たないどころか、自分の身の振り回し方すら自由にできない。それは分かりますね」

まあ、クジラを海から出してしまえば、彼らが自分の身体を扱いかねるだろうという断言にまで、文句を言う筋合いはない。川瀬は同意を示して頷く。

「クジラに空の飛び方調教して、何の得になるのかと、申し上げているんです。斉藤の役に立たないだけでなく、周りへの迷惑ということも考えてくださるなければ。斉藤のことをお分かりになった上で、Sのフライトクルーへの爆弾にしようというなら、私は断固として貴方を糾弾しますからね。さあ、私と全面対決をお望みだというのではないのなら、そこを納得させてください。これは単純なお願いだと、私なんかは思いますけれど、ミスタ・カワセ……」

クジラに飛び方。たしかに、そんなもん教えても、徒勞と言うか、意味はないな。

そう思いつつ、危険察知能力が低レベルにある、オフモードの川瀬は、交ぜっ返してしまった。

「ウインスレイ教官は、クジラは空を飛ぶ必要がないとでも？」

ああ。私の悪い癖だ。素直にどうなってるのか教えてくださって、どうして言わないんだ私は。

ウインスレイ教官の眉間の深いしわが、びくびくと引き攣っている。

るのを見て、言った川瀬は心の底から後悔したが、ときは既に遅い。

「川瀬教官」

ウインスレイの声の温度が、川瀬の気のせいかもしれないが氷点下まで急降下した。

「あなたが、あのネッド・ソンホに期待していたし、臍肩を出さない程度の冷静さでもって可愛がっていたのは、承知しています。訓練でなく、あんな本当の非常事態になつてしまふなんて、誰だつて予測不可能ですもの。ええ……不幸な事故でした」

何で、この人までネッドを持ち出すんだ。

「何を考えてらっしゃるのかわかりませんが、時間にしか癒せない傷というのは確かにあつて、彼のは、そういう種類の深手でしょう?」

弱いといえばそれまでだが、ウインスレイ教官。ネッドは強いんだよ。本当はね。だって、空が好きだから。その気持ちが無くなつたら二度と飛べないだろうが、彼は違う。飛んでいる。今だつて飛んでいるんだ。

「ライオンは我が子を千仞の谷に突き落とすと言うのは、迷信に過ぎません。痛手を受けている時に、なぜ、そこまで無茶に追い立てようとするの? なぜ待つということがおできにならないの?」

彼をあのポジションで引っぱりだそうとするのは、傲慢です。彼には荒療治も必要とおっしゃるのかもしれませんが、あのウェイ・ソヨンと亮ニクロスフィールド、もう一人貴方の大事にしているパーフェクト真木。彼らが優秀なことも、嫌と言うほどわかっているはずです。なぜ、彼らを集めた船に、よりによってかつての彼の自信と名声のよりどこであつた場所に……補欠クルーとして、ソンホ

の名前をあげられますの？ 残酷ですよ……幾らなんでも」

川瀬としては、真木と亮二の不動のSランクペアのところに、ウェイと霧島飛竜を咬ませた所までは身に覚えがあるが、そこで飛竜をCDRにするという暴挙をやらかした覚えはない。そして傷心をいやしているはずのネッドをサードシート（補欠席）に指定した覚えも無い……。私だって、男心ぐらいは理解する。

男はプライドとプライドとプライドでできてるもんだ。

「なんで……、斉藤を、コックピットクルーが計器読みなんて小馬鹿にするようなポジショニングにして、フライトクルーに組み込まれたのですか？」

ほとほと理解できないという口調でミズ・ウィーは言った。

！

「同じ、フライトサポート業務でも、搭乗要員と地上支援要員では、要求される技術も、必要とされる資質も……本当に、違うんですよ。このミッションに限らず、斉藤という子は、フライトクルーが務まるようなタマじゃありません。一度や二度、クルーとして乗船することが、斉藤のキャリアに何かもたらしてくれるとは、私には思えません」

ちょっと、ウィンスレイさまっ。何おっしゃいました？

逆に川瀬はミズ・ウィーに心から縋り付こうと思ったが、陶酔独白モードのミズ・ウィーに、言葉を切り出すタイミングが掴めない。

斉藤歩。

協調性ゲージ、ゼロ振り切ってマイナス、計測不能のマイペース。歩く傍迷惑。あの唯我独尊、悪魔的思考野郎が…… によりによって……

フライトクルーだとおつつつ！

だあれだあつ。そんな訳の分からんことをしたのは！ 何がどうなってるんだーっ。私が、いつそんな無茶をこり押ししたって言うんだあつつつ、と川瀬の中では、激しい嵐が吹き荒れている。逆にミズ・ウィーのトーンは寂しげに静まっっていく。

「一度、ネツドの気持ちを、ご自身に引き寄せて、想像力を使われてごらんになれば、ご自分がなさったことがどれほど残酷か、どれだけ無意味か、きつとお分かりになりますわ」

自分が…… したことつてのが…… 何ともナア。

川瀬は自分が非情に不利な立場に追い詰められていると思ったし、理不尽に責められているとしか思えない。

「冷たい顔をしてらっしゃるわ。だめですね。話をしようにも共有するものが、まるでないと言うことですね。私は今回、斉藤には、緊急避難訓練を仕掛ける予定になっているクルーのフライトを管制するチームの一員にでもしてくださいと…… 信じてましたのよ」

だから、そうしたんだが。

斉藤はSクルー専属のサポートチームに配置したはずだ。

「川瀬教官。あなたは今回、とことん、壊れてらしてよ。御自分で気付いてらっしゃらないの？」

身に覚えがない……。

今日何度目かで川瀬は思った。

「私は今回のクルー組みにも、ベストと思われる人材を、適当と思われるところに配置したつもりです」

川瀬はそれだけは天地神明に誓ってと胸を張れるだけの自信がある。それが、どうしてもここまでひねくれたものに、どこでどう変成を遂げたのか、見当もつかない。

「斉藤歩にしても、俯瞰する前に、飛んで行く目線を養うことは無駄でないはずですが」

自分で言っていて、苦しい言い訳だと川瀬は思う。ミズ・ウィーが彼を一つの実習船に限定して、その管制班のクルーとして働くようにしたように配置したのも、誰にだって下積みという視点が必要だと考えたからだろう。

人を使うときになって誤ってしまうことを減らすには、使われることで不満を味わう経験をするしかない。それは成長の過程において必要であつて的確なことだと思う。

幾ら才能があろうと、いきなり第一管の最後尾にでんと居すわつて、全体を俯瞰させることは難しいと、まあ、ミズ・ウィーも常識的に考えたとそういうことだろう。

「話にすら……なりませんわね。ミスタ・カワセ。私は貴方を糾弾します。よろしいですか、私がそうする前にここにきたのは、警告ではなく、思い直していただきたいというお願いでしたのに。ええ、そのままにするおつもりでしたら覚悟してらしてくださいね」

ミズ・ウィーはそう言い置いて、またコツコツとヒールの音を響かせて去っていく。

「首は切られるどのぐらい前に洗っておいたらよいかぐらいは、ご忠告しますわ。ミスタ・カワセ」

ドアが開いてそして閉まる音がした。果然とその背中を見送りながら川瀬は考えた。

けれど、彼女のデータを改竄した記憶はなし……。だれだ。いたい……。だれ……。

あ……。

川瀬の脳裏に一つの可能性が思い当たった。そしてそれは、間違いないという確信と手をつないでやってきた。

斉藤歩……。奴自身か？

あの若さで、極東アジア国軍の防衛大学を卒業している男。トークモード経由で、ホスト・コンピュータの判断をかませることなく、直に指令を出せる言語を習得しているという恐るべき能力の持ち主。うちのホスト型、データ蓄積型でありながら、経験の蓄積によってヒューマンライクなインターフェイスも併せ持つAIを設計した、ドロレス・オルティガの熱狂者^{フアナティック}。あれと学園の部外者が、堂々とうちのホストにアクセスできる唯一の機会だからという、とんでもない理由で、入学試験会場にやってきて、個別ブースに入って以降、時間一杯まで、ホストとトークして過ごしたという、わけのわからんことをした奴。

さまざまな情報をさっさと纏め上げて、セキュリティの脆弱な部分はどこか、どういうようにしたらもう少し質の高い管理ができるのかを指摘したメモと、マザコン『アースラ』の現在の成長段階に対する考察と、適正なメンテナンス・管理によって、マンライクに振れ過ぎることをいかに阻止するか、そして見掛けのヒューマンインターフェイスを、より洗練させるには、どのようなアプローチが

有効か…… などという、万が一彼が受験をしたのが、ジ・アースの総合人間行動専門学校の入試なら、文句なく花マル、特待生待遇一発確保確実のクオリティのレポートを提出して帰って行った極めつけの変人。

テストには一問も答えてなくせに、その視野の広さと、冷静な分析力と、情報処理能力にウインスレイ教官が惚れ抜いて、斉藤をベタ可愛がりしている極東アジア国軍の情報将官である岸二佐に（あれほど二度と会いたくないと宣言していたのに）自分のところに寄越すよう、お百度を踏んだとか、三顧の礼をとっただとか…… まことしやかに伝わってきているだけの曰く付きの人間。

在学中は、N e x G a s s のマザコンと好きなだけ触れ合って構わないというウインスレイ教官の甘い餌にホイホイ飛びついて、管制技術科の定期試験でそこその成績を維持できれば『アースラ』とどっぷりデートしていて構わないという特権を確約されてやってきた、学生というには些いさか問題がある立ち位置にいるあの…… 斉藤歩。

川瀬は目まぐるしく考える。

星間運輸も、地球とのシャトル輸送業務も手がける大手民間企業の御曹司、霧島飛竜……。いくら奴が不動のシュミレーター首位者だとしても、普通の神経をしていたら実際に飛ばしたことが無い奴にパイロットを飛ばしてコマンダーを割り当てることなんかしない……。…。

しかも、去年の訓練までパイロットとして優秀な成績を納めているクロスフィールドとウェイ、そして誰もが認める名CDRの真木がいるチームで。

真木……。パーフェクト真木。あいつが……。まさか……。ネッド・ソンホを引っ張りだそうとして、斉藤を籠絡もっくわくしたという可能性はないだろうか。

そう、真木はネッドに惚れ抜いていた。そして、あの事件の表面しか知らされなければ、奴がいざというときに何もできずに、ウェイに助けられたことで自信喪失して登校拒否になっているという、本人を知ればこそ無理がありすぎるストーリーに、誰よりも疑問を持ってるはずだ。真相を……。誰よりも知りたがっているのは真木だ。斉藤なんかじゃない。

ああいう女に、あれだけ思いをぶつけられるというのは、ネッド・ソンホ。お前の器量も半端じゃないってことだ。

けれど奴は去年のミッションで……。己と真木の資質の違いに気付いてしまった。そして、それをお前は屈辱と感じてしまった。そして、自分が何をやりたいのか勘違いしていたことにもついでに気付いてしまった。

……。だから逃げた。

だけどな、俺に言わせれば、する必要のない絶望だ。

川瀬は今ここに居ないネッドに心から言いたかった。

お前は真木じゃない。真木じゃないから、真木が惚れるんだ。

お前はそこところを、まるで解っていない。お前は、真木に何も言わずに逃げた。あいつだって、傷つく。お前が傷ついたとき、頼りにされなかったことを悔いる。真木ってのは、そんなふうにかが動くやつだ。

だけどあの時　川瀬は尚も思う　お前には、そういう真木の器が、重くなっちまったんだよな。それだってお前の罪なんかじゃ

ない。男つてのの下らないプライドって奴は、そもそもがチンケなくせにどこまでもやっかいだ。

そして、川瀬が真木にその事実を告げないのも、彼女を傷つけないやさしさからだった。ネッドが敗北から逃げているのではなく、真木の視線から逃げているのだという事実を告げるのは、あのゴツイ真木だって、ネッドに対しては乙女おとめだから、残酷すぎると判断した。間違っていたとは思わない。

気が済むまで、飛んでこい

そうネッド・ソンホをけしかける以外のことだが、川瀬にできたとも思えない。彼を癒すのは彼が大好きな空にしかできない仕事だというのが、川瀬の確信としてあったからだ。だから、後悔もしない。

十分に考えてた後の今でも、あいつをあそこにやったのは、最良に近い選択だったと信じている。

真木も十分に強い。あいつは……寂しいだろうが、ソンホは、自分で自分が真木と違ってて良いってことを、発見して納得しなきゃならないんだからな。

飛ぶ鳥に空が必要なように。

泳ぐ鳥に海が必要なように。

走る鳥に大地が必要なように。

ネッド・ソンホ・アフマド お前にはただ飛ぶことが必要なんだ……あのときは思った。

真木。けどお前のことを忘れていた。そうだ、枕を涙で濡らしながら弱々しく待つなんて、お前のスタイルなんかじゃない。お前大人しく待てというのが、土台無理だったか？

奴が自分に整理をつけて帰ってくるのを待てなかったのか？ 斉藤なんかを使ってネツドの名前をクルーに無理やりねじ込んで、お前は何を期待している？

お前がこんなふうに奴を呼べば、その声があいつに届くと思っているのか？

奴が来なければ、真木の純白の成績にシミがつく。真木は気にしないだろうが……ネツドなら気にする。だけど、そんなふうに考えたのは、真木じゃあないだろう。アイツにはそんな陰険さの持ち合わせはない。

どうせ……斉藤……、真木にそんな悪知恵を吹き込んだ犯人は、お前だろう？

だいたい、飛ぶことの恐さを知ってる真木には、本当に飛んだことが無い霧島飛竜をCDRにする発想は出ないだろう。

素人CDRでは、何か起こったときに自分たちにかかるリスクも大きいからな。

この人の命が大事ならさっさと出てこい……そういう脅しは、えげつないぞ、斉藤。

ただ飛ぶことで、自分と向き合っている奴に、周りを見渡す余裕がなくなってるといったって、この情報が行けば、奴は来るだけは

来るだろう。……真木のために。

真木はあんな風でいて、結構抜けてるからなあ。招集日に全員来なければ容赦なく不可が飛ぶっていうウチの常識を考慮に入れば、ここに奴の名前を入れることは、自分をエサにソンホに脅しをかけるのと同じことだなんて、全く気付いてないだろう。

それだから、斉藤。上手の手から水が漏れるというのはこういうことだ。

第一、ソンホがあそこで飛んでいるのを知っている人間は……ほとんど居ない。これだけひねくれて手の込んだ脅しを、どうやってソンホに突きつけるつもりだ？

お前が幾ら情報を引き出してこねくり回す天才でも、人の心の奥にある感情という情報まで、自由に扱えると……そんな、つもりでいるんじゃないだろうな。

斉藤……そんなに何でもかんでも、お前の意図した通りに物ごとが進むとでも、奢っていやがるのか？

大体、お前、そんなに人間関係にマメなやつだったか？ 誰かが苦しんでいても、それを傍から安直に手を出すことの無意味さを、誰よりも達観していたんじゃないのか？

それとも、お前みたいな奴でも、真木の頼みなら動くのか？

まさか無責任に、ただ成り行きを楽しみたい……っていうんじゃないだろうな。

斉藤歩。お前、いったい、何を考えている？

そこまで一気に考えて、どっと川瀬は疲れた。そこまで見えてしまえば、お手並み拝見モードになって、首を洗っているしかしょうがないではないか。あいつらも何時までも子どもの殻の中でいられるわけじゃないから、転ばない様にお手手繋いで、ひっぱってやる義理も義務もない。人間、痛い目に遭うこともまあ時には必要だ。

手を出すのは……転んだ後でも……仕方ないか。まずは、お手並み拝見と行こうか。

その一方でやはり、川瀬はため息を禁じ得なかった。

見守るだけ……ってのは、案外……しんどいもんだなあ。

9・オトメのキモチ

カップルばかりで、季節の割に暑苦しい夜の街。
ウェイ・ソヨンは独り心の中で毒づいた。

クリスマスイルミネーションが幻想的な雰囲気を作り、カップルの背中を後押ししまくっているかのようなイヴの夜。ショーウィンドウたちはまばゆく彩られて、キラキラ感に溢れている。

学校帰りの普段着なのがちょっと後ろめたくなるぐらい、街を闊^か歩^{っぽ}する女の子たちは、気合が入っておしゃれをしている。もちろん当然で、飾り窓なんかには負けないぐらい輝いてみえる。

皆、イベント好きなのよね、結局のところ。

ソヨンと一緒に歩いているのは、亮二クロスフィールド。彼は上背があるだけでなく、ちよっとその辺のメンズ雑誌のモデルも十分に務まりそうな、いわゆるセンスのある服を嫌味なく着こなしている。文句なしのちよっといい男系だ。

ソヨンが自分が惚れた欲目でないと確信するのは、道行く女の子たちがチラチラと亮二を好奇心たっぷりの視線で見、それから自分のツレを見て「負けた」って顔をしているのに気が付いたときだ。あの女程度のチビでも、このイカしてる奴の彼女ができるなら、そこに立つてるのが自分でもいいのにつて、露骨にそう思っている眼だ。

また一人すれ違い様に、カレシらしきおイモ君と腕を組んでる女が、亮二を見てソヨンに『負けた』視線を送ってよこした。羨ましそうに見られたところで、自分は亮二の彼女なんかじゃないんだよね。そう思うと、やっぱりソヨンはげっそりと力が抜ける気がした。

貴方と手をつないで歩いているのがカレシなら、その時点で私の方がキツチリ負けてるんだよ、と、そう思う。

学びたいことがあるわけでもないのに、社会で一人前に扱われる前の執行猶予が欲しくて行ってるような大学なら、もっとおしゃれも楽しんで、デートもたくさんして、エンジョイ私生活ができるんだろうけど、ウチでそんなことをしていたら、成績通知表のまさにそのタイトルが書いてある表紙に、通称、『おまえはそろそろ死んでいる』印の星マークが、黒々とした色で、ドカンと押されることになる。

N e x G a s s で『スター』だの『星』と言えば、もちろん、管制のチーフ・フライト・ディレクターのことなので、この『』は、正統派スターと区別するために単純に黒星くろほしと呼ばれる。

こいつを半期に三つくらうと、まず、自主退学勧告通知というのがやってくる。頑張っても無駄だから、早くほかに道を探そうねということだ。それでも居すわることはできるが、無事に黒星四個目を獲得すれば、問答無用の放校処分が待っている。自主退学と放校処分では、履歴書の扱いが違って来る。もちろん、今時、進学だ就職だという局面で、ペーパーで履歴書を自筆書きすることなどないので、データベースを管理しているホスト型コンピュータに履歴改竄をかけられるほどの凄腕ハッカーにツテでもなければ、学校を首になったという履歴が生涯ついてまわることになる。

まあ、三年も、四年も死ぬ気でコミットして、半期で四回も死ぬほどのウツカリ君であれば、それはこの道で食っていくのは諦めた方が自分のためにも、共に働くことになる周りのためにも必要なことで、そういう意味で甘い学校よりも、結局のところ学生に優しいのだろう。アホを大量に抱え込んで学費を吸い上げるのが第一義じ

やないというのは、私学にはできない誠実な態度というやつに違いない。

冬季休暇に突入する最終日の今日、曰く付きのクルー組み発表のとき、彼女が最高学年のエース、シェリル真木に「三本チョンボしても大丈夫」と怪気炎をあげた。それはつまりは、今期はまだ一度も黒星をくらったことがないという確かな自負が言わせたセリフでもあった。

この黒星。本来の星取表でいうなら、単純な『』で十分なはずなのだが、こんなところ通知表にまで星型が出張るのは、結局のところ皆、ウチに関わってる連中は、運営だろうと、教授だろうと、学生だろうとに関わらず、お星さまが大好きで『宇宙人』と呼ばれることに誇りを見出す人種だという証拠なんだろうとソヨンは思う。

そして星型フリーカーは、間違いなく航空科に多いはずだ。誰だってあの地球から見える星たちには魅了される。分厚い大気のせいで、輪郭が崩れて歪んだ煌めく星を、宇宙で見るのは無理だ。あの星型の星を実感したければ、地球テラ参りをするしかない。彼女は、去年初めて本当に行った彼の地から見上げる星たちが、本当に星型みたに見えたのをソヨンは鮮明に覚えている。

あの自己主張の強い、圧倒的な光の渦でしかない星と違って、夢げに夢見る様に煌めきらいていた星は、地球時代からある伝統的昔話絵本で、どうしてあんな形をしているのかの謎に答え合わせをしてくれた。

今のところのソヨンにとっての最大級のナゾは、亮二が自分をどう思ってるかということだ。彼女の溢れる様な疑問には、いったい誰が答えをくれるのだろうか。ある日突然、天からその答えが降って来るのではなくて、自分でどこかちゃんとそれが見える場所まで

いつてみて、初めて見えて来るものなんだろうか。

そばにいるのに、一緒に歩いているのに、胸のときどきがとまらないほど好きなのに、亮二の手に自分の手を伸ばすことができない。亮二から振り払われたりしたら、立ち直れないのが分かってるから怖くてできないのか、その気になればすぐ落っこちる様な軽い女に見られたくないっていう意地が邪魔をしているのか、その境界は曖昧でばやけていて、ソヨン自身にもよく分からない。

星と同じように、女は本質はどうあれ、ぱつと見に、風が吹けば飛ぶ様な美女である方が、マツチヨで殺しても死なないように見える女より、とりあえずのウケはいいだろう。ため息混じりに、自分から触れることなんかできやしない亮二の手を見る。長身だから当たり前なのかもしれないが、指が長い。手入れなんかしてないはずなのに、女みたいにつやつやとピンクに艶めく綺麗な爪が、几帳面に短く整えてある。

あの指が伸びて、私の指と絡まる。当然、ウィズプレジャーなんだけどな。

そう思ったけれど、煩惱めいた思考のループを、ソヨンは頭を軽く一振りしてはね飛ばした。

どっちにしる、今はロマンスなんぞに突撃している場合ではない。もうすぐ、もう一度、あそこに向かうのだから。航空科の聖地……^{ブランチ}地球への突入。初めてコックピットで味わった大気圏へまさしく攻め込んだ瞬間のゾクゾクくるような恍惚は、^{エクスタシー}思いを馳せるだけで、気合が入ってドキドキしてくるのだ。

今はそう、小学校のころの遠足や運動会まで、カレンダーで自主カウントダウンをしていたところと同じ気分だ。浮き立って拡散して

いくのと、集中力が絞られていくのと、全く違う力学の法則に従って、変成されしていく。体の内側がごちゃまぜな　混沌に支配されていく。

一、二年のペーパーのころは別にして、シミュレータ搭乗免許証のうち、シミュレータにソロで搭乗してもいいA級ライセンス取得後に、データとして死ぬだけでも黒星は当然押されるので、全く死んだことがない人間など居ないはずだ。

ソヨンクラスになれば、シミュレータがしかけて来る在り来りのちよつかいくらいで可愛く即死はしない自信があるけれど、やっぱりそうはいつでも御しきれないことも、それは当然ある。つまり現場だったらとつくに死んでいる……。

そこまで考えたとき、ソヨンは背中がゾクつと震えるのを感じた。

死は、本当に遠くにかすんでいるわけじゃない。生きている自分たちの横に、何食わぬ顔をしてそこにいる。一度……傍らに立っている死と視線が合った。そして覚悟した。

本物の死は、多分ソヨンがそれまで思ってきたよりも、随分と近くにあった。

そして……生き延びた。

自分の力と、自分の運で、そこを乗り切ったわけじゃないにもかかわらず、何かを一つ越えた実感があった。そう、本当に死が身近であっても、地球にプランジできる職業に付ける可能性がありながら、そうでない道を自分は選ばないだろうという確信だ。自分は魅せられている。何につて、もちろん、地球そのものにだ。

今は実習のことが一番大事。

ソヨンはそう思って、のんびり歩く亮二の横顔を眺める。もちろんありすぎる身長差は、横顔というよりは顎越しに頬のラインをなぞると言った方が近いのだけれど。

なんで亮二が、去年の彼のCDRである真木さんが店でお待ちかねと知っているのに、だらだらとやる気がなさげに歩いているのか、ソヨンは訝った。

と……、最低なことに、ソヨンの目で見てさえ、ちょっと「あの子カワイイ……」系の女の子とすれ違ったりするときに、亮二の瞳の中で、喜色がくるりくるりと浮かんで弾けていた。何のことはない、クリスマスを満喫している普通の女の子たちをみて、浮かれているのだ、コイツは……。

ソヨンは馬鹿馬鹿しくなった。本当に亮二は自分のことなんか、何とも思っていない。そう思うとソヨンは、朝部屋を出るときに勝負服を持って出なかったことを、意地でも後悔してやるもんかと心に決めた。

でも……。

ソヨンは、もう一度こっさり思う。あちこちに浮気に彷徨う亮二の視線は、どちらかというと単純に眼福を堪能がんぷくしているだけという感じで、キラキラしいクリスマス・イルミネーションを見ると同じ目の色だ。

女の子を妄想で脱がして、脳内凌辱に勤しんでいるような雰囲気ははつきりいつてゼロだ。

どーも、亮二はデカインだけど……。

行動パターンが、使い古された表現でいくなら草食系というやつなんだよなと、ソヨンは思う。もつとぐぐつと行かないのだろうか。もつとも、草食系といっても、アースビューチャンネルのサバンナで、食われる恐れにビクビクと飛び跳ねて逃げ回ってるシマウマとかガゼル系の奴じゃなくて、太ってはないからゾウとかカバとは思いたくないけど、例えばキリンとかみたいに、とりあえずの天敵がいらないから、余程のことがない限りジタバタする必要がない、可愛げがない方の草食系だ。

もし亮二がキリンだったとしたら……、隣でガゼルのガキンちよが、その幼い人生（？）を、ハイエナのご馳走として終える流血の惨事になっていても、「おお、君もお食事ですか？」という雰囲気、木の葉っぱをまったりと食ってるに決まっている。

そう、大概の男なんて、自分が一番いい男という根拠のない自身に満ちあふれた存在だから、女のコの熱い視線に敏感なはずなんだけど、どうも亮二はそうでないのだ。ソヨンからのものだけに限らず、視線などという繊細なものには、さっぱり気付いてないように見える。

今はそんなことを考えてる場合じゃないと言いつけるけれど、やっぱりチャラけた外見に似合わない、真面目さがたまらなく好きなソヨンとしては、揺るがないその視線に寄り切りアンドあびせ倒しくらつても……いいんじゃないのか、と聞きたくなる。

さもしくそんなことを考えた後味は悪くて、ソヨンは下唇をきゅつと噛んだ。

ごめんなさいだけど、そっちのカレよか、亮二の方が断然いい男でしょつ。

ソヨンは自分の苛立ちを、受け取ってくれるはずがない通りすが

りの他人に、こっそりぶつけて勝ち誇ってみてから、脱力した。：
…虚^{むな}しい。

がつくりとため息をつく。

ソヨンは顔を真剣に見つづけようとしたら、首が痛くなりそうなほどの長身の亮二を、もう一度黒目だけでちらと見上げた。

何度見ても、そのまま切り取って雑誌に貼っても違和感ないほどの着こなしだ。いわゆるスキのないおしゃれってやつだ。多分亮二自身は、そもそも自分がそこそいい男に見えちゃってるってこと自体をまるで分かってないんだよなと、ソヨンは思った。

第一、亮二の抜群なおしゃれが、別に彼の甲斐性でそうなってる訳じゃないというネタをソヨンは知っている。土地のバカ高いネオ・シヤンガンに住むために、亮二はルームシェアしている。その同居人というか片割れが、メンズブティックのスタイリストをやっているらしいのだ。

亮二の服装や髪形が、ハンパでなく決まっている真相が、その同居人が「きつと似合うから」とセットにして押しつけてくるのを、細かいことにこだわらず、そのまま有り難く着てるということだとしてもだ。

まあ、プロのスタイリストが、おもちゃにしたくなるぐらいだから、亮二の見てくれはそもそもいいのだ。

亮二に誘われて、二人で街に繰り出して、これでずーっと二人で過ごす約束で、クリスマスイベントとしての告白に至る航路^{ルート}があるなら、多分ドキドキ・ゲージがもうちょっと振れるのだとは思っただけだ……。

お店に着いちゃえば他の連中も一緒なんだよね。

ソヨンはそつとため息をつく。クルー組みも無事発表になったことだし、奢るから飲もうと先輩のシェリル真木に誘われて、ただ酒に釣られていそいそ出てきているだけなのだ。目的地に着くまでの僅かの隙間の二人つきりは、それでも、ソヨンにとって楽しいことだった。悔しいけれど……。

中途半端なクリスマス。

* * *

歩いていれば目的地には当然至ってしまう。そのまま亮二は、二人きりの時間を惜しむでもなく店の扉を開ける。入ったとたんに……。

「おっそ〜い。ソヨン」

シェリル真木の、聞き慣れた声が突撃してきた。ガタイが大きいだけじゃなくて、彼女は声も大きいのだ。亮二よりも当然小さいのだけれど、それでも彼と並んで立てば、真木の頭は亮二のこめかみぐらいまで届く。

180センチを優に越える長身の真木は、ただいるだけで衆目を集めるほどに存在感に溢れている。なのに、鍛え抜かれたメリハリボディがいやでも分かる、多分フェイクだとは思っけど、レザーの黒いツナギを着ているので、目立ち度に拍車がかかっている。シヨ

ツトガンでも持たせたら、そのまま、アクション映画に登場できそうな雰囲気がある。

さっぱりした気性で、しかも細かいことまで配慮のできる気配り屋。航空科の文句なしのエースで、ついでに去年は亮二がいたチームでCDRを張ってた人だ。技術の方もさることながら、問答無用で周囲を自分のペースに引き込んでしまう押しの強さも一級品。

なみいる自意識過剰野郎どもからも、絶対に舐められない。ついでに今まで成績表に黒星を押されたことが一度もないと聞いている。プロレスじゃあないけど、人呼んで『パーフェクト真木』。

たった一つだけし学年が合わない真木を、ソヨンが『真木』と認識したのは、もちろん、学校に入ってほどなくしてだった。とにかく、あの惑星間輸送船並みの、桁外れのガタイだ。トレーニングルームで走っているだけで、とにかく目立つ。シミュレータのスコアが抜群だとかそういう部分は置いておいても問答無用の有名人というやつだ。

もっとも、ソヨンが真木と親しく付き合う様になったのは、彼女が実習デビューした新人のときから、なぜか同じチームのクルーで、四年次履修生ながら、シミュレーターランキングで常にトップクラスを走っていたネッド・ソンホ・アフマドが、真木といわゆる公認のカップルだったからだ。

ネッドは特に大気圏内滑空課題では他の追従を許さないほどに秀でて「鳥人」と渾名あだなされていた。

ネッドは、普通の多くの人たちと同じように、コロニー生まれのコロニー育ち。風が普通に吹き抜ける環境に生きていたことはないはずなのに、生来の鳥みたいに風を読むのが抜きんでうまい。それは、三年次と四年次の二年連続で同じクルーだったソヨンは、ネッドがシミュレータに乗るときに同乗させてもらうことも多かったから、誰よりも知っているつもりでいる。そして、本当の地球テラの空

を滑空した強烈な記憶。

風を掴んだ鳥が、何と自由に大空を滑空するのかを、ソヨンはネットの運転で知った。飛べることと飛べないことの間にも、大きな差があるけれど、本当に自由に飛べることと、どうにかこうにか堕ちないでいることの間にある、大きな差を実感した瞬間。

魅せられた。あのとき、ネットは本当に鳳おおとりそのものだった。

幸いなる少数でもない限り、地球の空を飛ぼうと思ったら、シャトルライダーぐらいしか道がない。だから、ネットは好きでもない航宙もついでにやっていた。その当然の結果として宙空双方でそこそいけている真木に、総合評価としては、いつもトップを取られていたけれど、まあ、彼がそれを気にしていたとは思えない。

ネット・ソンホ 彼にとっては、空が全てだったから。

あの男の中に置いてさえ大柄に見える真木と、普通サイズのネットさんと並べば、どう見ても上下も左右も真木の方が圧倒している。なのに、デートで気合が入れば、真木は遠慮もせずにハイヒールを履いたりするから、サイズのますます大きく見える。ハイヒールモーターとの真木は、あの亮二と完全に同じぐらいのサイズになる。

こじんまりしたネットと並べば、どうにもちぐはぐな感否めないけれども、真木はいつだって、ネットが傍にいるときは、女の濃度が上がってみえていた。普段の真木と、ネットといるときの真木は、艶っぽさが違っていた。

例えば、去年の学校でのクリスマス・ダンパ。あのときは、真木は胸元が大胆に開いたドレスを着て、いつにも増して衆目を集めていたし、誘われれば誰とでもホイホイ楽しそうに踊っていた。あんなですこい姐御のくせに、音感もリズム感もピカイチなのだ。華があるというのは、ああいう種類の人のためにある言葉なんだろう。

一方でネットは、殆ど面白くもなさそうにお酒を舐めながら、壁の番人をしていた。彼は賑やかなのは苦手かどうかまでは知らないけれど、自分で周りを賑やかすのは絶対にできないタイプだとソヨンにも分かる。

ダンスの隙間に真木はいつもネットのところに帰って、彼の腰に腕を回して体の側面を、ぺったし密着させるようにしてなにかをしやべっていた。ネットは自由に楽しんでいる真木を束縛してないし、真木もネットとパーティーに来ているのに、そういうのが苦手なネットに無理にダンスをねだるような無茶は言っていない。それがとても大人に見えて、年齢も実際にそんなに違わないのに、なんか当然に、十分にお互いの違いを認め合ってる仲みたいに見えるのが羨ましかった。

「ああ、なんだ亮二も一緒か。どおりで待たされると思ったわ。悪いと思ったけど、始めちゃってるよお」

訳知り顔のニコニコが凶悪な真木が、「首尾はいかほど？」目線で手を振ってきた。ソヨンは「見ての通りの相変わらず」表明をして、ひらひらと手を肩の横辺りに泳がせながら、よく知った顔がたむろすテーブルに向かって歩きだした。

「ごめん」。学校の誰かに、一緒にいるところ見られちゃ、まずかったかなあ」

亮二も当然同じテーブルに向かう。のんびりした足音だとソヨンは思う。自分の一歩半の足音について一つだけ。それだけで亮二はゆったり落ち着きはらったキリンに見えて、自分はせかせか頑張っている兎がいいとこに見えるなんて、不公平な気がする。

「大丈夫だって。カップルばかりで、誰も景色なんてみちやいねえって。まして他のカップルなんて興味ねえだろ」

突然の亮二のカップル発言に、ソヨンの心臓は跳ね上がりそうになった。見上げると、いつもにも増して普通の亮二で、単なる軽口だとは思えない。

亮二のカップル云々なんて軽口に喜んで、情けないぞウェイ・ソヨン。今回は私のことは後回し、後回し。

「うわっ、本当に運転手さんだらけだあ。真木さん、俺なんか来ちゃってよかったんですか？ このメンバーだと、ちょっと引くなあ」

今回のクルーのメンツに入っている、結城ゆづきが言った。

名前はなんだったかな。忘れちゃったや。

ソヨンはさっさと思いつくのを諦めた。結城はあの高柳と一緒にミッションスペシャリスト科だから、コックピットクルーじゃない。だけど現場実習船に乗るのは今回で三年目だというから、ソヨンと一緒にの五年次履修生だ。

最高学年はいわゆるオブザーバー的立場に一步下がって、音頭を取るのが大体五年の役割だから今回のミッションの柱になるはずだ。たしか二回目では古株組みとは言えないだろうけど、もう一人、全くの新人さんじゃないから、こっちサイドに呼んで間違いないと思う人間がMSにいたはずだ。気配りの真木さんともあるう人が、運転手の中に一人にある結城に気づかって、もう一人に声をかけたりしなかったんだろうか。

「MSは結城くんだけ？」

「あ、ウェイさん、俺のこと個別認識してくれてたんだ。嬉しいな」
意外なことに、結城のニコニコ顔がかわいらしいと思えてソヨンは自分にため息をつきなくなった。これじゃあ道行く女の子に、露

骨に喜々としていた亮二と変わらない。

「真木さんは、退屈で厳しい前半戦を乗り切った打ち上げに、実習にテイクオフする仲間になった俺たちにもちゃんと声かけてくれたんだ。けどさ、あいつもタカの野郎と一緒に、マイペース野郎だから真木さんのお誘いを無下に断るといふ暴挙をしでかしたんだぜ」

真木がくくくつと笑った。

「須賀が言ってたのは興味ないじゃなくて、先約があるだっただろ。駄目じゃないか、クルーの仲間の評判積極的に落としちゃ」

結城が肩をひよいとすくめた。

「大体、クリスマス・イブ当日に声かけられて、二つ返事の結城の方がだらしないんじゃないの？ 予定入れたら蹴り入れて来る彼女の一人もいないってこったろ？」

「それは皆さんも同じってことでしょうが。俺はウェイさんと真木さん、つまえ、墜落科のクイーンとプリンセスと同席できるなら、彼女なんてふつちゃうのよ」

軽口を叩く結城の肩に、真木の非常に重そうな平手打ちが乗った。

「墜落科……って、このメンツの顔を見ながら口にできるとは、いい根性じゃないか。結城っ」

真木がさっそく、結城から敬称『クン』をとっぱらった。

MSの連中をよく知らないのは、自分も真木も一緒だとは思っ

けれど、真木はぐいぐいと自分のペースで周りを巻き込んで、その場で寂しく浮いてる人間なんていないようにしてしまう。年次から言ったら私たちと情報を共有する側で全く問題ない。クルーとしてあるなら、情報に濃淡が付きすぎない方がいい。こういうところに配慮が利く。真木という人は、先手必勝の攻撃的人たらしモードで突撃して、問答無用で信頼を勝ち取っていくタイプなのだ。自分が真木のように振る舞うことは無理だけれど、やっぱりあんなふうに

なりたい……そんなふうにソヨンは思ったりする。

あーあ、真木さんたちが卒業したら、最高学年になっちゃうのよねえ。

「早く座って。何でも頼んで、今日は奢りよっ」

真木さんが言う。どうせデートの予定も入ってないし、ついでに亮二もいるし。悪くないクリスマス。それに……問題山積のクルーの船出。本当は……私の名前があそこに輝いてるはずだった。御曹司の名が偉そうにあつたあそこに……。

「ごめんね、ソヨン。今回のことは、本当に悪いと思ってる。でも何とかアイツを引っ張り出せたら、絶対に私が責任もってちゃんと川瀬に詫び入れて、元に戻すから。一回や二回奢るだけじゃ気が済まないんだけど、気持ちだけでもね。まったく……あの、ど阿呆の所為で、迷惑かけるわ」

真木が『アイツ』と言ったのは、前回の総合実習訓練で、ソヨンがIST PLTパイロットだったときのCDR、ネッド・ソンホ・アフマドのことだ。実習訓練期間の最後の航宙で起こった事故で、何も出来なかったということになっている人だ。ソヨンにしてみれば、ネッドがそうでなかったことは事実なので、あれのどこがどうなったら、尊敬している『ネッドさん』の登校拒否につながるのかさっぱり見当もつかない。

本人に黙っているとか口止めされて黙っていたというより、どこがどうなってるそんな事態に転がったのか、当事者でありながら見えてない。そして、間違っただけをいうくらいなら、黙ってる方がましだと思って黙っている内に、事実とかけ離れたことに皆の理解がな

っていた、というのがすべての真相だ。

本当ならば称賛を受けて当然なのはネッドだ。すごいフライトテクニックをソヨンに見せつけておきながら、あのときの彼は、道に迷った子供よりも途方に暮れた顔をしていた。あの表情がソヨンには忘れられないのだ。

真木とネッドは、新入生の一年次から早速、ずっとシミュレータ―でのスコア争いをしてきたそうで、技術としてはほぼ互角という噂も高い。真木が今年、あのミスタ・シミュレータ坊主に後れをとってるのだって、あの御曹司が特別優秀だというよりは、恋人ではありながら、ずっとしのぎを削ってきたネッドの不在が、真木にとって相当に大きいのだらうと、ソヨンは踏んでいる。

それでも真木は、突然のネッドの不在に、戸惑って弱々しく泣いているというより、不機嫌に怒っている様にしか見えない。

まったく真木さんてば、いつだってこうなんだから。

とソヨンは思った。

多分ネッドさんも、真木さんなら一人で大丈夫だと思ってるのだと思う。お互いの自立を尊重し合うのは結構だけど、ちょっとというか、そこまでいくとキツすぎる。いろんなことを曲げてでも、好きな人の傍に居たいって気持ちがある、あの真木にだってちゃんとあるのは間違いないのだ。

鈍い男どもでも分かりやすい様に、真木もたまには表情だけでも寂しそうにすれば、いいのにと、ソヨンは思う。ネッドは真木を信用しすぎてる。多分、彼にとっても真木はカワイイ彼女じゃなくて、パーフェクト真木なんだろう。

それって、ちょっと最低だよな。

「ソヨン……。本当に悪かったわ。まさか、ミスタ^{エス}Sが本当にやるって、正直思ってもなくてさ……」

それは私も思った。でも『ネッド・ソンホ・アフマドがなんで学校に来なくなっただか、本当のことを知りたいとは思いませんか?』と、真木さんのところに、あの変人がやってきたのが、そもそもの始まりなのだと聞いている。

共に飛んでいたのに、同じときにコックピットで、アレを見たのに、そしてあんなふうにならなくなったのに、どこがどうなって、ネッドを打ちのめしてしまったのか、全然わかっていない。どうしてネッドが落ち込んでいるのかさっぱり分からないソヨンには、アレが真相を探り出してくれて、今不在のネッドを、学校や真木さんや……自分のところに連れて帰って来てくれるなら、協力したいと思ったのだ。

だけど……そのGOサインが……。

あの奇天烈なクルー組みなのだ。その理論の根拠が、「真木をエサにする」だなんていうのも、ソヨンには信じられない。ネッドが真木の恋人であることを前提として単純な作戦をしかけようと、真木に持ちかけた「ミスタS」などという、出来の悪い男児向け戦隊ものの悪役のような名乗りをしている奴に、本当にネッドを引っ張りだすことが可能なんだろうか。ソヨンは半分疑っている。

コックピットクルーに本当なら前期一度もシミュレータに乗っていないネッドがランククルーに入ることなど絶対に有り得ない。なのにネッドを入れる。招集日にクルーがそろわなければ、その段階で黒星一つだ。ウチのやりようを知ってるネッドが、そんなこと

でパーフェクト真木に黒星を付けるのをよしとしなければ、現れるはずだというのだ。

「ちよつと待って、ホントにそう？」と聞きたくなる様な単純すぎる方法だ。ネッドは幼稚園のガキじゃないんだから、好きな子がいじめられたからって、そのくらいで出て来るとはとも思えないでも……と、一方でソヨンは思う。案外、男なんてその程度のことです、出てくる生き物なのかもしれない。

とにかく、Sが真木のところに尋ねてきたその日に、亮二はたまにたまいつもの様に、真木さんとシミュレータに乗っていたらしい。亮二からの補足情報によると、ミスタSは、もう一つの安全策として、CDRに本来座るはずがない実習経験ゼロの、シミュレータ・トップランカーを持って来ると言っただけらしい。

慣例からいって、クルー組み発表後のメンバー変更は通常ない。クルー組みを采配している川瀬教官が、自分の組んだクルー組みが改竄されているのに気付く、ネッドの名前が入っているのはミスだと異例なことに発表後の訂正をくれましたとしても、二つ目のミスの言い訳までは上手く思いつかないだろう。慣例と予期せぬ改竄の間で、川瀬は暫く悩むはずだというのだ。果たして川瀬は、どの時点で二つも大きいミスを犯したと認めるだろうか。

飛んだこともないCDRが采配して、Sランク用の航宙と大気圏プランジを大過なくやりすごすことは難しい。少なくとも、全てが発覚して、元の鞘に収まるまでに、ネッドにこのシチュエーションが伝われば、真木のためにネッドが出て来る可能性がある。見えないものは掴めないが、見えたならば掴むことはできる。つまり居場所さえ判明すれば、ネッドの尾っぽを掴んで引きずり出せる、というのが、ミスタSの大風呂敷。

私は、大事な実習をネタに、ネッドを脅すなんていやだよ。

亮二情報によると、真木はそう即答したらしい。

このまま、ネッド・ソンホが退学処分になり、貴方の人生から永遠に消えても、パーフェクト真木さん、あなたはそれで後悔しませんね。

ミスタSのその言葉に、あの真木が怯^{ひる}んだという。

後悔しまくるに、決まってるだろ。

それがパーフェクト真木の答え。

学校に来ていないネッドのSランククルー入り。
御曹司、飛んだことがないCD^{コメンター}R。

どこをどう取っても、異常な事態。そう、結局GOサインを出したのは真木だとしても、真木はそんなことを考えもしなかった。つまり賽の目が全て裏目に出るならば、自分たちの通知表の表紙に黒星が踊ることになる。

パーフェクト真木ともあろう者が、ミスタSなどというフザケタ奴に踊らされたというのが、ソヨンが理解しているところの、今回の無茶苦茶なクルー組みの真相だ。

ネッド・ソンホ・アフマド。アラビックな名前が示す様に、ちょっと白人系とは違うタイプに彫りが深い。エキゾチックな雰囲気、彼の通称は鳥人ネッド^{ちようじん}。もちろん、大気圏航空において、シミュレータのスコアでも、実習でも図抜けて技術が高い。だから鳥人というのは、超人という意味合いも、言外に臭わせる渾名^{あだな}というわけだ。

運転手の卵たちの中で、ネッド・ソンホのオービター操船技術は群を抜いていた。大気の流れを読むのがうまい。無理をしない。突然の突風に煽られても、平然と次の風に乗っかっている。彼が元気に、全開だったら、あんな、霧島運輸の御曹司の飛竜みたいなヒヨツ子に、半年もシミュレーターの不動の一番を占拠させてなんかいかなかった筈。そう思うと、ソヨンはますます面白くない。

パーフェクト真木とネッドが、いつごろからステディな仲になっていたのかは、ソヨンは知らない。けれども、初めてソヨンが一つ学年が上の真木とネッドを知ったときは既に、真木は当然の権利を行使しているといった雰囲気、ネッドの体に密着するような位置に陣取っていたし、ネッドはその腰を普通に抱き寄せていた。

ベタベタと人前憚らず体をまさぐり合うようなバカップル・モードとは少し違うのだけれど、あんなふうにくっついていてのだから、間抜けに「恋人ですか」などと聞かなくてもそんな仲なのは分かる。ついでに、ネッドといるときの真木のとろける笑顔を見れば、真木が彼にぞっこんなのは誰からみても疑う余地がない。

あの重戦車級の真木が、ベッドの中でどんなふうなのかソヨンの想像の範疇外なのだけれど、あのネッドとの距離の取り方は、絶対に行けるところまで行っているのだらうと誰が見ても分かる。あの

真木さんを満足させられるんだから、あんな辛気臭い年寄りみたいなくせに、あつちはスゴいに違いないというのが、上級生のお姉様がたの統一見解だ。

そんなこんなで、実際、そっち方面に貪欲そうな美女連から、ネットがちよっかいを出されている場面をソヨンは何回も見ただことがあるが、彼女たちに彼がふらふらと浮気しているのは見たことがない。

当然、他の学部の中にも、真木とネットのカップルは、憧れらると同時に公認されていた。そりゃあそうでしょ。真木さんはあの通りのオトコマエだし、ネットさんだって、御曹司がでかい顔して、あの位置に居すわるまで、その位置を取ったり取られたりといった感じで占めていたのはあの二人なのだ。

御曹司^{あれ}は幸いなる少数（地球育ち）で、しかも大金持ち。スポーツ用のライトクラフトで、地球の大気の中を飛ぶということを普通にやってきているガキだ。

大気圏突入後は推進力なしで滑空するバージ・シャトルのための航空シミュレーションは特に難易度が高いとソヨンは思う。風も空も知らないで、生まれて初めて飛んでいる鳥のマネを始めた自分たちのようなコロニー育ちのヒヨコには、コツがつかめるまでの敷居が特に高いような気がする。けれど、生まれつきに濃い大気に包まれていたあれは、自分たちが飛ぼうとしていることをあざ笑うかのように、いともたやすくスコアをぐんぐん伸ばしていく。

だけどネットは違う。あの人は自分たちのように、何も貯金がないところから始めた。なのに誰より自由に、本当に自在に風をつかむ。

並みの奴なら「ひやりはっ」と事例どころか、重大事故になるよ

うな局面でも、操船技術一つで平然と乗り切っちゃうようなネッドと比べれば、御曹司はまだまだ多分にヒヨつ子だ。全面的な心服など渡したくもない、ソヨンは思う。ネッドは違う。単に学年が上だからとか、自分のCDRだからという訳では断じてない。そう間違いなく一種の天才。

そしてその天才を常に人一倍磨いて、常に研ぎ澄ませていた努力の人。

とにかく学校にいたころ、彼のシミュレータ搭乗時間はめちゃくちゃに多かった。今の御曹司のような地球^{テラ}G環境で育った者ならともかく、コロニー育ちにあの搭乗時間数は過酷だったに違いない。

あの真木ですら、あそこまでの時間数は乗らない。幾ら飛ぶのが好きでも自分がやったら死んでしまう。ネッドがそこまで先輩たちから馬鹿にされず、後輩たちから尊敬され続け、教官たちからの称賛が当然付いて来ていたのには、やはり涼しい顔をして彼がそれだけの訓練を常にこなしていたからだ。

そう……だけど。

ソヨンは知っている。ネッドが、『さすが真木さんの彼』って、みんなが認めるだけの男で居続けていた後ろには、めちゃくちゃピリピリして、追い詰めて、無理して、ずっと頑張りすぎてた素顔があること。

ネッドが称賛を受けたいのは、もしかしたら真木本人からだけだったかもしれないけれど、限界以上に、頑張つて、頑張つて、頑張りすぎてたこと。

搭乗許可時間数ギリギリまで乗って、疲労困憊してシミュレータから這い出して来るときのネッドの顔に在った苦痛の色を……真木は見たことがあるのだろうか。

あいつはね、鳥なのよ。本当は。

のろけているような微妙な表情で、真木はソヨンに、よく、そんなふうに言った。

コックピットでね。

ソヨンの記憶の中にいる真木が、とりとめもなくしゃべる。一度に聞いた真木の独白ではない。ランチをしたり、飲みに行ったり、シヨッピングの時や遊んでいるとき、何気なく会話に挟まれてきた、溢れるようなネットへの称賛と素直すぎる一途な思い。一度に聞いた話のように手をつないで押し寄せて来る。

* * *

「窓の向こうに地球が見えるの。コックピットでね、あいつは自分の感覚だけを頼りに、自分を信じて操縦桿を握るのよ。カートを運転してるような気易さで操縦桿を握ってるなんて言われるけど、ね、ソヨン。一緒に乗れるんだからよく見ててご覧。違うんだよ。あいつは、オービターを運転してるんじゃない。オービターの外壁の軋みも、震えも、あいつの感覚で感じ取れるんだ。自分の皮膚みたいだね」

真木さんは記憶の中でも、のろけている。

「あいつは、オービターに乗ってるんじゃないんだ。本当に一体になって滑空するために突っ込んでいくんだ。必死なんかじゃない。手抜きでもない。本当に、飛べるから当たり前前に飛んでいる鳥みた

いに、全然気負ってなくて、落ち着いてるの、いつも」

今なら真木さんがホントのことを言ってたってよく分かる。あの人は、いつでも落ち着いていた。どんな場合でも、逆上したりしなかった。

「信じないでしょ。ソヨン。あいつ、青空の中に自分を発見するみたいなの、あの大気圏突入の山場を越えた瞬間にね、いつも笑うのよ」

うつん、真木さん。私、知ってる。

「歡喜つて……知ってる？ あの言葉をそのまま体現してるみたいなの、本当にすごい、いい笑顔なんだよ」

私も知ってるよ……真木さん。

「いつも苦虫かみつぶしてるみたいに、額に皺寄せてさ。ばっかみたい。あの時の顔、みんなに見せてあげたいな。うつん、やっぱりだめ。独り占めしとくよ。あれは私の。ね、ソヨン。私みたいな女が、ぶってるって馬鹿みたいに見える？でもね」

ごめん、真木さん。私もう見ちゃったよ。忘れられないよ、あのときの表情は。

「本当に……大好き……。大好きなんだあ……」

ごちそうさま。

「ほんと、馬鹿なんだよねえ。あいつ。鳥の癖に……。あんなに頑張らなくても、ただ、空で羽ばたいてるだけで幸せなくせに」

でも、真木さん、ネッドさんは、多分貴方にスゴイって認めてもらいたかったんだと思うんだ。だって、貴方の前では絶対しんどそうな顔してなかったもん。

勝又と志賀かつまた しがが険悪だつて、キムとジュニアがばやいてたけど、ソヨンから見て大丈夫そう？　なんかネッドの奴、冷静に見てるみたいだけど、離棧前に、どうにかしといた方がいいんじゃないの？　まあね、アイツに人間の群れを引っ張るなんて、向いてないんじゃないかな……。このままじゃ、あいつ、壊れちゃうよ。

ああ、多分真木さんは、疲労困憊してシミュレータから出て来るネッドさんを知らないんだ。人あしらいがそんなに上手くないからクルーの中のいざこざがネッドさんの顔を曇らせてるんだと思ってるんだ。

そうだ。ねえ、ソヨン。人間の群れ扱うなんて、あいつの柄じゃないってこと、思い知らせてやっちゃってよ。いっぱつガツンとコックピットのヘッド取っちゃえ。ソヨンならできるよね。

私も何もしなかった。だって、人と人が上手くやっていけるように常に心を砕いている貴女が気にしているほど、ネッドさんは勝又と志賀の間に入ったクラックが、深い溝になつていくのを気にしてなかったもの。

このままじゃ……。壊れちゃうよ……。ヘッドなんてそんなもん、ソヨンが奪っちゃってよ。あんた私に近いもん、できるよね……。楽にしてあげて……。今のあいつ、全然かつこよくないよ。

真木さんは、勝又と志賀が殺し合いするような事態になったら、

ネッドさんが全ての責任を負わなきゃならなくなるかもと、すごく心配していた。だけど、私には不思議だった。あの真木さんですら、自分の彼には欲目が働いちゃって、冷静に分かってないのかなと思えるのは、本当に。

ネッドさんにとっては、コックピットクルーは、いざ船が桟橋を離れれば、自分の仕事をちゃんとこなして当たり前だと、そういうふうを考える人だった。だから、貴女が心配していたそのことを……全然、心配してなかった。

ただ、自分をいつももう一つ高い場所に押し上げるために、いつも前だけを見て自分を追い詰めていた。少しでも高みを目指していた。

だけど……結局、真木さんが正しかったのかな。

ソヨン。俺はもう駄目だ。

ネッドさんは壊れちゃったの……かな？

なんで、あんなふうに、全てを失くしたみたいな目をしてたんだろう。

* * *

「大体あいつはねえっ」

真木が吠えた。最近は特に、ネッドについて手厳しい。

「ヘッドとる、ヘッドとるって鬱陶しいのよねえ。頭、頭ツて頭がナンボよ。大体、頭だけで高等生物が存在してるなんて、大間違いだっつーの。まあったく、尻の穴をばかしてんじゃないわよっ。なかったらクソできないで、誰だって困るじゃん。頭じゃなかったら、存在価値が無いなんて、傲慢もいいとこだよ。ほんと、ド阿呆」

ソヨンと亮二が到着する前に、暫く自主訓練だけになる解放感からなのか、ネッド不在の憂さ晴らしなのか、真木にしては珍しく酔っ払いモード突入しているらしい。

ネッドが去年のトラブルのときにまったく何もできなくて、ヘッドを取ったソヨンの力で事故を回避できたことにシヨックを受けて学校に来なくなったらしい……、というのが、ネッド不在の真相としてまことしやかに広まって久しい。

否定をしたところで、じゃあ何でネッドは学校に来なくなったかを説明するには、ソヨン自身が知りたいぐらいなのだから、どうしても口は重くならざるを得ない。

頼む……ソヨン、お前が……^{かん}梶握^{かん}つてたことにしてくれ。俺は何もできなかった。

最後にネッドに会ったとき、彼の口から絞り出された言葉が枷のように彼女を縛る。

惨めだ……。俺はぶざまだった……。何も見えてなかった。可笑しいよな、何もかも、自分でできるつもりになってた……。情けなくて泣きたくなるよ。

あの瞬間を何もかもがネッドによって救われたという実感がある

ソヨンには、ネッドがいつたい何に対してあそこまで絶望したのか、本当に分からないのだ。

ネッドのようなどちらかというとお山の大将というものを理解できないタイプの人間が、ヘッドなどというものに拘っていたと信じてないふうな真木に、ソヨンは真相を教えるようにそれとなく何度か探る様な口調で聞かれたことがある。

なんで、あの鳥野郎が、いきなりヘッドヘッドなんて言い出したか、ソヨン、あんたには分かる？

そんなふうに。少なくともソヨンはネッドがそんなものに拘ったことはないことを知っている。知らないと……首を振る以外に何ができたというのだろうか。

「もうっ、真木さんってば、お下品っ！ 一応大事なカレシなんだからさ、もうちょっとお上品な臓器に譬えてやんなよ。心臓とかスネ毛とか」

亮二の交ぜっ返しに、結城が笑い声をたててる。笑ってないで、スネ毛のどこが臓器なんだって、誰か突っ込みなよ……とソヨンは肩をすくめた。

（真木さん、今回の川瀬の攪乱^{かくらん}が、自分たちの仕業だってこと、結城にどこまでしゃべったのかな……）

ソヨンはあんまりアルコールの味が好きではないのでモスコミュニケーションにした。あまり待つこともなく、ウェ이터さん これもちよっとイケメン系だけど、クリスマス・イブに誘う彼女もいないのかな が戻ってきて、淡い光りが弾けているそれを、ソヨンの目の前に置いた。

「飲み物そろったね」

真木さんがそれを見て言った。

「もう一回乾杯しようっ。これからよろしくと、半期のシミュレータ期間お疲れさまでしたってことでさ」

皆がそれぞれのグラスを持ったことを確認して……あろうことが、真木は吠えた。

「クリスマスに彼女ほって平気な奴なんか、くたばっちまえっっ」

店中の注目が、一瞬で真木さんに集まる。亮二と結城が一瞬、びっくりしたように見つめ合って、それから何かアイコンタクトをしている。これは絶対に真木さんに続くと見た。ソヨンは、自分のグラスを負けじと真木のグラス目掛けて突き出した。一人だけ乗り遅れてなるものか。亮二と結城のグラスもほぼ同時にそこへ到着したのと同時に、しゃれた店の雰囲気全台無しにする雄叫びがこだました。

「くたばっちまえっっ」

……なんというイキの相方。上手くハモったことが可笑しくて、四人で笑い崩れた。

やたらと勝負モードのカップルだらけのお店の中で、なんだか不自然に明るい真木のせいで、自分たちだけ忘年会のノリになっている。自分も含めて、全員が学校帰りの普段着のままで色気なし。一応、2対2なんだから、ダブル・デートに見えなくもないはずなのだけれど、絶対そうは映ってないだろうなと思う。お店屋さん、おしゃれな雰囲気全台無しにしてゴメンナサイ、という感じだ。

ソヨンはいつも明るい亮二を見てるのが好きなのだ。それに、見るだけじゃなくて、少なくとも仲間として扱われている自信はある。それで十分だったはずなのに、最近それじゃあ物足りない。

今回の悪巧みに乗ったことで、距離はもう一段階近付いたと信じたい。クリスマスの夜にたった一人で買ってきたお弁当をあつためた夕御飯なんてしなくて良かったから、この状態は非常に嬉しいんだけど……。

亮二は、一人だけ航空科じゃない結城クンに気をつかつてるのか、それとも単に馬が合ったのか、さつきから二人で映画とか、スポーツの勝ち負けとか、多分そんなこんなの取り止めもない話に興じている。ソヨンに限らず、誰かと目が合えば、いつもニツコリする亮二だから、もちろん、今だってちよつと視線がからんだときも、穏やかな微笑みがやってきた。

でもそのことに、それ以上の意味を読み取るなんて、多分きつとナンセンスなんだろう。

笑ったり、楽しそうにしている亮二を見てるのは……いつもなら基本的に楽しいはずのソヨンは、今日は、楽しそうにしている亮二が面白くない。何だか妙な気分だった。

ねえ……、私、優美ちゃんにキスしたんだよ。挨拶のいつものじゃなくて、うんと濃厚な奴。怒ったり……、たしなめたり……、してくれないの？

真木が件のミス^{くだん}スとの出逢いを語っている。ソヨンはグラスの水滴にライトがあたって輝くのを見ているふりをして、その輝く水の粒^{うかが}ごしに、ぼやけた亮二を窺^{うかが}う。亮二の顔もぼやけて見えた。

来るときだってそう。そのへんにうじゃうじゃしてるカップル

が抱き合つてたり、キスしてたりする横通つてきたのに、なんで、まったくいつも通りなの？ あてられて、燃えちゃったりしないわけ？ ぜんぜん気にしてないぐらい、何でもないの？

ねえ……、亮二。私つて、そんなに魅力ない？

「そうそう。聞いたかったんだけどさあ、今度のミスタ・カワセの最終版リスト、改竄^{かいざん}してくれた^{エス}って奴さ、本当に何者？ マザコンに悪さできるなんて驚異的コンピュータスキルの持ち主だつてことは認めるけどさ、結局のところ、そいつのこと、信用して……いいのか？」

結城が真剣そうな顔になる。

「声がでかいぞ、結城。マザコンに進入して、教官のデータ改竄^{かいざん}なんて、そんな恐ろしいこと、普通の学生にできるわけやないだろ？」

亮二の指摘に、結城が声だけでなく背中もまるめる。

「そもそも、そんなマザコンのセキュリティ破るつて、並の奴じゃできねえだろ？ そんなことできる^{エス}つて、ホントにうちの学生なの？」

「うちらんとこと、おたくらのところには、少なくとも、そんな奴はいねえことは、確かだな」

亮二が言つつちらとは航空科のことで、おたくらというのはMS科のことだろう。

「とするとウンコか。でも管制の連中には無理だよな。じゃあ、情報……、そのあたり？」

MSも当然管理のことをウンコ扱いか……。妙なところで連帯感を醸しだしている二人に、ソヨンは素朴な疑問をぶつけた。

「でも、今回、私たちのやったことシャレで済まないよね。マジで大丈夫かな……」

掲示板に、実習船訓練１年生の『オペー』とネッドさんの名前があったら、ネッドさん引つ張り出し作戦開始の合図。受けて立つも拒否するも自由。

もし、この話に乗るなら、真木さんと派手に揉めてみせるというのが、Sの提示条件だったらいい。私があの時点で真木に突っかれば、ソヨンも了解したってサイン。あの御曹司の名前の下に、自分の名前があるの見つけたときは、はつきり言っただれそうになった。ホストに送られたデータが改竄できるということは大ぼらに過ぎないだろうと、どこかで信じていなかった。

いまさら言っても仕方ないけど、いくらシミュレーターの天才だっただけで、あいつがCDRシートに座ってるオービターなんかじゃ、怖くて大気圏突入なんかしたくない。

「ホントに悪かったと思ってる。私も全然冷静じゃないよね」

もう一度真木が繰り返した。お酒に酔っているというふうではない。やっぱり、真木はよっぽどふりをしてたかっただろうなと、ソヨンは思った。それとも酔っぱらわなきゃ、やってられないとか。

自分もナットクをして走り出してしまったことにケチをつけるって、実際のところかなり反則だとは思っただけ、それでも……かなり……無謀な力ケに乗ったような気がしてならない。

「でもさ」

結城が口を挟む。

「冷静沈着なミスタ・カワセが、今頃どんなか、マジで見てえっ」

ソヨンはちょっと、あのいつも顰^{しか}め面の、眉間^{たてじわ}に縦皺が寄った川

瀬教官の顔を思い出す。慌てるとか、焦るとかしたことがありませんという、見事にスカした顔。

あの川瀬が、自分がGOサイン出したものと違うものが、クルー組み発表されたと分かったら、どんな反応を示すだろうか。

真相がバレて怒りをくらう前に、あたふたぐらいするんだろうか。あのシムサップ野郎でも。結城がこれからの半期、クルーとして一緒するソヨンに話を合わせようとして、話題の一環でそう言ったのか、心底見てみたいと思って言ったのかは疑問だけれど……。

「私もっ。それ見たいっ。川瀬教官が慌てふためくところなんて、卒業するまでに一度でいいから拝みたいっ」

もう、混ぜっちゃおうとばかりに、結城の亮二の目の前にソヨンは両手について身を乗り出した。

「亮二、Sに頼んで、教官室にカメラしかけてもらわなきゃ駄目じゃん」

「うおっ、そこまでは思いつかなかった」

亮二が大袈裟に仰け反ってみせた。皆、川瀬教官のおたつくところを見たいという思いは共通なんだなと思うと、何だか可笑的い。

それでもソヨンは少し笑いを治めて、真面目な顔つきになって言った。

「改竄されてるってことはバレバレだし、危険すぎるオーダーじゃない。幾らなんでも。ミスタ・カワセ、このままにしないよね。で、犯人探しするかなあ。どう思う？ 亮二」

「くだんのミスタSによりますと、マザコンにおくったデータが改竄されてると分かった時点で、自分が犯人だとミスタ・カワセは気付くって言ってたぞ」

そこは初耳だ、と、ソヨンは焦る。

「えーっ マジ？　じゃあ、結局は計画おじゃんってこと？」

亮二が首を振った。

「ところがどっこい。ミスタ・カワセは、多分スルーだつてさ」

「なんだよそれ。なんでそうなるん？　どついう根拠で？」

結城、いいこと聞いてくれた。と、すかさずソヨンはそう思った。彼女も根拠を知りたいと思った。

「俺たちがネッドさんを引つ張りだそうとしてるって、川瀬なら直ぐ気付くから……だとき。川瀬は学校じゃ一番彼の事を心配してるから、存在として味方扱いだよ」

「何その、存在として味方って……」

結城が重ねかける。

「うーん、何て言ってたっけかな」

滅多にマジにならない亮二が真剣に考えてるふうな表情になった。これもそれなりに悪くない……かも、と、ソヨンはこっそり見惚れた。

「結果に向かってプラスに動くファクターを味方……、マイナス要因を敵にして……えっとお……」

がんばれ、頭を使うんだ、亮二。

「そうそう、そうだった。何かしたいことがある場合は、いちいち目の前に出てきたことを味方と敵に分けて、足し算引き算していけば、結果の予測がつくとか……、えっと、つかないとかだったかな」

頭使うのは、亮二には無理か……。

ソヨンは応援そのものを諦めた。

「予測だけじゃだめじゃん」

「……いや、なし遂げたいなら……プラスにいくまで、諦めずに動けばいいとか……いけないとか……何だったっけ、真木さん」

ば……か。

「プラス……つまり味方をちゃんとキープして、マイナス敵を遠ざけるように気をつけながら、足し算引き算しつづければ、結果はプラスになる。だったかな。まあ、性格ひねくれてるのか、なんか小難しいけどさ、感覚としては、あやつは多分、あたしを励ましてくれたんだと思う。ネツドをとっつかまえるの……諦めるなっ……」

本当にそうなんだろうか、とソヨンは真木の人のよさに珍しくいらだちそうになった。成績と命を預けることになるクルー組みを、何かの道具にしようというのが、やっぱり根本的に間違っている気がしてならない。なのに、結城がぼつとりと言った。

「ふ……ん……。真木さんの直感なら……信じていいか」

真木さんのなら……か。

またしてもソヨンの心はざらつくような感じがした。結城なんか碌に真木さんのこと知らなかった癖に、もうこうなんだ。真木が何かをしたとかそういう分かりやすい因果関係で信頼を勝ち取っていいくらい分かる。だけど、そういうのとも違う気がする。かくいう自分だって、真木を信頼しているけど、何かしてもらったから揺るぎない信頼を築いてきたという、そんな感じではない。真木は裏切らないし、真木は誠実だし、能力もあって頼っていいと、どこからか

そういうキモチがやってきて居すわってしまうのだ。

いつも……そうなんだよねえ。真木さん……。

ソヨンも彼女が大好きだけれど、こんなふうに、なんとなく寄せられて来る信頼をどんといつでも受け止めて、真木は負担じゃないのだろうか。何でもなさそうに、いつもどっしりと人の輪の中心にいるというのは、やっぱり図太いんだろうか。それとも普通のことなんだろうかと、不思議でならない。

ソヨンは真木と自分を無意識で比較して、たまに……どうしようもなく、もやもやの虜になることがある。

私が真木さんだったら……私が真木さんだったら……。

思いがループしてどこにも飛んで行かなくなる。

馬鹿みたい。私、みんなからあんなふうにいつも頼りにれたり、判断もとめられたりしたら、多分切れちゃう。人の話聞いて、自分の意見もきっちり話して、なのにもいつも大らかで、なんて、自分には無理だ。

けれどソヨンは怖い。人が自分のことどんな風に思ってるのかとか、いつも見られて噂の俎まないたの上で捌さばかれるのなんて我慢できない。

「ところでさあ、真木さん……」

「何？ ソヨンちゃん」

真木が自分に「ちゃん」を付けるのは、ちやかしているときだ。

「なんで私たちが、可哀相に初フライトでCDRなんて凶悪なポジ

シヨニングで倒れかけてる御曹司の前で喧嘩しなきゃいけなかったの？」

「ああ、それね」

「うん……」

気が付くと、亮二も結城も身を乗り出して、真木に注目している。

「実を言うとな……」

聞きましょうとも。

ソヨンも真木にもう一段階にじりよった。

「あたしにも さっぱり訳が分かんないんだよね」

私が脱力して、ついテーブルにおでこを仲良くさせた。

結城が、かわいく口元に握り拳をあてがって飛びのいた。

亮二が派手に仰け反る真似をして、しすぎて椅子ごとひっくり返った。

亮二……本当に馬鹿。

操船科の実技演習棟の長い長い廊下には、毎日のように誰かが元気に死んでいるシミュレータが並んでいる。それぞれががり立てる空気まで震わす様な振動音が、廊下の隅々まで反響しつつ満ちていて、もごもご話していると、隣の人間へさえ語尾がちゃんと届かない。運転手さんが皆どなるようにしゃべるのは、この環境のせいなのかもしれないと、見慣れない風景を、斉藤歩は好奇心タツプリの色を瞳に乘せて　それでいながら、斉藤をよく知らない人間にとっては、鉄面皮とまで言いたいぐらいの、いつもの動かない表情で　堪能しながら歩いていた。

自分のよく知らない世界に触れているのを感じると、気持ちが浮き浮きと跳ね上がり、どうしても斉藤の脳味噌自体は躁状態になる。他人から、「分かりにくい」とか「無表情な奴」とか評されると、どうにも面白くない。

斉藤は、自身としては十分楽しもし、浮かれたり、ついでに怒ることも泣くことも人並みぐらいにはしているつもりなのだ。分かりにくいという奴は、観察力が足りないのではないかと思う。それぞれマンツーマンで、心理学的手法ではなくて、コーチングか何かもうちょっと砕けた方向で鋭意指導に当たりたいぐらいだ。

斉藤が目指しているのは、実習棟の一番奥まった場所にある、墜落科御用達の大気圏内航空シミュレータが並んでいる辺りだ。稼働中の四機のうち、SA二号機に搭乗している人間をとっ捕まえようという心づもりでいた。

大体の平均の訓練時間と、今回シミュレータに彼らが読み込ませたプログラムを考えれば、あと十五分ほどで出て来るはずだ。

無茶をこり押しするのにはタイミングが要る。少々疲れ切ってい

て、思考力が落ちている辺りが一番適當だろう。パターンとしてあの二人は週の初めのうちは余力を残して訓練をして、週末の休み前だけシミュレータ搭乗可能時間のいっぱいまで使ってやり込む。一番思考力が落ちている、その瞬間が、畏に引つ掛けるには適當だろうと、いそいそとやってきた斉藤としては、彼にとって物珍しい操船科の風景を非常に楽しんでいた。

一方、ここに生息している操船科のメンツには、斉藤は完全に見慣れない人物だ。

しわも殆ど寄っていない、カッチリとした管制科の灰ジャケグレイを着て、きつちり紅いネクタイを締め上げて、背中に一本棒でも刺し込んでいのではないかと思わせる姿勢のよさで、革靴の音を響かせて歩く。実のところそれは、斉藤の気性によるといふより、あれでも一応軍人であつて、そういう基礎の身体操作が骨身に叩き込まれた結果にすぎないのだが「軍人です」と看板を背負つて歩いているわけではないから、彼が気難しく几帳面すぎる性格なんだろうと、見るものを辟易させなくなる何かがあつた。

斉藤は、そこが普段歩き慣れた管制棟の廊下ですという気負いのなさで歩く。思い思いの私服姿がほとんどな操船科の人間の中で、管制看板であるグレジャケは異様に浮いて見える。動かない表情が怜悯な印象を与える変わりに、足どりはむしろ飄然としている。その異邦人を見た者は、一瞬驚いて動きがとまる。目的地が余程はつきりしているのか、迷わない視線のままで歩を進める青年が通りすぎた後、皆一様に不審のこもった目でその背中を見送った。

斉藤が目当ての場所について、待つこと七分でシミュレータが止まった。疲労困憊しているはずの搭乗者は、少しだけのるまにシステムを落としてから出て来るだろう。ハッチまでの所要時間四、五分というところだろうか。

我ながら、いい時間配分だと、そんなところでも斉藤の気分は、

もう一段階すつきり爽快としたものになる。音感に自信があれば鼻唄だって洩れたかもしれないと思うぐらいに楽しい。予測した段取り通りに物事が進むのは快感であるし、逆に暴走する物事をなだめようと振り回されるのも、実のところ決して嫌いではない。脳味噌は常にアクティブ・モードでスタンバイさせとくぐらいが、斉藤にとって快適さを保つ秘訣である。

シミュレータ外側には、モニターがついていて、シミュレータのコックピットのシートから見えるコンソールパネルやフロントウィンドウをそのまま写しているものが一つと、もう一つは、搭乗者の心拍や呼吸数から始まって、筋肉疲労度実測数値や、アドレナリン濃度などといった、さまざまなデータをゲージ表示してあるものが一つ。のランプが消え・ノルアドレナリン等の神経伝達物質分泌状況などを、事細かに表示している。

この画面は個々のシミュレータ監視装置として機能するから、管制のコックピット監視ブースに入ったときには見慣れたものだ。二人ともなかなか、いい具合に疲れている。疲れを見せないシェリル真木だけれど、筋肉疲労的には亮二クロスフィールドの方が余力を残していることが分かる。なるほどね、あの人も一応女性だったことだ。一人納得顔の斉藤は、どうやって話を組み立てようか、頭の中で考える。まあ、出たとこ勝負だ。

* * *

今日は、亮二がCDRシートが操縦桿を握って操作をしていた。オートクルーズを切ったところで、ぶれない操作。安定性抜群の亮二は、きつといいパイロットになるはずだ。

真木はナイスという意味を込めて掌を前に突き出すと、ちよつと疲れましたという顔で、亮二が軽くそこにパンチを打ち込んだ。

「お疲れさん。いい週末をね」

「はい、同乗ありがとうございました」

チャラ外見に似ずに、親御さんの躰がさぞかしよかったのだろうというところか、亮二はあいさつのときだけは、どんなに親しくなってもちゃんとした距離を取る。真木はついにつこり微笑んで肩をどやしつける。

「いて……」

小さく文句をいうが、多分、かなり痛かったはずだ。ロックを解除してハッチ開放ボタンを押すと、油圧制御の扉が、みしりと音を立てながら跳ね上がる様にして開いていった。五段ほどの階段を降りかけて、真木は階段の終わりの正面に管制の赤ネクタイが一人、自分たちに挑む様な角度で待ち構えているらしいのに気付いて足を止めた。航空シミュレータ機能付きのマシンは五機しかないから、テスト前などは、行列を作って待たれたりするが、知り合いならともかく、タワーのメンツがこんなところに居るのは、普通でない。少し後ろに居る亮二の知り合いかなと、亮二に確かめるまでもなく、そいつはにこりともせず言い放った。

「あなたが、有名なパーフェクト真木さん？」

航空シミュレータで何時間乗っても、精神的にしんどいだけだけど、加Gを忠実に再現する大気圏突入フランジをすると、やはり運転をしていなくても体に疲労が来ている。普段なら流すところだし、喧嘩腰に来られたからといって、状況も分からずに正面から受けて立つのは、実際に下手に過ぎるとも分かっている。けれど、真木は気分的に苛ついたのが自分でも分かった。そして冷たく聞こえる様にド

スを利用させて言い返した。

「パーフェクトなんかじゃあないけど、そう言われてるのは、たしかにあたしだよ」

「よかった。間違えるはずはないと思ったんですけれどね。一つ…確認なんですが、いいですか？」

真木は黙ったまま、その灰^{グレイ}ジャケットを睨^ねめ付けた。それを同意と取ったのか、先をいう様に促されたと感じたのかはわからないけれど、そいつは最初のままの無表情で付け加えた。

「あなた、ネッド・ソンホの、ここでのラスト・フライト。つまり去年の総合実習最後の大気圏突入で何があったか……その真相……知りたくないですか？」

ネッド。恋人だと信じていた。そういう意味で濃厚な関わりがあるからだけでなく、心だつて、引き裂かれた半身を求める様に自然に、紅い糸だつて、なよつぽく切れそうに結ばれてるんじゃない、なくて、がっちり太めのロープになるまで擦ってから、雁字搦^{がんじがら}めに全身に巻き付け合ってるぐらい求め合っていると思っていた。

トラブル・バーゲンではなくて、本当の事故。けれど死者も出さずに一件落着いたはずだったのに、ネッドは真木の前から失踪^{しっそう}した。視界から彼が消えたことの不安と心配で、川瀬教官に相談に行ったこともあったけれど、「病氣療養のためと、休学届けがきっちり提出されているから、事件に巻き込まれたりしているわけではないし、人のことを心配している時間があつたら、自分のスキルアップに励み給え」なんぞと、全くもって取りつく島がなかった。

不安。それから、不満。そして、置いていかれた感が無力感を突

破したとき、真木の中に残っていたのは、激しい怒りの感情だった。自分がどれほどあの男のことを好きでいるのか、知らないなどと言わせるつもりはない。自分は、だれにでも体を許すほどお手軽にできている女じゃない。

相手がネツドなら、奴が辛くて泣きたいというなら胸の一つや二つ、好きなだけ貸してやるし、男のくせに泣くななどと、背中をどやしつつたりしないで涙が涸れるまで付き合っ^かてやるぐらいの優しさは持っているつもりだ。

なのにひと言の相談もせずに、泣き言の一つ聞かせてくれずに、奴は真木の日常からぽっかりと消えた。

「あんた、みかけない顔だけど……、あたしとネツドのこと知って、その間抜けたセリフ吐いてる？」

真木の口調が自然とピリピリしたものになる。

「間抜けた……と、いいますと？」

真木の掴みかかる様な怒りの姿勢を前に、まったりと背筋を伸ばしたままどこ吹く風の灰ジャケに、亮二はちよつと感動した。こいつはすごく肝が座っていやがる。

「あたしたちのこと知ってたら、あたしがネツドのことで知りたくないことなんか一つも無いって、そんなんあつたりまえだろ？」

「ああ、そういう意味なんですね。それは……よかった」

怒りを滾らせている真木に対して、グレジャケの方はのんびりとした口調を変えない。亮二は、口笛を吹きたいのを我慢して、二人のにらみ合いを見物することにした。

「あんたは……何者？ 話がしたいなら、名前ぐらい、最初に名乗るべきじゃない？」

「それもそうですね……。とりあえず、真相説明までは……」^{エス}Sでも呼んでおいってください」

人を喰った様なふざけた返答に、真木はさすがにあきれ果て、怒る代わり肩をすくめて鼻先で笑った。

「Sって、しみつたれのSかい、それともサディストの頭文字のएसかい？」

「解釈の方は、まあ、何とでも、お好きなように」

青年の表情は驚くほど変わらない。まるで能面たとのようという譬えがあるが、あれをそのまま地で行く様だ。

「それで、ネットのラスト・フライトの真相つてのを、あんたが知ってるっていうの？」 真木が自分にも全く分からないことを、この管制野郎が知っているわけがないと確信している口調で言った。

「いいえ……。まだ、見えてませんよ」

「はんっ……。妙な期待させんなよなあ……」

肩透かしを食らった体ていで、真木の言葉が少しだけ詰まる。

「でもね……。謎を説明する……。ヒントを私は持つてるんですよ。多分」

説明するヒント？

紛れもなく東洋系の黒い瞳が、突き刺す様な真木の視線にも揺るがずにあつた。大体、そうでなくても「迫力系」などと揶揄やからされがちな真木である。何気なしに視線が流れただけなのに、慌てて視線を逸らすやつらは少なくないし、ことさら気合を入れて真木が睨やからみを利かせると、まあ大概が目を逸らしたり伏せたりする輩が多い。

このがっぷりと受け止められる感覚は、不思議と真木は嫌いではなかった。そう、真木がネットのことが一番最初に気にかかったの

も、飄然としたふうで、きちんと人の目を見ながらしゃべるネットが新鮮だったからだ。

「秘密も何も、奴は、緊急事態に対処できなかった。それでソヨンちゃんのお世話になって帰って来て、徹底的に落ち込んで……それで全部でしょ？」

珍しく真木の方がしどろもどろになって、そう言った。

「本当に……そんなのが全てなんだと……そう思われてますか？」
タワーのグレジャケに相応しく、細い線でありながら、揺るがない視線は強靱きょうじんさすら匂わせる。真木は気押されるのを感じた。

「ネット・ソンホ・アフマド……あなたたち飛ぶ人たちから、鳥人とまで呼ばれているくらい別格だったんでしょう。その彼がたかが大気圏突入時に通信が一切死ぬというトラブルだけで……本当に、何もできなかったと……、真木さん、貴女は本当にそうだったと思いますか？　それが全てで裏も何もないと」

真木は負けたくなかった。ネットのことについて、こんな奴が自分より知っているとは思いたくなかった。

「このマムをつかって、記録をずっと辿ってみました。あの人の…… ネット・ソンホの記録をね……。あの人は飛ぶために生まれてきた様な……。天才ですよ。貴女あなたのように努力と根性で頑張っている凡人が見たら……。多分妬けるほどに……。ね」

あのパーフェクト真木を凡人と言い切ったエスの無礼に、亮二がい加減にしろと、無礼を窘めたしなめようとしたそのとき、その機先を制したかのような真木が、ふふんと笑った。

「何もかも…… お見通しって…… そういつつもりかい…… あんたは？」

真木はSから凡人と評されたことに、まるで拘こたわっていない。そのことに、亮二は少し氣勢を削そがれた。亮二にしてみれば、努力と根性で頑張っているのは自分のような凡人であつて、真木はあっち（ネッドさん）に限りなく近いと思っっているのだ。

けれど、真木が自分を天才だとか、そういうふうに思っていないことも、また同時に知っていた。どれだけの努力の上に、今の真木があるのかを、亮二は誰よりも見てきている確信がある。

それでも……。

と最近、亮二は思う。生まれながらの才能というのは、間違いないところなのだ。けれど、その才能というのは磨かなければいけないのと一緒になのだ。だから、真木が努力の人であることは、それだけでもって彼女が凡人であるという根拠にはならないだろう。

妖しくもSなどと名告なのった青年の強い光を湛たたえた瞳がふつと緩ゆるんだ。真木は、彼がまさしく笑ったのだと気が付いて驚いた。何となく控えめな表情だろうか。笑うのに、口の端をあげるくらいの手間を惜しまなくてもいいものを。

「私はそこまで…… 自信過剰じゃないですよ。分からないから…… 知りたい。多分…… 貴女と一緒にです……。ネッドさんは…… 半年も学校に来られないほどの、身体に問題を抱えていましたか？」

「だって…… あいつは学校に来なくなつた。けど事故でもない限り、長期入院が必要だなんて、まあ有り得ないだろう。普通……」

グレジャケ男が、つかつかと真木たちの前まで歩み寄った。階段をそのままにして登ろうとしないから、長身の二人にとって、ごく普通サイズの不審者Sは、頭のてっぺんまでちゃんと見えるような状態だ。

Sが拳を真木の目の前に突き出してきた。今度は口の端に微笑みの形が エラく、人も、品も悪そうに はつきりと作られた。

「手」

短くひと言。うつかり真木が何か頂戴ポーズで手をだすと、思いつきり不審人物である管制官^{タウメン}は、その拳を真木の掌の上まで移動させてからパーにした。ぼとりと、真木に掌に何かごく小さなものが落ちる。Sが握り込んでいたので、何となく温い^{ぬる}。

メモリーチップ？

「これは……今度の……ミスタ・カワセ・オーダー……つまり正規の実習船訓練のクルー組みの最終案の……貴女たちの部分だけの抜粋です。今回唯一のSランクチームのね」

クルー組み発表は週末だ。だから……、今の時点で川瀬の頭とパースナル端末の中以外に、そんなデータはないはずだ。

「なんだって？ そんなのが今の時点でわかるわけじゃないか」

「信じる、信じないは、どうぞご自由に。これは提案です。貴女と、ウェイさん、そこにいるクロスフィールドさん……、四年のミスタ・ヒョウドウと、あと、サードシーターに二人……」

「こんなものを寄越して……貴様、……何を考えてる？ ……^{エス}S」

真木の瞳が、事と次第によっては、その目玉を視線だけでスライ
スしてくれる、というような鋭利な目つきで睨んだ。

「私が……小細工をして、ここにネッド・ソンホを入れます。招集
日に少なくとも全員の参加がなければ、黒星ハンコ決定ですよ。
自分が入っているとネッド・ソンホが気付けば、自分が学校に来な
いでいれば、イコール、あなたのパーフェクト記録が台無しになる
……そういうことですよね。貴女の栄光の記録更新を、自分が原因
で邪魔することを……多分ネッド・ソンホは望まないと思いますよ」

「アイツは自分で望んでここに来てないんだよ。引つ張りだして……
何が変わるのさ」

真木の言葉は心なしが弱い。ネッドに会いたいという気持ちと、
彼を自分の体で感じたいという欲求は確かなものではあつたけれど、
ネッドも同じように自分を求めていれば、こんなにも長く、ひと言
の言い訳もせずに消えるなんてことは考えられない。つまり、ネッ
ドにとって、自分はそれだけの存在ということなのだ。

会いたいけれど、どうでもいいと断じられる恐さ。問答無用で希
望の全てを踏みつぶされるぐらいだったら、このままなし崩し的に
うやむやになつてしまえばいい。そういう卑怯な弱い気持ちが一
緒くたになつて存在している。

「憶測と憶測で、何もかもなかったことにして流して、そんなもん
をコミュニケーションの高級手段だと思われてはたまりませんから
ね。ちゃんとネッド・ソンホの言葉で、どうして自分が学校にくる
事が堪えられないのか、貴女にだけは、ちゃんと向き合つて説明す
る、その程度の当然の男の義務は果たしていただきましょうよ」

ミスタSの声は、伸びと艶がある。それが猫なで声という奴にな

っていた。

「無理無理。あんたの言いぐさが正しとしたり、うちはSランクな
んでしょ。半年も休校してるやつが、幾ら去年までのエースだつ
つて、カワセがごり押したところで、ネッドを咬ませられるわけ
がないじゃない」

「ええ、ミスタ・カワセは……しないでしょうね」

Sは涼しい顔をしている。

「あんたが……する……そんなことできるってのかい？ ミスタS」
「できるとしたら？」

真木は怯んだ。

「だめ、やっぱり無駄だよ……。ここに名前が来ても、そしてそれ
であたしが飛び立てないとしても、あの人は、きつと来ないよ。だ
つて……あたしがいなくても……あの人は大丈夫なんだ……」

「なぜ断言できるんです？ 聞いても……いなくせに……」

聞きたい気持ちと、ここに居ない人間には聞けないという単純な
事実が真木を苛立たせた。いや、多分。目の前にいてさえ、惚れ抜
いてしまった自覚がある男なのだ。とろけるほどに愛しいやつから、
「好きだ」という以外の言葉を聞く勇氣なんかないに決まっている。

「だって、そうだろ？ 学校に半年も来られないって、普通じゃな
いだろ？ 卒業できなかったら、この業界のどこに働くところがある
つてのさ。そんなに……そんなにつらいのに、あたしの腕だって、
胸だって、あの人は必要なんじゃないってこつたる？」

真木の吐き捨てる様な言葉を聞いて、今までネツドの不在にも、特別どうという反応をしてこなかった彼女の中で吹き荒れていた嵐を思い、亮二は何となくあの真木が、か弱いその辺にごろごろしている女の子ほどには可愛いことに気づいた。何となくその一際こつつい肩が寂しそうに見えて　　ついウツカリ、真木の肩に手を置いた。

真木がほんの少しだけその亮二の気遣いに甘えて、背中を預けてきた。

「発表の日、このスクールにネツド・ソンホの名前を入れる。それが私ができなかったら、あなたも私を信じる必要はこれっぽっちもないわけですから、この話は流れということですよ。ただし……」

そこで一端Sは言葉を切って、呼吸を整えた。

「ネツド・ソンホと飛ぶ機会を、あなたが欲するなら、私はもう一つ、小細工を重ねて、ペーパーを一人コマンダーに入れときますよ。あなたの名誉に傷がただけじゃなくて、命も危険だとなったら……ネツド・ソンホは駆けつけて……くると、思いますよ」

「あんた……何様のつもりだい？　人の心をそんなふう勝手に読んだつもりになって、楽しいのかい？」

Sとやらを真木が引つ掴みにいきそうになったので、亮二は慌てて、真木の肩をつかんでいた手に力を入れて引き止めた。構内での暴力沙汰は黒星の対象だ。

「私も……真相が知りたいだけです。あの練習船で実際に何があったのか。なんで、あれほど完璧を誇った人が、崩れてしまったのか……。私はそうですね……。ただの知りたがりなんです。……きつ

と」

そう言ってからSは、全く思いつきり予測の立てられなくて当然という方向に、話をいきなりかつ飛ばした。

「もし真木さんが、私の好奇心の充足に協力してくれるというなら……。そうですね、クルー組みの発表のとき、この中に実習未経験コマンダーとネッド・ソンホの名前があつたときに、ソヨンさんと盛大に揉めてもらいましょうかね……」

真木呆れ声になった。

「そんなことをして、何の意味があるのさ」

「あなた方には……ありませんよ」

「あんたには、あるのかい？」

「私は、全く意味がないことは、しないことにしてるんですよ。それじゃあ……、私は発表の当日にあなた方がどうするか……楽しみになっていますね……。またお会いできます様に、パーフェクト真木」

これで言いたいことは全て言つたというふうになって、踵^{きびす}を返し、Sはすたすたと帰っていく。見ていないから分からないけれど、こいつはここに来た時も、絶対にこんなふう悠然と歩いていたに違いない。

12・不機嫌

「なっ、なんですかぁ。その不審すぎる言動はあっ」

結城の裏返った声の方が聞こえた。真木のやることは大体がツボを押さえたものであると普段なら信じているはずなのだけれど、今回は多分、結城の反応の方が正しいとソヨンは思った。

「^{エス}Sって、その名^{なの}告り方がそもそも徹底的に怪しいじゃん。どうしてそんなの信じたの？ 真木さんってば、パーフェクトとも呼ばれるお姉様とはとても思えないわあっ」

ソヨンも呆れて、珍しく真木に突っかかってみた。SランクのCDRシートをそんなしょーもない、成り行きで剥奪されてはたまらない。Next G a s s の操船科で、それだけのポジションを確保して（ちゃんと上手く全てを納めるところに納めて）終われば、真木さんがそうだったように、厳しく狭き門の就職戦線の難易度が相当下がるものを。

「冷静に考えたら信じられない……よね。疲れてたのかなぁ。ほんとゴメンね、ソヨン。ここでの最後のフライトを……ネットと……飛べるかもしれないって思ったら、我慢できなかったんだ……」

ソヨンはこれ見よがしにため息をついてやった。

「真木さんはそれでいいかも分からないけど、CDR実績欲しさに来年も五年生やるなんて、嫌だあっ」

ソヨンがカクテルグラスを握りしめて叫んだ。

「だから、招集日にネットが引っ掛かって、取り逃しても、絶対に私からカワセに掛け合って、ちゃんと元のオーダーに戻させるから、一カ月だけ、お願いっ」

言葉は可愛らしいが、手が合掌ではなく拳になっている。そのきつく握りしめた拳の乙女心に、ソヨンはちろりと真木を上目づかに睨んで、それからにっこりと微笑んだ。

「了解しましたあっ」

真木が手をパーにしたので、ソヨンは自分も掌を広げて軽くそこを狙って打ちつけた。

「ネッドさん引っ張り出す作戦には協力するってちゃんと言ったし、スタート号砲がCDR御曹司だつてことも聞いてたし、受けて立つなら真木さんに喧嘩売っていうのもね、全部納得してやったことだから今更そこに文句は言いいませんよ」

一応の譲歩。

「真木さんがネッドさんを引っ張り出したいのと同じで、私もネッドさんに帰って来てもらいたいし。何たってマイ・オンリー・CDRだもん、ネッドさんは。ただ、そのSとやらのこと、最初から聞いてたら、協力するのちよつと考えちゃったかも。絶対怪しいよ。だって、タワーマンなんでしょ、そいつ」

真木が頷いた。

「グレジャケの赤ネクタイ。どうぬっころがして見ても、タワーマンだよ……」

ソヨンが畳みかけた。

「運転手ならともかく、ウンコにネッドさんのシンパがいるとは思えないよ。そいつがいみじくも言ってたんでしょ。『意味がないことは、しないことにしてる』って。じゃあ、Sにとって、ネッドさんを引っ張りだしたい理由って何かあると思う?」

真木が暫く考え込んで、それから、もう分からないというように髪を掻きむしるようにして乱した。

「……わかんないっ」

ソヨンは肩をやや大袈裟すくめて亮二と結城の方を見た。二人も

分かりませんという表情で首をすくめて見せてきた。

「とにかく、私と真木さんは、あそこで堂々とガチンコしたことになるから、暫く冷やかに関係を保つふりしなきゃいけないのかな……。何か面倒だよねえ」

突然、真木がくすくすと思ひ出し笑いを顔に浮かべた。

「だいたい、ソヨンちゃん……ノリ過ぎじゃない？ あれ、相当凄かったよお。ほら、あの優美ちゃんをノックアウトした奴。私と喧嘩した勢い余つてもしれないけど、あれはちよつと……感動したつ。男悩殺するテクニク伝授してもらわなきゃ」

ソヨンがちよつと焦る。亮二の前では、あれはなかったことにしたいのに……。

「あーっ真木さんまで、おもしろがつて、ちゃかして」

「だって、あれ、やりすぎだろ？ 公衆の面前で、優美ちゃんも可哀相に……。ダメだろうが。ガキンちよからかつちゃあ」

（タカちゃんは、ガキンちよかあ）

真木の言葉に何となく納得する。キス魔でハグ魔の高柳優美

タカは、ソヨンに限らず、誰とでもあやつて東洋風ではきつちりないあいさつをする常習犯ではあるけれど、ただ、そういうのが正しいかどうか分からないけれど、何というか、されたところでどうてことないのだ。

あいさつのキスの味しかしいというか、ママやパパとするキスみたいな、全然脊髄にずしんとこない。だけど、とことんあつさり家族モードっていうのでもなくて、仄かにだけ^{ほの}キチンと男の子の匂いもする微妙な感じ。本当に不思議だとソヨンも思う。あれも人

徳というか個性というか、そういうものなのだろうか。

突き詰めて考えたことはないのだけれど、あやつの警戒心バリア自動解除モードを、個性で片づけていいんだろうか、ひよっとして特殊能力ではないかと疑いたくなるソヨンだった。

「なんかねえ……、真木さんに突っかかるって、慣れてないからさ。加減が分かんなくてさあ……。ホント、なんか調子狂うんだよねえ」

「真木さんに突っかかって調子狂うと、男襲うのかよ。凄いぶっ飛び方だな。まあ、ソヨンらしくていいけどな」

亮二が口を挟んできた。

「いいの？」

その言葉に引っ掛かってソヨンの眉間にしわがよる。

（全くもう、亮二って解ってない）

それでも希望を持っていたいい材料を探すとすれば、クリスマス・イブに自分たちとこんなふうにいるという事実だ。少なくとも、誰かつき合ってる人居たりしたら、今夜を、こんなふうにごしてないと思う。

（まさか、私たちとの食事が一次会で、これから彼女と待ち合わせでデートなんて、そんなん、絶対ないよね……）

ただ普通に美味しそうに飲み食いしている亮二の顔を見ると、何となくソヨンは腹が立って来る。まったく、本当に解ってない。

何なのよ。結城なんかと笑っててさあ。

そう、誘ってほしかったんだよね……多分。真木さんの声掛かりで集合なんかじゃなくて、二人きりでだったら、ただ街を歩いても多分もつと楽しかった。

「キスで思い出した」

突然、結城が口にした。

「前から一度聞いてみたかったんだけど……真木さん」
結城の口調が真面目になる。

「ん？」

ウイスキーのグラスを傾けていた真木が中途半端な位置で止まる。

「あたし？」

結城が頷いた。

「高柳のことなんだけど……」

「高柳ってタカちゃんのことだよ。そういや、結城の後輩だよな
あ。あいつって……センスいいの？」

真木さん、CDRの癖が抜けてないよ ソヨンは思う。クルー
の職能や特技だけじゃなくて、性格とかそういうのもできる限り把握
しておくのはオフィシャルCDRがおろそかにしちゃいけないこ
とだ。

知っていることを全部使わなくてもいい。だけど知らないこと
は使えないよ。

（ああ、これって。ネッドさんが言ってた……）

Sに改竄される前のクルー組みも見せてもらった。自分がCDR
……。そして亮二は今年もPLETシートをあつためる。彼ならSラ
ンククルーのCDRが指名されてもちつとも奇怪しくない。いつ
もなんとなく穏やかに、それでいて細かく気配りもできる。亮二が
川瀬オーダーの自分の位置に納得しているとは思えない。ただ、い
つもの怒ったり、キレたりしない冷静な亮二が、そのまま継続して
いるだけだ。

ソヨンはだからこそ余計に亮二が気になる。自分がCDRだったことに、亮二が押さえきれないほどの反発心を抱いていれば、まして自分のことなんか、好きでも何でもなくて、亮二にとってただの同級生に過ぎないとしたら……。

亮二が結城と楽しそうにしゃべっているのが、自分を無視している様に感じられてしまってソヨンは落ち込みそうになった。

「あいつのセンス？ そんなの分かるか」

高柳に対して結城の反応はそっけない。真木は重ねて追究する。

「なんでだよ。ペーパーの情報ぐらい把握してるだろ？ そりゃあね、ミッシヨンスペシャリストってのは、専門職の寄せ集めだから基本的に運転手って共通スキル持ちの私らと違って、それぞれに専門化^{シャライズ}してるんだろーし、そんなにベタベタしてないってのは知ってるけどさ、やっぱり共通したところも多いだろ？」

（真木さんが、どんどん情報を引き出してる、それって本当は私の仕事）

そううつかり思ってから、多分違うなあ、とソヨンは思った。自分は情報を引き出そうとして無理に会話に持ち込もうとする。だから、話が续かなくて、中途半端なところで会話が切れてしまう。だから情報量もそこそこ。だけど、真木さんは普通に楽しくしゃべってて、だからずーっと会話が续いて、結果として人一倍情報をもっちゃうんだ。

それに真木は、無責任な噂話ぺらぺらしたりなんかしない、女にしておくには惜しいほどのオトコマエなタイプだ。多分、男の子たちは、余り真木に女を意識しないで仲間みたいにしゃべれるんだろーう。

大体 ソヨンは思う。操船科の男どももよくいうけど、いわゆる見掛け標準で人間の範疇に入っているネツドが、あの真木と二人きりのとき、どんな会話をしているのか……、気にならない人間なんてウチには一人も居ないと思う。掌を返せば、あの真木でさえ、今は訳ありとはいえ、立派なカレシがいるのだ。女としても、完全に水をあけられている気がする。

（あ、やばい。なんか落ち込んできそう……）

「だって、あいつ、男とつき合うの嫌いだしなあ……」

「へ？……」

ソヨンが素つ頓狂な声を出した。真木とネツドと、それから亮二のことに気がいつていて、真木と結城の会話を聞いてなかったことに気づいた。

「結城は男とつき合うの好きなの？」

テーブルに肘を付けて頼杖ほおづえをしていた結城の顔が、その手からズリ落ちかけた。

「ばーか。そっちの意味じゃねえよ。ダチとつるむとか遊ぶとかそういうつき合い。あいつは男ってか、そういう点からみると、女とも……つき合うの苦手なんだ。きつと」

ああ、タカちゃんの話か。ソヨンは二人が何を話していたのかをやっと思ひ出した。

「……そうは見えないけど」

「でも、あいつ……友達、居ないぜ。あんな顔だし、いつも笑顔基本形だからそう見えないだけで、誰ともつるまねえし、つき合わねえ。変わってんだよ、基本的に」

（なんか……意外。優美ちゃんも、仲間になると難ありなんだ。っ

てことは……)

やっぱり、川瀬教官って、あたしに仲間割れミッション仕掛けようって……してた？

宇宙船というのはとことん閉鎖空間だ。そこに一緒に乗り組み、仕事をする必要があるのだから、反りが合わない人間とも、親の仇ともうまくやっていけるだけの、感情の制御力をつけろってのが、ミスタ川瀬の口癖だ。だから、そういう意味でも、技術とかの部分はおいておくとして、CDRとしての適正という意味で、多分川瀬の評価は、亮二の方が数枚上に位置しているのだと思う。なのに敢えて自分をそこに置いた。

総合実習訓練では、オフィシャル課題^{ミッション}の他に、そういう隠し課題が仕込まれることが多い。

仲間割れミッションは当然、学生たちが一番毛嫌いしてる隠し課題だ。全員及第か、全員落第かで一蓮托生に押し込まれてるのに、反りが合わない奴が始終角付き合わせて揉めるのは、勘弁してもらいたいと思う。だからこそ……なんだろうけど。

仲良しさんだけ居たい奴は、宇宙に出ようなんて考えるな。

川瀬節がソヨンの耳の中でこだました。

「で、同じ科の先輩の結城がよく知らない奴のことを、なんで、運転手の私が知ってるなんて思うんだ？」

結城が首を振った。

「科とかそんなじゃなくてさ、女としての真木さんに聞きたいの」

「女としてのあたし？」

冗談なのか、本当に酔っ払いなのか、真木がしなをつくった。

「結城が、ネッドとあたしを争って決闘でもしてくれるの？ 感激」
頼杖から半分ずれ落ちかけていた結城が、完全に滑り落ちた。テーブルに額を付けて仲よくなっている。確かに二人の男に争われるというのは、女の子にとってはオイシイといえるシチュエーションだけど、凡人の男にとって真木は普通に征服欲を発揮できる相手とは思えない。結城にしてみても、普通の頑張り方で真木を満足させられる自身はからっきしない。対等に勝負が出来るほどの精力絶倫を自分に期待できなければ、自然勘弁してくれという情けない声になった。

「……勘弁してくださいよ。想像しただけで震えがきちまった」
真木が笑った。こういう反応には慣れっこなのか、真木もあつさりしたものだ。

「ごめんごめん。冗談。で、何？」

「なんで、女ども……って、あつごめん失礼な言い方だな。普段、うちの科って女っ気ないからさ。」

（わかってるよ、そのぐらい）

ソヨンは一人ツツコミモードになっていた。

「ども、でいいぞ。気にすんな。野郎ども」

やっぱり真木がちよっとハイテンションな気がする。陽性の真木には珍しく、もしかして今日は絡み酒かもしれない。

ネッドさんが失踪じゃないけど、真木さんに連絡をとらなくなつて、学校にも来なくなつて、それで、ネッドさんを信じたい真木さんは何でもないふりして、ひょっこりいつもの顔で帰って来るって信じてて、それで我慢が溜まって、溜まって、限界にきてるっていうことかもしれない。

そんなふうに出ると、にこやかな真木の顔が痛々しく見えて来るから不思議だ。

「女もって、なんで、みんなあいつと平気でキスするんだ？」

ああ、その話か。そりゃ、同じ男として納得いかないだろうなあ
と、ソヨンは思う。

「挨拶だから……」

真木の説明は、多分説明になってない。でも、うんそう。

挨拶、挨拶。

「じゃあ、例えば真木さん、俺と挨拶のキスする？」

えーっやだよ。あたしは。

「……しないな」

真木さんも……なんだ。

「なんでだよ。変じゃない？ 差別だと思わないわけ？」

「それはだなあ……」

と、きつぱりした口調で真木が言いかけると、

「えっ、そんなの分かんないよ」

と、ソヨンが言うのと、ほとんど一緒だった。

ソヨンと真木が互いの顔をまじまじと見つめてあった。不思議
そうに見つめて、馬鹿みたいに見つめ合って……。

「えーっ、真木さん、分かるの？」

「えーっ、ソヨンちゃん、分からないの？」

二人は、ほぼ同時にお互いを指さして叫んだ。

暫く真木さんはそのまま、じっとソヨンを見て、それから、意味深な目つきで亮二の方を見て、それからもう一度、ソヨンをじつくりと見た。

「なあんだ……私の勘違いだったか……。ごめんごめん」
謝られて、ソヨンがいきり立った。

「なに、真木さんっその訳知り顔。で、勘違いって……どういう意味ですかあっ」

真木は手をひらひらとふって、首をふって、肩で笑って、それから残っていたウイスキーを一気に^{あお}呷った。

ソヨンは、真木の意味深な素振りとセリフと笑顔が気に食わなかった。

ぜーったいに気になる。どういうこと？

タカちゃんとキスするのが、ソヨンにとって、どうってことないのと、真木の笑顔がどうつながるのかも分からないし、それから、『勘違い』という言葉も気になる。それから、一瞬だけ間違いく亮二を見たのも絶対だ。

真木さんっ！　なんで、そんなに可笑しそうに笑ってるの？

ソヨンは憤慨のネタがもう一つ積み重なって、ますます不機嫌になっていくのを感じていた。折角のクリスマス・イブなのに、今日は厄日に違いない。

13・女の口は密談がスキ

食事をしていたお店を出て、ちょっとストレス発散にと、真木に引きずられる様にしてカラオケに突っ込まって、ソヨンも亮二も、それから結城まで、上手い下手関係なしに、大声を出してさんざん歌った。誰かがマイクを持つてゐる間も知ってる歌ならガンガンどら声を張り上げる。それでも真木は、まだ一人になる気になれないようだった。

「朝まで部屋でかけっぱなしにする音が欲しいから、ソヨンちゃん付き合え」とか言つて、ソヨンの返事も待たずにレンタルショップに足を進めた真木を、しょうことなしにソヨンが追いかけると、亮二たちも帰るのを棚上げしたようだった。

レンタルといっても、再生期間制限付きのデータを端末に落としていくだけだから、別にハードの記憶媒体を持って帰るわけではない。昔風に並んだジャケットは、単にそこが何の店であるか存在表明するためにあるようなもので、店員すら配置してないセルフスタンド型店舗だ。

純粹に音楽が欲しいだけなら、ネットの方が断然便利だ。つまりここは親しいもの同士で音楽情報を交換するためにあるようなものだ。レンタルしてみても気に入ったら購入手続を取れば、データはいつまでも再生できる。

あからさまに普段はそういうものに興味がない真木は、音楽の物色を始めても、アーティストと単なるアイドルの区別もつかない体たらくで、どれがどうなのかさっぱり見当がつかないという様子になった。ほどなく、お手上げというアクションをして、ソヨンに丸ごとゲタを預けようという様子だ。

「ソヨンちゃん、なんかお勧めあつたら、教えてよ」

「真木さんが、どんなの好きか分からなきゃ、オススメのしようがないですよ」

ソヨンが文句を言うと、真木がそれもそうかというように苦笑した。

「賑やかなのがいいや。楽しくなってくる感じで……」

どこか寂しそうな横顔を見れば、ソヨンはちよっと胸が痛い。

（あ……、今、真木さんと二人ツきりだ。これはチャンスですよ、ソヨンさんっ、さっきの続き……聞くなら今しかないっ）

そう思い立てば、迷っている場合ではなかった。男共のチャチャ入れがない状態で、キチンと聞いておかなければ、気持ちが悪くてうまく寝つけないだろう。

「ねえ……真木さん」

真木はただだと並んだショーケースをぼーっと見ていて反応がない。ソヨンはもう一段階声を上げた。

「ねえ……、真木さんってば……」

「ん？」

やっぱり、酔っ払いモードなままなのか、それとも何か思うところがあって心ここにあらずなのか、よく分からない。けれど真木の視線がちゃんと自分に向いているのを感じて、ソヨンはやっと口を開いた。

「さっきの続き。私気になって、気になって、このままじゃ、今晚眠れません。種明かししてくださいよお」

「種明かしって……何の？」

真木が、本当に心当たりがないのか、心底不思議そうな顔になった。

ソヨンはずっとそのことがどこかに引つ掛かっていたので、その反応すらがもどかしかった。

「優美ちゃんのキスが、別になんともない理由を、真木さんがわかって、私に分からない理由ですよ……」

渋々説明すると、真木の顔が合点したという色になってから、微笑んだ。

「……ああ、そのこと？」

「はい、そのことです」

「ごめん、ホントにごめん。私の完全な勘違いなんだ」

真木が照れ臭そうに笑って、茶目つ氣たつぷりに言った。

「だから……何の？」

少し真木は真剣なふうな顔になって、ゆっくりと辺りを見回した。単純に人がいないことを確認したのか、それとも亮二たちがいないことを確かめたのか。それはとにかく、真木は少しだけそういう間をとってから声のトーンを落としてしゃべりだした。

「優美ちゃんねえ……。ソヨンならいいよね。言いふらしたりしないよね。あの子ね……。すぐく、苦労してきてるんだよ……。多分」

苦労という単語と、あのことんマイペースな陽性スキンシップ魔との間に、ソヨンは酷く距離を感じて戸惑った。

「優美ちゃんが……苦労？」

ちよつとだけ、真木が言いよどんだ。

「あの子……ね、番付ナンバーズコロニーの出だよ……」

「えっ……、番……付き？」

番付コロニーというのは、宇宙開拓初期に人類が初めて宇宙に出たころつくられた、数あるコロニーの中でも一番旧式の街のことだ。インフラそのものが脆弱なだけでなく、劣化も激しく……とても、人間が快適に住めるところじゃないというのが一般的な共通理解だと思う。

新しく建造されるコロニーに、自力で移住することができない貧困層が取り残されて、スラム化が激しい。大人たちは仕事もせず（仕事そのものが無いとも聞く）、飲んだくれたりクスリでぶっ飛んだりしている。映画やドラマで描かれるとき、そこは、強盗、傷害事件などは日常茶飯事、殺人事件ですら珍しくなく、その辺にいつ死体が転がっていても誰も気にしないというようなイメージ。物乞いをするストリートチルドレンが溢れてて、汚ならしくて、惨めで、どこからどう眺めても閉塞しきっていて、出口の見えない純粋な闇に満たされた場所……そういう、イメージだ。

「多分、あたしたちの想像もつかない世界を生きてきた子だよ……。それであの子は……犬になったんだよね……きつと」

「犬う？」

真木の瞥えが唐突だったので、声が裏返って変な響きになった。

「ほら、動物ってこっちが弱つてるときって、ただいてくれるでしょ。優美ちゃんて、あれずごく冷めるところもあるじゃない。……多分だけど、どこからどこまでも悲惨な現状にずっと住んで傷ついて、どうしようもなくなって、毎日に押しつぶされてる女の人たちが身近にいっぱい居たんだと思うんだ」

想像も……つかない。

「力がある大人の男だったら、いろいろあの子もできたんだろうけ

どさ……。いや、逆に暴力を振るう側になつてたかもしれないけど……。あの子としては、運に見放されて、傷ついてるそういう女の
人たちにね、寄り添つて座つてゐるしかできなかったんじゃないかな
……。多分だよ。私の妄想。その部分は、あの子から直接聞いた
訳じゃないから。ただ、女の人が集まつて仕事をしてる場所にウツ
カリ生まれてきちゃつたんだつて、笑つてたから……。あの子。ナン
バーズで女の人が集まつて仕事してるつて……。多分、まともな仕事
じゃないだろ？」

ナンバーズは子供のお小遣い程度で十分楽しめる売春ツアーがあ
る場所としても、知られている。ソヨンはそれだと思つたし、多分
真木もそうだと思つてゐるのだらう。そんなところに、力も何にも
ない子供として生まれて来ることの悲劇を思うと、ソヨンは上手く
感情を言葉にすることができなかった。

「……なんか……可哀相」

洩れたのはそんな月並みなセリフだった。真木がソヨンに釘を指
す様に続けた。

「同情するなよ。あの子は人生なんて投げ捨てられたのに、うつん
投げちやつても仕方ない環境に居たのに、他の無気力な大人と同じ
ように無気力になることも、荒れることもしないで、ちゃんと働い
て生きてくつて決めて、軍に志願したんだ。ああ、これは私の妄想
じゃないよ。私聞いたんだもん。なんであんな、虫も殺せないよう
な顔して、軍人なんて道選んだのか、聞いたことがあるんだ……」

それは、ソヨン自身もずっと抱いていた疑問だ。彼ほど「ゼイドロ軍人」
という言葉がにあわない雰囲気の男はいない。それでも、ちゃんと
本人に聞いているところが流石真木だと思う。自分はそういう疑問
を抱いても、敢えて聞こうとなどしない。本人が言わないことに、
突っ込んでいく勇氣は持つてない。

「確かに……、優美ちゃんって他の連中とぜんぜん違うよね」
ソヨンがいうと、真剣そうにしていた真木が笑顔になった。

「あの子ねえ……、あたしに言ったんだよ。ここに來られて、凄く運がいいって」

* * *

狭い通路。すえたような悪臭が滲む。暴力を振るっている音。ふるわれている音が響く。そんな場所で、髪の毛の長い疲れた様な横顔のやせ細った女が、少年としゃべっている。少年は、痩せこけた体に、そこだけふくよかな女の腹に頬を寄せて、中にいる命が蠢くのを頬で感じている。女が少年の髪の毛を撫でながら歌う様にしゃべりかける。

ねえ、優美ちゃん、いい子ね。赤ちゃん生まれたら、おばちゃん、優美ちゃんってつけたいな。それとも……優美ちゃんだらけで、紛らわしいかな。

「僕のでいいなら、赤ちゃんにあげる。約束する」

ありがとう、おばちゃん、嬉しいな。きっと元気で良い子が生まれてくれるよね。

微笑む少年は、力強く蹴って来る新しい命の足の裏を、うすっぺ

らい肉越しにちゃんと感じ取る。大丈夫。赤ちゃんは元気だ。僕の弟だ。ううん、妹でもいいけど、でも女の子は大変だから、男の子がやっぱりいい。僕の……弟にするんだ……。

福祉局の回収車が引き取り手のいない死体を持っていく。焼却場へ。高温で焼かれて骨も残らない。ほんの一握りの灰になると聞いているけど、行ったことは無い。多分自分があるそこに行くのは、あの人のように……冷たくなってからだ……。

優美、いつまでそうしてんだい？ マリはもう帰ってこないんだよ。こんな生活してて赤ん坊生むなんて、どだいが無茶だったんだよねえ……。

「母さん……。おばちゃんの……赤ちゃんは？」

マリが独りで逝くのは寂しい、寂しいって、無理矢理つれていつちまったんだよ。あの子は寂しがりやだったもんねえ。……優美？

「ゆうびちゃん、死んじやったの？」

僕が名前をあげた……。

馬鹿な子だね。お前はちゃんと生きてるよ。

違うんだよ、僕ね、あの子に名前あげたんだ。だからそれは僕の名前じゃないんだよ。……もう。

ねえ、母さん。

僕ね……、僕。ずっと待ってたんだよ。あの子が来るの。

赤ちゃんの時はだっこして、キスして……。

大きくなったら一緒に遊ぼうと、思ってたんだよ。

僕の名前、あげるから……。何回だってあげるから、お願いだから、帰って来て……。

本当に、ちゃんと……。あげる……。から……。約束するから。

マリおばちゃんと、帰って来て……。ねえ、神様……。教えてく
ださい。

生まれて来ない命なら……。なんで来たの？

* * *

同じように悲しみに満ちた通路に一人でうずくまっている少年はもつと幼い。室内から洩れて来る女の喘ぎ声も、日ごろから聞き慣れた声だから、別にどうとも思わない。ただ、仕事が終わるまで、公園や通路で一人でぼつねんとしていなきゃならないのが、退屈なだけだ。早く、仕事が終わった母さんやおばちゃんたちから、一か
けらのおやつをもらいたい。

「母さん、しおりさんが起きて来ないんだよ……」

寝かせておいておやりよ。客とりすぎて疲れてんだろ。

優美、お前なんだか、物すごく臭くないかい？　どこで遊んでたんだい？　何かまた悪さしてたんかい？

「ううん。しのぶさんとか。あのね……母さん、しのぶさんね、ずっとねてるんだよ。どうしたんだらうね……」

「腐敗が進んでましたから死後2週間は経ってますね」

「あたしが、ちゃんとあの子の話をきいてやってれば、もっと早く見つけてあげられたんです……」

「お子さんの話ですと、普通に眠りに入って、そのままだめになっちゃったようです。訴えありませんし、私どもも事件性はないと考えています」

「それで……しのぶさんは、あの子に何て？」

今日は遅いから帰りなさい。

また、明日いっぱい話そうね……

だそですよ。

ねえ……母さん……

死んじゃうのって……

なんだかすごく簡単なんだね……

ねえ……母さん。僕に明日の朝って……

ちゃんと来るのかな？

* * *

最新ではないけれど、新しいコロニーの一つであるネオシヤンガンは、投影されたものとはいえ、空がある。GMT（グリニッジ標準時のこと）に準拠した24時間ごとの時間投影と、あと、ほぼ予報通りに推移するとはいえ、街路樹へのスプリンクラーや、建物に着く埃を洗い流すために雨だって降る。

それから、季節の変化。沿道をいりどる街路樹の多くは広葉樹で、季節によって新芽をふき、暑い日差しを和らげ、色づき、枯れ落ち、変化する。

コンパートメントルームの外はいつも昼間でそこそこ明るく、雨も降らないから屋外にあるあらゆるものにほこりが付着し、薄汚れ、いつも半袖で過ごせるほどの適温。暑くもなく寒くもない町で生まれ育った高柳優美　タカは、季節の変化というものが楽しく、心地よく、とても好きだった。

学生用の憩いの場所として開放されている、それぞれの学部棟の屋上にある緑化庭園は、和風だったり、イングリッシュガーデン風だったり、はたまた南国風観葉植物が鬱蒼と繁るドームだったりと

だつたりとそれぞれで趣向が凝らされている。

そんなものが当たり前の普通のコロニーに育っている者には、ほぼ必要とされていないようなそこに寝袋を持ち込んで野宿するのがタカの入学以来のお気に入りだった。メンテ時以外は基本的に24時間開放されている実習棟の屋上にある公園風な造りのそれは変哲もないけれど、安全警邏に引っ掛かって追い出される心配が一番少ないので、特に彼のお気に入りになっていた。

地球の大気圏とは違う偽物の空でも、真木は青空に浮かぶ雲の風景も、それが夕方に色づいていくのも、雨上がりのサービスが何か知らないけれど、虹の架け橋が大きく掛かっているのも素晴らしく美しい。体や心が疲れを感じたときは、ここに登ってきてはのんびりするのが好きだった。

空を見ながら散策する真木にとって、足元は完全に注意力散漫になる。だから、日中から寝袋で熟睡している存在になど気が付かず、何回か踏んづけたことがきっかけで、タカとはしゃべるようになった。

夕日を背負って黒く、そして縁^{ふち}だけ朱^{あか}に輝く雲が幻想的なある日の夕刻、真木はずっと気になっていたことを、つい聞いてしまった。明るいタカに似合わない職業をなぜそんなに早くに選んだのか。

そのときに、タカは特別隠していることでも無いというふうな、気負いの感じられない口調で言った。

ナンバース

番付コロニー出身で、小学校もろくに行っていないということを。まともな仕事に付きたかったら、字も書けなかったから、選択肢はほとんどなかったのだと。

言葉が続かない真木になど気づかぬふうで、タカは昨日の夕御飯のことをしゃべるように続ける。

いつもの気負いの感じられない、どこまでも突き抜ける大空に似た笑顔のままで。

俺ね……。ここに配属されたとき……凄く嬉しかった……。

普通に稼いで普通に生きてみたくて……。でも、小学校も碌に行っていないでさあ……。できることなんてたかがしれてるじゃん。あそこから這い出すためには、軍しかなかったんだけど……。人殺し……やだったし。

知ってる？ わざわざ殺さなくても……。人間って簡単に死んじやうんだよ……。

ホントに無駄だよね、戦争って。

まあ、タダで飯食わせてくれるんだから、文句は言わないけどさあ。

真木さん。ここに來れた……。俺ってさ……。凄く……。

物凄く……。運がいいと思わない……？

* * *

「しかたなく軍人になったけど、無駄な人殺しをしないですんで、凄く運がいい。それを聞いたとき、あたしね……、何だか凄く恥ずかしかった……。軍經由にすれば、簡単にウチの学校に入れるからなんて、チンケな見の奴らばかりだと思ってたからさあ」

真木のその言葉は、今のソヨンの気持ちそのままだった。軍人ゼイトロなんて、金もらって、ただ飯くらって、学費も免除で、入試さえフリーパスで。徴兵制が廃止されて万年人手不足に悩んでいるとはいえ、この学校に來ている彼ら、前線に立って命を張るわけでもない。いいご身分だ。そういう認識しなかった。

どん底から這い上がるというより、まっとうな生き方を選ぶなら他の選択肢がないという状況自体が、普通に自分の将来を考えていく中で、地球テラの空に憧れてライダーを目指した自分とは全く違う。

「人間が簡単に死んじゃう環境で育って、小学校も碌に行ってないって……。今ときだよ……。同じぐらいの年のやつで、同じ学校にいてさ、そんなふうにして育ってきた人間がいるってこと自体がシヨックだったんだ、あたしは。……で、そんな育ちかたしてて、生きてくために……軍を選ばざるを得なかったって言いながらね……。人殺ししなくて済んで……。凄く幸運だって……。あいつ、そう言って笑ったんだ。なんか……」

いつも笑顔が基本形のタ力だから、あれがどんなふうに笑ったのか、ソヨンには想像が簡単だった。けれど、その笑顔が単純に明るいのなんかじゃなくて、すごく強いものだったことに、今やっと気づいた。

何だか知らないけど、そのときのタ力の笑顔を想像するだけで、ソヨンは涙腺が弛ゆるんできそうだった。

「私ね、本当に普通に、普通の家庭で育ってきたことが、幸運だとして知らなかったことが、物すごく恥ずかしかったんだ。……あのとき。ただね、あの子、きつと凄く魂が頑丈なんだ。簡単に壊れたり、普通に揺らいだり、不運を呪ったりしないで、きちんと今日生きてることを楽しめるんだ。すごいなあって、単純に思った」

思い出してしゃべっているだろう真木の表情までも優しくなっている。タカの魂が頑丈という表現がツボを押さえているというかなるほど納得だったので、ソヨンは少しづつられて笑って、それで話を強制的に最初に戻した。

「それで……なんで犬？」

「犬がいやなら、ガキンちよでもいいや。ほらさ、赤ちゃんまでは戻りすぎるけど、ちよつと大きな子どもがさ、大好きな大人が傷ついたり疲れたりしてるときさ、一丁前にちっちゃい手で抱きしめてくれたりするだろ？ ほら、チュツとかしてさ、痛くない、痛くない……とか。ああいうやつ。すんごく、癒されるだろ。無力なのに……無力だからかな、必死で、大丈夫、大丈夫って、できる限りの力で抱きしめてくれるの嬉しいだろ？」

「……うん」

実際にそういうシチュエーションは経験なかったものの、何となく想像がついたのでソヨンはとりあえず頷いた。

「あいつのキスって……そんなやつだよ。女ってこれでも母性本能DNAにたたき込まれてるから、無条件で嬉しくなるんだ。大好きだから、頑張っつって体で伝えてくれる、ガキンちよからのメッセーじ」

へえ……そうなんだ。

「あいつ、最近あたしのこと、直ぐハグするだろ？」

真木が続ける。

「うん、調子にのってるなあって思ってた」

「あれさ……ネッドが学校来なくなってからなんだ。あいつが、あたしに会った別に、きっちり時間かけてハグしてくるようになったの……。大丈夫だって、ネッドは強いから……。帰ってくるって、言われてるみたいでさ、なんか元気が出るんだ。あれ。むっちゃ気持ちいい……」

あれ……。気持ちいいんだ。道理で真木さん、言葉はキツくてもいつも笑ってる。

「じゃあ……。他の男の子のって？」

真木がもう一度周りに素早く目を配って、男どもがいないのを確かめてから、ソヨンに顔をぐっと近付けて、とびっきりの秘密を打ち明ける様なふうで言った。

「……成熟したオスが……。メスを欲しがってるサイン……」

聞いてしまったソヨンも、うっかり近くに亮二がいたりなんかしないことを慌てて確認する。

まっ……。真木さん……。恥ずかしいことを、よくも素面でえっつ。

それから真木は意味ありげにウィンクした。

「ぜんぜん違うもん。こっちのメスも燃えてきちゃうし」

って……。ネッドさんのことだよねえ。うわっ、大人の会話だ

あつ……これ。

「勘違い、ごめんって言うのは？」

もう一つ残っている疑問をソヨンはぶつける。あっさりと真木が付け加えた。

「だから謝ってるだろ。あたし、ソヨンちゃんと亮二って、てつきりもうとつくに、そういう関係だと思ってたから……」

亮二にもちゃんと伝えていない想いを言い当てられた恥ずかしさで、ソヨンは思い切り引いてしまった。もしかして、周りにはバレバレなんだろうか。自分の気持ちは。きっちり気付いてないのは、ニブい亮二だけで。

「あたしたちは……そんなんじゃない……まだ……」

真木の顔がにつこりと破顔した。

「ああ。『まだ』ってところが、あたしの勘もそう外れてなかったって、そういうことかな。少なくともソヨンちゃんは、そーなりたいてって思ってるんだ」

真木の訳知り顔の笑顔が、恥ずかしい様な、腹が立つ様な、むちやくちや気に障る種類のものでソヨンは言葉が続かない。それでいて堂々とのろけるのはさすがに照れ臭いのか、真木はジャケットカバーがキラキラ並んでいる棚の方に視線を移してから、付け足す様に予言した。

「……楽しみにしてなよ。ぜんぜん違うから」
「ぜんぜん？」

正直……やってることはほぼ同じなんだから、そんなに違うとは思えない。そんなことを思いながらもソヨンの目には、年もそんなに離れていないはずの真木が、とても遠くにいる大人に見えた。

「うん……。ぜんぜん。分かるから……。ちゃんと分かるから。優美ちゃんとの違い……。って奴」

真木の唇の端に浮かぶ微笑みは、きつとネッドさんのことを思い出してるに違いないと思うと、ソヨンも真っ直ぐ真木の顔を見られずに、棚に綺麗に並んだアーティスト連中と視線を合せて、選んでいるふりをする。

自分の中にいる女って、そんなに簡単に燃えるんだろうか……。ソヨンはどうにも単純にそんなものを心の奥に飼ってるなんて、信じたくなかった。

分かるのか……。なあ。ってか、そんなのってあるのかなあ。私に。

ソヨンは、腹に溜まっていた怒りが、どうも消化しきれずに胃もたれしている気分で、深いため息をつきたくなった。

14・Kiss in the Christmas Night

クリスマス・イルミネーションで彩られた公園を、ソヨンは歩く。おとぎ話の世界だつて、こんなにキラキラしてないというぐらい、これでもかと飾られている。

ソヨンが一步半進むぐらいの間隔で、少しだけのにびり聞こえる足音がする。一步が長い亮二がソヨンに合わせて歩くと、いつもそんな感じになる。もともと余り動作や態度が荒いことはない亮二だけれど、ますますゆつたりとした雰囲気になって、やっぱりソヨンは悔しい。

夜が深^ふけて、あちらこちらのおしゃれなお店で、楽しくおデートしてきたカップルたちが大量に吐き出されてきているのか、あつちでもこつちでもいちゃいちゃオーラをまとわせたそいつらが、ベタベタと体を寄せ合いながら歩く。

真木のオス・メス発言で、すっかり亮二を意識してしまったソヨンが、いつもより頑張つてせかせか歩いても、亮二の足音はいわゆる普通の速度になるだけだ。全く、腹が立つ。大体、何で、亮二が自分のあとをついて来るのかよく分からない。それは嬉しいといえは嬉しいけれど、もし亮二が自分のことをちゃんと好きなら、そういう意思表示をしつかりしてから、ナイトの振舞いをすべきだと思う。

足音がソヨンを追いかけてくる。振り向きたかったソヨンは、妙に意識している自分を持て余す。普段なら隣を歩いて、これは美味しいシチュエーションとばかりに、一緒にキラキラする通りをゆつたり散歩するのも楽しんでいるはずだ。なのに、そんな簡単なことができない。亮二はいつになくつんけんしている自分をどう思っ

いるか。そんなことを考えると、ますます心がざわつく。

公園の中央辺りにある噴水前の広場にいつのまにか着いていて、ソヨンはゆっくりと変化する光を湛えた水のきらめきに、呆然となった。噴水ばかりは他の低重力が普通の町の公園には有り得ないオブジェだ。地球に限りなく近いここだからこそ、奇跡の様な贈り物。噴水を取り囲む様にあるベンチは、見事にいちやつくカップルたちで占領されている。連中の瞳には、噴水は全く映っていない様だ。こんなに綺麗なのに、ちょっと勿体ないような気もする。

ソヨンは苛ついてる自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。

足を止め、揺らめく明かりを見ながら言葉を吐き出す。

「綺麗だね……凄く」

背後で止まった足音の代わりに、亮二の声がする。

「……だな。お前、これ見たくて急いでたんだ」

亮二の声に心なしかほっとしたような響きが浮かんできたような気がした。ソヨンは思う。自分が何かに対して怒っているのだと、繊細な亮二なら気付いていたのかもしれない。

「今日、凄く寒いね……」

「お前ってば、一年中真夏みたいな格好してるからなあ。今日ぐらい冷えると、そんな薄っぺらなコート一枚じゃ、そりゃ、寒いべ」

亮二の口調はいつも通りのそのまま、カップル（真木さんの話にも）にあてられて、意識しすぎてる自分が、どこまでも馬鹿みただとソヨンは感じた。

「あれ……？」

ソヨンの肩に何か降ってきた。よくみると、男物のロングコート

だった。亮二のルームメイトの見立ては本当にセンスがよいのか、長身の亮二が膝丈ほどのそれを着ると、ひよろけて見える亮二が、鞭のようにしなやかな印象になる。

ソヨンの背丈では、ロングドレスというか、すそがほぼ地面まで届いてしまう。脱ぎたてのコートは温もりがもちろん残っていて、微かに、けれど間違いなく男のおいがした。亮二のおいだと思うと、ソヨンは今日初めて、いつものように素直に胸がときどきしてくる気がした。

振り返って見上げると、目線ががっちり合った。亮二はちよつと照れ臭そうな色を浮かべて、わざとらしく噴水の方に視線を移動させる。それが妙に可愛かった。

「い……、いいよ。亮二が風邪ひいちゃうよ」

亮二は肩すくめた。

「まあ、正月休みに入るからね。たまには風邪でもひかないと、馬鹿でない証明ができないから……そういうことで大丈夫」

風邪なんか引かないなんて、言わないところが亮二らしい。それにしても相変わらず、妙な理論の組み立てだ、亮二のやつ。

ちよつとだけ、このもやもや……吐き出したら、楽になるかなあ。

「ねえ……。私、優美ちゃんにキスしたじゃん」
ソヨンが言う。

「……うん、そだね」

亮二の反応は呆れるほど素っ気ない。

「どつ……思った？」

答えはちょっとした間、降ってこない。

「美味そうに、食ってたなあって……とこだな」

食ってたって……。

「な、何よ……その言い方。なんか他に言い様がないの？」

「言い様って言われてもなあ……。あんなん、別にどーでも構わねえし……」

どうでもいいのね。私のこと。

「そつかあ。私が誰と何しても、亮二には関係ないか。うん、そうだよなあ」

ソヨンは何だか泣きたくなってきた。

クリスマス・イブだけど失恋だあ。私、亮二にとっては友達とまりなことが、完全に判明しましたあつ。

「誰もそんなこと言ってねえだろ。お前みたいな肉食獣型の女は、おやつも美味そうな若い肉かあって……思ったけどな」

肉食獣型？ 失礼な。

「肉食獣が、美味そうに肉食ってるのって、見てて気持ちいいよなあ。高柳の奴、腰抜けてやがるし……。ソヨンすげえっ」

本当に面白そうに、声まで立てて笑わないでよ。

最低ッ。私……全然、どうも思われてない。やだ……、涙出てきそう。

「何とも……」

声が自然と低くなった。

「うん？」

睨み付けても、亮二は相変わらずだ。

ソヨンは噴水目掛けて歩きだす。一步半進むと、一步ぐらい。亮二はついて来るらしい。どういうつもりなんだろう。自分のことを好きだから、真木が解散宣言したとき、送るって言ってくれたんじゃないんだろうか。

「何ともないわけ？」

「へ？」

亮二……全然解ってない。

ソヨンは力が抜けそうになった。勢いでもう一度立ち止まると、背後の亮二の気配が濃くなった。少しの時間差でそよんの背中にせきとめられた亮二も停止した。彼女の背中に亮二の胸が当たった。

「ああ、もしかして、妬いたり、怒ったりして欲しかったの？　オフィシャルCDRソヨンさまってば……」

おちゃらかしたような声だった。

そうよ……。その通りよ。私……。

「そんなこと、誰も、一言も言っていないわよ」

我ながら素直じゃないと思いつつ、ソヨンは憎まれ口になった。

そうよ、誰が悪いと思うのよ。亮二、あんたのせいだよ……。こんなめちゃくちゃな気分。

「あんなん、どってことねえし」

もう、怒った。

「同じセリフ、自分の好きな人が、誰か他の男にキスしてても、簡単に出るの？ 亮二は」

自然、ソヨンがむつつりとした口調になった。

「うん……言えるよ。俺、お前のこと好きだもん……」

え？

ソヨンの中で、今まさに爆発しようとしていた怒りが、急停止した。思考機能不全。

「……うそ」

「……ホント」

うそだっ。だって、私が優美ちゃんに、てろてろのキスしたとき、楽しそうに笑ってたじゃない。

いきなり、亮二の掌がソヨンの喉にがつつりとあてがわれた。その手はそのまま喉の線をなぞり上げるように、顎に向かって這い登った。のどに感じる掌は凍るように冷たい。亮二の掌だのどを通るとソヨンの顔は自然に上を向いた。

目の前に上下逆転した亮二の顔があった。亮二は微笑んでいる。

「うそつき」

「ホントだってば」

亮二、笑わないでよ、悲しくなっちゃう。

「地獄に落ちるよ……。それとも、亮二は自分が好きな女の子が、別の男と、寝ようが抱き合おうが、全然平気だってそういうつもり？」

「そんなこと言ってねえよ」

あ……。亮二の目……。

笑顔が落ちた。亮二はもう笑ってない。

「高柳なんて……。あんなん、まだ男じゃねえし……。第一、お前だって全然感じてなかったじゃんか……」

亮二の顔が近づいてきて、ソヨンの視界を占領した。ソヨンはとっさに目を閉じた。顎を確保されているので、動くこともできずに唇が塞がれるのが分かった。

あ……。何だこれ……。

唇同士が触れ合うことを、確かキスと呼んではずだ。自分は何度もしてきている。両親や家族や友達や……。たくさん、知っている。だけど。

ソヨンの中で何かが弾けた。ただ唇が触れ合っているだけなのに、全然違う。ただ触れ合っているだけなのに、高鳴る胸の鼓動を押さえられない。その振動に揺さぶられて、自分の芯にある何かが、どろどろに溶けて崩れていきそうなほどだ。

ただ触れ合っているだけなのに、何かが自分の中に入ってこようとしているのが分かる。そして、自分がそれを受け入れたいと感じているのも分かる。

おずおずと、けれど誘う様にソヨンが軽く口を緩めた。押さえつけられていた感じはなかったはずなのに、亮二も力がガチガチに入っていたのだろう。のどに合った手が弛む。それから、ソヨンはお腹の辺りに伸びてきた手が、亮二の方へきっちりと自分を抱き寄せられるのを感じた。もう一段階、口づけが深くなった。

分かるから

大丈夫、全然違うつて……ちゃんと分かるから

ソヨンの頭の中で、利いた風なあのときの口調で、真木の言葉がぐるぐるまわった。

楽しみにしてな

「うん……、いい顔。そういうの本当にきちゃうなあ……」

唇が少しだけ離れた。いつもよりずっと近くで聞こえているはずの亮二の声が、遠くから響いて来るようだった。

やだ、膝が抜けそう。……ど、どうしよう……。

「お前みたいな肉食獣が、若い肉食い散らかしたって、どってことねえけどな……。食うなつてのが無理だろ？ ソヨン。だけどな……もし、こんなとろけるような顔、どっかの男に晒してみろ……。俺、マジで狂うからな……」

どうしよう。立てなくなりそうだ……。

「た……、立てなく……なり……そ……」

目を開くことができないソヨンは、やっとそれだけ声を絞り出す。
「いいよ。じゃあ、こうしててやる……」

亮二は両腕でソヨンを抱き取った。ソヨンの頭の上に亮二の声が降って来る。

「照れ臭いから何度も言わねーぞ。クリスマス・サービスだから、ちゃんと聞いとけ。俺はお前が……」

好きだ。

それ最後のひと言だけ直接耳に、間近かに寄せられた唇から、微かな囁きで吹き込まれた。声にならなかった分の吐息は、ソヨンの耳を逸れて頬をなぶって消えた。

「フェイントだよ……。狡い……よ」

我ながら情けない声だとソヨンは思う。涙が何となくにじんできてこぼれた。

「言つとくけどな……ソヨン。俺だって男だからな。ミスターが書き換える前の川瀬教官のチーム組みで、お前に今度のミッシヨンのCDRとられてたの……、むちゃくちゃ、傷ついたんだからな……」

亮二の声は、しゃべっている内容ほどに尖^{とんが}っていないなかったけれど、それでもソヨンの胸にずしりと重かった。五年次の実習は、本当に特別だ。だから、亮二だってP.L.Tシートより、CDRをしたかったはずだ。

「そんなの、私知らないよお……………」

私は亮二と一緒に、単純に嬉しかった。

「パイロットは…………、結局は、操縦桿…………あんまり握れないからなあ…………。去年の真木さんは…………あ、力が違いすぎるから仕方なかったけど、今年こそは……………」

「そんなん、ミスタ・カワセお得意の、仲間割れミッションだよ。亮二の方が…………絶対にCDR…………似合ってる」

ぷつと小さく、ソヨンの耳元に居すわっていた亮二の唇が噴き出した。

「冗談、ごめん…………。ソヨンがCDRサマで当然だよな。前ん時、役立たずだったってネッドさんの…………操縦桿…………とつちまっただんだろ？ あの人を押さえられるなら、俺なんかじゃ、太刀打ちできないよな……………」

その口調は、亮二らしくもない自虐の臭いがした。最初に傷ついたんだと言ったときよりも、ソヨンは隠しきれない刺^{とげ}を感じた。

違うよ。それ…………全然違うんだよ…………。私はそんなことしてないんだ。私の握ってた操縦桿は…………たしかに、あの人とつながっていたけど…………。

ソヨンは言い訳めいた口調になった。

「ネッドさんは、天才だよ…………。私、あるとき、命を助けて貰ったのと同じなんだよ。ネッドさんが居たから帰って来れた」

「俺の前で、あの人を褒めるな。腹だ立つだろ。…………でも、じゃあ、何で、彼は学校来なくなっただんだ？ お前も苛めてないし、あの人も無能じゃなかったんだったら」

亮二が当然の疑問を挟む。

「知らない。私、男の子の考えてること、全然分かんないもん。亮

「二の考えてることだって、全然わかんないし……」

亮二が抱きしめる腕に力を込めたのが分かった。

「一つだけ……教えてくれ。お前……真木さんのこと、純粹に好きか？」

「どういう……意味？」

「お前、何か隠してないか？ 俺はやっぱ信じられないんだ。あのネッドさんが、緊急事態だからって……何にもできなくなるなんてことは……」

そうだよ。信じていいんだよ。あの人は……、凄かったんだから。

「真木さんが苦しんでるの……、楽しんでなんか……いないよな……？」

そのひと言は、幾ら亮二から発せられたものでも、ソヨンにとって我慢できる種類のものではなかった。

酷い……。あんまりだ。亮二。

余りにも腹が立った。ソヨンは亮二を振り払ってぶん殴ろうとした。けれど、亮二は力も体軀も小柄なソヨンを完全に圧倒していた。暴れようとしたところで、彼女程度の力では身動きすらできない。抱かれているのか、羽交締めにされているのか、ソヨンにもよく分からない状態になった。

「痛い……じゃない。放して……亮二。今のセリフ、最低だよ……。私、確かに真木さんのこと、憧れてるだけじゃなくて、嫉妬もしてる。悔しいって思うこともある。だってそうでしょ？ 一つしか年変わらないんだよ」

ソヨンは、心の中では口に出したその数倍を叫んでいた。

だけど、大好きなんだよ。ネッドさんといるときの甘ったるい真木さんも、一緒のシュミレーター乗ってるときの、めっちゃ厳しい真木さんも、お店で可愛いもの見つけて、一緒にはしゃいでるときの真木さんも。私、やっぱり真木さんが、大好きなんだよ……。亮二は、そりゃパーフェクト真木チームのPLETかもしれないけど、しよせんそのときだけでしょ。私は、あんなにかより、ずっとずっと、真木さんと一緒にいるんだからね。

亮二の方も、色々な意味で気持ちが悪くついていた。告白をして、多分いったんは自分の気持ちそのものを彼女に受け入れてもらうことが出来たという手応えはあった。

普通なら、この先にもっとお互いを知りたいとちゃんと伝え合って、くすぐったいような時間をもう少しだけ、分け合えるはずだった。そう、ほんのつい数瞬間前まで。

けれど、何で自分は間抜けにも、どこかに引っ掛かっていた鬱屈をソヨンにぶつけてしまったのだろう。

プライドがむちゃくちゃ高いソヨンが、侮辱されたと怒るのは当たり前だ。お前なんかCDRに相応しくないと言ったも同然なのだから。けれど、半年以上も学校にこないネッドのことは、ずっとどこかに引っ掛かっていた。真木は強い人だけれど、やっぱりネッドはあの人にとって特別なのだろう。落ち込むまいとして、踏ん張っているけど、じわじわとあの真木が今にもつぶれそうなほどに追い詰めているのが分かる。

亮二はネッドが真木を大事にしていたのも知っている。だからこそ、真木をあんなふうな状態のまま放って、どこかに逃げているネッドが許せない以前に解^げせない。

「たのむ……ソヨン。お前は……何も隠してないって……言ってくれ。俺は……お前も信じたいけど、ネッドさんが、何もできなくな

るなんて、そんなこと、信じられないんだ」

ああ……そうなんだ……。ネッドさんが、学校来なくなって……寂しがつてるのは、真木さんだけじゃ……。ない。

すぎる様な色を帯びていた亮二の言葉に、ソヨンは今度こそ力が抜けた。亮二に抱かれていなかったら、きっと地面にへたりこんでいたに違いない。

あつたかい。

すべてを預けて感じる亮二は、ぬくもりそのものだった。

「ずっとあの人が目標だった……。あの人が飛ばないなんて、そんなのは、いやだ……」

ごめんネッドさん……。亮二が寂しいって。真木さんと一緒に……寂しいんだって。

「ネッドさんは……。最後まで、ちゃんと操縦桿……。握ってたよ。凄かった……」

ソヨンが耳もとに感じていた亮二の息使いが、荒くなった。

「……どういうことだ？」

亮二の声が冷たく感じられたのは気のせいだろうか。ソヨンは続けた。

「ネッドさんは、握ってたんだよ……。最後まで。ちゃんとランディングするまで……。だけど……」

「だけど？」

だって……。あのとき……。ネッドさんは。

* * *

俺は……ダメだ……。

俺は一生、真木には敵わない……惨めだ……。
本当に……ぶざまだよ……俺は。

頼む……ウェイ、お前が……梶握ったことにしてくれ。

「あたし、そんなん嫌だよ！」

頼む……。俺、このままじゃ、真木の前に立てない。

ネッドさん……。なんでそんな顔してるの？ 全然分かんないよ。
なんで、そんなに辛そうなの？

「真木さんだけには、話していいでしょ？ ネッドさんが梶、最後までちゃんと握ってたって……」

お前が真木に……、真木だけじゃない、誰かに言ったら、許さないから……。

誰かに言ってみる。俺は二度とお前たちの前に、この面さらさないからな。

「なんで……、なんで黙ってたんだ。ネッドさんが、操縦桿握ってた……ってこと。真木さんは……知ってるのか？」

亮二は完全に詰問調になっていた。ソヨンは首を振るしかできない。

「なんでだよ。ソヨン。どういうことだよ。お前も、ネッドさんも、本当に、何考えてんだよ。俺……話聞いてて、聞く前より全然分からなくなっちまった……」

だつて……だつて……

「じゃあ、私……、どうすれば……どうすれば良かったって、言うのよっ！」

ソヨンは亮二を振り払って逃れると、ただ闇雲に走り出そうとした。肩から亮二のコートが滑り落ちたのと一緒に、自分を包んでいた亮二のすべての優しさを落つことしてしまった、そんな気がした。心の中で、ずっと彼女自身が押し殺してきた疑問や、不満が渦を巻いていた。

真木さんが、悲しいの喜んでなんか居ない。ネッドさんの脅しが、恐かったんでもないんだよ……。ただ、あの人が……。あんまり悲しそうだったから……。あんまり、辛そうだったから……。ネッドさんより、真木さんの方が……頑丈そうに見えたから……。

結局のところ、ソヨンが逃げられたのは、僅か二、三步といったところで、手を伸ばしただけの亮二に簡単に腕を掴まれた。加減が

分からなくなっているのか、掴まれた腕が酷く痛い。ソヨンは亮二を睨み付けた。

「悪いけど……放して……」

ソヨン自身でもぞくつとするくらい冷たい声が出た。

ソヨンは思う。私は……、亮二が好きだ。それは間違いない。真木さんがネッドさんを好きなのに負けないくらい……多分負けないくらい、大好き。でも、だけど……ううん、だからこそ……。温もりを感じたり、唇を知ったくらいで……ずるずるって……のめりこみたくない。

何もなければ、ソヨン自身がCDRだった。クルーを率いてくたくスク（義務）をミスタ川瀬に与えられた。亮二の操船技術が優秀だったことは彼女が一番よく知ってるのだ。

知ってる？ 亮二、気がついてた？ 私が、ずっと見てたって。

「なんだよ。いきなり……放せて、そんなにいやだったのか？」

私が誰より知ってる。あなたが、凄いつてこと。ネッドさんとも真木さんとも……全然違うけど。確実な、その迷わない動作が、訓練と訓練と、訓練でできあがってきたんだって知ってる。だって、ずっと見ててもう五年目だよ。見すぎちゃって瞼に焼きついてる。天性とか勘とかじゃなくて、経験と試行錯誤で積み上げてきた、亮二の操縦が、私は好きだよ。

「亮二……」

いやな訳ないじゃない。ホントに大好きだよ。

「さっき言ったね亮二。男だから、あたしの下でP L Tがショックだったって……」

「……ああ」

ソヨンには亮二の顔が強張^{こわば}って見えた。

「ごめん。私、女だけど、私だって五年次履修生で、私だって去年ずっとネッドさんを見て、手にあの人の感覚を馴染ませてきた……」

練習船は普通の船と違って、C D R席とP L T席の操縦桿が連動している。優先はC D Rだから、余程のことが無いとP L Tの操作は機体に反映されてないけど、P L Tの桿には、C D Rの魂が伝わってくる。

「亮二、あなたの掌が多分、真木さんを知ってるように、私だってネッドさんを知ってる……」

「ソヨン……何が言いたい？」

「亮二がC D Rだったら……嬉しかっただろうけど、だけど多分私だってきつと悔しかった……って思う。だから」

「……だから？」

「結局、オフィシャルはあの御曹司だけど、でも気持ちだけはオフイシャルC D Rとして、このミツシヨンに参加したいと思ってる。私も大好きだよ。亮二。でも、今は……自分の女なんかにつき合って、亮二に溺れて……、フライトをただの仲良し遠足になんか、絶対にしたくない」

そんな顔しないで。本当に好きなんだから。

「じゃあ、しがないP L Tの……俺なんかのフライトは遠足か……」

？」

亮二の声は完全に冷えていた。

怒るの……当然だよな。だって、酷い言い方だもん。……ごめん。亮二。

ソヨンは踵かかとを返して歩きだした。もう一度、亮二が手を伸ばしてきて、もう一度抱きしめられたら、ソヨンのなけなしの強がりも霧散したかもしれない。けれど、今度は凍りついた様に亮二の足は動かなかった。

雪が……ちらちらと降り出していた。

15・ 閑話そのもの 斉藤&タカ（春花付き）

斉藤歩はどうにも人から、『頭が切れる』とか『回り過ぎるのは疲れないか』などと、本人としては、非常に納得のいきかねる評価を面と向かってされることが多い。

鈍いと思われているのか、図太いと思われているのかはつきりしないけれど、自身は繊細であるつもりなので、そのデリカシーのなさには、少々辟易としないでもない。全くもって心外というしかない。

斉藤の自己評価を端的に表すなら、『凡人』になる。まあ、多少のところ記憶力だけは人より若干優れているかとは思っけれど、そこまででいっぱいはいだ。あとは、若干好奇心が無節操で旺盛^{せい}な^{おう}のと、その方向性に節操がないのくらいであとは平々凡々じゃないか、というのが彼の言い分である。

斉藤は人間というものが好きだ。それは、子供のころ身近にいた女性たちから、スキんシップをたっぷり浴びせられて育ったからでもあるだろう。

けれど一番の原因は、文字を覚えるのが人一倍早かっただけでなく、幼児期に特有の「なんで？」攻撃の方向の取り止めのなさ、執拗さに音を上げた家族から、書籍や情報に直接疑問をぶつける様に仕向けられたことだと思う。文字にのめりこむ過程で当然持った物語というものに触れる機会において、様々な考え方をするものが人間だということを、言葉でそうだと認識する前に、なんとなく気付いていったということが大きいと思う。

人間ですから、なんとなく好きだと思える者がいるのは当然として、どうにも苦手な心の動き方をするやつ、不可解な振舞いをする

人はいる。それでも、それぞれにみんな面白いと思うのが、斉藤という青年の心の動き方だった。

他人というものを拒絶しているようにも受け取られかねない、冷たく冴えて見えるドライな外見を相当に裏切って、中身は結構人そのものが好きな、どちらかというとウェットなタイプだ。

高柳^{タカ}にとっては、この斉藤の見掛けの冷たさと、おもちゃ箱みたいに、ごちゃごちゃといろんなものが『整理されて』詰まっているオトク感と、どこか間抜けた人のよさという不思議な取り合わせは、一度知ってしまうと非常にツボにはまるというか止められないというか。とにかく癖になる美味しさだと思っている。

ずっと話していても飽きない。

大体、普通の人間（つまり斉藤はタカの中ではいまだかつて普通という認識で括られたことがない）は、親しくなると向うからもズリズリと近寄ってきて、自分のペースを維持するのが結構大変になる。

けれど情報収集と分析マニアとでも呼ぶべき斉藤ときたら、生来ものぐさというか、最低限の衣食のみ確保したら、あとは二十四時間、睡眠以外ずっとマザーコンピュータ『アースラ』と何かごちゃごちゃやっていて倦^うまないらしく、いったいいつ普通の学生らしい勉強をしているのか全く不明だ。それでいて、タカからみたら神様レベルの運^{ウン}行の秀才共をコケにしてトップを維持できるほどの成績を保っているのだから、本当に変なやつで間違いない。

ついでに初等教育さえ受けていなかったタカの基礎学力が、そもそもまったくなくてないと斉藤が認識してからは、タカが体ではな

く頭を使う作業　ぶつちやけ勉強というらしいが　を始めると
さりげなく傍にやってきて（珍しい）色々教えてくれるようになって
いた。

これが基礎学力ぐらいあって当たり前的前提で進んでいく授業よ
り、断然分かりやすかった。斉藤はタカが何も知らなくて当たり前前
だという前提でどこまでも付き合ってくれる。土台、どっちかとい
うと興味の充足というものに限ってのみタカは相当に粘着質なのだ。
どこまでも納得するまで質問を重ねて、重ねて、大人たちから鬱陶
しがられてきたタカにとって、斉藤はとても根気がよくフツコロが
深い教師だった。

わけの分からん状態でつまれて、興味がうずいたところで中
途半端な状態のまま、時間切れ放置される授業より、自分もアース
ラと遊びながら、片手間でどこまでも気が済むまで付き合ってくれ
る斉藤先生の方が、当然頼りになる教師だった。

タカは、斉藤には先生が似合うと思っている。知識の種まきをし
たあとに、芽が出ることを当然としないで、成長した先に実りがあ
ることも当然としないで、待つでもなく、急がせるでもなく、ただ
いつでもそこに控えていてくれる感じだ。

彼がいつも穏やかな笑顔でいたら、多分、今と同じように統合電
脳制御室に引き籠もっていても、自分のように日参しては、教えを
乞うたり、ただのんびり寛いでいくような人間は絶対に増えると思
う。

知り合って間もないころは、タカは斉藤の出来の悪い人形（表情
を感じられない造りということ）のような、表情制御の無器用さに、
もっと普通にしていた方がいいと思った。けれど今は違う。

付き合っていくうちに分かってきたのは、彼は彼なりのやり方で

自分を十分に出しているということだった。動きの幅が小さいだけで、相当分かりにくいやつではあるけれど、ちゃんと泣きも笑いもするし、哀しいとかそういう繊細な動きもちゃんと持っている。ただ、そのために動かさせる顔面筋肉の使い方がなっていないせいで、本当に分かりにくい、荒^{すさ}んだところがない。

どこも荒んでいない人間の感情表現の仕方にまで、他人が文句をつけるものではないと正直に思う。やつが十分にそういう動きをもっていて、それが分かりにくいだけなら、こっちが察すればいい。斉藤が変わらなくても、自分がちゃんと汲み取ろうとすれば、あいつとはちゃんとコミュニケーションが成り立つのだし、それで十分じゃないか。

タカは野垂れ死になどいい死にかたの部類に入る方で、人殺しや暴力が、無気力で不運な人間を平然と押しつぶしていた町に育ってきた。だから、『荒^{すさ}む』ということの持つ、周囲を徹底的に破壊し尽くすマイナスのエネルギーというものに、いやというほど触れてきた。ゆえに、そういう雰囲気には敏感になる。

だから斉藤はどこも歪んでないと断言できる。だから傍にいて居心地がいい。安心できる。

本当に運がよくて、死神の鎌が打ち下ろされる前に、逃げ出すことができた。だからといって、あそこがあのままであること、あのままでしかいられないこと　多分今日も誰かが死んだり、殺されたり、殺したり、傷つけたりしている　は、常に心のどこかに引っ掛かつてある。

あの町で自分は……何もできないとき、泣いたり怒ったりすること、だれかを傷つけるより、笑うことで大好きな人たちを励めせると学習した。それが何時からだったのかは分からないけれど、本当に幼いころには、そういうふうな振る舞いが身に染みついていた。

逃げてきたことの後ろめたさはある。けれど成長した自分があることで荒れて破壊衝動に身をやつしていたり、薬に溺れて日々鬱々と過ごした場合を比べれば、母親や家族みたいだった人たちにとって少しはマシな現実だろうと思える。だからあそこをあのままに安逸な日常を堪能していることへの忸怩たる思いはあれど、それを後悔することもないと、冷静に思う自分もいる。

そう。やれることは目の前にあることだけ。そして、どうせやるなら、少しでもマシに思えることを選ぶこと。そして、選んだら、捨てたはずの あったはずの もう一つに、「もしそうしていたら」を問わない。

結局タカという青年の行動を律しているのは、その単純な処世術の徹底だけだったりする。

そういう単純な行動原理も徹底すれば異能の一つになる。だから、緊急事態回避訓練において、高柳のスコアは異常に伸びる。それは多くの人間が、命の危険（それが自分のものであっても、他人のものであっても）というものに曝されると、最善しか選べないと錯覚して考えすぎて立ち止まっている間も、迷わずその局面での最善を選びとっていくからだろう。そして、その嗅覚というか勘働きは、常に磨いているからこそ、メンテナンス直後のアイドリング状態でいつだってタカの中でスタンバイしている。

そう。いつだってできることは、目の前にある一つのことだけなのだ。タカは思う。幾つか方法があるように見えたら、そのときは直近の手始め、第一動作によって起こるであろう短期的な見通しを立ててみればいいのだ。その結果がマシと思える方にかける、それ以外に何ができる？

それを言ったとき、斉藤は珍しく声を立てて笑った。ひとしきり一人で笑いこけて それから、彼が好きだという物語にある、登

場人物のセリフを教えてくれた。まるで、タカのためにある言葉みたいだと、例の分かりにくい控えめすぎる笑顔に戻って。

人生はロシアンルーレットだ。

生まれてこのかた育つて来る過程において、タカの主な娯楽は体を使った単純な遊びか、どこも同じような設備が基本的に備えられているコンパートメントルームの、壁一面を占めていた、劣化してノイズが走ることもあった総合端末をテレビモードにしたものだけだった。

もちろん、そんなインフラの貧弱の煽りをくらって、文学にも小説にも、コミックなどにも親しんだことはないタカが、ロシアンルーレットという言葉について何となくでもイメージを持てる様になるためには、斉藤はほぼ二日にわたることになった根気よいレクチャーを受けてようやくのことだった。

「ロシアとは何か」、「ルーレットとは？」から始まるのだから、普通なら付き合いきれないと思うだろう。けれど斉藤はどんな些細な疑問にも、恐ろしい速さと分量で答えをくれた。

頭の中に総合端末で検索をかける機能へのリンクが貼つてあるとは思えないぐらいだった斉藤に対してタカは、羨ましいとか、憧れるとか、逆に悔しいとか妬ましかと思う前に、「便利だなあ」と単純に思った。それは、どこまでも現実主義者であるタカの本領発揮というところだろう。

周りにいた大人たちも、極貧層の当然として無学で無気力で、教育とは何ぞやなどと、考えたこともない者ばかりだった。疑問など投げて、そんな下らないことを聞くひまがあったら、パンの一つでもかっぱらつといで……というような町だった。

本性が好奇心の塊のようなタカは、そういう意味で今までずっと

飢え、餓^{かう}えてきたのだ。だから、斉藤という飲んでも飲んでも尽きることなくタ力がずっと欲しかったものを溢^{あふ}れさせておきながら、そのことにまるで無頓着な斉藤との出会いは、多くのタ力が出会ってきた奇跡の中でも、特級に位置づけるべきものだったと今では思う。

ただあるだけで、人は、いろんな意味でラックを受け取っている。何も受け取っていない人間が、育つて来ることなど有り得ないのだ。恵まれていることが当然の人には分らないだけだ。

タ力を産んだ母親が、生まれてしまったから、傍に置いておいたから、なんとなく情が湧いて親しく思うという心の働きを持つてくれていた人だったという、超絶当たりくじを引き当てたから、あんな町でも自分は育つことができた。面倒だからと放置され衰弱死したり、煩いからと殺されたりする赤ん坊だって珍しくないところだったのだから。

そんなこんなで、自分は究極のどこかでいつもツイていると思う。

タ力は思う。自分もいい加減に理解が悪くて、興味が暴走して、一つの回答を得たらそれに付随する十の疑問に囚われるタイプだけれど、それにどこまでも真面目に答える（しかも記憶の中にあるデータベースのみを利用してだ）ことができる斉藤は、本人が如何に平凡な俗人を主張しようとも、立派に変人ランキングのトップを争うことができる。

* * *

見事な手際でしたね。今の。

記憶の中で、斉藤の声がふいに聞こえた日のことを思い出す。

あれは作業服ではなくて、簡易宇宙服での実習中のトラブル課題回避実習中だった。経験が浅い人間が微細重力下でパニックを起こせばそれだけで命にかかわる。低学年向けの予告されたトラブルに対処するのなんぞ、タカにとっては「緊急」などと呼べる様なものとは思えない。

それでも常に命が掛かっている危険な作業だから、集中力は当然に絞る。ふと片がついて集中力を心地よく離散させてやった、まさにその瞬間だった。そのときを待っていたかのように、金魚鉢（全方位視認型ヘルメットの通称）の襟との接続部分当たりにあるスピーカーから、あの声が聞こえた。

こんなときに音声通話をしかけてくるのは、教官か、チームメイトか、管制官タワーメンぐらいだ。でも、この磨き抜かれた声はタワーで間違いないだろうと思った。

管制官の役割は結構分化されているらしい。情報収集と分析と、それからプログラムを組んだり、シミュレーターを走らせたりする、いわば前線にいる連中が、コックピットクルーに直接指示を出して来ることは基本的に無い。

マイクを使って直接現場に指示してくるのは、FDクラス以上になる。そこを目指す人間の訓練カリキュラムの中には、滑舌かつぜつが悪くて聴き取り間違いをされることを恐れてか、徹底的なボイストレーニングが組み込まれている。

彼らは、どんなときも、早口でなく、聞き取りやすく、大丈夫だと落ち着ける様な速度を心がける。速すぎても遅すぎても聞き手はいらいらするものだからだ。

管制官の声は、本当に天然のものではなくて、訓練によって後天的に獲得した美声なのだ。歌が上手いとかそういう種類のものではないけれど、耳に問答無用で馴染んで心地よい。

その声の持ち主を特定するのに、ちょっとだけタカは苦勞した。タワー連中は普段のおしゃべりの声と、管制官モードどっぷりでマイクに向かつてしゃべるときと、まず雰囲気が相当違うのだ。しゃべったこともある幾つかの顔をなぞるけれど、どうにもこの声と一致しない。

ここのところ見させてもらったけど、タカのやり方って、なかなか思い切りがいいんだよな。どんなときでも判断までが速い。

タカと言われてからやっと、同じ軍人船ゼイドロに乗って、ネオ・シャングンにやってきた同期生とはいいたくない種類の、同期のあの野郎だと、遅ばせながら彼は気が付いた。

あの移送船ライトクラフトに乗っていた訓練生の殆どが、新兵であり、志願兵であり自分と同じような世間知らずのガキだった。

その中にいた別格に異質な存在。

あのときは、まだ一応十代のたそがれに引っ掛かっていた斉藤歩。彼が十代そこそこで特別にスカウトされて軍に引っ張られた天才であり、防衛大をちゃかちゃかやつつけ来ているというのは、船に乗る前から噂で聞いていた。けれど噂話などにキホン興味がないタカにとって「斉藤歩」という名簿の名前は、「あゆむ」という男なの

か、「あゆみ」という女の子なのが気になったぐらいだった。

案の定というか、下馬評通りというか、実物の斉藤歩は（残念なことに野郎だった）文句なしに頭がよさそうで、これから訓練を始める（しかも後方支援の方面で）同期生が乗り合わせた船の中では、余りにも毛色が異なっていた。

あの冷たく見えるならまだしも、温度すらないように見える表情で、軍服も自分たちのような活動服ではなくて、常服を着ていた。既に軍の水に洗われて久しいからか、姿勢がとんでもなく良くて、それだけで小一時間をマトモに座れない連中の中で浮きまくっていたと言っている。

結局 Nex G a s s での技術習得は、軍人らしさを鍛える場面にとことん恵まれないので、ここにいる軍人が軍人らしい身体捌きでいることなど滅多にない。当然やつの軍人仕様の身のこなしは、管制でも浮きまくっているに違いないと思うと可笑しい。

短い時間ではない移動中で、斉藤に話しかける人間はだれもいなかったけれど、だからといって、斉藤の方から働きかけが見られることもなかった。あらゆる意味で、あの移送船の中での彼は孤立していた。そして、そのことを気に病んでもいなかったのが分かるほどには、尊大に見えた。本当に斉藤は第一印象のせいで随分損をしている男だと思う。

どっちにしろ、あのときのタ力は、エリートなどは自分には関わりが無いものだと思っていた。それは多分タ力だけの思いでく、あの場に乗っていた大多数の軍人組が共通して持っていたものだろう。向うも一緒で、どうせ、未来の輸送船の運転手や、荷役労働者になんか興味がないだろうと、疑うこともなくタ力は思い込んでいた。

MS科の実習訓練を、タワー連中はその気になればモニターを通して見ることができるし、逆に年次が進んでスキルが上がって来れば、予告なしにプログラムにトラブルを組み込むことも許可されているらしい。

そんなことを思い出したのも、その聞き覚えのない管制官タワーメンの声が「タカ」と自分呼んだからだ。

あの移送船の中でタカは、斉藤「あゆみ」ちゃんという女の子じゃなくて残念だったけど、野郎でもいいからよろしくというような、まあ初対面の年上の人間にするにはどちらかというところと相応しくないあいさつをしたのも、たまたまトイレに同じタイミングで入ろうとして（ついでにトイレは使用中だった）ガチあわせをしたからであって、別に何か下心があつたわけでも何でもない。

ただ習慣で「タカと呼んでくれ」言つて手を差し出したとき、斉藤はおずおずといった思い切りの悪さで、自分の手をそつと取つた。そのときのタカの感想をひと言で表現するなら、間違いなく「気持ち悪い」だった。

初うぶな女の子じゃあるまいし、野郎が羞恥したところで可愛くないんだよと鬱陶しく思つたタカは、ことさらにがっちり握り返して「握手」というものを教えてやるべくそうした。男なんかとおずおずと手を握り合うのは気持ち悪いと思うのは当然だろう。ところが、余りにも意外なことに、あるとき奴は　間違いなく　微笑んだ。

あ、人間嫌いな奴なんかじゃない、こいつ。

あるときトイレの前で、そうとつさに思つただけをタカは覚えていた。学校というものに飲み込まれてからも、たまにふと斉藤の

見せた微かな微笑みを思い出すと、何となく会いたくなった。運ウ行学部棟には女の子も多かったから、廊下自体が、殺風景なMSのものとは一線を画していた。ひまな時間に遊びに尋ねて、歩くだけでも楽しかった。けれど、肝心の目的だった斉藤に関するならば、話し掛けるきっかけに困るところか、そもそも本人を見つけることもできなかった。

奴はウンコにいないんじゃないかとも疑ったけれど、定期考査の上位成績者の欄には、必ず奴の名前が輝いていた。

「おお、久しぶりじゃないか。可愛い歩あゆちゃん。生きてたんだ」
その言葉が出たのは、あれから一度も見ることがなかったから。

せめて、アユムと呼んでくれませんか。女の子じゃないんだから。大体『可愛い』っていう形容は、私たちが男である前提が正しいなら、年上の同性に使うのに適切であるとは思えません。

女の子みtainな顔とはいわないけど、女の子みtainだった最初の握手を覚えているタカは「女の子じゃない」という、そのひと言がもろに受けた。タカがくつくと笑っていると、斉藤はあの管制官トーンでのたもつた。

そんなに女の子の名前が好きなら、ユウビさんという可憐なお名前の方で呼びますよ、タカ。

「勘弁してくれ。女の名前で呼ばれると背筋がぞつとなる」

だったら、私をそんなふうに呼ぶのも止めてくださいね。

幼い日の、記憶の中で消えかかっている風景の中で、その名前は結局は生まれて来ることがなかった弟分にあげたものだ。

けれどタカにしてみても、生まれて来ることがなかった子供にあげた名前だとか、子供を産むということがそれだけで困難な環境に

生きている人がいるとか、そんなことを、どちらかというと鈍い同年代の野郎どもに説明する気になれない。

奇妙に思われるだけならまだしも、そもそも普通のコロニー育ちの連中に、番付きのやるせなさ、閉塞感に腐ったあの感覚は分からないと決めつけているのも大きい。だから、女みたいな名前は好きじゃないと、単純に分かりやすく説明することになっている。

自分としてみれば、「優美」という名前で呼ばれないなら、それでいいのだ。そこに至る動機付けが多少違ったところでノープロブレムってやつだ。

ひょっとしたら、ウンコ棟のどつかにいる斉藤なら、きちんと説明すれば分かってくれるかもしれないと思う。けれど、今更そんな手間をかけるのは面倒くさい。それに、名前なんていうものは、もともと物体としてそこにあるわけじゃないから、あげちゃったから無くなったなどという幼児の理論を振りかざすのが、そろそろ恥ずかしいというところもある。

けれど、優美という名前はあげてしまったから、もう自分のものでないという感覚は、まぎれもなく自分の中にあって、その名前で呼ばれることがどうしてもしっくりこないのだ。

さて、一方の斉藤である。彼は、弱いものや儚いものを愛しく思うという、女性の本能に巢食う心の動きに守られて何とかまっとうに育ってきたなあという実感がある。それでも押さえきれない何か、きつちりトラウマとして身内に存在しているのという自覚もある。

ごく幼い日、斉藤は女子供にされるべきでない種類の暴力を受けたという経験を持っている。そのことをしっかり受け止めるには、多分幼すぎた彼は、そのことの大半が記憶からものの見事に消してしまっていた。

けれど普通に埋もれていく記憶の中に、もともたない故に消しようにも無い空白の時間があることに、ふとした折りに気付く。気付けば、それはとりあえず今は触れてはいけないものと思う。

いつか、きちんと頑丈な大人になったときに、向き合うべきだという理性もあれば、このまま忘れてしまうことが正しいだろうという直感もある。

しつこく体に残っている、もはや決して痛むことのない古い傷痕は、風呂場で見るとびに、どこか落ち着かない気分させる。それは結局はどこかで彼を縛っている。

愛されて育った子供が当然に持っている、人をたまらなく好きだと思ふ気持ち。そして暴力に蹂躪された子供が、持ってしまったて当然の、よく知らない人が怖いという気持ち。その二つの「当然」に挟まれて、感情というものは、彼の中でいつも覇権争いをしている。だから、斉藤はいつも迷う。初対面の得体がしれない人間の前では、正直、距離の取り方が分からない。情けなくもいつもどうしたらいいか迷っている。なのに、後でちよつと話すようになって、ほぼ必ず言われるのが、「最初のとき何か怒ってた？」なのだから、正直困る。

出逢いの最初の警戒心がやや高いこと、本人は怖がっているつもりなことが、どうして傍目^{はため}には、不機嫌そうに見えるのか。その疑問に答えは用意されていないらしい。だから、付き合い始める前の段階で、誰からも相当にややこしいやつと思われるしかないかという諦めなければならないのだろうか……。本当に、困ったものだ。

というわけで、移送船のトイレ前でのファーストコンタクト以降のほぼ半期ぶりに、マイク越しでマトモに会話したそのしよっぱなお互いがなぜそう呼ばれるのかがいやなのかを、面倒くさがって言い逃したのが百年目。

それからというもののずっと、呼称については、女にカテゴライズされるような名前で呼ばれる度にトラウマの存在を苦く思い出す斉藤と、「優美」と呼ばれるたびに生まれてくることができなかった魂の無念を思い出させられて珍しくナーバスに落ちそうになるタカは、お互いがそれによって相手の傷に塩を塗り込んでいることに気付かずに、自分の傷に塩を塗られた腹いせに「相手がそれを嫌がっている」ことだけを敏感に嗅ぎつけて、意趣返しをしつつづける関係になっている。不毛そのものだ。

二人を知る者たちは、どうやらいつの間にか仲良しらしい関係なのに、平然とお互いの呼称について、二人が不毛な言い合いを際限なく繰り返しているのに疑問を持ちつつ、余りにも続いているのでその辺にころがっている「こんにちは」のバリエーションとして片づけるしかないところまできていた。

春花もその一人で、お互いに苗字で単純に呼び合えばいいという着地点に至れないのかが不思議でならない。お互いに嫌がっていることが明白なのに、あの頭が良いことは間違いない斉藤と、災難を感知して避けることには生まれながらの反射神経を持っているタカが、しつこくお互いの呼び名の部分で角突き合わせているのだ。

かといって仲が悪いと断ずるのもいささか疑問が残る距離の近さ

だ。一匹狼どものくせして、男に興味がなさそうなエセ・イタリアン高柳^{タカ}が、斉藤にだけはなぜか懐いている。

春花は、どちらかというときと斉藤の見掛けの冷たさを思いつきり誤解していたクチだ。どうにも癪^{かん}に障る。

授業もこない。ウインスレイ教官からは特別扱いを受けている。がちがちの軍人。ついでにいつも定期考査では、ぶつちぎりのガチトップを張って来る。廊下でたまたま行き会ったとき「連続首席おめでとう」と、イヤミを込めて言ってやったら、「毎回一人はいるはずですから、おめでとうもないんじゃないかな」などと答えやがった天然レベルにある傍若無人。

斉藤^{あいつ}がどこにいつも居るのか、春花に好奇心が沸いたのは、斉藤とタカが廊下などですれ違ふとき、いつもあの不毛な呼称訂正合戦をしていることに気付いたからだ。つけて行った先であの『アースラ』を初めて見た。斉藤がアレにとことん入れ込んでいるのもそのときに初めて知った。

そして、斉藤がマザーコン『アースラ』をエサにウインスレイ教官に一本釣りされたこと。成績さえ維持すれば、好きなだけマザーコンピュータと対話していい構わないというそのものがエサだったと聞いたときのおかしさ。奴が授業に来ないのは、授業をバカにしているからではなく、AIなんかに（正確にはその設計者にらしいが）真剣に惚れているからだときのおかしさ。

疑問が氷解してみれば、なぜ、斉藤がいちいち気に障ったのか、今では春花にはさっぱり分らない。

タカが初等教育さえ受けていないという事実も春花には衝撃的だった。そして、普通に生きるために軍しか選べなかったという経緯^{いきわづ}も正直に言えばショックだった。そして教科書を読むことそのものと格闘しているタカ。彼にどこまでも真面目に付き合っている斉藤。

そして青白くイルミネーションのように、水槽のように淡い光りの点滅に満ちた部屋の風景に……惚れた。

斉藤は近くに付き合ってみると不思議な奴だった。ちょっと見には、対人バリアをガチガチに張っている様に見えるのだけれど、その実、特に何も構えていない。タカが特別気に入ったから、傍にいろのを許しているのかと思ったけれど、そうでもない。自分が同じように定期考査用の勉強道具を持ち込んで、あの部屋で格闘していても全然気にしていないし、質問をぶつければ下手をすると教授陣より分かりやすく解説してくれる。

なんで、そんなにいろんな事に詳しいのよつ。

一度、余りにも面白くなくて、斉藤に突っかったことが春花にはある。斉藤はきょとした顔になって、平然と言った。

アースラが全部教えてくれるから。

倒れそうになった。マザーコンピュータと人間の先生じゃあ、量も質も敵うわけがない。けど実地はどうなのだ。細かい疑問に手取り足取り答えられるのは、やっぱり人間の教官の方が上ではないか。そこに春花がなおも突っ込むと、斉藤は照れ臭そうに微笑んで言った。

風呂とか食事とか……ウインスレイ教官にお世話になってるから、そのときに聞かし。

あきれ果てたと言っしかない。斉藤の野郎は、マザーコンピュータを教師に、首席指導教官から、生活支援付きマンツーマンで個別指導を受けていたのだ。

そこにちよつと見ただけで疑いようもない斉藤の記憶力と情報整理能力が、そんなものたちに出会ったら、そりゃあパターン化している定期考査など、屁でもないだろう。

呆れついでにネタが判明した段階で、現実主義者の春花も定期考査前、アースラ部屋参りの常連と化した。

彼女がその期間限定で通っていたのは、普通の友達付き合いがあることも大きかったけれど、何より、致命的な遅れを取り戻すために頑張っているタカの邪魔にならないようにするためだった。自分があそこにて斉藤を使っていたら、タカは自分をいつも後回しにするのが分かった。教科書を読むこと自体に大きな困難を抱えているタカなんかに、配慮されるほど居心地が悪いものはない。

けれど、これだけは断言できる。春花は斉藤とタカがつるんでいるのを『見る』のが好きなのだ。斉藤はすごいと思うし、学部棟に湧いて出たときチャラチャラとキス魔をしているタカとは似付かない、真剣モードのタカもカッコいいと思うけれど、断固として仲間なんかじゃない。自分は、彼らの一風変わった付き合い方が好きで、鑑賞して楽しんでいるだけだ。

ただ、観察の結果言える事は一つ。斉藤は間違いようもなく、他人が思おうと、どう見えようと、基本的に「スキンシップされ好き」野郎だ。

だから、ガタイが大きくてやや嵩張るかさばという難点があるにしろ、自分からすりすり寄りそうことはないにしろ、男同士だという致命的欠陥があるにしろ、タカから唐突にハグされたり、意味もなく頭を撫でられたりするのを、斉藤は絶対に堪能している。

春花はたまに思う。あの様子では、恋人でも何でもない自分が、突然にタカのような行動を取ったとしても、斉藤はあの能面みたいな光りの当て方でようやく表情が湧いて来る様な控えめな様子しか

表せなくても、多分きつと喜ぶんじやないかという気がする。

徹底した観察者であるつもりの春花は、彼女自身が、『あの』各部で浮きまくっている、能力お墨付き、性情極め付きの変人と認識されている『斉藤』や『タカ』と、『正気で付き合えるツワモノ』というレッテルを貼られていることには、未だ気付いていない。

16・閑話休題 帰宅（前書き）

作中で斉藤が『Deck the Halls』を歌っていますが、彼の歌う調子は筆者的には、このイメージです。

Ally & amp; AJ Ver. http://www.youtube.com/watch?v=BC4RDx88eZw&feature=related

楽しく、ノリノリです（^^）v

16・ 閑話休題 帰宅

斉藤はマザーコンピュータ『アースラ』のところに帰ると、自分の部屋に帰って来たという気がする。ほっと落ち着くというか何というか。青は鎮静を促す色というイメージがあるけれど、古代ローマや中国では死や死後の世界を象徴する色だったし、古代エジプトにおいては魔よけの色だったらしい。

設計者の意図が鎮静瞑想になかったとしても、斉藤には非常にオーダーメイドにも似た心地よさを感じられる種類の空間そのものだった。

部屋の隅では、マミー型（と呼ぶそうだ）寝袋に潜り込んだタカが寝息を立てている。今日のたまごどんぶりディナーは、思いもかけずに色々な意味で美味しかった。春花が偶然してくれたから、あんなふうな事が運んだ。女の子というのは、本人が意図していないところで、男にとって恩恵を振りまくものだ。どちらかというと肉感爆弾みたいな女性が身近かだった斉藤には、春花のスレンダーさは、必要以上の女を意識しなくて済むからありがたい。

無理矢理押しつけた星は、春花は氣つ風がいいし、気持ち良く切れるし、ちょっとおしゃべりだけど判断までの時間も短くて、ぐだぐだと迷わない。何よりも、一番すごいのが、普通に授業に出て、だれとても親しげに話せるから、顔も付き合っても広いこと。あいつなら女だてらに、Next Gass初のレディースター（CFD）に務まる気がする。

スターを目指せという呪いの呪符という意図を、春花が汲み取ってくれたのかどうかは定かでないけれど、まあ目の前で外して捨てられなかったのはよかったよかった。などと、かなり間抜けに斉藤

は思う。

クリスマスに、いつも近くに持っているものに付けるモノを贈るという意味が、告白とごく近似値にあることに、全く気付いていないのは、知識総量と、その現実応用経験に相当の乖離がある斉藤ならではだ。

斉藤は純粹に、君がスターになったら、協力するよという意味表示のつもりだった。

あのときの春花の笑顔を思い出すと、何となく気分が浮き立ってくる。野郎にそうするのは、クリスマスの一般常識としてアリなのかタブーなのかはつきり分らないけれど、小さなプレゼントがあるんな笑顔をひきだせるなら、タカにも何かした方がよかったのかなと、真剣に考え込んでいる。向うがどう思っているかは知らないけれど、自分にとっては片手で足りる友人の一人だから。

タカという男の行動を見るにつけ、斉藤は、奴にはどうにも『傷ついている』という状況に対してのアンテナとでも言うべきものを持っている様な気がしてならない。

普段は意識してないつもりではいるけれど、どうしようもなく、不安定になるとき それは自分がいつかは乗り越えなければいけない課題であると、斉藤自身は認識しているけれど、できるだけ触れないで済ませたいものだ 実感する。

トラウマという奴のもつ暴力性の特徴で、斉藤の自由にならない部分で、突然、すべての思考がガチガチにしばらく、自分そのものが乗っ取られたかの様にどうにもならないときがある。やつのスキんシップ攻撃は、それを感知すると、ガチッとスイッチが入るらしい。奴の頑張れ大好きハグ攻撃がくるのはいつもそんなときだ。へこたれている人間に対して強く発動される、ガタイがガタイ故に

ちよつと斉藤としてはうんざりなアレは、けれど慣れると全く悪くない。

小さいころ自分をずっと抱きしめてくれた女性の匂いとは全然違うけれど、斉藤はタカの体温にうつかり寛いでいる自分に気付くと愕然とする。どうやら、押しつけがましい愛情表現に溺れる傾向がどうやらあるらしい。

斉藤がずるずるとマイナス思考のループに乗ってしまいそうな恐怖の実感があるとき、なぜかタカは近くにいてくれる。特殊能力だろうかと疑いたくなるぐらいに。そして、少なくともお前は一人じゃないというメッセージを発している様に、鬱陶しくも傍にいてくれる。ちよつと倒錯的とも思わないでもないが、正直、ありがたい。

最近のやつがああ真木に対して異常に懐いているのも、去年のあの事故（もしくは事件？）の後だ。

そういうわけで、斉藤は今自分が安定していて、いい状態だといふことが、自分から距離をきつちりとして、部屋の隅に持ち込んだ寝袋ですやすやと眠っているタカの様子から分かった。少しだけそのことに安心する。

今自分は、あの人のことを……思い出しているけれど……それに傷ついてはいない。

やさしい笑顔の記憶。なつかしさに単純に酔う。一緒に歌ったDeck the Halls（ひいらぎ飾ろう）。クリスマスノキラキラは、大好きな思い出たちの一つ。

データ蓄積型ホストコンピュータのアースラは、ちよつと今の季

節、町を彩っているイルミネーションにも似て、室内の照明の光を蓄えて、思考しているはずのところ、ゆったりと発光し、仄かな残像を残して闇の中に溶ける。

このマザーコンピュータ・アースラのインターフェイスであるこの部屋は、彼女の義視人工二ユーロンに電気が走るときに、夢見る様に発光して、残像を残してゆつくりと静まっていく。その単調の中に無辺の余韻を残す風景が、クリスマス・ツリーを飾った電飾の点滅を思い出させる。

Deck the halls with boughs of
holly Fa-la-la-la-la-la-la-la-la-la-la-la

齊藤には珍しく、小さく切れ切れではあるものの、ちょっと陽気な鼻唄が洩れた。楽しいクリスマス。キリスト教徒でもないのに、なぜか皆大好きなクリスマス。

アースラ本体はもつと大きい。けれどこのインターフェイスは、ちょうど部屋いっぱいに見える様に設計されている。それは宇宙船の操縦桿が本来無負荷で動かせるものを、操作している感覚を運転者に与えるために、わざと抵抗力があるように偽装しているのに似ている。

余りに大きすぎると、対話の相手にするには多分難しいと思ったのだろう。自分はきっちり違うけれど、天才というものはたしかに存在するのだ。例えば、そう、アースラの設計者だ。相いれない二つの概念を大胆に組み合わせた。データ蓄積型でありながら、経験の蓄積によってヒューマンライクなインターフェイスも併せ持つ芸術作品。

人は人らしい不条理を内包した揺らぎに馴染みやすいが、かといって機械は機械であるべきだという合理性も捨てたくない。大規模なホスト型コンピュータに、計算以上の思考や、感情の萌芽は認めたくないという必要と、やはり愛らしさ、伴侶と呼ぶに堪えうる魂を欲して新人と呼ばれるほどにリアルに人を模したヒューマノイドを作らせたことと、そのどちらもが、人間の都合による手前勝手というカードの裏表だ。

けれど斉藤はそれを駄目なこととは思っていない。技術を革新させてきた動機のうち少なくとも半分以上は、ものぐさの人間が勤勉を廃除したいと努力したことの成果なのだ。

だから、このAIを設計したドロレス・オルティガは天才だ。新人を作った人たちは、人の心を模すには、行動することによる経験のフィードバックを蓄積することが必須と考え、マザーコンピュータを作り出した人たちには、数多の経験の意味づけを、自分の中で再度させないことを選んだ。

ドロレス・オルティガは、パターンとして人はどういうものか観察して、学び、そして「演じる」ということをさせた。よく知られたドロレスの名言　人でなくていい。しかしどこまでも人らしくあれ　というあの言葉は、本当に彼自身言った言葉でなくてもいい。ただ、彼が目指したものが何かは、あの言葉で結局は全てなのだと思う。

目の前にいてくれるアースラ。本当は感情のゆらぎなどないのに、人に似て迷ったりするふりを徹底してできるAI。だけど、狂わない。迷わない……けれど、どこまでも手触りとして柔らかい。

こんなふうに生きたいと思うのは……人間として奇怪いだろうか。こんなにも心惹かれて、存在に酔うのは、ひょっとして何か欠けているがゆえに他ならないのではないだろうか。

ふとそんな思いも過つたけれど、もう既に、理想を追い求めたい、
面映くも青い十代からは、とづくに決別した斉藤は思う。
周りがどう思うかに忖度するより、好きなものは好き、それだけでいいじゃないか……と。

T i s t h e s e a s o n t o b e j o l l y ,
F a l l a l a l a l a , l a l a l a l a l a .

「データマン……。楽しそうだな……」

「タカ？ お前、寝てたんじゃ……。ないのか？」

「寝てたよ……。おいしいもの食べて、みんな今日も生きてて、めっちゃ……。幸せ……」

さらつと、子供のように単純に、究極の幸いを指摘して、屈託なくタカは微笑んだ。

そう……。生きていて……。

やはり斉藤は少なからず意表をつかれた。

今日もみんな生きていて……。めっちゃ……。幸せ。

こんな言葉を、こんなふうに着実を持ってさらつといいこなせる
タカ……。お前、本当に……。

「ん？ 何？ なんか言った？」

ほら、感情が少しでも歪めば、こいつはこうやって距離を狭めて来る。斉藤は思う。鬱陶しすぎず、かといって冷たくもない、ちょうどいい、心地いい距離にいつもちゃんという男。大丈夫、今のはちよつとだけ……。感動してるだけだから。センチメンタルは、病気

じあないから……。

「いや、何でもない。いつもながら、よく、こんなに明るいところで眠れるな……と思ったただけだ」

アースラの本体は、いつも、アースビューの南の海の底のように青く暗く沈み、そして、ゆっくりと光を揺らめかせてたゆとう。ここに闇は訪れない。そういつも光りに満ちている。眩しすぎず、何処も焼かない、砂漠に住んでいた人たちが、愛していた月の光りにも似て……。現実の月は嫌いだけれど、お話の中に出て来る月はいつだって美しい。

「……眠つてるときって……死んでるのと一緒だからね。寝てるときに明るいかどうかなんて、俺は気にしないし」

起きてるときだって、タカは気にしてないはずだ。

「……るさかったか？ 眠れないなら、今日は止めとくけど」

「うるさいって……ああ、お前のマシンガン・タイピング？ 慣れるから……全然、平気。それとも歌？ だったら全然、気にならねえぞ。お前めっちゃ声美人だし……」

「声美人って、褒めてくれてるつもり？ ……でも……なら、いいけど」

斉藤が曖昧に頷くと、唐突にタカが話題を変えた。

「CDR……キシシマ……ヒリユウ……」

「ん？」

「どうだった？ 生の奴は……」

ああ、そうか。

斉藤は思う。

細かいことは全然言っていないけど、タカなら察しているはずだ。今回のクルー組はミスタ川瀬のスタイルじゃないと。

どう見ても難易度が上がっているというより、単に無茶苦茶だ。

そして第一管制室に向かうレールに乗っているはずの斉藤が、自身がコックピットクルーであることに、まるで疑問の一つも挟まずに、当然として振る舞っている。

それだけで、カンのいいやつだから、きっと一連の悪さの根元であるとは疑ってないにしろ、何かの理由があつて、どこかで斉藤自身が一枚噛んで悪さをしていることはほとんどバレているに違いない。

でも、それだからって、どうしてかとか、なぜかとか聞いてこないのは、多分、斉藤がやろうとしている何かが、とんでもなく人道に外れたことではないはずだという、闇雲な信頼があるからだろう。そして、斉藤も、その高柳の確信があれば、自分はどこまでも無駄に自体を引っかかり回して興がっているような極道はできない。

タカは斉藤にとつて、自分の安定度を示してくれる目盛りでもあり、それだけでなく、良心というものの幅をきっちり決めてくれる。

「……うん。悪くない」

全ての思いを込めて言う。自分はふざけすぎの阿呆かもしれないけれど、それでも、道を踏み外して平然とスリした顔でいられるほど悪人でもない。

「あゆみちゃんの悪くないなら……惚れたつてのと、一緒だな……妬けるぜ」

今度のタカの微笑みは、多分 信賴してるからな という斉藤に対してされた、保険としての駄目出し。

うん、分かってる。タカ。お前が心配しなくても、自分は誰かを傷つけようとなんか、絶対にしていない。

「ゆうびちゃん、ばか言つてないで……早く寝た方がいいんじゃないか？」

「そりゃあ、歩ちゃんにそっくり返すよ。明日からGアップトレーニングで、お互いに死ぬんだから」

忘れていた大問題だ 斉藤は思った。

今回自分が悪ノリをしたと思うのはきつちりここだけだ。なぜ、自分は霧島飛竜と一遍ぐらい飛んでみてもいいかな、などと一瞬でも思ってしまったのだろう。体を使うために、体を使うというのは趣味でないのに。

大体、今のタカの言葉は完全に間違っている。今更のトレーニングで死ぬのは自分だけで、タカの方は、そのくらいでつぶれたりへこんだりしないに決まっている。

「ん……、そうする。あれって……早く始めた方がいいのかな」「あつたりまえでしょ。甘く見ると、本当に死ぬよ。フライトクルーがGショックで死んだぐらいの黒星なら、パーフェクト真木おねーさんの箔付になるなんて思つてないでしょう？」

剛速球の牽制だ。斉藤は仕方なく苦笑する。

「そうだなあ。精々、頑張ってみましようかねえ。タカ」
その作った笑顔をどうとったのか、タカはケツというような顔になった。

「データーマン……お前も、本当にプランジするつもりがあるなら、今日は適当にして寝ろよ。明日から一緒にGアップ練だからな。したことないでしょ……。マジで死ぬよ」

「ありがとう……。でも、もう少しだけ……。ママと話してから……。ねるよ」

「そんなに、毎晩、毎晩、よくしゃべることがあるな」
呆れた様にタカは言う。

「人間にも……。ママにも……。認知の限界ってのがあからね。足りないところを、お互いに埋めていくのは、楽しいんだ……。よ」
これは斉藤にとつての真実だ。タカには正直その感覚は全く分からない。

「お互いにつて、病気だな。まあいいや。……クリスマスだし、もうちょっとしつぽりデート……。って？」

「それも、あるかな」

寝袋の中で寝ているミイラは、窮屈そうに肩をすくめて微笑んだ。

「まあいいや。体を壊さない程度で寝ろよ。データーマン。あこがれのヒリュウ君のフライトクルーなんて、サンタさんからのプレゼント並の……。強運だろ？ 体作り込んで、ちゃんと飛ばないと」

そして赦してくれる。結局はすべてを。奇跡のような希有な魂。

「そうだな……。メリー・クリスマス……。タカ。お前にもなんかプレゼントきたか？」

「明日の朝、ちゃんと目が覚めたら、それがプレゼントさ。毎日、ちゃんともらってる……一日っていう特別なのをね」

他の野郎が口にしたなら、何とぎざでいやったらしいセリフだろう。けれど、タカの口から洩れると深遠なる何かがあるように聞こえる。それは、多分、彼が疑いもなくそれを心の底から真実だと知っているから、単純な事実として紡ぎだされる言葉だから、ほどよい重さを伴って、心の中にすっぽりと落としこまれてくるような感覚がある。

そうだな。毎日があるのが奇跡だったよな……。

斉藤は、しばしの間、その言葉に酔った。タカお前との出逢いが、自分にとっては奇跡のプレゼントそのものだ……。

メリー・クリスマス……タカ。

* * *

春花が帰ると、部屋には、むっとくるジャンクな菓子の持つ香料のにおいと、アルコールのにおいと、化粧品の甘ったるいにおいと、笑い声が充填されていた。

「春花、おかえりっ。この時間だとやっぱりおデート？」

完全に出来上がっているのは、ルームメイトのキャスリーンだ。「デートって、何だよ」

「だって、タカちゃんと、御曹司つれて、斉藤んとこ寄ってたんでしょ？　で、この時間なら、当然どれかとクリスマス・デートでしょっ」

そういったのは、キャスリーンと仲よしのリディアだ。皆良くみているものだとは本当に呆れてしまう。

コートを脱いで、自分のテリトリーのクローゼットに直しながら、春花は小さいテーブルをききちちに囲んでいる頭数を数えてみた。一、二、三、四……。八人もよくこの狭い部屋に詰め込んだものだ。ルームメイトのキャスリーンは五年生で、彼女の友達も殆どが成人だけれど、春花と同じ年で、結構仲がよい部類のケイトまで飲んでいる。全くもう……。学校にバレたどうするつもりなんだろう。

「今日、クリスマス・パーティーやるって言ってたっけ、キャス」春花が言うと、キャスリーンは立ち上がって、空いたグラスに酒を注ぎ込んで持って来ようとする。

「キャス……、私は未成年だから飲まないって、いつも言ってるでしょ」

「全く、春花はカタいんだから」
機先を制されて、キャスがむかつき顔になる。

「春花あ、誕生日が来たら逃げられると思うなよ」

「はいはい。了解しとくわ、キャス」

春花はそう適当に相槌を打ってから付け加える。

「なんか、普通の未成年用ドリンク頂戴っ。」

春花が帰って、ようやく酔っ払いに無理矢理付き合う必要がないことに気付いたのか、ケイトがぶちぶちと青く弾ける怪しげなノンアルコールカクテルをグラスに二つ注ぐのが見えた。こんなもので用意してあるのだから、やっぱりキャスは分かってくれている。

「あの変人どもと、どうして私がデートしなきゃいけないのよ」

ケイトの横に、それほど嵩張らない尻を押し込みながら、いつも

の習慣で、おながが一杯なはずなのに、真っ先に甘いチョコに手が伸びてしまった。口に放り込んで、ただの甘さにちよつとだけ後悔する。凄く美味しかった飛竜お手製のティラミス。あれの上品な甘さが、どこかに吹き飛んでしまった。

「だって今年唯一のSランクチームじゃない。春花おめでとうつ」
ケイトが言つて、ああそうだったと思い出した。ウェイとクロスフィールドの2チームがSかAランクでスコア争いをするはずだという下馬評を覆して、今期はSチームは一つだけ。こんなところにも去年の事故が響いている。

ウェイさんもクロスフィールドさんも、多分それぞれがCDRを十分できる人材だけれど、分散させて総合力を落すより、まとめて上げ基調を目指す方向を川瀬教官は選んできたということだろう。若しくは、運営の都合による指示の可能性だってある。

Sランクチームの事故。詳細は結局藪の中に入ってしまった感がある。管制と完全に通信が途切れた。第一管だけでなく、ミズ・ウィー率いる第二管とも通信が断絶して、運行プログラムへの干渉も完全に死んだ。それも大気圏突入中という一番危険な山場で。

管制の関与一切なしでの奇跡的ランディング。死傷者も一人も出なかったのだから、めでたしめでたしで全く問題がないはずだった。

普通ならどんな微細な事故であつても、記録は完全に公開される。調査報告書もだれでも閲覧可能に決まっている。それから事故時に運転者がどういう操作をしたのかを、（やってみるかどうかは別として）だれでもトレースできるように、シミュレータの事故フライト記録データベースに入れ込まれる。

けれど、死者がゼロ、機体も損傷なく着陸を果たし、通信系のトラブルのみで学校はあれは事故ではなかったと言い出した。冗談じ

やないと、春花は思う。

七名の乗船クルーのうち、四名のコックピットクルーのうち学校に残っているのは、二度と大気圏突入はしたくないとかで航宙専門に転科したマックスウェーバー・ジョージ・（ジュニア）と、ウェイ・ソヨンのみ。操船はエースが不登校になり、もう一人は学校をやめた。残る三人のMSのうち、一人はネッド・ソンホのように休学中で、残る二人は学校をやめた。

Sランクルーといえば、技術もメンタル面でも、ほぼ問題がないと判断されているレベルにあるはずだ。なのに運転手の半分と、MSのすべてが消えた。ウェイ・ソヨンも、ジョージ・も、事故に関しては、だれにも一切話をしていないそうだ。

ここまでくると、些か何かとんでもないことがあったのではないかと、憶測に基づく噂が駆け回る。

ウェイ・ソヨンが落ち行く船を何とか建て直したから全員が生還したが、実際のいざというときに役立たずだったことに絶望して、その挫折感から立ち直れずに、ネッド・ソンホが登校拒否をしているというのが、一番信憑性のある噂。

それから、MSのメンバーは殊更に仲が悪い連中だったので、タイミングも場所もわきまえず、壮絶なバトルがあつて、間に入って殺されそうになったネッド・ソンホが、対人恐怖症になっているとかいう噂もある。これは学校側がネッド・ソンホが入院中だと発表していることによる。

ウェイ・ソヨンは勇者だとか、ネッド・ソンホは腰抜けだとか、いや、ウェイは鈍感で、ネッドは繊細なだけだとか、本当に学部棟も違うのだから生の情報は少なく、春花には何が真実なのかは全く分らない。

斉藤がフライトクルー。絶対に解せない。真木さんとソヨンさん

と、クロスフィールドさんがいて、御曹司がCDR。川瀬が壊れたという噂もあるけど、あの川瀬もボケるにはあと十年ぐらい掛かるだろう。何か……ある。

今は謎だらけだけれど、とにかく今日はあのわけの分からんクルー組のおかげで、とっておきに美味しい夕食にありついたから、よしとしておこうと春花は思っ、ケイトにおめでとう返しをすることにした。

「第一管ゲットじゃん。そっちこそおめでとっつ。うらましいよ……」

「憧れの赤タイだよ。本当、嬉しい」
ケイトが本当に嬉しそうに微笑んだ。

自分だっ、て赤タイしなかったけど……春花は思う。それでもまあ、一度ぐらいは船に乗るのも、後学のためにはいいかもしれないし、Sランククルーというのは自尊心をそこはかとなくおだててくれる。ただし、最大の難点が大気圏突入だ。

大気圏突入だけはしんどそうだからって途中下船なんて通じないだろう。これからの数カ月は毎日過酷なGアップトレーニングが待っている。もっとも、幸いなる少数を除いて遠い場所だ。こんなふうに大手を振って地球に立^{テラ}てるのは、チャンスの一つだとも思う。そういう意味で文句はない。

タカなら地球G仕様にするためのトレーニング・ノウハウをきっちり持つてらるだろうから、暫くは斉藤ではなくてアレを利用させてもらいますか、と、春花はグラスに入った弾ける青い液体を飲み干した。

「で、話をそらさない。どっちとデート？」

「どっちって、四人でごはんしてきたただだよ。デートなんてご勘弁」

キヤスが聞きとがめて、割り込んで来る。

「ちよつと待て、春花。四人って何よ。変人斉藤と、我等がタカチヤンまでは分かる。あと一名って……まさかとは思うけど、ミスタ・シミュレータ？」

掲示板の前でのどたばた騒ぎは、注目度が高かった気がする。目立つ連中がごちゃごちゃ騒ぐから、自分も巻き添えで目立っていたみたいだ。だけど……彼らのうちの誰かとデートなんて有り得ない。

「いつものタカと斉藤と、あとお初顔が強烈キケンな素人CDR、御曹司・飛竜とだけど、何か？」

アルコールが入って騒々しくなっているケイトが、叫ぶ様にして言った。

「すごい」

何が凄いんだろうと、春花はちよつと考える。

「何が……」

ケイトが信じられないというように眉を顰めた。

「だって、同期の三部門有名人、完全制覇じゃんっ」

「制覇って……大袈裟な。同じクルーになったから顔つなぎ会だよ、単なる」

春花がいい終わらないうちに、キヤスリーンが割り込んできた。

「うわっ、春花先生、凄い余裕発言かましてくれる。あんたさあ、調子こいてると本当に、タカちゃんと御曹司ファンから殺されるよ」
確かに、あの二人は女の子の中では人気が高い。

「どれが本命なのか、白状しなさいっ春花ちゃんっ」
「うわあ」

肉感的なキヤスに羽交い締めになれて、春花が勢い奇声を上げた。

どれって言われても……そんなん……ねえ。

「あ……春花あ、携帯にそんなのつけてたっけ？」

バッグからはみ出していた星をケイトが突ついているのを見て、春花はやつとそれをもらっていたことを思い出した。あのとき斉藤がつけてくれた星だ。

安物でもなく、かといって値の張る高級品でもない小さなチャームの『星』。私たち管制技術科の人間にとって、星といえば、青ジヤケの胸に燦然と特別なエンブレムの、あの星をどうしても思い出す。クリスマスだから単純に星なのか、それともCFDを目指せとでもいうつもりなのかとつさに考える。あのとき斉藤は……。

斉藤これ、クリスマス・プレゼントのつもり？

呪い……みたいなもんな……。

「……斉藤」

奴は絶対に……何かたくらんでる。春花がぼつとり口にすると、上に半分のしかかっていたキャスリーンが異星人でも見た様な顔をして仰け反った。

「えーっ、うそお。春花……あんたって趣味悪いっ」

「え？ ……あつ。あーっ 違うーっ」

ケイトが星のチャームを見ていたから、斉藤を思い出したただけなのだ。なのにキャスリーンは、すっかり、春花が本命は斉藤だと答えたと思っているらしい。確かに文脈としてはそれが一番すつきり通る勢いだ。だけど自分は断じて、あんな超絶マイペース野郎に付き合うほど暇じゃない。慌てて否定しようとした。

「照れなくていいって。アンタ本当に変わってるわ。文句なしでかわいいタカちゃん、あとカネ、カオ、カラダの『三力揃い』御曹司と並べて、なんでアレよ……」

だから違うと言おうとしたとき、もう一度ケイトが聞いてきた。

「春花、これかわいい、どこで買ったの？」

またしても春花は、すっかりキャスリーンと話していることを忘れてケイトに答えた。

「それは斉藤が……星の」

『呪いだと言ってくれたんだ』と説明しようとしたのを、キャスリーンはまたしても、わざとではないかと思うほどに見事な聞き違いをした。

「なぬーっ、『斉藤が欲しいの』ですとあっ。春花ちゃんってば、お酒も飲まない未成年の癖に大胆な御発言っ」

だが、あんな奴を欲しいって言ったよ。

春花は……否定する気力もなくして、どっと力が抜けおちた。

17・お一人様たちの長い夜（前書き）

飛竜ちゃんが聞いていた曲はこんな感じ

<http://www.youtube.com/watch?v=NkWjst-SJNl>

クリスマスってだけで選曲していいのかEXK放送スタッフ。

17・ お一人様たちの長い夜

十分な空間が確保されている部屋には慣れている。だから、掃除が面倒なぐらいには広すぎるとは思っても、寂しいなんて思ったことはなかった。

四人で食事をしていたって、きついとは思わないほどに大きい部屋だから、あの三人がいたぐらいで、空間が占有されたという感じでもない。けれど、一人につき五人分ぐらいはしゃべっていたんじゃないかというぐらいに賑やかな三人が帰っていくと、部屋に充たされた静寂に圧倒された。

もう少し何か飲もうかと冷蔵庫を目指してキッチンに入る。大柄と評される自分よりも一回りは優にデカイ、タカがまだ立っている気がした。

タカの横にいたかと思うと、手動でクリームをホイップしていた僕の横からボウルを覗きこみ、そうかと思うと無能をさらしてカウンターで完全に客化していた斉藤の横にいたり、何となくずっと僕たちの間をひらひら舞っていた春花の気配が残る。

きれいに片づけられたシンクには、水滴一つのこっていない。タカの仕事だろうか。なんだか綺麗すぎて、却って切ない。

部屋を見回す。業者が定期的に点検して入れ換えていく観葉植物の大鉢は天井まで届きそうだ。こっつて、こんなに広かったっけ？近代作家もの、のわけの分からんなりに色のせめぎ合いが見事な絵が、壁の一面を占領している。

ガランとした沈黙の中でデンと居すわる家具たち。応接セットもベッドも無駄に大きい気がして来る。

普段は、風呂を使ってメシを食ったら、ベッド一直線で、眠ったかどうか分からないうちに目覚ましてたたき起こされる。でも、冬季休暇で明日からは授業はもうない。早起しなくても、午前中をのんびりすごして、適当な時間に実習棟でGアットレーニングをゆるゆる始めるぐらいでいい。

クリスマスはさすがに、学校で自主トレする人間も少ないだろうから、人が少なそうな時間をあくせく狙って行動しなくてもいいと思う。

何となく、壁を総合端末モードにして、チャンネルをアースビューに変える。昼間の南の深い海。そんなマニアックな設定を打ち込むと、壁があのとときのアースラの青色に広がった。深いのに、明るい。揺らめく様な青。思った通りの青。空の青とは違う青。

壁のあちこちに仕掛けられた高級スピーカーがノイズを除去した海の底の音を、ゆったりと奏でた。金持ち仕様の部屋だから、ふと思いつて全方位モードにすると、すべての壁が海になった。

ウミガメが飛ぶ様に泳いでいるのに気付いて、思わず手を伸ばす。もちろんカメにとっては、そんなことは起こっていないのだから、その悠然とした羽ばたきは変わらない。

BGMの選択画面を選ぶと、『Nature』になっている。その横にあった戻るボタンに障れば、今日のトップ画面が開いた。大きなニュースはないようで、点滅しているヘッドラインはない。

その代わりBGMボタンの横に『クリスマス特集』アイコンが湧いている。何気なく触れると、聞き慣れた音楽がこぼれてきた。何の曲かは知らないけれど、クリスマス・ソングというイメージはない。

ただ、打ち寄せる波にも似た音たちが、耳の奥底から言葉の記憶をつれてやってきた。なぜあれだけけたたましかった連中の声が、こんなにしんみりと甦ってくるのか分らない。

目的が一致してたら、仲間だよな

春花が微笑む。

ゴールデンたまごどんぶりの、いい活用法考えたぞお。

なんで、連中の言葉が、何度も何度も弾けてるんだらう。僕はうんざりする。

青白く点滅を繰り返す巨大な人工知能。うちの学校のすべてを心得て、記憶して、常に成長していくデータ蓄積型AI。ホスト型とかマザー型コンピュータが、宇宙空間に浮かぶ人工都市の背後には必ずいるあれ。

あんなに綺麗なものだなんて知らなかった。アースラとか何とか、名前が付いているのも知らなかった。連中はアースビューの海と言ったけれど、地球育ちの僕に言わせれば、もっと似ているのは水族館の巨大水槽。水族館というのも、ここには無いもの。

その言葉が聞きたかったんだ。

斉藤。他のどんな言葉を僕が言うと思っていたんだ。僕は飛ぶためにここに来たのに。僕は……飛びたいよ。青い空がなつかしいよ。風のおいが……違うんだ。このこと……、あそことは。

安心したよ……。

どうしてだろう。殆ど無表情なのに、笑っているのが分かる。僕が飛びたいと言ったのどが、そんなふう君を喜ばせる？ 状況最悪……。だけど、皆で本当の青の中を飛ばう。大気圏に入って、雲が広がって来る前のあの狭間にだけ存在する、どこまでも青く透徹とした、あの空へ行こうよ……。みんなで。

こんなとこ一人で住んで寂しくない？

タカ。本当にさ……。今まで、思ったこともなかったんだけどなあ……。この部屋ちょっとだけ僕には広すぎる……。かもな……。

* * *

クリスマス・イルミネーションのキラキラがかすむのは、なんだろう。突然降り出した天気予報にない雪が降ってるから、雪の結晶が反射するからかもしれない。

雪……。降ってるよ……。

笑ってない亮二は怖いよ。なんで……。そんな顔してるんだろう。

亮二……。今日は物凄く寒いよ。コートも着てないで……。風邪……。ひいちゃうよ。

コートの温もり。唇に感じた亮二の熱さが、何もかも溶かす。

深く重ねられた唇の隙間から、どこまでも貪欲に私の中に入って

こようとするのは、私を感じたいからなのか、それとも、ただ私じやなくても……真木さんが言うみたいに、オスだから、ただ単純にメスが欲しいだけなの？

もし、こんなとろけるような顔、どっかの男に晒してみろ……。俺、マジで狂うからな……。

ねえ……ホント？ 亮二は本当にそれぐらいで狂っちゃうの？

同じ管制のキャスリーンのところで集まって騒ぐと言ってたルームメイトのエリカは、まだ帰って来る気配がない。このままだと朝までバージョンかもしれない。なんで、たった一人で、こんなふうにベッドの中にいるんだろう。

早く、帰らないと……ホントに、ホントに風邪ひいちゃうよ……、亮二。

だけど、私があんなことを言って、亮二を怒らせた。でも亮二だって酷いよ。あんなこと言うなんて、本当に……信じられないよ。

ソヨン、お前、真木さんが苦しんでるの……、楽しんでなんかいないよな……？

酷いよ……。あんなこと言ってくれた後なのに……。

好きだ。

直接、耳の中に吹き込まれた……、微かな声にもなっていない。でもちゃんと聞こえた。本当に私のこと好きならね、亮二。真木さんが苦しんでるのを、私が楽しんでるなんて、そんな酷いこと言えないよね。……悪いのは……亮二じゃない。

頼む……ウェイ、お前が……梶握つてたことにしてくれ。

ネッドさん、なんで学校来ないのよ。……なんで、真木さんほつとくのよ。なんで、私にそんなこと押しつけるのよ。

悪いのはネッドさんじゃない……。

ねえ……。寂しいのは、真木さんや亮二だけじゃないよ。

私も……会いたいよ。ねえ、川瀬がさ、ネッドさんのこと、心配しなくてもいいっていうんだよ。あいつには空があるから、まだ飛べるから大丈夫だって。

でも、じゃあ、私たちは……要らないの？ いなくても、全然平気なの？

教えてよ。笑ってるだけじゃ……わかんないよ。

雪の降りが激しくなってくる。亮二の肩に積もっていく。

ごめん。ごめん。ごめん。ごめん……。ごめ……。ごめんね。

悪いのは……私だ。ネッドさんに頼まれたからって、先生たちに言われたからって、黙って何も言わないで、ネッドさんのこと好き

な真木さんも、ネッドさんのこと大好きな亮二も……苦しめてる。

雪……、やまないよ。亮二、早くコート拾って着て……帰らないと、本当に風邪ひいちゃうよ。招集日に学校こなかったら……私たち飛べないんだよ。分かってる？

亮二、私もあなたのこと大好き。でも……、でもね。ごめん。

あなたに溺れるのは……いや。

だいすき……なのに……。

やっぱり、亮二が悪いんだよ……あんなの……、あんなのするから、……心臓が……痛いよ……。

心臓が熱くて……、痛くて、眠れないじゃない……。ばか……。

エリカ……飲み会なんかやめて、帰って来て。冷蔵庫からおやつだして、一緒におしゃべりしようよ……。

* * *

雪が降っている。なんだか、底冷えする。足元に落ちてるコートが、女に逃げられた感を演出していて、腹が立つ。幾ら街がキラキラしてたって、ソヨン……お前が半分泣いてたら……俺は全然楽し

くない。

いったい何があったんだ。なんで、おしゃべりな癖に、あのときのことを何もしゃべらない？ お前でもできたことが、ネットさんにできなかったなんて……俺は信じない。あの事故の後、お前……笑ってても、勉強してても、シミュレータに乗ってても、どっか中途半端な顔してる……。気付いてるか？ 自分がどんなに無理してるのか、本当に気づいてるか……。

パイロットシートは、ガキの遠足だって？

可哀相な万年P L Tに面と向かって言うか？

そんなに……お前、一番じゃなきゃ……嫌なのか？

俺だって……CDR席に座りたかった……。万年P L T決定。永年P L T賞を作ってくれて、川瀬に直談判してくなるじゃないか……、これじゃあ。

ちつちえ癖して……、細っこい……折れちまいそうな体の癖して……、気の方は、勘弁してくれてぐらい、強んだよなあ。参るよ……ソヨン。並の女なら、多分堪えられないぐらいの好奇心だらけの目を、お前は平気で受けてたって胸を張ってるけど、どっかで泣いてるみたいに、見える……。けど……。

ほんとに、見事な肉食獣だよなあ。

仕方ねえなあ……肉食獣に惚れちまうなんて、草食獣としたら、えらい間抜けだどなあ、けど、惚れちまっただから、仕方ないよ

な……。

……おかしいな……。これだけ……雪にあたってたって……全然、
想いが……冷めちゃくれないんだからな。

ソヨン、さつさと喰いに来いよ……。お前になら、食われてやる
から……。

雪……。いつまで降らせる気だ……。迷惑だよ……。全く。

* * *

薄暗くて、長いカウンターだけのバーは、ネッドが好きだった店
だ。よく一緒に来たことを思い出すともなしに、思い出す。しゃべ
るより、頷きながら話を聞く方が好きみたいなネッドは、だけど好
きなことについて話すと、結構よくしゃべる。

マスターの趣味が、紙飛行機なのだ。ここでは、真木はむしろだ
まって二人が際限なく話しているのを聞くことが多かった。

天井から吊るされている紙飛行機が今日はキラキラと輝いている。

「新城さん……ヒコーク……、綺麗だね。クリスマス・モード？」
「発光スプレー使って、結構がんばっちゃった。真木ちゃんはいっ

も通りだねえ」

マスターの新城のところの客は殆どが常連の紙飛行機野郎だけど、今日はさすがに家族サービスでもしているのか、店の中はちよつと閑散としている。マスターが頑張つて紙飛行機をキラキラさせようと、塗装してたのに、客入りがこれじゃあ気の毒だ。

店の名前は『サトウキビ』。これだって、マニアのネッドに教えてもらえなければ、わけの分らないちぐはぐなものに聞こえたかもしれない。紙飛行機の室内最高記録滞空時間を保持している素材が、この宇宙新素材時代にも関わらず、サトウキビという植物から作られた紙なのだそうだ。

大の男が、ヘソだのヤリだの、果てはトンボがどーのイカがどーの、トンビだなんだと言い出すから、最初はびっくりしたものだ。

「おしゃれする気にもなれないわよ……一人だもん」

「ネッドの奴……相変わらずなん？」

連絡がないのか？ということだと思う。真木はしかたなしに頷く。

「もう……意趣返しに浮気しちゃえば……。真木ちゃんの学校ならいい男は山盛りなんじゃないの？」

マスターの軽口に、真木は笑ったのだけれど、客が座るはずの側に座っていたママのミチルさんが窘めるような目つきでマスターを睨んでいた。料理担当のママ、ミチルさんは、この時間は暇なんだろう。いつもは12時過ぎて料理がオーダーストップになると、乾きものと飲み物だけの店になるから、ママは用済みだとばかりに退散していくのだけれど、クリスマスだからマスターに閉店まで付き合うつもりなのだろう。

ギャルソンエプロンを外して、化粧を濃いめになおしてくると、ああ、綺麗な人だったんだなと真木は思う。

「……珍しく、長いね。真木ちゃん」

「そう?」

ミチルが眉を顰めている。

「運転手は呑んでも、呑まれちゃいけないってのが、口癖なのに、ちよつと呑まれてるよ……今日は」

「……そう?」

「おいしそつに見えないよ。もう今日は止めとき……」

ミチルさんが商売人とも思えない事を言う。

「例の実習、そろそろだろ? 体調に響くよ」

「……うん、ありがと。そうするね」

「……ネッドちゃん、……まだ、帰ってこないの?」

「ママつてば、商売人の癖に見て分からないの? 帰ってないから、ひとりでこんな所でクダまいてんのに」

「まったく、真木ちゃんときたら、こんな店なんて、言ってくれるじゃない」

真木は照れ笑いをして頭をひょっこりと下げた。酔っぱらっているから失言するのだ。本当にミチルに言われるまでもなく、飲みすぎてる。

「ごめん、ごめん。でも、ソヨンは亮二と帰っちゃったから、こんな夜中につきあわせる子いないし。ソヨンちゃんはちよいときついけどいい子だし、亮二はああ見えてめっちゃくちや真面目だからね、いい組み合わせ」

ネッドが、ソヨンと亮二を初めてここに引っ張ってきたときは、案の定というか、予測に違わずというか、ソヨンは結局紙飛行機のロマンがまるで分らない真木組に入り、ミチルさんの料理にはまっていた。そして亮二はすっかり、ネッドとマスターの新城にいつぺんで洗脳されていた。

未成年に飲ませたら営業免許が取り上げられるからと、いまだにおおっぴらには商業施設でアルコールが飲めない亮二だけれど、ネットがいたときは、彼にくつついてやってきては、マスターとなあなあでノンアルコールカクテルに、こっそり悪さをしてもらってたのだって、真木はちゃんと知ってる。

それにミチルさんが、馬鹿な男どもに呆れて、営業停止になったら離婚してやると啖呵を切っていたって。あのときの新城さんの顔、おかしかったあ。

やだ……、なつかしいなんて、全部終わっちゃったことみたいじゃんか。

「真木ちゃん。人の心配してる場合じゃないでしょ。ネットちゃんは、ちよいと目が覚めるぐらいのいい男だから、ちゃんとつつかまえとかないと、誰かにとられちゃって、泣いても知らないよ」

「……もう……ダメかも……」

「あら……、真木ちゃんらしくもない、弱気発言……。もしかしてホントに何にも連絡ないの？ ああの馬鹿……」

真木はグラスに残っていた液体を^{あお}呷る勢いで飲み干した。記憶の中でも、カッコいいと勘違いしていやがるような、ネットのスカした横顔が、ぼうつとにじんで^{かす}掠れていく。

クリスマスぐらいは、もしかしたら、コールの一つもあって。顔出しに来てくれるかもって……思ってたのに。やっぱりあの人は、あたしなんか居なくても全然困ってない。

人間の記憶力なんてショボいんだからね。大好きだった筈の笑顔……、ちっとも思い出せやしないじゃない……。。

真木がグラスを勢い良く置くと、ミチルがさつと取り上げた。

「店じまいっ。今日は真木ちゃんに売るお酒はもうないからね」
「お……水」

目が回りそうだ。やつのことでそれだけ言つと、真木はカウンターに顔から撃沈した。カウンターの向うで、ミチルと真木の方にちらちら視線をよこしていたマスターが、氷の浮いた水を持ってきて真木の顔の前に置く。もうちょっと重力環境が軽めに営まれている街では、決して楽しい種類の贅沢な飲み方。コップや器に盛つてある料理は、本当にパツクされているものより美味しいと思う。

薄目をあけると、氷と水の揺らめきの向うで、キラキラと発光する紙飛行機がゆれていた。ああ、本当に飛ぶのが好きな馬鹿どもに似合う趣味だ。

あの大気圏内航空シミュレーターの成績がやたらといい、下手をすれば、鳥人ネットが持っている最高記録を抜いちやう勢いの御曹司も、連れてきたらマスター新城と、レイノルズ数がどーとか、ねじれがどうだとか、PLGバチンゴもいいけど、醍醐味はHLGハンドだよな、などと言いつつに決まっている。

さつさと帰つて来るか、さつさとくたばつちやえ……。ばかやろっ……。

真木のことなど、気づいてもいない飛行機は、生命維持のために必要な強制大気循環流にのつて、楽しむ様にゆれていた。でも……飛行機は……。

好きなだけ……飛んでいればいい……かな？

18・SによるSのための特別課題

斉藤は眠ったのか、それともまだ目を閉じているだけかもしれない。タカの顔が、アースラを形作る透明の球体に映り込んでいる。それを見ながら、タカの言葉を半ばうつとりと反芻する。はんすう

明日って誰にでもくるもんじゃないからね。

おやすみ、また、明日……あえるといいな……、タカ。

うん、また、会えると……いいね。

また、会いたいな。

記憶は一つ一つの音を言葉にして、塊にして、しゃぼんの泡でくまるまれる。ぷちぷちと弾けるたびに、形を変え、色を変えて、からかう様に消えていく。

斉藤ならたどれる履歴の個人情報や、噂話から切り取ったタカの生い立ちと、今の彼のあっけらかんと、どこまでも突き抜けた闊達かつたつさとの距離に戸惑う。

タカ。お前にはいつも……驚かされるよ。もう眠っているのならば聞こえないはずの同居人の寝顔に向かって呟き（つぶや）くように、斉藤は思った。しらふでは恥ずかしくて言えないし、アルコー

ルもやらないので酒の勢いというのも当然有り得ない。

もちろん斉藤とて、成人男性の当然の試み^{しこみ}として試した^{ため}ことぐら
いはある。けれど、情けないことにアルコールには飲まれてしまう
タイプと判明した。精神の色調が変わって躁状態になるだけなら許
容できるが、記憶が飛ぶのはいただけない。

つまり、多分永遠に、タカに面と向かっていつも凄いと思ってい
るということを告白する日はこないと思う。けれど、いつもあの有
り様に自分の中途半端を自覚する苦さに困りつつ、近しくそのよう
な人を見られることが嬉しい。

地獄を見てきたくせに……。無残に、無意味に人が死んでいく中
で、生き延びてきたくせに……。今日の次に明日が当然あると無邪
気でいられないくせに、どうして、そんなふうに笑う？

タカ………なんでかな。本当に、強い……。

羨ましい。

お前はいつだってちゃんと揺るがない。

斉藤は視線をあげる。アースラの磨かれた様に光る艶やかな球面
に、間延びして歪んだ自分の顔が映っていた。自分の過去に居すわ
る白い空白から、目を背けている臆病な自分が映っている。強い人
間ばかりじゃない。人はそれぞれ自分であっていい。弱いことを引け
目に感じることはない。それでも……斉藤歩。お前、しっかりしろ
よな。

自分にはタカのような強さはない。だけど、自分には、別の武器

がある。だから、あの人は、この宿題を出してきた。

いくぞ、斉藤歩……始動だ。

気合いを自分なりにいれて、アースラに使用許可コードを読み込ませる。一応、その気になればアースラの制御に直接指令を出すこともできるが、それを斉藤は欲していないし、許可もされていない。今自分が求めているものを問う。アースラが知っている、もしくは知っていた真実ではなく、アースラから隔離されて記憶庫に移されたか、末梢された記憶。アースラのどこを弄つても、特殊なキーをもっていなければ解除できないところにあるはずのそれ。

それを持っているのは、自分の持っている小さなメモリーチップに入っている。自分がさせたいのは、アースラにその元のありかを問うことか？

違うだろう。自分が知りたいのは、なにがあつたのかと、それに関わった人たちが、口足並みを揃えて隠蔽^{いんぺい}をよとしたこと。

その疑問に対する答えは、データ蓄積型のマシブAIなどにはない。選んだのは人間なのだから。

斉藤は、ゆつくりと自分という存在がアースラに認識されていくのを待つ。一般の人間に話し掛けるときのアースラが、それぞれに人らしさを演じることができる。そういう作られたアースラと会話することも斉藤は嫌いではない。

だけど、今やろうとしていることは、そんなことじゃない。

隠されていること。関係者が触れない様にして過去に早く押し込めようとしていることを暴くことではないだろう。多分、これを自分に託したあの人は、答えを持っているのだから。そしてそれでいて、何も知っている立場にない自分に、知ろうとしろと暗に指さし

た。

いったい何を自分に見つけさせたかったのか。あの人が知っているそれを、自分が見つけることにどういう意味があるのか、斉藤が斉藤として認識されるのを待ちながら考えてみる。

何かを始めようとするとき、どうしていつも、どこまでもが茫洋ぼうようとした世界に、たった独りで投げ出されているような気がするんだろう。

たった一つでいい。あるはずの糸口を見つけない。それをつまんで引く張れば、そこから、真実まではいかななくても、その周辺事情が分かるところまで近寄れるかもしれない。つかんで、知って、そして自分がどうするか。あの人は多分そこまで想定したはずだ。

期待をかけられて、それに答えるということに対して、常日頃は意義を見出すことが殆どない斉藤だけれど、この課題を出してきたあの人の瞳を思い出せば、俄然がぜん受けて立たなければという熱い滾りたぎにも似た感情が湧いて来るのを自覚する。

自分は、熱い人間ではないはずなのに。たくさんの切れ切れた糸端をとつかまえて、多方面から一気に手繰りたくよせて、さあどうだと大見得を切ってみたい。

とはいえ、闇また闇だ。最初のそもそもとつかかりの一本を捕まえるのが難しい。

歩いていて、たまたま気付いた糸端を手にとって、その先を辿っていくのは別に大変なことでも、難しいことでもない。いつも興味の暴走するままに任せてやっていることだ。

けれどあの事件の結果だけはみんな知っている。当事者がだれだったのか、そして、結局どうなったのかは、事故調査委員会の公式

発表がなかったところで、はつきりしている。親しい顔が見えなくなる、日常から消えてしまう。理由もわからずに。理不尽は大嫌いだ。日常を予期できぬ形で奪われるのは、それがその後の日常の不満と直結していなくても、気持ちがいいものではない。

でも、道筋はだれにも見えていない。どうしてそうだったのか。いったい、本当は何が起こって、だれが何をして（あるいはしなくて）、そこにいた人たちが何を思ったのか。そういう部分はすべて謎だ。

斉藤は自分は探偵は向いていないとつくづく思う。面白そうな事実の断片があつて、その先に何が待っているのか知りたいときに、どうしようもなくわくわくする。これをしたら、どうなるのか。そういうこと考えると、脳内エンドルフィン値が急上昇する。

けれど……。辛気臭い事実が歴然としてあるとき、そして当事者たちがそれに蓋ふたをしてしまっていることが明確なとき　寝てしまった子を起こすのは賢明なことというより、むしろ愚かなことになってしまう。

知らぬが仏というのは、ある意味正しい。多くの知的レベルは申し分ない人たちが、知らせぬことを選んだなら、知らぬままにいるのも知恵の一つだと思う。

それは多分、自分が過去をある意味す狡くも封印　なかったことに　して、みせかけの平穩に安住しているという自覚があるせいに他ならないからなのだと思う。

目を逸らしているとき、その見たくない事実は見えずとも、目を逸らしているということは自覚できているのと一緒に。みな、事実が隠蔽する方向で収束したのを知っている。だからこそ、そこになぜを突き付けるのは愚かなことなのかもしれない。

空白ならば空白であると気付かなくてもいいものを、そこが空白であるということに気付いているからやっかいなのだ。

隠されている何かを暴くなどという蛮勇は、多分、今の斉藤のあり方を真つ向から否定してくるようなものだから、正直、嬉しいものでも有り難いものでもない。むしろ、うんざりと避けなくなる種類のものだ。

あの人は、そんな自分の心の動きの機微までも全部分かつて、これを自分に渡したのだろうか。だったら……受けて立つまで。

斉藤は、ドブネ（多分ドブネズミ色ということだろう）色をした制服のジャケットの、胸のPATCHポケットにずっと入れている、メモリーチップケースを取り出した。そいつは、紛失防止のためにクリップ付きボールペンの顔をしている。

斉藤だって生き物である。何かに心惹かれてしまえば、単純に興味というものが総動員されてしまい、実際、食事や睡眠すらじやまくさいと感じてしまう質だが、欲望の閾値が高かったとしても、彼なりにお腹が空けば美味しいものを食べたいと思う。空調完璧でも老廃物は毛穴に蓄積する。汚れがたまれば肌もかゆくなるし風呂も欲しくなる。

美味しいものを食べると幸せだと思っぐらしいの感性の持ち合わせはあるし、戸外を吹き抜ける風に頬をなぶられるのも、どこまでも突き抜けて見える空を見上げるのも（それが偽物であっても）、空の色の变化で時のうつろいを感覚的に認識するのも好きだ。

一応、お年頃の青年として、排泄欲求と限りなく近いほどには切

実な性衝動だつて、本人が自覚できるほどには一応あるし、現在のところの探求欲のほぼまるごとがアースラにあるにしても、人間としての斉藤の部分は、別にアレに欲情するほどマニアックでない。

自分の周りに寄つてきてくれる（それは多分変わり者と断じて構わない種類の人間だとしてもだ）人たちの、いわゆる人肌という温度帯にきちんとある体の気配を、皮膚の感覚で身近かに感じるのも好きだし、想定問答集のような範疇に収まらない、いろいろな人たちの言葉を聞くのも好きだ。

それは、物語というものが好きだったというか、それしか主な娯楽がなかった少年期において、空想の中だけで世界を数十回で収まらないほどに、征服したり、破壊したり、救つたりしてきた斉藤であるから、当然といえば当然の嗜好だ。

二日に一度は風呂を使って、ちゃんと食事をしているところを見せないと、アースラ部屋入室禁止令を出すというのは、のっけのそもそものにウインスレイ教官から引導を渡されていた条件の一つだ。そういう制約を課しないと、普通の生活ができないとまで、殆ど初対面の彼女から思われているというのは心外だったけれど、まあ、正直その傾向は認めざるを得ない。つまり、自分というものに対してウインスレイ教官が割いてくれた、情報収集の努力に素直に感謝することにした。だから、まあ、余程のことがなくても毎日一回は、面倒でも二日に一回は、単身赴任や独身の教官たちが住んでいる教官宿舎に、斉藤は出掛けていく。

一応、極東アジア軍籍を持つて訓練に来ているという名目の斉藤には、軍の持ち物である寮の個室に住む権限はあるのだが、私物というのを殆ど持っていない斉藤にとって、維持費を天引きされるぐらいなら必要がないと、最初から入寮辞退をしている。

もともと入寮辞退の制度は、極東アジア軍籍があつて後方支援のための訓練期間にある人間は、年齢制限の関係で独身者に限定されてはいないので、家族と住みたいとか、もうちょっと広い部屋でないと荷物が入らないとかいう人間もいるため、許可されている類のものだ。独身者で入寮していないものは殆どいないのではないかと思う。

斉藤にしても最初は、置く荷物は大きくてなかったとしても、風呂のためだけにでも部屋を確保しておくつもりだった。けれどやってきて一番最初にウィンスレイ教官から、風呂と食事を世話する宣言されたせいで、それならば要らないかと、入寮辞退してアースラ部屋に直行してきてしまった。

それでも拘置所に拘留された経験をほんのガキのころに済ませてきている斉藤としては、神経質そうな見掛けを裏切つて、ちゃんとしたベッドでなければ寝られないというほどの繊細さの持ち合わせはないのだ。

アースラのオペレーティング・ルームは本体の内部と違って無菌室ではないし、埃の持ち込みは普通に望ましいことでないにしても、厳密に廃除すべきものでもない。入寮するにしろ、アースラのところには布団調達して持ち込んでやろうと算段していたのだが、同じ船でネオシヤンガンに運ばれてきた同期の軍人^{ゼイドロ}で、際立つて長身とそれを裏切る童顔というミスマッチが著しい青年が手荷物のバックパックにくくりつけていたことで、寝袋というものが存在することに気が付いた。

これはいいんじゃないかと早速ネット通販の最速便で注文をかけてウィンスレイ教官のところ宛に送りつけたから、とにかくここに来てから丸々二年と半分、ベットと布団というものから遠ざかっている。

何とか絶滅を免れている地球産の生物カタツムリよろしく、いつも寝袋と着替えがつまったバックパックと共に移動するタカと違い、コンパクトであることはそれほど求めていなかったから、当然、斉藤の寝袋は封筒形だ。

予想外の事態としては、あれから二年と半分を経過した現在、なぜかタカまでアースラ部屋に住み着いていることだ。

斉藤の家というわけではないし、家賃を払っているでもないし、風呂と洗濯をどうしているかは疑問だけれど（多分、MS連中が欠かさないトレーニング棟にあるシャワーだけで、水仕事関係は済ませているような気がする）、地価が馬鹿高いネオシヤンガンではルームシェアが学生の基本スタイルだとか何とか言い募り、ただで安眠できる場所があるなら逃すものかという勢いで転がり込んだのがちょうど今から二年ぐらい前の今の季節だ。

ここにまさしく、転がり込んでいる自覚がある斉藤としては、こんな形で同居人（と言えるのだろうか）が出来たこと自体が、何かの間違いとしか思えない。

そもそもの発端は、突発事項対処プログラムの特出したスコアだけが突出して目立っている男が、ネオシヤンガンへ来るとき、移送船の中で言葉を交わした唯一の青年だと気付き、なんの気なしにヘッドセットのマイクを口元まで下げて話し掛けたことに始まる。

最初は（当たり前だけれど）タカは斉藤が誰なのか、まるで分からない様子だった。ただ暫くしゃべっていて、話し手が斉藤だと気付き、彼がここに寄生していることを知ると、なぜかその勢いでやつは遊びに来たのだ。それで斉藤がささやかな生活用品を持ち込んでまで、ここで過ごしているのを知ると、いきなり「すみっこを貸

してくれ」ときた。

季節すらないほど旧式のコロニー出身者だという彼は、^{タカ}どうやら入学して以来半年以上を、学校のあちこちを流浪の民していたらしい。つまり寝袋使用でずつと野宿していたということだ。季節のあるネオシヤンガンで、寒さが厳しくなるこの季節を目の前にしてようやく、寝袋生活はさすがに限界かもしれないと……あのタカでも思ったらしい。

金を払って独身寮に入寮するしかないかと覚悟を決めた矢先なのだと言っていた。もし、ここに寝泊まりできるなら、非常に有り難いのだけれど、そのころは彼もまだ齊藤^{じぶん}に対しての距離を測っていた段階ゆえなのか、そこそこ丁寧な言葉づかいをしていた気がする。その話の中で、彼が収入のほぼすべてを、家族に送金しているのを知った。

別に、齊藤はここに正式に申請して居住権を確保しているわけではない。占有権があるわけでもない。学籍保有者であれば、見学申請を申し出れば別にアースラ部屋は閉じられていないし、別に見学申請時に時間制限されることもない。

第一のそもそもが、齊藤の部屋ではないのだ。

そう言うのと、やつはいそいそと見学申請をその場で出して、その日以来、冬が終わっても基本的に出て行く気配はない。たまに、野外が恋しくなるようで、ふらっと居なくなって帰って来ないけれど、まあ、一週間もたてばいつの間にかその辺にいる。

それはともかく、眠りに誘^{こた}われてもいい時間ではある。フットワークの軽さも抜群にいいタカは、健康優良の証明のように寝付がいい。つまり寝袋に入るといことはほぼ寝ているということだ、今

の斉藤は一人でいるのと同じだ。もつとも、よしんば起きていたとしても、やつは斉藤がアースラと楽しくデートしているときは絶対に無遠慮に距離をつめてきたりしない。

その場合場合の距離の取り方の絶妙さが、タカのタカたる所以だ。

この楽しい気分が残っている今の間に、もう少し特別課題に向かい合うべきという直感がある。

説明はできないけれど、今日はシナプスの伝達効率がいい気がする。処理能力がベストに近いのではないかと……そういう感触だ。こついうときにやると、行き詰まっていた仕事が博多とつたりするものだ。

そこまでの予定もしていなかったけれど、勢いで霧島飛竜と直接話す機会を持っただけでなく、全くもって絶品なたまごどんぶりデイナーを楽しむことができた。あそこに春花がいなかったら、そういう勢いにはならなかったと思う。食事までいったところで、適当に飲める店で話題の切れ間に、居心地の悪い沈黙が居すわるような会食になったと思う。

本当に、女の子は一人いるだけで、柔らかな雰囲気を作ってくれる気がする。何年ぶりかで、賑やかで非常に楽しいクリスマススを過ごすことが出来た。ひとえに春花に感謝だ。ここにツリーはないけれど、一緒に飾ってくれる人もいないけれど、これはもう神様からのプレゼントとしか思えない様な、本当に久しぶりに楽しく穏やかな聖夜だった。

賑やかで陽気な笑顔が信条のタカ。誰とでも上手くやっているように見える。けれど、ここにいるときのタカはもしかしたら誰も信

じないだろうけど、タカは本来は繊細に周りに気を回しすぎるタイプなのだろう。そして、それを彼自身が負担に思っているから、不用意に誰かと距離を詰めすぎないように、計算しているのかもしれない。

* * *

あの日。教官棟の廊下を歩いていた斉藤は、突然、操船部の教官に呼び止められた。ほぼ二年半も毎日のように教官宿舎に通っている勘定になるので、下手をすると教官の方が学生より顔見知りが多かったりしていた。

斉藤を呼び止めた教官は、NextGassにきて一番最初の定期考査で作った、シミュレーション・スーパーバイザー・プランニングの回答を見て、『トラブルを仕掛けるタイミングが非常にイケズでシムサップの素質十二分にあり』という、ちよつと高評価は間違いないけれど、素直に喜んでいいか悩みたくなる微妙なコメントをくれた人だ。

それ以降、斉藤とすれ違ったときには気さくにひと言、ふた言、声をかけてくれるようになっていて、言葉を交わすこと自体はそれほど珍しい事ではなかった。

けれど、あの日の彼は人気のない廊下で壁に背中を半ば預ける様にして立っていた。その後の彼がとった行動を思い返せば、斉藤を待ち構えていたとは思えない。

「斉藤……、手」

彼はいきなりそう言った。

斉藤がすっかり、何か頂戴ポーズで手を出す。と、にやっと眼鏡の奥の瞳が、思わせぶりな光を宿して笑った。彼はそのまま、拳をぐんと突き出して、斉藤の掌の上まで持って来ると、唐突にぱつと拳を解いた。

教官の掌から、何かが斉藤の手に向かって落ちてきた。

「これは？」

「メモリーチップ」

それは分かる。そうじゃなくて……。教官はにっこりと微笑んだ。

「フライト・レコード」

「え……？」

「プレゼント……。というか、宿題みたいなもんかな。優秀無比な不良学生に対するね」

彼のもってまわったそういう言い回しは、あてこすりなのか、ただの習慣になっただけの癖なのか、斉藤にはよく分からない。ただ、数値評価的成績としては優秀だというのは厭味というより事実そのものであるし、授業に対する取り組みが不良だということにも否定はできない。

「斉藤……」

アイドリング状態にないときの斉藤の反応が、どうにも今一つなのはいつものことだ。それに慣れているのか、その教官は斉藤の反応を待たずに先に話をすすめた。

「これは、ゲームじゃないよ……。神聖な謎解きだ。……読んでご覧」

教官はデータを見るではなく、読むように言った。

「フライト・レコードが……何か？」

「アースラから最近消されたはずの……だよ」

斉藤は掌の上に乗っている、本当に小さいチップを見つめた。この中に噂になっている、あの事件の記録が入っているというのだろうか。

「お前なら、このデータから真実を見つけるはずだ。まあ、その真実を君ならどう調理するか見たくてね」

そのとき妙に素直な言い方が、彼に似合わないというか、そもそも何か企んでいる様に斉藤には思えた。

「ミスタ・S。真実が見えたら……それからどうするんですか？」
彼をそう呼ぶ。

「さあな。何かをどうできるかなんて思い上がるのは、人間の手には余ることだからな。神様候補のお前ならどうするのか……、かわいそうな凡人の私は楽しく、見させてもらうことにするよ」

大体、彼は自分のことを『かわいそうな凡人』などとは、これっぽっちも思っていないだろう。斉藤は天井を睨みたくなる。むくむくと反抗心が湧いて来る。

神様候補というのは、つまりCFDを狙っているんじゃないのか、という質問かもしれないし、もしそれを狙うなら、生活スタイルをいい加減に変えるという苦言のつもりかもしれない。どっちにしろ、自分にはそういうつもりはない。

じゃあ、真実が分かったところで、それが別に自分にとって全く無縁で、どうにも解釈しようもないことだったらどうなるのだろう。その場合自分は何もしないだろう。第一、何かをしたくなかったとし

ても、できることである確率はあるのだろうか。何もできることがなくて、何かしたくなった場合が一番始末に負えないような気がする。

そう思った斉藤は、試しに聞いてみる。

「何もしなかったら？」

教官は少しの間、斉藤を見つめた。それから人指し指を眉間近くにもっていくと、眼鏡の位置をちゃんと直した。

「何もしない。だったら、お前は本当に神になれるかもな。そうだろう？ そいつがいつだって連中のやり口だからな」

何もしないということを賛美しているような言いぐさが、斉藤には可笑しい。笑おうと斉藤がしたときに、その教官は神託よろしく言い切った。

「だけど、お前は何かしたくなるさ。青いからな……」

何もしない場合は二種類あると思う。

できないからしないというのが一つ。

できようと、できまいと、したくないというのが一つ。

そして、する場合は三つ。

出来るからする。

できようが、できまいが、したいからする。

しなければならぬから……する。

* * *

眠っているはずの同居人に向かって、斉藤は言う。

お前と話してると、いつだって 自分の足元が見えてくる。

斉藤歩……。お前は、ちゃんと、生きてるといふ奇跡に感謝できるほどに繊細か？

奇跡を謙虚に受け取ること、確かな毎日を過ごしているか？

お前は、自分だけの力で、生まれてきて生きていくって勘違いをしてないか？

奢ってないか？

傲慢になってないか？

そう、ちゃんと目を開いているか？

「ミスタース、面白い宿題……感謝しますよ……」
そつと言葉にする。

ミスタ・S その教官は、操船技術部の連中にそう呼ばれているのだ。彼がくれたそのチップをケースから出して、しばし、矯^ため

つ^{すが}眇めつ眺める。

しばらく無為にそうしてから、フライト・レコードのデータを、シミュレータに投入した。

「ママ……今日も一回……、いい？」
今からですか？

「うん……。いこう。あの日に……」

もう一度。糸口が見つかるまで、懲りずに何度でも。ここにきかけとなる糸端が、きつとあるはずだから。

歩……。私の中に……。

何度目かになる斉藤は、既に慣れたものだ。仮想空間に誘^{いざな}われるまさにそのとき、アースラの声はひどく遠く聞こえるような気がするし、今自分がその声の胎内にいるような気もする。

飛べないはずの斉藤は、あの人に重なって空を飛ぶ。

一度も行ったことがないはずの、偽^{ニセモノ}者でない空の中を。

19・解けない難問 課題丸投げ？

斉藤は、アースラが作り上げた仮想空間に自らを委ねていた。常日頃、鍛えるということを蔑ろに^{ないがし}してきた自分を悔やむ。全方向から、特に強く脳天から、万力でしめられるように重力が襲いかかってくる。心臓が鼓膜の隣で鳴っている。頭が痛む。のどがつまり、骨が軋^{きし}む。

テラGの持つ容赦のなさに、全身が悲鳴を上げる。斉藤はこのところずっと、S教官にフライト・レコードをもらって以来、ほぼ毎日のように記録を辿^{たど}っていた。シミュレータのソロでの搭乗資格は持っていないので、アースラが斉藤の脳にたどらせている記憶を、仮想空間にあたかもいるように体感できるだけに過ぎないのだが、脳味噌自体が騙されているのだから、全身に受け止める負荷は手応えありすぎるものだった。

何度同じ空を飛んだろう。同じ軌跡で、同じ場所に向かい、同じ悲劇を経て、同じ場所にたどり着く。

仮想シミュレータは船体の振動から、わずかな操縦桿の操作、乗り手が受けたはずの全てを斉藤の脳味噌に直接の反応値として流し込み続ける。この不思議な空間は、本当によくできていて、専用のヘルメットを装着しているだけで体は椅子に腰掛けているだけなのに、実際コックピットに座っているかのような、リアルな感触がある。

斉藤はただ腰掛けて ただの椅子だが操縦席そのものに感じられる、操縦桿 多分肘掛け に手をのせる。すべての事象を見落とすまいと体の全てに集中力を分散する。年に似合わない運

動不足。鍛え込んでいない体は、パートタイム・スーパーマンになど程遠く、人間の標準値よりも相当に鈍い。脳味噌に直接刺激を送り込まれているのだから、運転手さん自身の、全ての動きを感じ取れて然るべきはずなのに、情けないほど何も見えない。

何度も確かめた。

何度も何度も何度もだ。

体は使っていないのに、脳味噌の感じる錯覚で、へとへとに疲れ切って、食べたものを戻しそうなくらいキツイフライトを繰り返して、斉藤が事故記録から分かったことはただ一つだけ。

運転手さんは……一人だ……。

そう一人だけ。最初からネッド・ソンホが握っていたか……。あのときPLETシートにいたウェイ・ソヨンが握っていたか、まったくのほかのメンバー、例えば、セカンド・シフトだったクルーが、二人を押しつけて操作したか。それはまったく不明だ。不明だけれど、一般的にフライトというのはどういうものなのかを知りたくて、ライブラリデータ取り放題というタワー特権で、在校生のフライトレコードを手当たり次第に体験してみた。それで漸く分かったたった一つの明確な事実。

最初から最後まで、一人の人間が操縦桿を握っていた。間違いないと確信できているのは、たったそれだけのこと。ただ、これだけ脳味噌だけで飛びまくっていれば、いやでもそれぞれに癖のようなものがあるのが分かる。だから運転手さんが途中で変わっているかどうかぐらい、感覚で分かる。そして、あの奇跡のフライトのとき操縦桿を握っていた人物を考える。

あのととき、操縦桿を握っていた可能性がある人間は四人。たった四人なのだ。

だから、全員の過去のシュミレーターのフライト・レコードをマムに全部再現してもらって、分かるまで、見えるまで繰り返し飛んでいる。

マムがつくった仮想コックピットのCDR席にすわる。

体が……きしむ。

喉が圧迫される。

喉に大きな塊がつまってるみたいだ……。

苦しい。

マム……そこまで、シュミレートしなくて……いいよ。

機内に漂っていた埃とかいろんなものが雨みたいに降り出す。重力圏内に帰って来たサインだ。そして上と下とがはつきりとした、たしかな世界にぐんぐん近付く。

まだだ。

運転手は迷わない。こんなとんでもない事態でありながら、この迷わなさ……。雑魚にはとても真似できない……。

でも……。まだ……。見えない。オートクルーズの支援なしに、機

体をコントロールしなきゃならなくなったとき、ああやって冷静に操縦桿を握り続けたのは、ネッド・ソンホか、ウェイ・ソヨンか。

ウェイ・ソヨンはこの二年間で、凄くネッド・ソンホの手に似てきている……。あの連動式の操縦桿でくる感覚は、多分言葉より数倍圧倒的な力があるのだろう。あの二人の操作は似ている。

だけど、多分九割以上の確率で、ネッド・ソンホ、あなたが握っていた……。でしょ？

なのに、なぜあなたは学校から 真木さんから 逃げた？

ネッド・ソンホ。あなたは、操縦桿を手放してはいないのに。

そして……。なんで、他の三人が口をつぐんでいる？

あのとき、セカンド・シフトだった二人の内、一人は正式に学校から去っている……。

退校の理由は、一身上の都合……。

もう一人は……。学部替えをして、航宙の三年次履修生としてやりなおしている。二度と、大気圏突入なんかしたくないって……。そう言わんばかりだ。

……。ネッド・ソンホは何をした？

……。それとも何かしたのは、ウェイ・ソヨンか？

……。それとも、何もしなかったのか？

シミュレータが静まり返る。ランディングしたあと、多分コックピットを包んだ静寂を、斉藤は一人で味わい、そして苛立つ。自分は何を見落としているんだ？

「プリーズ・ママ リトライ・アゲイン」

規定のフライト回数を超えました。一日にそれ以上の時間数をシュミレーターで飛ぶことは、本家の航空科でも禁止されています。

「アゲイン……ママ・アースラ。これはシミュレータじゃないんだから……」

律儀な警告を一笑に付すと、一気に脳味噌の感覚だけが、無重力空間を飛んでいるあの時間に無理矢理シフトされた。

さすがに……きついな……。斉藤はぼやいた。

だけど……見えそうな気がする……。のに。

何か……ひとつだけだ。

多分、見落としてるのは、多分、本当にちいさなたったひとつのキー。

軌道船という、小さな空間にいた誰もが、通信系統、音声システムのトラブルという複数のトラブルによって密室になったあそこで、何があったのか口にしてない。それが、既に異常だ。

異常事態を生還してきた、普通なら英雄だ。誰もが、何も言えな

い何かとは……なんだろう。

ボイス・レコードは残っていないが

S教官の眉間によった皺の数をかぞえなくなる。ありえるのだろうか？　ウチのシステムは最新鋭を常に心がけていることで知られている。複数のトラブルを……ガキどもが率いている第一管制通信が見落としても仕方ないが、なんで教官たちの第二管が見落とした？

分からない……。

学生が……幾重にもなされていた安全策の隙間を拭うようにして起こってしまった重大な事故を、学生の力だけで乗り切って生還し、ウチの学校の無事故記録をそのままにしたというのは……管理の面からは痛恨の失策だけど、飛行士育成という観点で見れば、逆に誇ってもいいぐらいの快挙の筈だ。

なんで学校も黙っている？

とにかく自分の勘にアタリが突っかかってくる瞬間まで、基本データにとことんつき合うの……。

斉藤は、腕組みをしたウインスレイ教官が、まさに背後に屹立しているのを感じる。

釣りみたいなもの……。水面をばたばたかき回しても意味がないわ。

自分は今、釣り糸を垂らしながら、水面をばたばたかき回している道化なのだろうか。

当たったと思ったら、まずは一回ゆるめなさい。いきなり引いたら、糸、切れちゃうわよ……。

（いつも、どこかで、必ずゆるめる…か）
「イエス ミズ・ウィー。心して……」

斉藤は、たった一人にもかかわらず、口に出してそう言って、それからにやりと笑った。

そうそう、じゃ忘れない内に招待状をつくつとくか。たしか、こんなだつな……。

拝啓。

（タカの奴、よくこんな言い回し知ってたな）

大好きなおねえさま方と

（彼女たちにしれつと言えるのはお前ぐらいだ）

親愛なるクルーの男性諸氏に告ぐ

（拝啓で始めて、告ぐってのはないよな）

記憶の中にあるタカの言葉を、指でたどる。多分、語尾だの言い回しだのはズレてるかもしれないが、エッセンスのところが生かせていればいいのだ。

差出人…… キリシマ ヒリュウ……。

【エンター】

これは悪事じゃない。そう、ちょっとしたお茶目だ。

* * *

「飛竜……手」

シミュレータが並んだ無機質な印象がある、運行科の実習棟の廊下で、突然斉藤に呼び止められ、そう言われ、素直に手を頂戴ポーズにしてから、何かひどく行動の選択をまちがった気が 飛竜はした。

「何これ？」

掌に落とされた物体を無視して、飛竜は斉藤の瞳を見る。逸らしたり、揺らいだりしない黒い瞳が、宇宙の深遠のようにそこにあった。

「メモリーチップ」

斉藤の言いぐさはそっけない。それは分かる、と飛竜は思う。

「そうじゃなくて……」

「フライト・レコード」

斉藤がうつそりと口にする。

「え……？」

「プレゼント……。というか、宿題みたいなもんかな。優秀無比な不良学生に対するね」

そう言っ、斉藤は一人くすくすと勝手に笑いだす。斉藤がS教官ごっこをしているなどと分かる由もない飛竜はどことなく憮然と

してしまう。

「このライト・レコードを私も何回かなぞってみた」
ぶっと、飛竜は嘖き出す。

「お前、なぞったって、シミュレータの搭乗資格あるのかよ」
「ない。」

ひと言で切って捨てる斉藤は、スカしたものだ。

「このシミュレータじゃなくて、ママに仮想コックピットをつくってもらってね……あくまでバーチャルにきてただけだ」

「なんだ……、おどかすな……。このシミュレーターの再現レベルってかなりリアルだから、素人じゃ体がもたないだろうが……」
ふっと斉藤が苦笑した。仮想コックピットでだって、十分に死ぬる。

「それはもう、身に沁みてる……。死ぬかと思った」

飛竜はちよつと考える。この程凶悪じゃなかったとしても、そのママとやらの仮想コックピットが、このシミュレーターと似たような体感になるとしたら、予備訓練なしに乗るのは、はっきり言って自殺行為だ。

やっぱり、馬鹿かもしれない。こいつ。つくづく飛竜は、目の前にいる男に呆れるしかない。自然嫌味が口について出た。

「生還おめでとう。二度と無茶はするなよな」

「ありがとう」

と、やはり斉藤はスカしている。

「改めて思ったよ。航空科の連中は……変だ」

変と堂々と言われると、ちよつとかちんとくる。

「変で悪かったね。で、何か用でもあるのか？」
自然と言葉が荒くなった。

「こいつに……三つのフライト・レコードが入ってる」

フライト・レコードが……

「三つ？」

「ええ、それで、運転手さんは、多分二人」

「多分なのか？」

「三人ということも、可能性はゼロではないので。ですが、九割方二人です。どれとどれが、同一人物のフライトなのか、もしくはもう一つは別の人物の手なのか、飛竜、君たち運転手さんなら、なぜれば分かるか？」

「分からないことも……ないだろうけど、やってみなきゃ何とも言えないな。でも、何のために？」

斉藤の口の端がまたしても微妙につり上がった。多分、間違いなく、こいつは微笑んでいやがるつもりなんだ。どうにも半端で収まりが悪いと言ってやりたいが、なんとなく人サマに向かつて堂々と意見する場数を踏んでいない飛竜は躊躇する。

「それも宿題です。これが何か分ければ、僕が何をしたいか、多分分かると思いますよ」

コツコツと革靴の音を響かせて、斉藤が去っていく。

飛竜は斉藤の背中に声をかけた。

「これ、ソロプレイで答えだすのか？ それとも、真木さんとかに

ヘルプ頼んでもいいのか？」

コツ……っと、斉藤が立ち止まる。そして振り返りもせず、肩の辺りまで軽く手を上げてひらひらと振った。

「答えさえ分かれば……手段はどうとでも」

何事もなかったかのように、再び歩き始めた斉藤の背中を、飛竜は思い切りしかめ面で見送った。

20・フライトレコード・トレーシング

「オフィシャルCDRサマともなると、いきなり大したもんだ。このあたしに、アンタが運転するシミュレータのPLETシート座れとは、あんまりぶっ飛びすぎてて、怒る気にもならんわ」

一緒にフライトレコード・トレースをしてほしいと頼み込むと、真木さんは苦笑とあきれ顔の中間点というような微妙な表情になって、僕を見下ろした。僕は小柄な方ではない……というか、どちらかといえば体格的には恵まれている方だと思う。基本がそれなりにあるだけでなく、毎日、毎日阿呆みたいに筋トレだの有酸素運動だのに追い立てられているのだから、持病持ちでない健康な十代に筋肉が付かない方がおかしい。

それでも真木さんと面と向かうと、いろんな意味で大きいというか、器が違う感じがする。

もちろん、真木さんも鍛え込んで絞り込まれた体つきをしているが、やはりでるところはきっちり女らしい膨らみを十分に蓄えていて、幅はあるものの肩のラインはなだらかに丸い。

そして、きつい口調を裏切って、表情も笑みを含んで柔らかい。

「苛めないでくださいよ。真木さんの感覚を頼らせてもらってるんですから……」

調子に乗って甘えると、しょうがないわねというような感じで、真木さんの苦笑は、もう一段階柔らかさを増した。

「わかったわかった。んで、何もしないでいいんだって？」

「一緒のフライトクルーに名前があった、斉藤という男からの依頼なんですよ。何でもこのチップの中に、三つのフライト・レコード

が入っているそうなんです。で、ドライバーが、二人なのか、それともまったく別の三人なのか特定してくれて」

「……何のために？」

真つ当な疑問だが、その答えは僕は持っていない。

「聞いてません」

処置なしの馬鹿には付き合いきれないという感じで、真木さんが大袈裟に肩をすくめたのが分かった。

「いいわよ。つきあうよ、御曹司。でも、レコード・トレースして、フライトの癖なんて分かるかなあ……。まあ、運転手^{ドライバー}特定までやんなくていいなら、どうにかなるもんかね……」

フライト・シミュレータに乗ることは、別に真木にとって忌避するようなものではない。どんなシチュエーションのデータだろうと経験の風呂敷はでかい方がいいに決まっているし、回数だって一回でも多く乗る方が自分のためになる、そこに疑問の入り込む余地はない。

「それなんですよね。その斉藤が、マザコンの妄想シミュレーターとやらで自分でやろうとして、どうも、懲りたみたいで……。まだフライト・スケジュール発表になってませんが、この面子^{メンツ}で大気圏^{ブラ}突入^{ンジ}がくつついてないなんてことないでしょうし、あいつ……できるのかな……」

一瞬、真木さんが目を白黒させて、それから、にっこりいつもの「どんとこい風」笑顔になった。

「そりゃ、無知のなせるわざとはいえ気の毒に……。いきなりじゃ

あキツかったろうね」

そう笑い飛ばした真木さんに激しく同意する。

「まあ、彼も今回飛んでくれるみたいですから、少しは慣れてもらっていいんですけどね」

真木さんは思い出したというように付け加えた。

「なんか、噂だけどさ、管制のウィンスレイ女史がトサカに来て、ミスタ・カワセンとこ怒鳴り込んだらしいよ」

となると、管制の連中にとって、斉藤が第一管に配属にならなかつことについては、奇怪しいという怒りのようなものが春花のように湧くのが普通なのだろう。

「やっぱり管制は、斉藤を飛ばす気はなかったんですね。ミスタ川瀬って何考えてるんでしょうね……」

川瀬のことを話題にしたとたん、真木の表情は複雑になった。いつもの切れ味が鈍って、どことなく歯切れが悪い口調になる。

「私は川瀬教官のこと、きらいじゃないよ。あの人がどんどん凄い厳しい課題だしてくるから、『殺してやりたい』なんてしょっちゅう思ってるけどさ、いつもあの人のくれる課題は、絶対にいつだって、ちよつとがんばればできるところに置いてある。どんなにがんばっても決してできないレベルの課題は出してこない」

真木さんは川瀬を擁護している。あんなめちやくちなクルー組みをしてさえ、揺らがないほど信頼できる人だということなのだろうか。とにかく、元エアロスペースでエースを張っていたとかいう川瀬は、当然墜落科航空科の名物教官で間違いないが、一、二年次履修生

にとっては、雲上人で顔しかない。真木のように絶対の信頼を彼における様になるのかもまだ未知数　分からない。

「……そうなんですか。僕は今年噂のミスタ川瀬初体験ですから……」

「そうだったね。」

真木さんがちょっとだけ微笑む。

「だけど、今回は、あたしはナツトクしてないよ。初体験でCDRは、どう考えたって無茶だ」

僕も無茶だと思う。真木さんは正しい。

「間違っちゃいけないよ……。御曹司。本当に飛んでるとき、できない、絶対無理だと思ったら、直ぐソヨンが亮二、いざとなったらあたしでもいい、ちゃんと投げるんだよ。今回のあなたのポジションはミスタ・カワセもやりすぎたと思ってる筈だから」

「……ええ、僕も分かってます。今回は、ウェイさんや亮二さんが、こういうやつかいで理不尽な状況に取り込まれたとき、どうするかって……課題なんでしょうね。僕はとんだ道化です」

自虐的な僕の言葉が気に入らないのか、真木さんは黙ってPLETシートにすわりこむ。

「うわっ、なんかこの位置懐かしいッ。最初にコックピット入ったときを思い出すわ……」

あたしは……知ってる。

真木は思った。

川瀬教官は今回ソヨンにCDRをとらせたこと。この子は勘違いしている。川瀬教官は、危険と無謀を取り違いたりしないし、飛ぼうとする人間を鍛えることが趣味なのだから、二度と飛べなくなるようなことはしない。彼が寄越す課題はいつもできるギリギリよりもちよつと向こう。その加減はまちがえない。だから彼は初心者飛竜に、こんなとんでもない課題はよこさない。

やつぱり、あたしは、冷静じゃなくなってる。あのSの野郎が何といったって、こんなガキにCDRを割り当てるのはとめるべきだった。

真木はPLETシートでCDRの操縦桿と連動している補助操縦桿《サブ・スティック》を握り、掌の感触を確かめる。

何かトラブルが起きて、いざという局面が来てしまったら、こいつ殴り倒してでも、あたしがヘッドとる。けど……、そしたら、これだけ光るもんがある子を潰れちまってもおかしくない。それはどこまでも教官な川瀬が望む様なことではない。……罪作りだよな。

S……。あんた、何を考えてこんなことした？

* * *

やっぱり、僕なんかがCDR席にすわるなんて、たとえ記録をなぞるだけだつても、気に入らないんだよなあ。きつと。真木さんは無然とした表情をしている。

多分、僕だつて同じ局面になつたら、きつと我慢できない。

川瀬教官という人は、悪魔だけど、それでもどこまでも教官だつていう噂がずっとあつた。それは信頼するに足る噂だと思つていたのだが……やっぱり、けつこうアテにらないもんだと思う。

とにかく、こいつをセットしてやつつけちまおうと、シミュレータのロットにメモリーチップを落とし込んだ。読み込んでいる間赤ランプが点滅して、そしてすぐに緑の点灯に変わる。データ読み取り速度も早いから、これでどれだけのフライトレコードが読み取られたのか全く分からない。とにかく三つだ。

「じゃ、プログラム起動しますね」

「はいよ。さつさとやつちまおう。モノによつたら三本も一気にはできないだろうけど、どれから行く？ マイ……CDRサマ」

真木の嫌味にちょっとだけ苦笑する。本当にそうなんだから、言い返すこともない。僕は一番データ量の重いものを選択した。やっぱり連続ライドを想定すれば、一番キツそうなのから行くに限る。と、唐突にプランジ直後の感覚がやってきた。

おい、ここからかよ。僕は文句を言う。少しは飛ぶと思つたのに、

いきなりじゃあ、そりゃあ心の準備つてものが普通あるんじゃないか？

……きた。いつもの感覚だ。

耳がふさがる。

喉と食道が圧迫されて声が出なくなる……。

息ができないと塊を飲み込もうとしたら、パニックになる。

ここは我慢のしどころだ。身体が慣れるのを待つしかない。

だけど……これだけはいえる。人間なんか、本当は宇宙とテラを行ったり来たりするような生き物じゃない……。

苦しい。

真木は間違いなく知ってる。この向こうに、歓喜があることを。圧倒的な大気を守られた生き物たちの故郷。そこに帰る。そうじゃなかったら、だれがこんなしんどいことをする？

故郷が……待ってる……

実際は、この状態になる前に、埃だの髪の毛だの、空気に混じって浮遊していたゴミの雨が降り出すことで、重力圏に向かっていくことを知るそうだ。

このシミュレーターでは……そこまでは実現していない。ただ、轟音と、この気圧の変化と、振動と。

ホンモノはこの数倍物凄いつて……先輩たちは言う。

シミュレーターなんかでいい成績をとったって、実際に使えるかどうかは別だつて。

ただどここでの時間数をちゃんと経過しないと、それをただの時間の消化じゃなくて、自分に意味があるものに落としこまないと……無駄にする時間はない。

え？

「ま……真木……さ……」

僕は声を絞り出した。やっとのことで傍らのシートにいる真木さんの方に顔を向ける。

真木さんの顔色も変わっていた。目の前で、端から綺麗に……順番に……。

計器が死んでいく……。

管制からの音声……消えた……。

ただの轟音だけがコックピットを満たしている。

目の前の死んでしまった計器達……。

「ま……」

真木さんが目玉だけで僕を睨んで、僅かに首を振ろうとする。

重力で喉仏が圧迫されて居るときに、しゃべろうとするのは危険だと……、そう僕は教わってきた。そうだった、しゃべろうとしている場合なんかじゃない。

このとき確認するのは自分の状態だけだ。

レッドアウトの兆候は……？

視野狭窄は起こっていないか……？

そして……予測できたように。

……計器が、全部……死んだ。

拷問のように時間が過ぎていく。一体自分が乗っているこれがどうなっているのか、全く見当も付かない。盲い、音を奪われているのと、これでは全く変わらない。滑空状態になったときに、どうやってこんなんで運転すればいい……？

でも、そのときは、もうすぐ……くる……。来てしまふ。

そう思った。たかがシミュレータとはいえ、何千回も搭乗しているのだから、感覚がそのときが近いことを教えてくれる。重力圏に完全に帰って来た瞬間。

くる。

くる。

くる。

……きた。

そら……

くも……

命の……満ちる……場所^{ほし}……

この雲をもう少しで突き抜けていくだろう。

海……

それから……

……白く波立つ青い波濤

ああ……なんてことだろう。僕はため息をつきなくなった。操縦桿を握っている人はまるでまよいのかけらもない。そう全く恐怖も迷いもない……。

ただ、風をつかむことだけに集中している。操縦桿を軽く振らせ

るような微調整で探りながら、機体が飛行を保持できる上昇気流を探している……。

もの凄い。電気系統の計器はどうみても死んでいるのに。

万が一のために生き残っている安全のための。コックピットには電子計気が全く完全にトラブルったときの最後の保険として、ひどく旧式な計器、電子制御でない、計器がいくつか搭載されている。それをみれば、この飛行が安定していることを示している。

古くさいあいっただけを頼りに、この人は体勢を整えているのか？

それとも、この運転手さんには、読めるのだろうか？

機体をなぶっていく風が。

視力をもがれた、無様で無力な飛行機ではなく、自らの翼としてどこまでも飛べるのだろうか。大海原に行く鳥が、迷わないように波頭を越えて冬を越し、夏を越す二つの故郷に当然飛んで行くように。

ああ、絶対に大丈夫だ……。僕はそう思った。

この人に任せておけば、水の上か地上か、そこまでは分からないけれど、間違いなく、絶対につれて行ってもらえるだろう。故郷に……。

地球の大地に待つ……、目的地である宇宙港の滑走路に。

この感覚を手に入りたい。僕は切実にそう思った。

力を、自分を殺すんだ。そう何度も言い聞かせて、握っている操縦桿と、目の前にある生き残っている計器に集中する。この人の感覚を自分に染み込ませるんだ……。

そう思って、僕は操縦桿に置いた手に全神経を集中させる。やがて、振動がやってくる。大地に降り立ったあのときの、オービターの車輪が滑走路を走り、摩擦の制動が機体を減速させようと揺さぶっているのだ。

これでもかというように全体の揺れが大きくなる。静止するのに距離が足りなかったのか、整地された滑走路を大きくはみ出したのだろう。けれど、機体を真っ直ぐに保とうと、運転者は最後までコントロールをやめようとはしていない。恐ろしいほどまでに生還への意志の強靱さが感じられる。

やがてかなりの衝撃を全身にくらってから、機体は唐突に止まった。シミュレータの唸り声が緩やかに収束する。このオービターは滑走路を大きくはみだして迷走した後、建物か何かにつっこむかなんとかして、止まったと見える。

何時から息を詰めていたのか分からない。けれどぼつと息を吐き出して脱力したことで、自分がひどく緊張していたことが分かる。手がいまさらの様にふるえて来る。

「す……い。まるで鳥そのもの……ですね、……この人は」

溜息が出る。僕はそう言って、隣のPLETシートの真木さんを見る。

え？ 真木さん……涙……？

「真木……さん？」

気軽に声をかける雰囲気じゃなかったけど、僕はためらいがちに口にした。

「これ……、あいつだ……。あたしには分かる」

あいつ……っていうと……。僕はできる限りのデータを総動員する。真木が「あいつ」と呼ぶのは……。もしかしたら、例の……ネッド・ソンホ？

真木さんの瞳から、涙があふれてはこぼれていたけれど、そのことに彼女自身が気付いていない様子だった。あの人が落ち着くまで、次のデータのフライトなど無理だ。集中しすぎて、疲れ切って僕たちはシミュレーターを下りた。

僅か五段ほどのステップを踏みしめる足が震えてくる。手もそう。恐怖と畏怖。どうして、あんなふうになるんだろう。どうやったら、あんな感覚が……。研ぎ澄まされるんだろう。僕はあと、何千時間乗ったら、あの運転手さんのレベルの、ほんの入り口にまでいけるんだろうか。

器……、そんなもんがあるなら、僕には、ない。それだけは分かった。だけど、もう一つだけ、僕は分かった。ずっと、そう、ずっと。僕は、あんな風に、飛んでみたかったんだ……。あの地球の大地の中を。

「真木さん、御曹司。二人でさっそく練習？ 飛べないかもしれな
いってのに、のんきね……」

下りた先にたまたまウェイさんが目の前に立っていた。単に通リ
掛かったのか、シミュレータの空き待ちで並んでいたのかよく分か
らないが、真木さんとウェイさんの仲なら、あれだけ昨日つんけん
とぶつかったとしても、別に無視するほどの間柄にもなれないのだ
ろう。

昨日、タカのやつを濃厚なキスで撃沈させたおねえさまは、まだ
怒ってるのかな。でも、なんとしても、一緒に飛んでもらわなきゃ
……。

僕にあの世界が見える日が来るかどうかは分からないけど、僕は
飛びたいんだ。

不格好だろうと、なんだろうと……。

あれ？

そう思ったとき、気が付いた。ずっと泣いていた真木さんみたい
に、ウェイさんも、なんか目が赤い……。

「ソヨン……あんだ……」

僕が何がなんでも説得しなければいけないウェイさんに、何でも
いいからしゃべろうとした瞬間、後ろから、真木さんの声が僕を突
き抜けて彼女に向かった。

「あたしが……知らないと思って……いい根性だね」

「……え？ 何が？」

ウェイさんが、とまどった顔になる。

「何のこと？」

「あのとき、あんたは、ネッドと飛んでたんだろ？ あんたは、あの人の横にいて、操縦桿を通して、あいつがどんなふうには飛んだのか……、どんなに凄かったかわかったくせに……。なんで、黙ってた？」

ああやっぱり。あの斉藤がくれた謎のフライトレコードは、公表されることなく事故調査委員会が隠蔽した、あの去年のSクルーのものだったのだ。そして、運転していたのは、ウェイさんじゃなくて……ネッド・ソンホ・アフマド。真木さんの……、求めてやまないひと。

「……それは……」

ウェイさんが言いよどむ。

何か言いたそうにしているのだけれど、ウェイさんの口からは何も出てこない。

「教えなよ、ソヨン。なんであいつは学校に来なくなっただんだ？ 事故なんか全然、ちつともあいつを傷つけてないじゃないか」

「ネッドさんは……」

やっとそれだけ口に出して、やっぱりウェイさんは言いよどむ。彼女の言葉を待つ様にしばらくウェイさんをにらんでいた真木さんは、ウェイさんがそれ以上言葉を紡ぐ気配がないとみるや、ぷいと顔を背けた。

「悪い。今、あんたの顔をみたい気分じゃない。殴るの我慢してるんだから……消えな」

えっ、何で、真木さんがウェイさんを殴りたくなるんだ？ あのフライトレコードがネッドさんのだったとすれば、私の彼ってカッコイイ、めでたし、めでたしって、それでいいんじゃないの？ 飛ぶ気十分だった真木さんが、ソヨンさんと決裂するのは、絶対嬉しいくない。

僕のフライトはどーなる！

「ちょっとまった。真木さん」

僕は思わず叫んだ。

「口を出すな、ガキンちよの分際で」

真木さんが怖い。でも、黙っているわけにはいかなかった。

「真木さんとウェイさんが喧嘩して、僕の初飛行が離陸せずってのは、勘弁してください。あなたたちにとっては、たったひとつの黒星かもしれませんが、僕にとっては、初めての空なんですから」

状況が読めない以上、子供の理論で行くしかない。けれど、真木さんは冷たかった。

「あと半年、ミスタ・シミュレータしといで。悪いけど、あたしはソヨンとは飛びたくない……」

まったく。斉藤の野郎、余計なおおおつ。

あの野郎は、このフライト・レコードがあのとときのネッド・ソンののだと知っていた筈だ。それで、なんで、真木さんと飛んでみる

と言ったとき、止めなかったんだ。真木さんがあのときのコックピットの状況を知れば、そりゃあ、ネッドさんが格好良ければカッコイイほど、登校拒否している理由が分からなくなる。何もできなかったどころか、神がかったほどにすごい技術を見せつけて、それで賢沢に、彼は何に絶望なんかしたっていうんだ。

こうなると、本当は第一管に居たかった斉藤の、遠回しなフライト妨害工作としか思えなくなってくる。

あの野郎、本当は飛びたくないんだろっ。

「ネッドさん……つれてきますから。僕が絶対に見つけて、何かなんでも引きずってきますから。結局悪いのは、ウェイさんでも、真木さんでもなく、あんな凄い飛び方しておきながら、なんだか知らないけど、居なくなっちゃったネッド・ソンホさんでしょ？」

僕は今、むちゃくちゃに飛んでみたい。招集日にメンバー不足で黒星もらっておしまいだなんて、そんなのは我慢できない。

僕は今、むちゃくちゃに飛んでみたい。

何がなんでも、飛びたいんだ。

「必ず、つれてきますから、頼みます。時間をください」

真木さんが僕を見た。じっと睨む様な目つきで見ている。随分と長い凝視の後で、ぽつりと彼女は口にした。

「わかった。15日まで……待つよ」

なんだかめちゃくちゃ具体的な日付、嫌な予感が。

「真木さん……。それって」

聞かなくてもいい質問をついうつかりしてしまった。

「メールくれたでしょ。拝啓、大好きなおねえさま方と……ってやつ」

さ……斉藤ッ。お前本当に、あの文面で僕の名前を。思わず顔が火照ってくる。と、真木さんが、そのときだけは楽しそうに笑った。

「大丈夫だよ、そんな可愛い顔しなくても。あたしに面と向かっておねえさまだなんて素っ頓狂な呼び方できんのは、どうせ優美ちゃん辺りだろ？」

……よかった。さすが、真木さん、その通りです。

「最大限の譲歩だ。15日にネットとつかまえ損ねたら、あたしは飛ばない。あんたがCDRなんて、そもそも無茶な話だからね」
それで興味の全てを失ったというように、真木さんは踵かかとを返して歩きさつて行った。僕は……そしてソヨンさんも、ママに怒られて見放された子供みたいになっている。ママなら、帰っちゃう素振りをみせても、まあ順当に途中で子供が気持ちを切り換えて追いかけてくるのをまっくれるだろうけれど、ママじゃない真木さんは、そのまま本当に廊下の向こうに消えて見えなくなった。

くそ。まずは、ウェイさんから行くしかないか……。

僕は半ばやけになって言った。

「ウェイさん、つきあってくださいませんか？」

21・遠足に行こう

雑踏の迷子のようだったソヨンさんの顔が、ゆっくりと不快で充たされていくのが分かった。露わな怒りではなく、大好きなママに「あなたなんか、余所の子」と言われた子供のように、なぜそんな理不尽な言葉を投げつけられるのかに、戸惑いを隠せていない、そんな顔だった。

「私、ガキとつきあう趣味はないの。お門違いよ」

ひんやりとした声じゃなくて、ちよつと怒りでふるえてるような、そんな感じ。

「違いますよ……。なんで、真木さんが怒ったのか……。知りたいんですよ。だったら、僕と一緒にシミュレーター乗ってくれませんか？ 多分、ウェイさん、あなたには辛いフライトになると……。思いますが」

ウェイさんが、あの消えていく計器を直接目の当たりにしていたなら。恐かった筈だ。シミュレーターだって分かっているけど、一瞬心臓が止まりそうになった。あれを実際に体験したソヨンさんが、それを再体験するのが……。いいことかどうか……。分からないけど。でも、多分、なんで真木さんがあんな風に怒っているのか、ウェイさんは知らなきゃならないと……。僕は思った。

それに僕は、あの計器が消えていく瞬間を直接体験などしたくはないけれど、あの操縦桿の感覚を、機体が自分の体みたいだったあの感覚だけは、もう一度……。いや何度でも味わいたかった。

予想通りというか、何というか、二度目のフライト・レコード・トレースはさんざんだった。

目の前で計器が死んで行き始めたあの瞬間、ウェイさんが凍りついたのが分かった。実際に、計器が目の前で死んでいく瞬間を味わった人に、追体験させるべきものでは、なかったのかもしれない。

まったく動かなくなったウェイさんの顔は、多分、重力の過負荷からくるだけでない苦痛に歪んでいた……。

ウェイさんは、シミュレーターが止まっても、しばらく動かなかった。だから僕もつきあつてずっと座っていた。気持ちなのか、記憶なのか、今の追体験をなのかは分からないけれど、落ち着いて気持ちを整理するのに時間が必要なんだろうということぐらいは、僕だつて分かる。

「……真木さんは……、ネッドさんだつて、言つてた？」

長い長い沈黙のあと、驚くほどはつきりした　それもさばさばしたというような　声で聞かれて、僕の方が逆に凍りつきそうになるほど驚いた。

「いえ……『あいつだ、あたしにはわかる』とだけ」

「じゃあ、わかつちやつたんだ。あれが、私じゃないって……」

ふつきれたような表情のウェイさんの、顔色だけが心なしが悪い。

「あーあ、真木さん怒つちやうの当たり前だよね。だつてさ……、大好きな人が、いわれのない汚名着てたようなもんだもんね。私なんかヘッドとられて……落ち込んで学校来なくなつたなんて……」

酷い誤解だもんね」

僕は黙っていた。多分、その方がいいと思ったから。

「でも、ネッドさん……、真木さんにだけは……言っちゃって」

「……ウェイさん」

言うなというネッドさんと、多分真相を話せと迫らなかったらう真木さん。黙っていたのは、悪意なんかじゃないだろう。……そう、成り行きというやつに違いない。

「何？ 御曹司。ごめん、あんたの初フライト、メンバーそろわずで……だめになりそうだね」

御曹司だって、この際、いいや。

僕は思った。真木さんや、ウェイさん、ネッドさん。真実は隠せたとしたって、失くせるわけじゃない。僕は、そろそろ霧島という看板に拘る時期を卒業しないといけないのかもしれない。そんな気さえしてくる。僕が……誰よりも一番拘っていたのかもしれない。自分が、霧島だということに。

それでも、飛びたかったのだ。ネッドさんのように大気を感じるところを、自分の運転で。僕は多分諦めない。知ってしまったからもう、自分が成りたいものが形として見えてしまったのだから。

「僕は諦めませんから……」

多分、僕は笑っているのだろう。ウェイさんが、呆れた様に見返して来る。僕はそんなウェイさんに確かめる。

「黙っておけ……って、ネッドさんが頼んだんですか？ あなたに」
小さく、ウェイさんが頷いた。

「うん……、でも、もういいや。私真木さんじゃないもん、自分の器の小さいの、嫌ってほど思い知ったわ。御曹司、私、たった今決めた。もう二度と誰の秘密も引き受けないぞっ」

ウェイさん……なんか、凄くきれいだ。
素直に僕はそう思った。

「真木さんが飛ばないって言っても、ネッドさんが来ないって言っても、ネッドさんの首根っこひっ捕まえて引きずってくれば、状況は変わるよね。引きずってこようよ、ね、シェフ……」

斉藤、お前、こういう文章にしたんだ。

シェフという呼ばれ方をここでするとは思わなかった。思わず僕は自分の息に噎せてごほごほと咳き込んだ。口の端でウェイさんが笑っていた。

* * *

シミュレータのハッチ型の扉が跳ね上がる。二人で並んで降りるほど階段は広くない。僕は、ウェイさんに先を譲って、三歩ぐらい後に立った。と、階段を二、三步降りたところでウェイさんが止まる。彼女の視線の先には、亮二さんがいた。

ウェイさんと亮二さんは、カップルだという噂もあるし、いや、ただ単に運行情の名カップル、ネッド・真木の相方同士だから普通

より親しいだけだろうという噂もあるし、はつきりしない。けれど、少なくとも普通の顔見知りというよりはずっと親しいのだけは間違いない。

邪魔しちゃならないと、ウェイさんの横をすり抜けて通路に飛び下りようとしたとき、亮二さんの言葉が横殴りに突っ込んできた。

「シミュレーター止まってから、馬鹿と長くね？ あと詰まってんだけど……、お前ら迷惑だぜ……」

亮二さんとも思えない喧嘩腰な口調に、どつきりとして足が止まる。

「ごめん、待たせたね……」

ウェイさんも、凍りついてる様な温度の言葉を、ぞんざいに放り投げてるようにしか応えない。余りにも意外で、飛び下りかけた体勢のまま、僕は二人を代わり番こに見つめた。亮二さんと話しているときは、いつもとびきりの笑顔なのに、ウェイさんの表情は硬く強張っているようだ。亮二さんも限りなく零度に近いというか、マインスマで行ってしまったっているような温度の表情で、温もりの加減もない。ウェイさん、真木さんがちんこに引き続き、この二人までどうしたって言うんだ。わけが分からない。

とまどう僕を残して、ウェイさんはあの短い言葉を言い捨てたなり、亮二さんの傍をすり抜けて歩いていってしまった。

亮二さんは、いつもの、笑顔をどっかに捨ててきたみたいに、険しい顔で僕を見ている。

へっ……？ 僕を？

何で？

「シェフ……」

さ、斉藤……。お前はあ……、亮二さんにまで、あのふざけた文章で？

「楽しみにしてるからな。死んでも構わないから、根性で全員集めるよ……。俺は遠足に行くんだからよ……」

え、遠足？

「ソヨンに聞いておいてくれ。おやつはバナナ抜きで、30ユニバぐらいでいいか？つてな……」

おやつ？

わつ……。わけわからんっ！ 僕は動けないまま若干パニック。亮二さんは、いわゆる美形というやつだ。いつもはへらりへらりと笑っているから感じないのだけれど、こんなふうに微動だにしない硬い無表情でいられると、はつきりいつて相当に怖い。これは亮二さんが始めた新たなお遊びなんだろうか。それとも、ウェイさんとマジで何かあったんだろうか。

「御曹司、階段塞がれたら邪魔」

短く言われて、僕は飛びのいた。というより、ほぼバランスを崩して横に落ちたというところ。ふん、と亮二さんが笑うのが分かった。恐る恐る見上げると、九十八パーセントぐらいの確率で、紛れ

もない嘲笑。

プシュっみたいな聞き慣れた音をたてて、亮二さんを吸い込んだハッチが閉まると、僕はなんだか猛烈に腹が立ってきた。

とにかく、僕のすることは決まっている。

斉藤の奴をとっつかまえて……、一体全体どういう見なのか、何を考えているのか、納得できるまで聞かないと、二度とやつを信賴できない。

あいつはあのフライト・レコードをネット・ソンホとウェイさんが乗っていた事故時のだと知っていたはずだ。本当に知らない可能性はある？……まさか。

（多分、間違いなく知っている……）

だったら常識的に考えて、何で、操縦していた人間を特定しろと頼まれたとき、僕が真木さんに応援を頼んでいいかと聞いたとき……どう考えたって、止めるべきじゃないか。それをなぜ、止めなかった？ 理屈に合わないじゃないか。

真木さんは、ウェイさんと乗らないと言った。せつかく、あの絶対に乗らない宣言していたウェイさんがその気になってくれたのに、真木さんがウェイさんとは乗らないというのなら、結局、足す1、引く1で、事態は変わらないままだ。

むしろ、僕を食わず嫌いしてくれたウェイさんより、きつちりウェイさんとぶつかって搭乗拒否した真木さんの方を、もう一度説得するほうが難関に決まっている。

解決に向けて段取りしているといいながら、事態は悪くなってるじゃないか。

ずんずんと、廊下を突き進みながら、それでも考える。

なんて切り出そうか。

それから、先輩たちみんなからかわれた、たまどんパーティーの招待メールだ。奴はいつたい、どんな文章をメールしたのだろうか。差出人を僕にしたなら、原稿の段階で見せるべきじゃないか？ そうだ、それが最低限の礼儀だ。

思えば思うほど、むかつきは鎮静化するどころか、沸騰の方向へ突き進んでいた。じいちゃんがよくいつていた。かつとした勢いで人に会っちゃいかんと。もし腹が立つたら、水を飲んで、深呼吸して、出来れば一晩ぐらい寝てからもう一度考える。ぶつかった後で、言葉を引っ込める事はできないのだからと。

そして、それでもまだ腹が立っていたら、それは当然の怒りだから、迷わずぶつけるとそう言った。弱小な運送会社だった霧島を、一代で政府御用達にしあげたじいちゃんは尊敬しているが、ごめん、僕はまだそこまで達観できない。怒りがさめないうちにぶつけとかないと、うっかりぶつけそびれて、僕の思いはどこにも行き場所がなくなってしまうような気がした。

斉藤の棲家は割れている。あいつは少なくとも、自分の小さな依頼が、これだけ僕を怒らせてるなんて思ってもいないはずだ。少しでも想像力があれば、そのくらいは想像付くにきまっている。なのに、絶対に、そんなデリカシーはないと見た。

そう。ゴールデンたまごどんぶりを食べる会なんての主催は、

断じて僕じゃないからな。まあ、当日のシェフは……引き受けるに
吝かでないにしてもだ……。

NexGASSのマザーコンピュータ、アースラの御在所に通じる扉で、見学申請を出すときに、斉藤を追いつめるには通路までのDでは足りないと思って、思い切ってマザコン部屋への突撃切符であるAを選択した。すいといばかりに許可が降りて、ずっこけそうになる。前に来たとき、高柳は許可レベルDにしとけ言ってたけど、ちゃんとAで申請しても、許可おけるじゃないか。

やっぱり、やつらはよくわからない……。誠実なのか、それとも人を馬鹿にしているのか。

前に一度来た事がある廊下を歩いていると、例のアクリルガラス（多分）越しに、マザーコンピュータ・アースラの一部がはみ出しているコントロール・ルームが見えてきた。

青く、青く、球体の水槽のように見えるアースラが、前に見たときと同じように、緩く、あるいは速く点滅している。青がはじけてあちこちできらめきの屑になる。外から見ただけで、夢見るほどに美しいのに、あの側まで本当に行ってもいいのだろうか。僕の足はなぜか、いつのまにか止まりそうなほどにまで進む力を失っていた。

斉藤の……すみか。やっぱり、きれいだ……

通路から窓越しに見えるそれに、うつとりとなってしまうと、萎えかけた心を叱咤激励する。そう。だけど、はつきりさせることは、はつきりさせないといけない。

やつらと……飛べるのか。僕の気持ち。信頼を……、本当に渡せるのか……。

ID端末をかざすとあっさりとドアが開いた。旧に心臓がどきんと飛び跳ねた。僕は拒否されたかったんじゃない。けれど、ここに本当に踏み込んでいいのだろうか。何か、僕は決定的な選択をしてしまったのじゃないだろうか。

ドアが開くと、うなる様な、震える様な、やっぱり水族館の巨大水槽の前のような、不思議なざわめきが空間を充たしていた。そして、コンソールパネルの前にも、隅の床に置かれたラップトップパソコンの前にも、求める人影はいない。

よく知らない部屋は、死角の場所も分からない。居るか居ないか分からない影を捜しながら、僕は一步を踏み出した。

斉藤……どこだ？

と、そのとき、僕は何かを踏んづけた様な、何か罨^{トラップ}に思いつきり引っ掛かったような感じがして、……瞬間、天地が思いつきりひっくり返った。

何が起こったのか、分からない。

「い……ってえ」

けれど、床に限りなく近い場所で、そう文句を言ったのは僕の口ではなかった。

22・脱アイドリング

テラGより、大分低めの重力環境で、こけた衝撃そのものは大したことではないが、床とお友達になるといふのは、あんまり嬉しい事態ではない。埃そのものが神経質なまでに排除されているのだろう床は、顔が映り込むほどに磨かれてはいるが、そんなのはこけた精神的ダメージをダイレクトに自分に跳ね返して来る効果しかない。

起き上がるより先に目玉だけで周囲を見回すと、あいつ　どこかで見た野郎の顔が目に入った。目を瞑ったまま、眉間にしわを寄せて、一生懸命目覚めようとしているといったところに見える。

……？　なんで、顔が床に落つこちてるんだ？

「……痛い……。誰だあ……思いっきり俺を蹴った奴は」

た、高柳？

その声で顔の持ち主を思い出す。僕は恐る恐る聞いてみる。

「何して……んだ？」

「何って……寝てただけど……」

寝てたって、ここはアースラの、つまりNexGASSの心臓部分に当たるメイン・コンピュータルームで、特別な場所で……つまり、人が寝てるなんて誰が思うか？

「なんでだよ」

僕の声は問い詰める様なモノになる。

「なんでって、最近ここに住んでるから……かな」

住んでる？

またしても信じられない発言をタカがする。この部屋で誰かが、寝袋で床に転がっているなどというのは、断固納得できない。百歩譲ってこいつがアースラの技術者だったとしてもだ。ましてやこいつはMSの卵だ。マザーコンピュータについては、自分と同レベルの素人でしかない。

「費用節約で、斉藤の借りてる部屋に転がり込んでただけ……」

マジで斉藤はここに住んでるのか。

僕は呆れる。うちに来たとき、こいつが荷物まとめて来ようかって言ってたけど、冗談とかじゃなくて本気でそういうことをする奴なのか？ それに、斉藤もそうだ。繊細で神経質に見えて、こんな生活とはとことん無縁な場所で暮らすことができる程度の、大雑把^{ザッパ}なやつなのか？

「一人だと、寂しいからさ……、あゆみちゃんの気配のあるところで寝てるの。……犬と呼んでくれ」

一人だと寂しいって、それ、大人になろうって野郎のセリフか？ 第一、童顔は確かに可愛いけど、結構デカいんだよな……こいつ。

「寂しいって……」

呆れて口にしかけると、真面目な顔でタカが言い訳した。

「だってさ、寝てる途中で死んじゃっても、一人だったら誰にも気付いてもらえないじゃん。俺、半分腐るまで一人で寝てるのって……やだし」

一体、何の話だ、何の。

「だけどさ……、構われるのも、そんなに好きじゃないから、斉藤みたいな超絶マイ・ペース野郎は……助かるんだな」
「そういうのは犬じゃなくて猫だろうが……」。

「超絶マイ・ペースな優美ちゃんに、そんなふうに言われるのは不本意だね」

きれいに点滅している人工知能ユニットの向こう側にあるんだろうコンソールパネルを叩く音が止んで、斉藤の声がした。

「待ってたよ。多分勝手は分かっていると思って、飛竜の許可レベルAにしておいたけど、ちゃんと察してくれたみたいでよかった」

それで、入れたのか。

「で、分かったか？ あのフライト・レコードの謎」

斉藤の声は、静かで、まろやかで、耳に心地よい。多分、マイクを通すと、多分深い柔らかさが増して、指示する声とか聞きやすいんだらうな。

でも、この声にうつとりして、僕の怒りを忘れてなるものか。がんばって怖い顔にする。にらんでいる様に、ちゃんと見えるだろうか。

「斉藤……。先にひとつだけ教えてくれ」

「……うん？ ……どうぞ」

「あれが……。何か分かっていたのか？」

ここで嘘をついたら……。僕は、多分、この先ずっと君を信頼しな

い。どんなにその声が心地よく響いたとしても。

「……いや、分からなかったから、頼んだ」

この、嘘つきめ。

僕は床に転がったまま、タカとおしゃべりをしているという情けない姿勢から脱出すべく、すっくと立ち上がる。そして、斉藤を睨……もうとしたとき。

「まあ正確に言うとなつは分かっている」

斉藤の顔はいつものようにのっぺりしていたけど、ちょっとだけ眉間がせばまって、そう、難しそうな顔になっていた。

「ネッド・ソンホとウェイ・ソヨンのだ。私がシミュレーターの記録から拾ったものだからね。それは間違いない。ただ、もう分かっていると思うけど、その残るひとつが、あの謎の事故のときのものだ。それが誰か分からない。あのとき運転手さんが誰だったか……僕はそれを知りたかった」

嘘つきじゃない？

「もう一つ教えてくれ」

「複数の質問がある場合は、最初から幾つあるか言うべきだね。もう一つ、もう一つが、どんどん増えるのは、子どもの会話だよ」

「あと一つ。僕が、真木さんに応援を頼むと言ったとき、なんで止めなかった？」

齊藤は、いつもの何でも見えてますというような目で、僕に照準を合わせてくる。反らして……なるもんか。僕はがっしとそれを受け止めて、瞬^{まはた}きしないように頑張った。ここははつきりさせないと、気が済まない。

齊藤歩。お前が何か言葉を弄して調子よく言い抜けをしようとするなら、僕は……。

「所詮は、シミュレーターの天才君だろうと、直接に飛竜はネット・ソノホのフライトを知らない。知らない事柄の特定をするのは人間には無理でしょう？ 彼の癖を多分一番よく知っているのはウェイさん。だけど、大気圏突入時に計器が死んでいくあの瞬間を、彼女に追体験させるのは酷だと思ったのが第一点」

……無理がない。嘘とか人を担ごうとか言う臭いはない。

「第二点は、ウェイさんは、何があったかをここまで誰にも話していないということ。それが今更飛竜何かに言うとは思えなかった」
僕何かにとは、言ってくれる。だけど、多分その齊藤の予測は間違っていない。

「やっつかいなことに事故調査委員会の記録は、ここには入っていない」

齊藤が背後の人工知能の多分はみ出してる部分を、自分の肩ごしに親指でさす。その指し示す先にあるのは、紛れもない、アースラそのものだ。

「マザー・コンピュータに記録がないなんてことが、あるのか？」

「……うん。信じられないんだけどね。ということは多分、何かの理由があつてホストから削除されたんだと思うんだ。あるいは極秘扱いで情報を隔離されて外部のデータ保存庫に収納されてしまったか……」

「どういうことだ？」

斉藤が何をいいたいのか、今一つ分からない。

「そろそろ、次の質問には追加料金請求するよ。こちらの質問にはいつ答えてくれるんだ？」

斉藤の瞳は、だけどむしろ微笑んでいる。うーん、僕が今口にしたのは質問ではなかったのだけれど、斉藤はこいつも質問と受けとったようだ。

「もう一つだ。なぜ、このフライトの操縦者を特定する必要があるんだ？」

斉藤は、いかにも可笑しいというような、間違いようのない笑顔に珍しくなった。

「どーでもいいけど、優美ちゃんもだけど、最近、いろんな意味で鈍い人間が周りに集まってきている気がするな、どうしたら、軌道修正かけられるだろうか」

「どういう意味だ？」

その言い方は、幾ら凶悪な姉が三人も居るといふ最悪の成育環境に培われて侮蔑に強い僕でも、ちよつと腹が立つぞ。

齊藤は真顔に戻って説明を続けた。

「今は我々は、何とか実習船訓練に飛び立つべく努力をしている最中ではありませんでしたか？ いがみあっているお姉様方には、ウインスレイ女史に倣って、お百度でもなんでも力技で押し切れるけれど、ネッド・ソンホは、まず居場所を特定しなければならぬじゃないですか」

ネッド・ソンホ……。ああ、そうだった。居場所すら特定できていない、多分引っ張りだすのが一番やつかいな人。

「水道光熱あと消費電力量といったデータからみて、例の事件以降、彼のコンパートメントは使用形跡がありません」

おいおい……。僕は言いたくなる。マザコンからそんなデータを引きずり出すのも、はっきりいって、データの不正使用になるんじゃないのか？

「つまりまあ、自宅引き籠もりの可能性はゼロ。オフィシャルと言っているほど公認の恋人である真木さんの通話記録をみても、彼らがコンタクトをとっている気配もなし」

……。おい、それは完全に一線踏み越えて、既に犯罪だろう。

「あと一点非常に異例なことがあって、半年不在にも関わらずネッド・ソンホ・アフマド……彼には退学勧告が出てません」

「えっ？ 死刑執行命令書が……出てない？」

「異例……でしょ？ そもそも控えとはいえSランククルーに配置

されているということは、成績は休学前の状態で凍結されているということです。少なくとも噂されているような登校拒否というのはないと……そういうことです」

うん。異例だ。それってめっちゃくちゃ異例だ。

うちの学校は遅刻三回で黒星一つ扱い、それが三つで退学勧告は常識だ。

「ということは、今回の彼の登校拒否は、妙な言い方をすれば、少なくともオフィシャル……、公認のものということになりますね」

「学校公認の登校拒否って……なんだそれ」

しつこく、寝袋（そんなもんを、こんな所に持ち込んでる奴がいること自体が、非常識だと思うが）に入ったままの高柳が、聞き耳だけはしっかり立てていたのか割り込んでくる。

「なんだそれ……、なんですよ。だから、知りたいのは、うちの学校では基本的に存在しない登校拒否なんて状態で、他ならぬ学校がソソホを放置しているのか……なんですよ。謎解きの鍵^キはどう考えたって、あのフライトにしかないでしょ？」

「……そうなるのか？」

僕が「そうなんだ」と答えようとする前に高柳が言う。僕はあの自信と自信と自信でできているような斉藤の断言に、疑問を挟むことをすら思いつかなかったが、つき合いが長そうなだけあって、簡単には斉藤理論に説得されないとみえる。何だかわからないけど、さすがだ。

そのとき、もう一度、斉藤の瞳が微笑むのが分かった。もしかして、斉藤もこういう高柳の、容易に自分のペースに巻き込まれてこ

ない一種の頑丈さが、気に入っているのかもしれない。

「多分ね……」

頼りないこと甚だしい。

「データーマンもアテにならねえな」

すかさず、タカが突っ込む。

「のんきに寝てる人には言われたくありませんね」

ほとんど無表情のままなのに、どことなく楽しそうに見える斉藤が文句を言う。

「俺は体使うのが商売だからね、タワー組み連中みたいに寝不足になんかなれないの。あゆみちゃんはさ、だいたいが頭が回るのしか取り柄ないんだからさ、がんばれや」

こいつには、親しき中にも礼儀ありって言葉を知らないのか？
頭が回るのしか取り柄がないなどと、えらい言われようだ。直接言われた本人でない僕でさえむかつきそうなのに、斉藤の表情は楽しそうに見えるまま変わらない。

「適材適所っていうんですよ。そういうの。体しか取り柄がない優美ちゃんは、体使う局面がきたら、死ぬほど働いてもらいましょうか……」

斉藤がしれっと言う。う……ん、こいつらの感覚ってついていけない。

「おーっ、まかせとけ、あゆみちゃん」

そうだ。タカはどうなのだろう。昨日は朝一で前期総合評価を受けとって（僕自身はナットク行く成績でよかった）、午後に実習船訓練のクルー組みが発表で冬期休暇入り。それは間違いないけれど、三年次履修生より上の普通の実習船訓練生は、来るべき実習に備えて、自主訓練に余念がないんじゃないのか？　こんなところで暢気に冬休みしていていいのだろうか。

実際シミュレーターだっていつもより混んでいた。

高柳は、高確率で大気圏突入が待っていると知りつつ、昼寝して過ごしていて、いいのだろうか。それとも僕や斉藤がジタバタしてるのを知りつつ、こいつはもう、今回のフライトはないものと諦めているのか？

「それで、真木さんは、運転手の特定ができたのですか？」

ちよつと強引に斉藤が話を筋に戻した。こいつが僕と飛ぶために最大限の努力をしているというなら、協力するのは、当たり前のことだ。それで、プラス、ウェイさん、マイナス、真木さんになったとしても、故意と悪意でないなら、問題はない。

「彼女は『あいつだ』としか、僕には言ってくれなかったけれど。ただ、そのあとシミュレーター出た通路とここでウェイさんとがちあつて、真木さんとウェイさんと言い争いみたいになって……」

斉藤が溜息をつく。

「女の人は……、難しいですね」

心から言っているふうなのが、めちゃくちゃ可笑しい。

「真木さんはウェイさんとは飛びたくないって言い出して、さんざんだったよ」

「えーっ、ベテラン組み全部乗らない宣言？」

さすがに寝ている場合でないと思ったのか、高柳が寝袋から這い出そうとしている。

「いや……それが、ウェイさんが、みんな引っ張ってきて飛ばうって……。あと、亮二さんが、遠足行くから全員集めとけて……。なんか、わけ分かんないんだけど、あの二人は行く気になってくれたみたい。真木さんもとりあえず『十五日に』ネッド・ソンホを確保できてたら、飛んでもいいってなる可能性も、あるような感じ……」

僕が十五日というところを強調すると、斉藤はにやっとな微笑んだ……。

多分、絶対、口の端が微妙にしか動いてないけど、間違いなく、こいつは今、面白がってる。

「じゃあ、十五日にネッド・ソンホを引きずり出せば、コックピットクルーのベテランさんたちは、全員参加……ですね」

何だ、その徹底的に楽天的な見積りは。でも、確かにそうなる……よね？

「……ということに……なるのかな？」

自信がない。

「その、ネッド・ソンホとかいう人が飛ぶって言わないと、無理な

んでねえの」

高柳が言うのに、斉藤は即答しなかった。

「見つかりそうか？」

高柳がたたみかける。

「なんか、要素は全部あるような気がするんだけど……。見えて当然の筈のものが、見る目がないから見えてない、そんな感じかな。何かもぞもぞしてて、気分悪い……」

「らしくもない……」

ふふんとタ力が笑った。

「ウェイさんと……話したんですよね。飛竜は」

斉藤と高柳の会話を見る形になっていたので、そういきなり話をふられてとまどった。しかも当然のような呼び捨てで。僕はここではゲストじゃなくて、仲間として扱われてるのかな。……まさかね。

こいつらと話したのは昨日が初めてだ。

「ああ……。うん」

斉藤が自分に言っているのか、僕に聞いているのか確^{しか}と分らない、どこか半端な聞き方をした。

「ネッド・ソンホがなぜ学校に来なくなったのか……。そのヒントになるようなこと、彼女は……。何か言ってますでした？」

「特には……。結局斉藤が知リたかった、運転手さんは誰かという答えはネッドさんで決まり。けどあのすごいフライトが自分じゃないって……。つまりウェイさんじゃなかったこと、真木さんに言うなって言ったのは、ネッドさんだったみたいですけど」

斉藤の宙に浮かんでいた目線がぎゅっと自分に合せられるのが分かった。

「今、何て言いました？」

「な、何って？」

「だから今ですよ。ネッド・ソンホは……、真木さんに、よりよって真木さんに、言うなって……、そう言ったんですか」

「え……、ああ、うんそう。……そう言ってたと」

斉藤の表情はまったく変わってみえないけど、なんかが変わった。いうなれば、新しいプログラムが走り始めたコンピュータみたいな感じだった。

今の僕の説明のどこかに、鍵があったのか？ 同じ情報を持っているのに、というよりむしろ、その情報をもってきたのは僕なのに、僕に見えていない何が奴に見えたって言うんだ？

「真木さんに……言うな。真木さんに言うな。真木さんに……。あの、凄いフライトを、自分の恋人に……言うな……ですか？」

計器がまったく働いていない状況で、気流を読みながら風に乗っていくのがとんでもなく凄いフライトだったのは、まったく飛ぶことに素人の斉藤にも分かるのか。

「斉藤？」

「真木さんには言うなというのが、ネッドさんの望みだったと、そういうのですね……なるほど」

につこりと斉藤が微笑んだ。

「データマン、何が見えた？」

タカが自然に聞いた。データマンか。確かに斉藤に似合っているかもしれない。膨大なデータの羅列に、文脈を与えられる才能。そこにある情報の意味が読める人間。こんな奴がタワーに控えてくれているのなら、何か遭った時、判断を間違ふことは少なそうだ。ミズ・ウィーが斉藤に惚れているという噂の理由が、何となく分かった気がした。

情報が渦巻く管制室の一番後列、全てを見渡せる位置にいて、全てを当然のように把握しているCFD。今まで灰色のもやもやだったそこに、斉藤をぽんと置いてみると、なぜかそれが凄く正しい事のように思えた。

そういえば真木さんが言ってたっけ。船を動かしてるのはパイロットだけど、フライトを支配してるのはFD、フライト・ディレクターだって。

斉藤が動いた。

やつが駆け寄ったのはマザー・コンピュータの端末ではなく、床のすみに転がっていた個人持ちのラップトップパソコン。そして床にあぐらで座り込んで、コンピュータのキーボードに指を乗せる。

彼の指がリストの名曲でも弾きこなしているような激しさで動き始める。普段トークモードという音声制御でしか使わない僕から見ると、信じられない神業だ。

タカも斉藤の方に歩きだそうとして、それからちよいと僕を振り返って顎をしゃくる。ついてこいという仕種らしい。僕も斉藤に近付き、やつの背後にしゃがみこむ。斉藤があぐらの上に置いたパソコンの画面を、やつの肩越しに覗き込んだ。

パーソナル・ユースとはまったく思えないような、今どき真っ黒な画面に、白い文字が踊っていく。

く*く*

ミスタ・クロスフィールド

至急返答をお願いします。

真木さんは何がパーフェクトなのですか？

S

く*く*

……。何がって……、どういう意味？

斉藤の人指し指が、キーを叩かない程度の強さで上下している。ひよつとして、苛ついているとか、待ち遠しくてたまらないとか、そういう状態なんだろうか。珍しい。

そんなことを考えている間に、メールの着信を示すポップアップが画面の端に浮きでて点滅する。亮二さんからの返信かな、めっちゃくちゃ早い。

く*く*

ミスタS

真木さんは、3年次履修生の初年度、クルー解散時の相互評価で、

クルー全員がA評価をつけたのでパーフェクトと呼ばれるようになったと聞いている。

亮二

く*く*

あ、真木さんのパーフェクトってそれなんだ。技術とか、成績表とかそんなじゃなくて、クルーからの信頼度がパーフェクト。何かそれって凄い。どんな人だって、合う、合わないは当然ある。そういうのを全部置いておいて、クルーとして最高だったという評価なるほど、実技やペーパーのオールAより、滅多にないかもしれない。

にやり……。斉藤の後方斜め四十五度から伺える頬のラインが、そんな擬態語が相応しい角度になった。

く*く*

ミスタ・クロスフィールド

素早いご回答ありがとうございます。

おかげさまで、どこが問題が見えたと思います。どうぞ十五日を楽しみに。

S

く*く*

斉藤は両肩に背後霊になった僕たちを完全に無視して立ち上がる。勢い、僕とタカはバランスを崩してぶざまに転がる。その僕たちに一顧だにせず、回れ右。押し退けるようにして、マザコンのところのコンソールパネルに移動すると、また猛烈な勢いでキーボードを叩き始めた。

こっちに表示される文字の羅列は、いわゆるホストに直接指令を出せる特殊言語だ。法則性を知らない僕たち素人には、怪しい記号の羅列にしか見えない。

床に尻餅をついた体勢のまま、呆れている僕を見てニヤツと笑い、タカはにあう仕種でひょいと肩をすくめた。

「データーマン、やっとこ始動。ま、考えるのは奴に任せとこうや……。そのうち指令が飛ぶぜ……。こっちは準備運動でもしとこうつと……」

タカは寝袋を手早く丸めてきつちりと止め、そのまま部屋の隅っこ目掛けて蹴飛ばすと、寝袋の行き先も斉藤の方も見やりもせず、部屋から出て行く。歩きだした高柳の背中を僕は追いかけた。なんと呼ぼうかちょっとだけ迷う。それから……。

「タカ」

昨日そう呼ぶように言われてたのを思い出して、僕は躊躇いがちにだけれど、呼び止めた。

やつは歩みを止めようとはしなかったけれど、短く答えてくれた。

「何？」

「どこに行くんだ？」

「いきなり、テラ行くとか言われても良いように、Gアップトレーニング」

「今から？」

「そろそろ人が減るころだからね。俺キライなんだよね、マシンの空き待ちとかするの。時間なんか、神様から十分もらってるのかどうかも分からないのに、ばさっと待ってるのって……無駄だろ？」

まったく考えなしに昼寝してるって訳でもなかったんだな。こいつ。

「……つきあう？って聞きたいとこだけど、斉藤の指令でフライト・レコード・トレースやらされたんだろ？ 飛竜は帰って寝た方がいいだろうな。コンディション作つとかないと、いざつてとき動きが鈍くなるからな」

春花はアホ柳なんて呼ぶけど、こいつはこう見えて結構いろんなものが見えてるのかもしれない。もっとも、斉藤とは種類が大分違いそうだけど。

僕は、斉藤にもタカにも置いて行かれてるような、自分だけが何の才能も持っていないような、そんな気がして……少し……ほんの少しだけ寂しかった。

23・探偵きどり

僕と、タカは並んで歩く。この長い廊下の壁の向こうか、天井か、床にアースラの本体が満たされていると思うと、何となくだけど見られている様で居心地が悪い。アースラは住環境機能のすべてを制御しているのだから、いつだって見ているに違いないんだけど、ともかく、気配が濃いのだ。

こんなところで、平気で生活できるって、こいつらはどこか変だ。
「地球に……って、なんで？」

言ってから、唐突過ぎたかなとちょっと自分で苦笑する。けれどタカは全然気にしないようだ。

「ん……、なんとなく。ネッドさんって、鳥だろ？」

「へ？」

ネッドさんが鳥。うん、でも確かに、あの飛び方には、そんな言葉が似合いそうだ。

「根拠全然ないんだけどさ、鳥だったら、マジモンの空があるところに居るような気がしてるんだよね、俺。それに、ネッドさんが地球にいないくて、迎えに行く場所が全然別の所だったとしても、あのメソッドだからなあ……。今回の実習船訓練、絶対に大気圏突入時があるでしょ、ちゃんとアップしとかないと、伸し餅になっちゃうし」

そう言っ……多分、タカは笑った。顔は見えないけど何となく分かる。

こいつ、なんかペースは読めないけど、無駄なことはしないみたいだ。なんだか時間をギリギリまで使い込んで生きてるみたいだ。

無駄なことはしないっていう、タイトな人生への向い方で、あの斉藤と気があってるなら、あちこちぶつかってから止まる様な非効率的な体制御しかできない僕が紛れ込む余地はなさそうだな……残念だけだ。

部屋を出るときに、こいつら二人に対して感じた距離感は、ますます広がっていくような気がする。タカも、斉藤も、別次元の高みにいるような気がする。

「……あ、そうだ」

高柳が立ち止まって僕を見た。やっぱり、いつもの極上の笑顔。

「昨日、悪かったな。いきなり押しかけて」

……？

はっきり言って、僕は意表をつかれた。こいつからそんな常識的な言葉が出てくるとは思わなかった。

「斉藤いつもあんなだからさ、クリスマスぐらいのんびり飯食わせてやれてよかった。ありがとうな」

その言い方が物すごく優しく、僕はなんだか、妬ける気分になった。

やっぱり僕はゲスト。分かっているつもりだったけど、そんなふうにお礼を言われてしまったことで、思い知らされてしまった気分だった。そう、分かり合っている友達同士なのはやつらで、そこに僕はいない。遠慮なく、何でもできる仲だなんて、彼らも思っ

んかない。

「でさ、ずーずーしいんだけど……」

……？

「また、あれ頼むわ。マジで、めっちゃ美味かったし。ゴールデンたまごどんぶり……」

頼む？

「……もちろん。いつでも」

もう一段階、高柳の笑顔が弾けた。

「できれば、ベジタブル・ファミリーや、別のタンパク質ファミリーもいるやつで」

いつまで、こいつはたまどんを根に持つてるんだと、僕は呆れる。

「井以外も、僕のレシピにはあるぜ」

ほこつと、とつくに弾けているはずの笑顔が、ゆたかに膨らんだ。

「さんきゅー。愛してるよっ」

ぶつと噴き出したくなる。野郎に愛されても……困る。軽く手を振って、タカは鼻唄混じりに、廊下を駆けだす。閉じられた空間独特の反響が、やつの足音を追いかけて半テンポずれてこだましている。

愛してる？ まさかだよ。

「またな——っ」

通路の角で影が見えなくなる瞬間、やつは僕に向かってそう言った。見えない通路の先でも、駆け足で遠ざかっていく高柳の足音が聞こえている。その音を見送りながら、僕は、残像となって耳元に焼きついてしまったやつ声を聞いていた。

またな。

うん、次はもっと手の込んだもの作るよ。文句がでないくらい、うまいやつを。

消えてしまいそうなその言葉を、何度も、何度も確かめたくて、僕は耳を澄ます。

通路のずっと向こうに小さくなった足音が止まって、もう一度だけ奴の音が響いた。

「忘れんなよ——っ」

そっちこそ、な。僕はその言葉もじつくりと味わっていた。

*
*
*

データをパソコンに移動した。慣れているのだが、斉藤にしても若干鬱陶しい、指令言語から普通の言葉に変換された文字が、つると吐き出されて、黒いデスクトップを白く彩っていく。

あの、去年のネッド・ソンホ・アフマドのクルーの名簿だ。ここまではさすがに消されたりしてはいない。

チームコール名 ND

Cockpit crew

CDR ネッド ソンホ アフマド

1st PLT ウェイ ソヨン

2nd PLT カツマタ ケイスケ

3rd PLT マックスウェーバー ジョー ジ Jr.

PLT Apprenticeship NIL

Working party

1st MS シガ ヨウコウ

2nd MS キム チヨル

3rd MS タケナカ シヨウダイ

DEC・現在

ソンホ ネッド アフマド 操船技術部航空科（病氣療養のため

休学中）

ウェイ ソヨン 操船技術部航空科（五年次履修中）

カツマタ ケイスケ 所属無し（退学処分）

マックスウェーバー ジョージ・R 船技術部航宙科へ移動（3
年次履修中）

シガ ヨウコウ 所属無し（自主退学）

キム チョル M S科船体整備専攻（病氣療養のため休学中）

タケナカ ショウダイ 所属無し（退学処分）

めちやくちゃだな。このクルー。

斉藤は溜め息をつく。いくら退学率が高いといっても、それは一年次と二年次でドロップアウトする人間が多いというだけで、三年次履修生、つまり実習船訓練の参加資格を得るまでがんばった人間の定着率は、逆に良いのがウチの特徴だ。

自己都合、放校処分合せても、定着率は成績がいいものの方が高いのも、普通の学校と同じ事だ。S評価を受けているクルー七名中、マトモに学校に来ているのが二名というのは、異常な数値だ。

大気圏突入時という、一番生死に直結する部分で、致命的なシステムエラーが起こり、それがトラウマになるぐらいに、この人たちが繊細だったとしてもだ。実際、乗り越えられたトラブルなら、それはむしろ自信と誇りに昇華されるような気がする。なのに……。

なんで、こんなにボロボロなんだろう。

まともに続いているのはウェイさんだけじゃないか。

佐久間教官の宿題（そそのかし？）を受けて立った以上、それから真木さんにネッド・ソンホを引きずり出すと安請け合いをした手前上も、彼をここに引っ張りだしてこなければならない。

小動物なら居場所が分かれば、無理矢理捕獲して意志などぶつちやけて、ただ持って来ればいいが、相手は普通にプライドを持っている男で、意志もあれば抵抗もある。つまりは本人が納得してここに帰って来るのでなければ、結局は当事者のだれもが納得いく形にはならないのだ。

ネッド・ソンホが、理由があつて逃げている以上、その理由を知らなければ、ここに来る事を同意させることなど無理に決まっている。あのフライトの真相が、即ちネッド・ソンホ・アフマドが、日常から逃げ出した理由ならば、まず、その事実を知らなければ、彼を説得する作戦なんぞ立てようがない。

けれど佐久間教官がくれたフライトレコードをトレースして、自分なりに運転者を特定して分かったことといえば、ネッド・ソンホ・アフマドという人は、非常時の判断力も、行動力も、それから飛行機の操縦技術も一級品だということだけだ。

大惨事になって不思議ではない事故がおきて、それを無傷で乗り切った。普通なら称賛されるだろう。そして、事実、あの事故を乗り切ったことになっているウェイさんは、誰からも一目置かれている。だれも死者を出さなかった運転手を非難するわけがない。

思い込み。予断といつてもいい。そんなものに自分は囚われている。斉藤は思う。分かりやすい物語があるように見えれば、その路線で先読みをしたくなる。

いざというときに、何もできなければ、男という生き物のプライドは引き裂かれる。それは、いざというときに何もできなかった記憶から、逃げ出した後ろ暗い覚えがある身には苦いほど分かる。

自分が何もできなかったことに絶望するとき、確かな裏付けのなかった虚勢が張らせる見栄など、木っ端みじんに打ち碎かれる。打ち碎かれてしまえば、何やかやと理由付けをして自分をかばうか、

逃げ出すことでしか自分を保てない。勝った、負けたと、本能がどうしても気にしたがる、男っていうのは、そういう脆い生き物だ。

それを知っているから、あのフライトでネッド・ソンホは何も出来なかったから、単純に落ち込んだのだという図式で、自分は先入観を築いてしまっていた。

だから、自分でトレースしてみて、あのときの運転者が、ネッド・ソンホとほぼ確信できたときから、斉藤は激しく混乱した。飛竜や、真木さんをつかって本当にそれがネッド・ソンホだったのか、確かめずにはいられないほど混乱した。

運転手がネッドさんなら、辻褄が合わないじゃないか。

一体あの人は、何に対して、そんなに蟠ただかまっているんだ。

その袋小路にどんずまっただかのような深い疑問が、飛竜がウェイさんから拾ってきた、何気ない言葉で氷解した。

真木に言うな。

あつた事がない、声も顔もデジタル・データでしか知らない青年の顔が、彼の声でそう呟く。

真木に言うな。

真木さんには、言うな。つまり、彼が逃げているのは真木さん……自分の恋人そのものからだ。だから、連絡もとらない。行き先も告げない。傷つける事を分かっている、噂が正しいなら、誰よりも真木さんの理解者でいたはずなのに、逃げ出した。

真木さんから逃げ出しているということに気が付かないで、学校

から、事件の記憶から逃げ出そうとしていると、先走って曲解するから全部が狂った。

じゃあ、気を取り直して……。斉藤は、ネクラ趣味を具現するかのような、お気に入りの真つ黒なデスクトップにあるすべてのデータをしまい込んだ。電源が入っているのか、入っていないのか、緩やかに点滅するハードディスクの監視ランプがなければ、判断がつかなくなってしまったモニターを睨む。

普通は静電気が細かな埃を呼び寄せて、パーソナル・ラップトップなど直ぐにうつすらと埃の膜がはってしまうが、さすがは学校の頭脳であるマザーコンピュータのコントロール・ルームでは、排塵機能はピカイチで、汚れは自分の手の脂ぐらいがキーボードにつく程度だ。

鏡になって、黒い画面に自分の顔が映り込む。斉藤は、黒いデスクトップに浮かぶ、幽霊みたいな自分の顔に向かって呟く。

斉藤君、ここでクイズを一つ。

何だい？　そういえば「何だい」って「難題」と同じだね。

馬鹿言ってる。さて、質問だ。お前も若い男なら、分かるはずだ。男にとって、いたたまれなくなつて、恋人から逃げたくなるのはどんなときだい？

肝心のときに、役に立たなかったとかかな。

交ぜっ返すな。

じゃあ、やる気が途中でしぼんじまったとき？

……。いいから、そこから離れる。

どう頑張っても、太刀打ちできないぐらい、相手の方がうまかったとき？

……ビンゴ。……それだ。

ふん、『パーフェクト真木さんは、何がパーフェクトか』だって？ お前にしては上等だな。よくそこに気が付いた。
黒い画面の中の斉藤が、にやりと笑った。

「さてと、斉藤君。そこまで分ければ、どうしますか？」
今度は、声に出している。

探偵ごっこですかねえ。

うんと頷いて、斉藤はごろりと床に寝そべった。天井が高い。アイスラが青くゆるく点滅している。綺麗だと思う。寝袋がないと、やっぱり床は硬くて冷たいから、眠気などやってこない。むしろ脳味噌は冴えて来る。

アームチェア・ディテイクティヴ（安楽椅子探偵）と洒落込んで、頭の中でだけ今知っている情報を復習^{ひん}える。

いやいや、と、斉藤は自分でつつこむ。アイスラ部屋には、机や

いすなどといった小洒落たものはない。とてもじゃないが、安楽椅子などというのは、おこがましい。

愛用のラップトップ・パソコンも（画面が小さすぎるのは嫌いだ）床おきだし、寝るのはタカを真似て寝袋だし、ついでにここは飲食厳禁だから、居室というには程遠い。

ってことは、オンフロア・ディテクティブ（床上探偵）？

もう一人の斉藤が馬鹿にしたかのように笑う。

それを無視して斉藤は考える。そうあの隅の老人だって、必要があれば自分で証拠集めに出歩くのだ。頭脳労働専用などとうそぶいたところで、人に話を聞きたいときは、直接に限る。表情、言葉の強弱、息づかい。伝聞できくのでは絶対分らない、しゃべられた内容を文字変換してデジタル・データで保存しても、それは会話のすべてじゃない。

ネッド・ソンホが逃げているのは真木さん。

理由は、どうあがいても、真木さんの足元にも及ばないと彼が思い込んでしまうという事態が起こったという事。……ついでに、そのことは、あの人が、そうありたいと願っている状態であつたら、乗り越えられたに違いないようなこと。

自分にとつてどうでもいいことなら、相方がどれだけ優れていても、男は気にしない。むしろ、誇らしく、そんな女に惚れさせている自分に有頂天になれるぐらいには、単純だ。男ってやつは。

ネッド・ソンホがなりたかったもの。そして、なろうとしていたもの。

真木さんが持っているもの。

クルー解散時の相互評価で、クルー全員がA評価をつけたのでパーフェクト

ネッド・ソンホがなりたかったもの。なろうとしていたもの。

コマンダー
CDR

ネッドさんが何に失敗したのか。

操船そのものじゃない。それこそ、彼は鳥人 ミスター・パーフェクトだ。今この学校の中で、誰よりも確かな技術を持っている。

直接、クルーだった人たちに聞くのが手っとり早いが、どう考えても人材不足だ。話を聞けそうなのは、ネッド・ソンホと同じ病気療養中扱いのキム・チョル。それから専攻を変えて在学を続けているマックスウェーバー・ジョージJr.の2人かな。

あるいは、ウェイ・ソヨン。彼女を直撃するか。

退学処分……というのは穏やかじゃないから、学校を追い出された二人に聞いても、口を開かせるのは……難しいだろう。

第一、現住所特定だって、多分困難だ。退学処分ということは、勧告なんかと違って問答無用で放校ということだ。学校に未練があれば恨みは消せないだろうし、気持ちの整理が付いているなら思い出したくもないだろう。

リサーチ先として除外していい。

それにしても、ネッド・ソンホといい、キム・チョルといい……。学校公認の登校拒否って、一体なんだ？ 基本的にうちの学校で身につけることができるスキルは、病弱な学生がやっていける仕事なんかじゃないから、体が病氣になったら自主退学していくのが普通だ。学費も馬鹿高いし、企業の採用だって、ぶっちゃけ、脳味噌三分の一、度胸三分の一、実技三分の一ってところだろう。何年も浪人したり、留年したりする程度の人間を雇うほど、酔狂じゃない。

学校が基本として、休学を認めてないのには、それなりの理由があるのだ。

だけど、そんな怪異がまかり通っている。

学校自体が、それを許すだけの理由……。

斉藤の脳裏に、佐久間教官の表面はにやついていたのに、どこか憤懣が滲み出ている様な表情を思い出す。

斉藤、手。

宿題だ。これは、ゲームじゃないよ……。神聖な謎解きだ。……読んでご覧。

神聖な……。謎解きというからには、探偵を気取ってもいい気はするけど、神聖という部分に何か引っ掛かる。

その真実を君ならどう調理するか見たくてね。

彼は真実を見つけるところにゴールを置いてはくれなかった。その程度の真実を見つけれない人間じゃないと、自分を買いかぶってくれる程度の簡単な謎。

そう、謎自体はきつと、どうってことない、単純なものなんだろう。

きれいに順番に死んでいく計器。

きれいに順番に。

きれいに……。

……何でだ？

パーフェクト真木……クルーからの評価が全てA。

ネッド・ソンホ、操船の天才……。

その天才を遺憾なく発揮した直後に登校拒否。

行儀よく、消えていく計器。

まるでスイッチを切っていったようじゃないか？

誰かが……切った？ ……まさかね。そんなことしたら、自分も死ぬ。

電気系統の故障なら、一気に落ちるんじゃないの？ 斉藤君。

順番に落ちていくのは……人為？

でもなぜだ。船が落ちたら、乗っている人間は自分も含めてみんな死んでしまうのに。

管制が転送したプログラムに悪意が仕込まれていた？ ありえない。そんなとんでもないプログラムは転送前に、マムに弾かれるだろう。

やはり、クルーの……故意か？

開かれたはずの事故調査委員会の記録も、クルーへの聴取の記録も……ホストから抹消されている。

クルーへの事情聴取。そこで語られたのは何だ？

なぜ、そこまで徹底的に封印する必要があった？

ありえないことばかり……なぜ起きている？

ネッド・ソンホ・アフマド。

男ならだれだって自分の恋人には、良い所を見せたいはずだ。それなのに、彼は、最後まで操縦桿を手にしていた英雄行為に口をつぐみ、ウェイ・ソヨンに名声をおしつけた。

大気圏突入時に計器が死んでしまう。オートクルーズの支援も無しで、ネッド・ソンホが宙港まで辿り着き目視と感覚と旧式の計器だけでちゃんとランディングさせたのは軌跡に近い神業だ。

フライト関係のプログラムは、管制が転送するから、そこを弄る

のは、余程の腕を持っていないと不可能。

放校処分になっている武中と、ネッド・ソンホと同様に、病氣療養なんてウチの学校ではあり得ない理由で学籍が温存^{キム}されている金のこの2人は船体整備専攻のMSだ。Sランクの評価をもらっているMSが二人なら、高柳が言うように、このフライトが、機体そのものにトラブルを次々発生させる種類のバーゲンだったことは十分ありえる。

仕込まれたトラブル・バーゲンの種類自体も、自分は間違っている込んでいたのかもしれない。次々、トラブルが起こる機体。そのカバールの途中で、MSの二人が対立を深めていつてしまったのだとしたら……どうだ？ 機体にトラブルを起こすための仕掛けだったものが、学生が一番嫌っている、人間関係のトラブルの種として、勝手に蒔かれて育ってしまったのだしたら……。

MSなら、船をいろいろな意味で弄る機会があった、ということだ。あの、トラブルを人為で引き起こすなんて、何程のものでもない。大体、一般的に言って、壊すより直す方が難しいのだ。修理屋が、破壊の意図を持ったらどうなる？

人間は捨て鉢になれる生き物だ。斉藤は思う。健康的な普通の人間が、普通にいるとき、誰も死にたいなどとも、殺したいなどとも思いはしない。

だけど、殺したいほど憎しみがあるとき、自分のことを冷徹に温存しようとする人間と、何もかも壊してしまえと思う人間とがいるのだ。

自分が乗っているオービターを、燃やしてしまえと思う人間なん

か、この世の中に存在しないなんて……、そんなふうに決めつけていいのか？

斉藤、お前どうするよ。

「話を聞くしかないだろうな。直接」

斉藤は声に出して言った。本当にしなきゃならないことは、口に出してやると、俄然やらなきゃいけない気分が盛り上がる。やり遂げたい事は、紙に書いて目につくところに貼りだしておくか、メモに書いて毎日唱えろといったのは、これはだれだった？

「だれに、何の話を聞くの？」

そのとき春花の声がして、斉藤はどつきりと目を開けた。

24・ダブル・スタンダード

目の前の、ちょっと手を伸ばせば届く場所に、春花の訝しげな顔いぶかがあつた。斉藤は、ずっと、ループ状態の考えをぐるぐると繰り返し返して、どうやら考えているつもりがいつのまにか、うとうとしていたようだ。

「そんなところで寝てたの？」

呆れた様な声。

「……寝てない……と、思うんだけど自信ない」
「何それ」

春花が溜め息混じりに言うのを見て、斉藤は自然と頬が弛んだ。

「寝るなら、せめていつもみたいに寝袋ぐらい使いなさいよ。倒れてるんじゃないかと思って、びっくりしたじゃない」

それでちょっとだけ険しい顔けわをしているのか。斉藤は納得する。呆れ顔は春花が心配するほどのこともなかったと安心したということだろう。いわゆる少年のころ亡くした母親の顔はあんまりよく思い出せないけれど、もしかしたら、自分が病気になったり、けがをしたりしたら、こんなふうな顔で見て来るのかもしれないと思えた。

「心配させちゃっかな。考え事してたつもりだったんだけど、どうも、寝てたのか、起きてたのか、分からない」

「……ほんと、斉藤って、疲れる。寝てるのか、起きてるのかぐらいいちちゃんと把握しときなさいよ。全く、これで誰より記憶力だけはいいんだから、困るのよねえ」

斉藤は口の端で笑うだけじゃなくて、ぷつと噴き出した。春花はいい。妙なところに囚われて、偏執的になってしまい、どこまでもこだわってしまう視野の狭さを、飽くなき探究心とかどうも誤解してくれる人の方が多くて困る。卵に入ればそこそこのいい得点を叩き出す自信はあるけれど、それは一重に記憶力の問題だ。

まあ、春花が誤解しているように、記憶力がいいんじゃないくて、効率的に整理してしまっておける検索力があるだけなんだけど、と、斉藤は思う。

マニュアル式、二度も三度も読みたくないとか言って、きつちり丁寧に読み込んでしまう高柳みたいなのを、記憶力がいいというのだ。多分。

まあ、どちらにしても、こだわって、こだわってしまうと、抜け出ることができなくなる自分の背中を、自分がいきたい方向にちょいと押してくれる春花の観察眼と、繊細さと、それから大胆さが好きだと思う。

本当に自分は、こうやって甘やかしてくれる女の人に甘えるのが好きなのだと、斉藤は思う。春花は多分自分のことを、ちゃんとした男と見てないのだ。だから多分、出来の悪くて手間が掛かる子供に対するような「もう、仕方がないんだから」という諦めの入った投げやりで彩られた、「それでも」という信頼をくれている。

倒れているのと紙一重の状態で横たわっていた斉藤を覗きこんでいた春花が、生きているなら結構、心配して損をしたという勢いで、斉藤から離れた。小柄でスレンダーな彼女は、ぺったんと座り込むと、少女のような風情になる。女臭い女はちよつとだけ苦手な斉藤には、そんな彼女の雰囲気も好きだ。春花の気配が少し遠くなって、何となく自分を取り巻く空気が寂しくなった。

「春花、丁度いいところにきた。ちょっと私の推理を聞いてくれな
いか？　どこか極端に無理があったら指摘してほしい」

「なによ……。いきなり」

春花が目丸くする。

「もう、勝手もんなんだから。普通は、何しにきたとか、聞くんじ
やない？」

「……春花はいつも勝手にくるじゃないか」

「だって、斉藤ってば、アースラべったりだもん、顔見たくなつた
ら私が来るしかないじゃない」

「そんなに、こんな顔みたかった？」

春花が眉をひそめた。

「一応、ゴールデン・たまどんクルーの一員としては、何やらかし
てるか気になるじゃない。一応優秀な成績でターンを終えてS評価
もらったのに、いきなり黒星なんて我慢できると思う？」

「……春花には……無理だろうな」

よろしい、というように、春花が腕組みをして頷いた。

「で、首尾は？」

斉藤は話をするために上体を起こして、胡座あぐらになる。

「だから、それについての御相談なわけ。推定が基準の憶測なんで、
妄想が生み出したストーリーなのか、それとも検証するに足る方向
的に納得していいストーリーなのかを、誰かにきいてほしかったん
だ」

「ミズ・ウィーでいいじゃない。毎日、まあ最悪二日に一回ぐらい
はお風呂もらいに行ってるんでしょ？」

にやっという感じで、斉藤の口元が微笑んだ。

「アースラへのアクセス権限悪用して、ミスタ・カワセのオーダー書き換えたなんて、そんなん、ミズ・ウィーに告白してごらんよ。在学中二度とここに立ち入ることを禁止されちゃうよ……」

「あはは、それもそうね。……ん？」

すっかり勢いで流しそうになってから、春花は一瞬考えて、それから全身でかたまった。

「斉藤……っ。……あ、あんた、アースラに直接介入して、かっ……川瀬オーダーいじくってんのお?!」

春花の声が裏返った。

「……そうじゃなかったら、あの川瀬が、僕をゴールデン・クルーに入れると思う? 僕を一管に入れる気十分のミズ・ウィーの決定を足蹴にしてさ……」

まだばれていない悪戯を、告白したワルガキの表情になった斉藤がいう。

「……あ、あんたはあ。何てこと仕出かすのよっ。信じられないっ」

春花はそれから、赤ちゃんのように膝と手を使った四つ這いで斉藤との距離をもう一度詰めると、辺りを憚る小声ははになって、斉藤の耳元近くに唇を寄せて話し掛けた。吐息が頬にかかってすぐすくったい。

「あいつらは、知ってるの?」

あいつら……というのは、高柳と飛竜だろう。

「……まさか、「冗談」

斉藤は即座に否定する。

タカの野郎は利用できるものは何でも利用させていただく主義のくせに、妙なところが真っ直ぐで、不正的なものを嫌う。命は短いいつでも簡単になくなるものという、若さに似合わぬ諦観と、生き物としての快楽は普通に楽しんで何が悪いかという子供みたいな開き直りが絡み合っている。あいつは単純で明快なことを複雑にするのは頭が悪いようにしか見えないという。

『Nothing is particularly hard
if you divide it into small jobs.
』

（小さな仕事に分ければ、特別に難しいことなんてない）

まさか、組み立てライン方式を思いつき、高技術者が丁寧に作っていた車を量産することに成功したヘンリー・フォードの言葉を知っているとは思えない。けれど、単純そうに聞こえても、いざやろうとすると、複雑な局面を単純に切り分けることこそが難しいのだと実感させられるアレを、生得的にやってのけるやつなのだ。

歩ちゃんてさ、もしかして本当は頭悪い？

斉藤に向かって、真顔で聞いて来るのは奴ぐらいだ。片づかないながらも、何となく定まってしまって、過去の記憶として静かに消えていこうとしている何かを、引っ張りだしてぐちゃぐちゃにしようという、そのこと自体に、納得するわけがない。

飛竜は尚更だ。あの真っ直ぐに飛ぶことしか興味がない飛竜の、

暇さえあればシミュレータに乗っているあの情熱が気持ち良くて、知りたいと思つたばかりなのだ。

そう、興味を持てばこだわってしまう割に、真っ直ぐに好きだとか嫌いだとか表現するのはどうにもしっくりこなくて……。だから……。

無理矢理、向こうから自分に関わって来ざるを得ないシチュエーションを作っちゃえばいいんじゃないの？　もしかして。

そんなことを腹黒く算段しているときに、あの例のS教官があの手紙をもつてやってきた。渡りに舟とはこのことだ。

もつとも、そんな右も左も担ぐような底意地の悪い思いつきが最初からあつたわけではない。メモリ・チップをもらった直後斉藤は、まず、自分でそれを体験してみることにした。もちろん、限りなくリアルにできている（らしい？）シミュレータの搭乗資格など持っていないから、ママ・アースラに仮想コックピットを作り出してもらつてだ。

きついと噂は聞いていたから、搭乗資格を得るための訓練用の、一番負荷を軽くしたもので試して……。ウンコの連中が、「申し餅になる」と笑い合う意味が初めて分かった。全くその通り。ぺたんこに潰されるんじゃないかと思つた。

正直、想像していた数倍しんどかった。これを毎日やりながら、負荷値を上げていって現実の数値まで底上げしていく。……。こんな事、毎日、繰り返し訓練しているやつなんていうのは、どういう神経をしているのか……。尊敬するより前に呆れた。

斉藤は、去年ぐらいから、ミスタ・シミュレータと渾名あだなされてる人物の存在は知っていた。幸いなる少数（地球育ちということ）の、

丈夫すぎる骨格にものをいわせて、毎日のように、一日当たり許されている搭乗時間の限界までシミュレータに乗っているやつ。気になりだしたのは、あのときから……。

* * *

メインAIのアースラは、その支配下であるこの学校の敷地内では、ほぼ神に近いだけのことができる。

わざわざ出掛けていなくても、仮想空間という形で、あらゆる場所を機能も含めて再現することができる。

斉藤は、管制官用のシミュレート・ブースに座って、ヘッドセットを装着して、マイクを引き下げる。スイッチが入るのが分かる。

「シミュレータ2号機、現在の搭乗者は……えっと、ミスタ・キリシマ？」

はい。君は？

どこか、怪訝そうな声だった。ああそうか、ミスタ・シミュレータ。君はこんな声をしているんだ。初めまして……。

「君がシミュレータで自主訓練してるのと一緒にだよ。管制業務のシミュレータで、そちらをたまたまウォッチしてたんですよ。今の……、トラブルは……よく乗り切ったなあ……思って、ついね。……邪魔だったかい？」

仕方がないな、というような笑い声。

いや……別に……。暇なんだな。そっちは。

別に暇なんじゃないけど。そう言おうという前に、運転手さんがしゃべる。多分、危険回避の為にアドレナリンでまくった直後で、興奮してるんだろと思ってたのに、思ったより冷静な感じのしゃべり方なんだな。

ただ、今は、ほとんど死んだかと思ったけどね、なんとかたて直せてよかったよ。ほんと、ミスタ・カワセのプログラムは怖いよなあ……。

ほとんど死んだかと思ったという言葉を、あのときの飛竜は、まるで、ちよつとその辺を走ってきましたという感じの気やすさで口にした。

「実際の船だったら、最悪、死ぬかもしれないですよね？」

若干、人の悪そうな口調で聞いてみる。

そうだね……。

彼の声はあんまり変わらない。心外そうでもなく、否定するでもない。それは、当たり前すぎる事実を偉そうに説明されたときに、別に否定できるわけもないから、聞いていますということを、取りあえず表明するためにした反応とでもいいいたげだ。

ああ、そうか……。唐突に斉藤は悟った。

彼らにとっては危険はあって当然なのだから、飛び込んでくると自体を十分に予測しているのだ。

基本的な状態として、体じゅうの細胞の一つ一つがちゃんと覚醒していて、集中力が研ぎ澄まされている。つまり危険は、突然降って湧いて出るものではなく、いつかはやってくる当たり前の出来事なのだ。

自分たちは突発的な出来事に襲われるまで、平気で鈍感なところに自分を置いているから、いざというとき興奮状態にまで体を過剰活用してやっと、どうにかこうにかおたおた反応できる。不格好にアドレナリンに支配させることで、無理矢理覚醒させて対処するしかない。けれど、彼らは根本的に違うのだ。

いざ「それ」が来たときに、どうやったらそれを上手く処理することができるのか、無難なものへとトーンダウンできるのか、あるいは回避していくべきものなのか、判断するための用意を整えてからはじめて、シミュレータに乗り込むのだ。

道を歩いていて、いきなり正面からきた人間がパンチを繰り出してきたら、人間はどうしようか盛大になやんであたふたする。けれど、リングが上がったボクサーが、相手からパンチがくることを想定しないわけがない。やつらにとってはパンチは当然くるもので、問題は、どんなものがどんなふうにくるのかだ。そして、自分や自分の体が、それをどう上手くさばける状態に作り上げ、メンテナンスしておくのかなのだ。

連中が、シミュレータに乗っている以外の時間の多くをトレーニング・ルームで過ごす意味は、こんなところにあるのだ。危険が高いことを承知で、その場所に行きたくて行く人間は、その危険を制御できる自分を楽しみたいのだ。

だから、上手くいったときにも、どつと疲れてセトロニンに癒してもらわなくてもいいのだ。もともとが些^{いさ}か動的なものの、覚醒した状態で静まっているのだから。凄^{すご}い……。

「こんなこと続いて、それでも、操船科の連中つてのは飛びたいって思うものなんですか？」

ちよつとだけ、沈黙。それから……。

この窓の外の映像つてそつちで拾えるの？

「ええ、もちろん」

ヘッドセットのマイクを指先でつまんで引き上げると、スイッチは切れる。

「mam、向ここの映像とシンクロさせて……」

管制官用のシミュレーション・ブースにあるのは手元モニターでしかないけれど、mam・アースラの仮想コックピットだから窓がある。それが、言葉がおわるかおわらないかの刹那、突然眩しすぎるほどの純粹の光りと、それから青に席捲された。

圧倒された。マイクなど上げなくてもよかった。本当に、声も出ない。

雲の領域に行く前の、この青の中の風景つて、特別だと思わない？

落ち着いているというか、まったくその辺をぶらぶら歩いているのと変わらない、普通の色をした飛竜の声だけが聞こえて来る。その声に酔う。

ずらりと並んだ計器や、意外なほどシンプルな操縦桿やさまざま

なスイッチが並んだコンソールパネル。その前に広がる窓は、普段見慣れた、コックピットそのものをモニターしている画面の中に見える窓とは大きさだけでなく、存在そのものが違っていた。

光そのものと、青そのものが、莊嚴にそれぞれの真実を謳いあげている。

光と青の見事の調和^{ハーモニー}。

青と光が体のすべての輪郭からしみ入ってくるから、斉藤は自分も青と光で充たされていくような、不思議な感覚を味わっていた。

スピーカーは沈黙したままだ。

もしかしたら、こっちが何かしゃべるのを待っているのかもしれない。斉藤がもう一度マイクを下ろそうと手をマイクに持っていたとき、もう一度飛竜の声が聞こえた。

他の連中は知らないけど、僕は、こんな空の中なら……いつだって……。

いつだって？

いつだって飛んでいたよ……

* * *

トラブルが起きることを想定してやってみれば、訓練と努力なしに、フライト・レコードをトレースしてみてもいいかもしれない。斉藤はアースラにコックピットの状態まで再現しなくていいよというのをウツカリ忘れて、あのデータを再現させて、実感として死んだ。後悔先に立たずとはよくいったものだ。

とにかく、予断の通り、あのすべての計器がお行儀よく死んでいき、手足が末端から壊死していく病を患った気分を満喫したあと、斉藤はあのと、コックピットにいた人間が目当たりにした、神がかり的な運転手さんの飛行を感じた。

いつものように、手元モニターに映るコックピットの風景の中にあるモニターでみたならば、きつと分からなかっただろうあの感じ。門外漢でも震えが来た。もし、目が見えない人が、白杖もなしに人込みをすいすいと歩いていたら不思議に思うだろう。計器にも、オートクルーズにも一切世話になれない状況なのに、自在にその大きな機体を操っている。不思議な人。

メモリ・チップに入っていたフライト・レコードは、去年学校中を騒然とさせた総合実習訓練の事故のもの。事故記録も開示されないまま、うやむやにされてしまったあのときの。だろう。それはいい。

そしてS教官、シムサップ佐久間が、なぜこれを自分に読めといったのか、その意図を斉藤は推測した。彼は自分に何を読めといったのだろう。運転手さんの凄さか？ それは違っだろう。

運転手がネッド・ソンホだったとしても、ウェイ・ソヨンだったとしても、あのときのあのオービターを運転していたものが英雄で

間違いない。

そんな人間の存在を、学校が何故隠しているのか。

そう、学校はその功労者を表立って讃えてもいない。ついでに、事故原因そのものも発表しなかった。普通なら、事故だのひやりはつと事例のデータは、だれでもトレースして疑似体験できるようにしておくのが、うちの学校のやり方だ。

「じゃあ、ほかに誰が知ってるの？」

春花の声に、斉藤は現実には引き戻される。またしても、自分の思考のループに入っていたらしい。自分のこういう周りの見えなさに苦笑するしかない。

えっと、春花に聞かれてたのは。自分の悪戯を知っている人間だったつけ。

「真木さんとソヨンさん。あの二人には、オリジナル・カワセ・オーダーを予告しておいて、それを自分が改竄できたら、協力するようにつて、頼んだからね。だから、まあ多分、ミスタ・クロスフィールドも知ってるかな……。もしかしたら、MSの結城昴さんもかな……。あの人は、人付き合いそつなくこなすタイプみたいだから、真木さんが自分たちサイドの人間としてハントしている可能性はあると思う。もう一人のMSの須賀さん、あの人はあらゆる意味で一匹狼的な人みたいだから、知らないと思うけど……。」

「つまり、私たち以外はみんな知ってるってこと？ お前どっちが味方だと思ってるの？」

「第一目的での味方は君達ゴールデンたまどんクルーで、第二目的では、先輩方バリバリのSランククルー」

「第一と第二ってなによそれ。全然分からないよ。あんたが何をしようとしてるのか」

ついに斉藤は、春花の中で「お前」を通って最速で「あんた」にまで降格したらしい。

「あのねえ、今回のゴールデンたまどんぶりクルーで、ややこしい先輩たちを攻略しようって趣旨じゃなかったのかしら。局面が分裂して、向こうとこっちで情報がモザイクになってんのよ」

春花の眉間が完全にしわしわになっている。可愛い……と思う。多分。

「つまり……あれだ。単に色気をだしすぎた……」

「色気？」

「飛竜に、協力してくれって言わせたかった」

「へ？」

春花の眉間のしわが深くなる。

「どういうこと？」

どこから話すのがシンプルなのか、少しだけ斉藤は考える。

「実はね、特別課題と称して、うやむやにされてる去年のアレの真相を、探ってみろって佐久間教官にね、宿題を出されたんだ……」

第一目的はそっちね、一応」

「……佐久間教官が何で？」

「それは分からない。だけど、調べていて、去年の事故には事実以外に真相とやらもあるらしいことだけは分かった。コックピット・クルーだった三人のうち、二人までが休学と転部しているて、その休学しているのが、あのパーフェクト真木の恋人だったって話。そ

「なんは春花の方が詳しいんじゃないのかな」

春花は頷く。事故の記録を隠蔽するなんて、うちの学校とも思えないやり方だ。そのうちいつのもように記録をライブラリに出して来るだろうとたかをくくっていたのだが、事故に対する噂が落ち着いた後も、いまだに記録は公開されていないし、データ化もされてフライト・レコード・トレース用ライブラリに載ってきてもいない。

コマンダー

「それで真相に近付くために、まずCDRネット・ソノホに会おうと思ったんですね。下っぱをつついてるより、一番早いでしょ？」

「斉藤らしいけど……、あの人学校に来てないじゃない。珍しくアクティブになって、彼の部屋にでも突撃かけたの？」

「行こうと思ったんですけど、無駄足はいやだったんで、ちょっと調べたんですよ。場所とか、通話記録とか……」

春花の目が冷たくなる。

「あんた、それ犯罪じゃん。あのさ、いつもそんなに簡単に他人の個人情報にアクセスしてるわけ？ 常習犯だったら警察に突き出すわよ」

「怖いな。そんな面倒なこと必要がなければしないよ。第一、そんなに暇じゃない」

春花が目細めてにらんできた。

「いい？ そんなこと今度したら、警察じゃなくて、ミズ・ウィーに直接チクるからね。クレイジーレベルで大好きなアースラと生き別れになるがいい」

「それひどいよ。春花。二度としないよ、そんなに暇じゃない……痛っ」

春花が思いつきり、斉藤の手の甲をつねった。

「あんたはもう、良識っていうのと少しは馴れ合いなさい。そうい

う問題じゃないの」

斉藤は、かわいそうな右手を引つ込めて、左手の中にしまいこんであげてから、これみよがしに春花の目の前でやさしくさすってやった。

「つねる……というのは、攻撃者自身のダメージがないので、陰湿なものに分類されるようですよ。春花さん」

「このくらいしないと、目がさめないでしょう。キサマは」
えらい言われようだと、斉藤は慚然となる。

「まあ、そんなわけで、話を戻すと、ネッドさんはここにいなかったんですよね。だから、何かいい手がないか考えてて思いついたのが、真木さんを入質にとっちゃおうかな、なんて……」
「どういうこと？」

「だって、真木さんの彼なんですよ。真木さんが危険に曝されたら、飛んでこないかなあとか思ったの」

「……頭痛い。ごめん、一度自分の体、鏡で観察したら？ 斉藤なんかはどう頑張ったって、あの人を危険な目にあわせるなんてできないでしょうが」

「まあ、もちろん私なんかには無理ですね」

「だって、今、真木さんを危険な目に遭わせるって……」

「だから、そんな面倒なこと、自分でやるとでも？」

春花が目を見開いた。

「ま、まさかとは思うけど……飛竜のCDRって……っ」

「さすが春花さん。ご名答」

さすがの春花が二の句を告げない。

「彼のフライトに惚れちゃったんだけど、ほら、これでいてけっこ

う私は内気なんですね。向こうから、取りあえずこっちに、協力を要請せざるをえないようなシチュエーションを作り出して、そんなに彼を追い込もうかと思って……。そしたら、お友達になれるかな、なんて。いいアイデアだと思ったんだけど」

罵倒しようと口を何回が開きかけて、それから春花はどどつと脱力した。自分みたいな常識人の感性で、こいつに何をいっても始まらない。

どうして、こいつは、「お友達になってください」と素直にひと言いえばすむことで、こんなに周りを巻き込んで爆発物をばらまくようなマネをするのだ。

「そーれーで？」

乗り掛かった船というやつかな。春花声を低めて、それでも先を促した。

「ごめんなさい」

斉藤は悪びれたところが薄い、いけしゃあしゃあとした表情で、それでいていかにも『怒ってる？』という目つきになっている。春花は思う。これだけとっつきにくい印象なのに、ちゃんと直接ぶつかれば、こんなふうに素直というか、調子こいて甘えて来るのだから始末が悪い。ついでに、この男は面倒くさがりなだけでなく、規則・規範などというものの存在は認知しているものの、自分がそれに縛られなければならないなどと思ってもないようなのだ。

浅い付き合いだけど、タカはそういう意味では信頼していい。あいつは法律なんかで縛られなくても、誰かを傷つけたり、奪ったり、領域に侵入したりということはしないと思う。飛竜のことはまだよく見えないけれど、どちらかといえば、その点ではタカに近いと思う。

一番信じちゃいけないのが、この男だ。こいつは、出無精の面倒くさがりの、偏執狂で、アースラ狂いでいるから世間に迷惑をかけるだけ、興味の対象に近付くために法だとか常識だとかの障害が立ちちはだかっていたならば、そんなもの無視するようなやつなのだ。

いったい、どういう育ち方をしてきたら、こうまで迷惑な存在になるのかがよく分からない。とにかく、斉藤にはまともな善悪の判断力を持っていない。だれかちゃんと善悪が分かる人間がついていてやって、はみ出す方向に向いでしたら、首に綱をつけて方向転換させてやらないと、非常に危険になる。それは確信できる。

そういう意味で、春花にしてみれば、斉藤がまっとうなタカとつるんでいることは、非常に世界のために正しいことのような気がするのだ。これで飛竜もそういう方向の人間だと確認できれば、危険物に安全ロックが二重に掛かったのと同じだからめでたいことこの上ない。ダイナマイトだって、元をたどれば過酷な労働に苦しむ人間を救いたいと開発されたのだ。危険そのものの斉藤だって、使いようで世間様の役に立たないとも限らない。

「一応聞いてあげるけど、それで、私がSチームのクルーというのは、斉藤の冗談？ それともミズ・ウィーのオーダー？」

「ミズ・ウィー。もちろん」

「で、『あ・ん・た』なんかはSチームのクルーっていうのは、どっち？」

「……私」

春花がぐいと斉藤の胸ぐらを掴んで揺さぶった。

「あんたは、何で、そんなややこしいことするのよ。私は、斉藤が第一管にシフトされていの見たとき、あんたのために怒ったんだからね。どうしてそうじゃあじゃあと。……何でそうなのよ。あんたってば……。そりゃ、自分から管制やりたくて、ここに来たんじゃない」

ないっていうのは知ってるけど、それにしても、そこまで一管を毛嫌いすることないじゃない。ミズ・ウィーのお世話になってるくせに、アンタが未来のスター目指さないで、どーするのよ。この恩知らず」

何で春花が怒っているのか、斉藤には見当もつかない。そして、言い訳を重ねた。

「第一、授業も、ミズ・ウィーのゼミも、ほぼばっくれてるんだから、今更何食わない顔で、一管行ったって、スター森崎にしたら迷惑だよ」

「他にもうちよつとマシな言い訳はないわけ？」

春花の顔がせまっていた。タカのまねっこをするなら、キスができるぐらいの近さだ。だけど、タカがどうやって、この距離を速攻で埋めるのかよく分からない。

そんなことを妄想したせいで、斉藤はちよつとだけ照れ臭そうに言いよんどってしまう。それから……。

「……飛んでみたかった。一度だけでも、その、春花さんとか……タカとか、飛竜とか。私だけ第一管で、なんか仲間外れ……だし。という理由じゃ……だめ？」

ちよつとだけ春花も間をおいて考えて、それから叫んだ。

「当たり前だあゝっ」

25・青い連中

去年の例の事故について調べているので、話を聴きたいんです。御迷惑は承知していただけますけれど、何とかお時間いただけないでしょうか。

こちらが訪ねていくのと、外でお茶でも飲みながら話をするのとどちらがいいかを、春花の基本技の中には入っていない技、可愛い女の子光線を放射しながらコールすると、キム・チョルは意外なほどあっさりと、外でなら会おうと言った。

もし、部屋に来说いと言われたら、一応「あんなの」でも性犯罪抑止力として機能するはずの斉藤と行くという打ち合わせになっていたが、そこまで警戒するまでもなかったようだ。

人を怒らせないしゃべり方ができるのは、絶対に自分の方だと、自らリサーチに行くといった斉藤を思い止まらせ、春花が動くことにしたのは、彼女自身が斉藤の話をじっくり聞いて、斉藤の推理が正しいのか、全く間違っているのか知りたくなったからだ。

真木さんは……、去年の事故のとき、ネッドさんは自分が何もできなかつたことに絶望して学校から逃げていると思っっている。

ネッドさんは、そんなものは軽々とこなしながら、真木さんに対する劣等感と、恐らく自分の能力そのものに絶望して逃げている。

そのねじれ現象が生じているそもそもは、あの事件自体の真相を知らない、上手くストーリーに乗らないんだ。

そんなふうに斉藤は言った。

別にね……。あの人たちが単純に喧嘩別れをしてるなら、私たちが口を出すことじゃない。というか、出したってどうにもならない。だけど、ネッド・ソンホが逃げている理由と、真木さんが追わない理由がそもそもすれ違っていることが、事件がうやむやにされている所為で、この先、永遠にすれ違ったままになるなら、勿体ないと思わない？

「ネッドさんを引っ張りだすだけで、どうにかなるの？」

どうにかなるというより、半年以上になるお互いの不在が渴望にならないなら、別に会ったところで何も起こらないと思うんだ。だけど、お互いの不在が本人たちが気付いてないレベルで魂からの欲求不満になってたら、もう一回会ってみるだけで案外うまくいくんじゃないかな。

あのととき、斉藤の表情はたしかに笑っていた。その微笑みは穏やかという言葉が似合っていた。ひやかしてもなく、押しつけがましさもなく。確かな根拠の裏付けをもたない確信犯とでもいおうか……、何とも表現しにくい不思議なものだった。

女の子というものはだれだって、だれが見てもお互いに好き合っているくせに、距離を詰めきれない人たちをみたら、ちょっと一肌脱いでみたくなる。

たとえば、偶然の出会いを演出してあげたり、大勢で遊ぶ企画をたてつつ、こっそり二人きりシチュエーションを演出したり。そう、恋の神様をしゃれこみたくなったりするのは、いつだって女の子だ。こいつは男のくせに、本当に変わっている。

クピドもどういいう見で、こんな人間をその使徒に選んだのだろうと思うと、春花も呆れて笑うしかない。

最初に存在を知ったとき、斉藤というのは冷たい男だと思っていた。才に溺れ、人を見下し、誰からも距離をおいて、孤独でいることに恐怖もためらいもない、そういう存在なのだと思っていた。

けれど斉藤は、ただのマニアで、自分が興味を持っていることだけに夢中になる、それを通して思っている幼稚な子供。それもとびきり頭だけはいいい。なのだと思った。人にはそれぞれに思惑もあり、どうにもならない感情もあり……そういったところに、とことんデリカシーがないやつなのだと思っていた。

それから、もう一度春花は斉藤を見つけた。斉藤はたまごはたまごでも、存在としてあったかいたまごどんぶりなんかじゃなくて、半熟ゆでたまごなのだ。硬い殻を砕いて剥がして捨てて、ぶあつい白身を食べながらむいて……。そのあとはじめて、柔らかくて、ほっこりあったかい、とろりと美味しい黄身が食べられる。

「たまごんの具に、半熟ゆでたまごって合うのかな？」

春花がいささか唐突にそう言ったとき、斉藤は、斉藤のくせに、こいつは何をわけ分らないことを言い出すのだ、みたいな顔をした。

斉藤は、去年の事故のことをもはやそうとは呼ばず「事件」と言う。探偵でもきどっているつもりなのか知らないが、学校は事故なら隠す必要はなかったはずだというのだ。

「春花、データってね、結局は同時並行であつたり、錯綜していたり、因果関係があつたりなかったりする、いろんな物語を、ある瞬間で切り取ったものにすぎないと私は思うんだ。だから、何が起きているのか、あるいは起こったのかを知りたければ、データを細

切れのまま並べてたんじゃ埒が明かないですよ。真実なんてそんなものは、関わった人の分だけありますからね……。真実なんてそんなものはないんだから、本当はだれも知りようがないんですよ。だから物語に出て来る探偵って連中がやってることは真実の解明なんかじゃないですよ。その出来事に振り回された人間が、なぜそんなことが起こってしまったのか納得できるように、物語を組み合わせるストーリーを立てて見せること。その一面的な解釈を多くに、……つまり納得したがつている解答が欲しくて飢えている当事者じゃなく、その事件を見ることができるギャラリーまで有無を言わさぬストーリーを組み立てられるのが……名探偵なんだと思うんだ」

斉藤は普段は寡黙だけれど、スイッチが入ってしまうと、こうやって、うっかり説得させられているような物語をさつさと組み立てる。名探偵の解釈にうっかり納得してしまってから、春花は考えるじゃあ、斉藤は名探偵の要素が十分なの……？ でも、それはちょっと違う気がした。

「じゃあ、学校は何を隠しているのか」

こうなると、斉藤を止めるのは難しい。しかたなく、春花は先を続けろというふうに小さく頷いて見せた。

「まあ、常識的消去法でいったら、未成年の犯罪……これしかキーワードで残らないと思うんですよ、私は」

斉藤はやっぱり止まらない。

「人的損害がなかったからこそ、公にすべき事件ではなくなったものの、一つ間違えたら六人の学生が死亡という大惨事になっていた。ハード系の予期できぬトラブルであつたなら、それこそ事件の全容を公開してメーカーに改善と補償を求めるだろうし、そんなトラブルを学生が見事、自分たちの技術で乗り越えたなら、学校としてはこれだけの教育力があることを、学生の就職先である企業にアピ―

ルできる……違いますか？」

春花は今度も頷くしかなかった。無理やこじつけの感じられない説明。言われてしまえば、そうねと、納得してしまう。そう、斉藤が言うところの多くが納得できる物語ストーリーというものだ。

もう一つ意外なことに、斉藤はたまに止まって、春花が同意を示して頷くの待ってから続きをしゃべりだす。一人で勝手に言いたいことをほざいているのではなく、同意のしるし、あるいは異議の気配を確認しながら、段階を踏んで続きに行っているのだ。

丁度いいところに来た。ちょっと私の推理を聞いてくれないか？

どこか極端に無理があつたら指摘してほしい。

そんなのその場凌ぎの意味のない言い抜けだと思ったのに。斉藤は自分の考えたストーリーを春花が納得できるのか検証しているように見える。……これって、もしかして、私という人間の物差しで、自分に無理や乱暴がないか確かめているってこと？ ……で、そういう良識の部分を頼られてる？

そう考えると春花は少しだけ、嬉しくなってしまった。そして嬉しがっている自分が非常に心外だった。こんなやつのが分かるような変人にだけはなりたくない。

「学校が黙っている。つまり、ハードのトラブルの可能性はこの段階で限りなくゼロです。すると、犯罪……という意識はもしかしたらなかったのかもしれないけれど、事故は何らかの人為的原因で引き起こされたということになる。……それからもう一つ、本来、休学届けがあつたところで、退学勧告が出されても奇怪しくないほどにも休んでいる、キム・チョルと、ネッド・ソンホを、勝手に休学

扱いにしています」

「……正式な、休学願いすら出ていないってこと？ その二人からは」

齊藤は頷いた。

「これも多分で、予断だらけなんですけどね、彼らの技術そのものには、全く問題はないんでしょう。そして、つまらないケチで本来真っ直ぐ育っていくべき芽が萎れて潰れていく事態を招いた不手際を、学校自体が忸怩^{じくじ}たる思いでいるのだと……そう思っんです」

春花は考える。故意によるトラブル。未成年の……。コックピット・クルーの冷静な操船があつて結果として、死人どころか怪我人も出ていない。フライト・クルー全員が死亡するよう悲惨な事故になつてしまいかねなかつた事態を回避できた。Sランク評価をえられるほど優秀だったMSとはいえ、事実上放校されているのだから、ほぼ間違いなく、その二人のどちらか、あるいは両方が原因と見ていいのだろう。

「多分ね、精神的に病んでいたのだと鑑定されるか、医師の診断があれば、学校はその犯人を、悪として糾弾できない。彼らの未来のために、沈黙することを要求される。だから……、原因を作った人間を守るために、最悪の事態を回避することに寄与してくれた人間の方に、沈黙を要求した……んじゃないかな……と、思っただけど」

「えっ？」

春花は聞きとがめる。

「ソヨンさんを黙らせているのって……学校なの？」

「そうじゃなきゃ……これだけの長い沈黙の説明がつかない。ネット・ソノホに止められたから、真木さんにしゃべらなかつた。そう、ソヨンさんは飛竜に説明したそうですけどね。最初はそうだったとしても、ネット・ソノホと真木さんの関係を知っていて、応援して

いる立場であつたら、ネッド・ソンホの不在で不安が大きくなつてきているはずの真木さんに、実はと打ち明けないのは筋が通らないんです。彼女自身がネッド・ソンホに惚れていて、真木さんに意趣があるのだとしたら納得できますけれど、それだったら、今度はこないないチャンスが転がっているのに、彼女が失意のネッド・ソンホに接触しないのは、もっと、奇怪しいでしょう？ 真木さんがへたれかけているのは、あのタカの最近の懐きようからみると、明らかなんだし……」

ぶつと春花は小さく噴き出した。斉藤はなんでも利用するやつなんだ。タカは人の元気のバロメーター扱いなのか。

「で、確認できている要素から私が組み立てた物語は、説得性のあるものですかね。それとも、妄想の産物に過ぎませんか？」

「……無理はないと……思う」

少しだけ時間をかけて脳内検証してから春花が言うと、斉藤は僅かに頷いて、視線を空へ飛ばして、何か考えるふうになった。

「……仕掛けをした……ってほどじゃないですけど、一応、真木さん人質作戦は、ネッド・ソンホが学校に未練もあって、真木さんの現在の動静にも留意しているという前提で組み立てたんですけど、このままじゃ、完全な不発弾ですよ。こつちを見てないんだから脅しにすらならないよね……。やっぱり、成績だろうと、命だろうと、真木さんのために動こうという気になつてもらうためには、現状をつきつけてやらないといけないんだけど……さて、あの人はどこにいるんだろう」

「無責任野郎……」

「……すみません。まさか、あの人がこつち見てない可能性まで、想定してなくて」

「頭回りすぎるだけで、そう見えないだけで、結構間抜けなのよね……。斉藤って」

斉藤はくすつと、彼には珍しい笑い方をした。全く、タ力といい、春花といい。自分がどこまでも無能みたいじゃないか。まあ、当たってるけど。

「検証」

春花が言ったとき、斉藤はどういう意味か一瞬把握しそこねた。

「え……？」

「斉藤、あんたが言ったんでしょうが。妄想で片づけていいぐらい取るに足らないストーリーなのか、その路線もあり得ると過程して検証していい程度のものだと思うか」

「……あ……」

やっぱり斉藤はどこか子供だ。夢中になると、そもそもなんでそれをやっていたのかを忘れて熱中してしまう。その話をしてたんじやないのか、今は。春花は呆れた。でも、この集中力があるから、きつと斉藤なのだ。

もう一人のこの部屋の住民を春花は自然と思い出した。子供っぽい童顔で、いつも満開の笑顔で、子供のノウテンキの代表格で噂されるタ力が、知れば知るほど生きているということに真摯すぎる、どこまでも青く静まった魂で満たされているのだと思う。そんなに大層なもんダイヤモに譬えてやるのは勿体ないが、タ力の芯にあるのは金剛石ダイヤモンドに似て、ひんやりと冷たく、綺麗で硬く、それでいて美しくて女を惹き付けるモノだ。どんなに叩いても、どれほど酷く扱っても、簡単に壊れてしまったり、傷つけたりすることさえできないほどに。つまり、繊細なのは見掛けだけで、めちやくちや頑丈……そんな感じ。

情報を貪欲に飲み込んで、のみならず、使える状態に常にしておけるといのは、斉藤レベルになると異能といっても過言でない。思考そのものに関しては巨人の卵だというミズ・ウィーの評価は間違っていないと思う。斉藤は、自分たち凡人の努力を嘲笑うかのよう

に、やすやすと高みまで飛ばたいいく。
けれど、その思考の飛ばたきの奔放さを宿めて制御するには、余りにもまだ子供なのだ。まだまだ大人になりきれていない自覚がある自分さえよりもずっと。なぜなんだろう。この人は、なんでこんなに、アンバランスで……ほっとけない。

* * *

「ふん……本当にいやがった。で、……おまえ、誰だ？」

声が降ってきて、春花の思考はそこで現実に戻った。顔をあげると、斉藤に見せてもらった証明写真と同じ顔があった。キム・チョルは、病氣療養中というわりに、元気そうな顔色で、公園のベンチに座っていた春花の前に立ちはだかっていた。

「NeXGas三年次履修生の、崔といいます」

「学校のお使いじゃないよな、まさか？ 俺は、何度慰留されても、もう戻る気はないって言ってるし」

ああ、やっぱり。斉藤、学校はこの人の才能を惜しんで、帰って

来るように、さんざん働きかけてるみたいだよ。春花は思った。

「なぜですか？ 私も惜しいと思います。Sランク評価を受けるだけの才能がおりなのに……」

「才能？」

キムはどこか自虐的に笑った。

「無理だからさ。俺には、向かねえ」

「どうして……ですか？」

「向かないに理由があるか？」

「まあ、それはそうなんでしょうけど。でも、今日私が来たのは、別に慰留とか、そういうのじゃないですよ。学校も関係ないですし……」

「だったら、尚更、何の用だつてんだ？」

苛つているのか、キムは初対面の春花にも言葉が荒い。

「教えてもらいたいことがあったので」

「教えてもらいたいこと？ ああ、そういやコールのとき、練習航海のこと聴きたいって言ってたな。だけど、今更だ。確かに、あのクルーに選ばれたんだ、俺だって、そこそこの腕はあったさ。今だって、船外活動しろって言われたら、やってみたいさ。多少のブラシクがあったところで、Aレベルの連中程度に動ける自信はある」

「だったら……どうして。学校が、あなたの才能を惜しんでいることは、一年近くになる今も、通常の退学勧告どころか、成績評価も凍結したままです……」

春花が言つと、キムは大げさに溜め息をついた。

「だけど、だめだ」

「何がどう？」

「薄皮一枚に等しい、宇宙服着ただけで、エアロックから零れてい

く度胸つてのが、失せちまったのさ……完全に」

「どうして……ですか？」

キムは春花をほとんどにらみつける勢いで見た。

「ここに来るんだ。ある程度のことは知ってるんだろう？ 駄目に理由なんてあるかよ。あんどとき、俺はもうだめだと思った。地獄の釜が蓋開けてんのを、俺は覗いちまったんだからな……」

「地獄の釜が蓋を開けてるのを、覗いた……ですか。オーバーな表現ですね」

「オーバー？ ふざけるなっ」

いきなり、キムに声を荒らげられて、春花は首をすくめた。

「いいか……。あのとき……船が、自分たちが、ゆつくりと死んでいくしかないのが俺には分かった。あのまま為す術もなく、ただ永遠に続くかと思えた轟音の中で、終わりが来ることに怯えた。終わるその瞬間まで、何もできないことに怯えたんだ。分かるか？ 俺は思った。このまま死んでいくんだ……。ってな。こいつはオービターなんて乗り物じゃなくて、威勢よく燃えてくだけの棺桶だってな……」

それから、急に怒りをしばませた。

「俺だって……アストロノーツになりたかった。でも、怖いんだ。情けないぜ、どうしたって体が言うことを聞きやしねえ。ほんと……ぶざまなもんだ」

ふいっと、春花そのものと話すことに興味を失ったような形で、キムは踵を返した。春花は少しだけ迷った。怖いに手綱をつけられ

ずに見えるような仕事じゃないのだ。異常に厳しすぎる制約を設けている学校が言う通り、この世界は、そんなに甘い商売じゃないのだ。怖いが冷静を縛ってしまえば、命さえ落とす。周りを巻き込んで。

惜しがりつつ、学校が無理強いをできない理由も分かる。「とにかく、続けてみる」と言えるほど安全ではないのだ。命綱と宇宙服だけで、宇宙空間に出て行くというのは。

「学校は……待ってるんです……」

ひと言そう背中に告げるのが、春花にできた精いっぱいだった。キムの足は少しだけ止まって、それから肩まであげた掌を、ひらひらと振った。さようならなのか、分かったというサインなのか、まあ、それは分からないけれど、このつぶやきがキムに聞こえてよかったと春花は思った。

* * *

「お疲れの所申し訳ありません。お話をきかせてもらいたいんですけど」

操船科の学部棟の中から、専攻を航宙に変えたマックスウェーバー・ジョージ・Rを探すのは、顔と生息域がわかっていても大変だった。斉藤は、結局、真木に初めて接触したときと同じように、シミュレータに入ったタイミングで、目当てのシミュレータに行くことにした。

「お前は誰だ？」

思い切り、警戒心のある顔。同じ学生なんだから、そこまで構えなくても、と斉藤は思った。

「斉藤といいます。あなたは、あのフライトでネッド・ソンホさんと一緒にいたね」

ああ、その話かという顔になってから、彼は首を振った。

「……その話なら、事故調査委員会でもお釣りが来るぐらい話したよ。もう話すこともないだろうし……話したくもないね……」

当然といえば当然だけれど、事故調査委員会は搭乗していた人全部に事情を聴取したのだ。だから……聞かれることはないというのは分かる。けれど調査記録はオープンになっていないのだから、彼の声は残っていない。オープンどころの話ではない。アースラそのものから削除されたか、外部のメモリ保存庫に隔離されたかしている。

斉藤は食い下がった。

「ほんの少しだけ、話をする時間をください。お願いします」

「何でだ？」

「彼を、つれてこないと、飛べませんから……」

ジョー・ジ・Rは、ああ、という顔つきになった。

「ああ、そういや、そんなだったな。特別温情でさぼり続けてるくせに退学にもならないソンホさまを、いい加減に休暇から引っぱり戻そうって魂胆だよな、あれはどう見ても。それで奴の名前がペーパーCDRんところに入ってるなんて、川瀬らしくもないやりようだけど、まあ、あれであの人は黒くもなれる人だからな。で、そんなやつの下に付ける、付けないで、ウェイが真木とガチンコしてたよ

な、珍しく」

同じ航空から足を洗っただけで、操船にいることには変わらない彼は、そこそこにあのクルー組みのときのすったもんだを見てたのだろう。

「ええ、でも、このままではコールがかかっているのをネッド・ソンホさんに気付いてもらえませんか、居場所を探してるんですよ」

「そりゃ、問題ないんじゃないか？ 心配するな」

ジョージ・J・Rはあつさりと言った。

「奴の居場所はミスタ・カワセが知ってるし、自分で実習船訓練のメンバーに入れたなら、連絡ぐらいするだろ。それで、奴が来るかどうかまでは、分からないけどな」

「ミスタ川瀬は、ネッド・ソンホさんの居場所を知っている……のですか？」

「というか、学校止めるって言った奴を川瀬が引き止めたのさ。幾らなんでももつたないってな。俺もそう思うよ。俺たちが今こうして生きてるのはあいつのお陰だ。学校にしたって初の死人を出さないで済んだのはソンホの功績だからな、つまり……学校としたら奴に恩義を感じてるってことだろうな」

死人を出さないで済んだから、学校が恩義を感じている。今、彼はそういった。斉藤は心の中で呟いた。

B I N G O

「とにかく、俺には今更しゃべることは、何もない……。ミスタ川瀬は、ネッド・ソンホの居場所を知っているし、奴がヘッドとして

の役割を充分果たせなかったとはいえ、学校は、死人を出さなかった奴を、相変わらず高く評価している……」

斉藤は自分の推測がほぼ正しかっただろうジョージ・の言葉に浮き立ちそうになって、すっかり聞き逃しそうになったひと言に、なんとかひっかった。

「ヘッドとしての役割を果たせなかった？　ということは、ネッド・ソンホは……、見事な運転をした他になにかしでかしてたんですか？」

少しジョージ・は考えるふうだった。この斉藤というわけのわからない男が、何を目論んでいるのか分からないからだ。けれどスクールの実習初回生ならば、飛んでの失敗ならまだしも、クルー揃わずでの不発じゃあ我慢ならぬだろう。

「逆さ。……何もなかった……のさ」

何もなかった……？　真相は、それ……か？

「おっと、しゃべりすぎた。箱口令、箱口令……」

ジョージ・がおちゃらけて言うのに、斉藤は目を細めた。やっぱり……彼らは、口止めされている。そして、ネッド・ソンホのあのフライトを知っているから……、彼がこのまま学校をドロップアウトしていくのを惜しいと思っている。

「じゃあ……一つだけ、イエスカノーで教えてください。二度と顔をここには出しませんから、一つだけ」

「なんだ？　こっちはシミュレータ上がりで疲れてるんだ。イエス・ノー一つぐらいなら答えてやるからさっさと試ってみろ」

一つだけなら……これしかない。斉藤はためらわなかった。

「事故の原因は……人為ですか？」

ジョージ・は、怯んだような、いかにも厭そうな顔になった。

「いやな質問しやがるな……」

斉藤はそれには口を挟まなかった。自分でも厭な質問だということとは分かっている。

「オーケー、オーケー。全く、厭な野郎だな。二つ目の質問しやがったら、死んだ方がましだったって言わせてやるからな。イ・エ・ス」

もう絶対にしゃべらないと全身で表現するようにして、彼は斉藤に背を向け、つかつかと歩み去っていった。斉藤は反復する。

イエス……。

人為……？

イエス。

その前に彼はなんて言ってた？

何もしなかったのさ……。

ネッド・ソンホ、彼にとってあのフライトが問題だったんじゃないんだ。斉藤は確信した。あれは彼にとっては、呼吸をするほどに自然なこと。翼がある限り、飛ぶのを諦めることはないのだから。

だけど……彼は自分に絶望した。

なぜなら、人為で……事故が……起きたから。

クルーの人間が、自分の命もなくなることを承知で、事故を起こしたから。

そうなるまで、何もしなかったから。

何もしないのは……神様って奴のいつものやり口

なんて間抜けなんだろう。佐久間教官……。あなたは、とっておきのヒントを、一番最初にくれてたんですね。

齊藤の脳裏に、あの宿題を自分に渡したときの佐久間教官の顔が甦った。

読んでご覧。

アイ・サー。ミスターS。ネッド・ソンの居場所は川瀬が知っている。なんてことはない。振り出しに戻るって奴だ。

結局、全ては川瀬教官が知っている。ということは、そんなことは佐久間教官だって知ってるってことじゃないですか。

んじゃないで、ミスタ佐久間はこんな問題を出したのか。

つまり、厭ったらしさで学生に評判が悪いにも関わらず、あなたは、ことなかれ主義の学校の決着が気に入らなかった。

それでいて、ウェイ・ソヨンやジョーgerのように学校で頑張ってる面々のためには、事実を隠蔽しようとしている学校の選択は正しいことだという判断もあった。事実を大っぴらにすることを望まなかったし、かといって、ネッド・ソンホはじめSクラスの学生たちをいじけたままにもさせたくなかった。

ミスタ佐久間、あなたって案外先生なんですね。

変だな。斉藤は不思議な気分だった。あの人に利用されたって分かった今も、なんだか、それを怒る気になれない……。佐久間教官が目の前に立って、データをちゃんと読んだ自分に微笑んでいるような気がしていた。

シムサップは悪魔だけど、勢い余って、コウモリ風悪魔羽だけじゃなくて、昆虫的に対仕様ってカンジで、天使の羽ぐらい、もしかして、隠して背負ってるのかな……。

それで……佐久間教官。……私は、事実を知ったら、どうするんですって。

何かしたくなるんですけど。

おまえは何かしたくなるさ。……青いからな。

佐久間の声が確かに聞こえた。

「ミスタ佐久間。あなただって、まだ随分青いじゃないですか」
斉藤は思わずそう呟いたのだった。

26・エウレカ

斉藤が操船の人間をつかまえるのは、すっかり、このシミュレータの扉が並んだ、駄々長い廊下になってしまった。やはり総合実習のクルー組みが発表になれば、その顔をみれば大体、招集日^{メンツ}に渡される課題航路が予測がつくというものだ。このところ、ずっと、シミュレータはご盛況で、ほぼフル稼働状態だ。

機械が動いている音。あの扉とびらの向こう側で、たくさんの人が、それぞれの課題に立ち向かっている。人の分際で鳥に憧れてしまった人たち。そして、鳥の分際で人に生まれてしまった人たち。

いつだって飛んでいたいよ……。

何時間

何十時間

何百時間飛んでる？

飽きる様子も見せず、暇さえあればシミュレーターって奴は、いつも動いてる。

的確な判断も、未熟な判断も、全部飲み込んで、動いている。うまくやりすごしたり、乗りこなしたり、死んだりしながら、みんな何度も何度も馬鹿みたいに、繰り返し返す。

いつも。いつも。何度も……そして、何度も。

なぜか飛ぶように生まれついてしまった人たちが、いつだって飛んでいたい空……。そうさ。僕だって、一度ぐらい飛んでみたかった。

だけど、諦めていた。私は鳥じゃない。飛ぶのを楽しむ鳥になりたい人もいれば、羽ばたく彼らを見ているだけで満足する人もいる。でも、最初からできないと諦めている、鳥になりたいと言えない、臆病者もいる。

やろうともしないで、やろうとすることそのものを、無駄でムリだと、思い込もうとしていた。無邪気でいることを、否定して。

シミュレータが止まる。もうすぐ、あの人が出て来る。疲れたような、興奮の余韻を残している、特有の顔つきで。

シミュレータの扉が跳ね上がる方向に、ゆっくりと開く。

「ウェイさん……」

数段の階段を降りてくる途中の人に斉藤が呼びかけると、がっしりした人達が大量に生息している中で、埋まってしまうような小柄な……ウェイ・ソヨン。

「あんた、だれ」

そうだった。あの人には直接まだあったことがなかった。こっちはずーっと、あなたたちのことを考えていた。だから、初めてという気はしないけれど。

「私は斉藤と言います。あなた方の噂の俎板には、相当乗っている自信があるんですけどね。……Sと名乗った方が通りがいいかもしれません」

「あんたが、S？」

Sをどんな男と想像していたのかわからないけれど、ウェイはとまどった顔をして、それから決意したように斉藤を睨んだ。

「それで……何しに来たの」

彼女は、すべてのぶつけようがない思いを抱え込んでいた。大好きな人達に、甘えてなつくのは簡単だけれど、大好きな人達から理不尽に拒絶され、筋を通しているつもりが、混乱しているあなた……。斉藤はがんばって微笑んでみた。春花に向かってそうすることができたのだから、ウェイさんにだってできるはずだ。

自分は、二度と微笑んだり、笑ったりしてはいけないと思っていた。大好きな人のために、何をすることもできず、ただ、生き残った自分には。けれど、自分を励ますように寄り添ってくれる人はいつもいたから。一度だって、ずっと孤独だったことはないから。

「ウェイさん、あなたが理解していないことを、教えていただきにきました」

「あんた、馬鹿？ わたしが理解もしてないことを、どうやって教えられるのよ」

そうですね、私は馬鹿だ。

「理解してないだけで、あなたは真実を見ているのだと思うんです。それを是非」

「……何がしたいの？」

「あなたは、コックピットの2ndドライバーシートで、操縦桿を手にしていた。優先権のない、コマンドーの操作をそのままに伝えてくるだけの、棒つきれみたいな……それを。違いますか？」

ウェイの顔が一層険しくなる。

「そうね。パイロット・シートの操縦桿は、棒つきれと同じだわ。で、そうだったとしたら……。そうだったら、どうだっていうの？ 私がネッドさんが獲るべき称賛を、奪ったいいタマだっていいいの？」

「そんなことは、思ってませんよ。私と話すのがいやだったら、もしくは、あの人から口止めされているなら、頷くか、首を振るかもなくていいですよ。ただ、聞いて欲しいんです。あなたに」

斉藤は険しい顔を続けることもできずに、迷子みたいになっっているソヨンの顔を見た。

「黙っていると、誰にも言うなど、あの人自身が、ウェイ・ソヨン……あなたに……言ったのですよね。生きて、地上に降り立つことができた、あなたたちが、惜しめない称賛と感謝を渡そうとするのを受け取ろうとせずに……」

少しだけ、ソヨンは目を閉じて、通路からはのぞむべくもない大空を睨のうちに眺めているふうになった。あの瞬間を思い出し、青に瞬間ひたって、それからもう一度目を開く。そのとき、彼女の瞳の中にあつた鋭い刃は、もはやそこにはなかった。

「見てきたように、断言するのね……」

つぶやいたときは、僅かな苦みを含んだ笑さえ浮かべていた。

「何もかも破壊するつもりになったら、MSという人達にとって、コックピットクルーにトラブルを制御されてもらっては困る。あな

たたちがどうにもしようがないタイミング、一番危険な時間帯に……つまり大気圏突入の瞬間に船体トラブルを、つきつければいい。

私の勝手な憶測なんですけど、直接ぶつかっていたのは、退学処分になったMSの二人。去年のSクルーのMSにしかけられた特別課題は、ハード系かソフト系かはわかりませんが、MSの技能をギリギリまで試すトラブル・バーゲン。それに対応していく中で、二人の関係は最初は小さな齟齬だったものが、大きな乖離になって、最終的には敵対するまでになってしまった……。ではありませんか？　そして、そのうちのどちらかが、相手を徹底的に叩き潰さなければ済まないと思うまでに、病んでいつていた。けれど、残る二人のMSも、コックピット・クルーも、自分たちの常識で、実習が終わるまで、どちらも憤怒までに高まってしまった感情すらも、きつちりと制御してくれるだろうと、思っていた。みんなメンバーは少なくともSランクを教官が保証しているのだという数値的評価に甘え、見積りを甘くしていた……。違いますか？」

ソyonは、途中からシミュレータのステップにへたり込むように腰掛けて、斉藤の紡ぐ物語を聞いていた。

「トラブル・バーゲンが……仲間割れミッション要素の種になるなんて、だれも思ってたでしようね。そして、普通の神経をしていれば、自分が乗っている船に何かをするなんて非常識は理解できない。そのどちらかが……私は探偵でも、事故調査委員でもないで……どちらがどうだったかなどと、今更調べませんし、知りたいたとも思いません。ただ、人というのは……自暴自棄になったときでさえ、自分を守ろうとする人と、すべてを破壊してしまいたくなる人がいるですよ。だから……何もかもこわしてしまえという、その考えに囚われる余り、自分の命も危ないという計算もできず……せずに……かな。自分の命も乗っている船に致命的なトラブルを

もたらした。

大惨事になるだろう愚かな行動。そんなことをしでかしたのが大人ならば、扱いはまた違ったんでしよう。だけど、彼らは前途ある若者です……。未成年で……。身も蓋もない言い方をすれば、犯罪者というより、精神的に追い詰められて行動に異常をきたしただけの、狂った子ども。

そんな狂気に対してでも、相手が未成年であればそれでも守ろうとするのが、今の社会の在り方です。だから、彼らの犯罪者にしないために、心を病んでしまった気の毒な学生として学校や警察、大人たちは……。彼らの方こそを守ることを選んだ。直接の被害者だったはずの、あなたたちを、放置して……。それどころか、事故調査委員会や学校側は、あなた達に口止めさえした。クルーの一人が病んでいったことに気付かなかった……。あるいは、気付いても手だてを講じなかったことを……。糾弾さえしたのかもしれませんが。だから……。あなた達は口を噤むことを、結果として余儀なくされた。

人間関係がそこまで拗れるまで、何もできなかったあなた達にも、彼らの前途を守る程度の義務はがあると。何もしなかった、あなた達にこそ非はがあると。

刃物というのはどこまでも刃物なんですよね。だれかを守ろうと振りかざせば、守ろうとするものの、たまたま隣にいた人を平気で傷つける。直接、電子制御システムをダウンさせたMSと、彼と直接ぶつかっていたMSは流石に放校にせざるを得なかったものの、あのとときのフライト・クルーに、沈黙を強制した……。度し難いものですね。結果は、マックスウェーバー・ジョーgerやウェイ・ソヨン、あなた達のように強いものは黙り、ネッド・ソンホや、キム・チオルのように弱いものは、いたたまれずに逃げ出した。

学校は、あのような状態であつたにも関わらず、無傷で乗り切つて生還した、あなたたちを、讃えたいし、慰労もしたいし、感謝だつてしているのに……沈黙している。

違いますか？」

ソヨンは目を閉じて、自分の膝に額をぶつけた。

「ネッドさんは、弱くなんかないわ……」

「あなたのその絶対の信頼が、見るものを曇らせている。弱いから……逃げ出したんですよ。ネッド・ソンホは……」

「ネッドさんは弱くなんかない……」

ソヨンは顔を上げて言ったが、その言葉は弱々しかった。脳裏にあのときの、泣きだす寸前のようなネッドの顔が浮かんでいた。

俺はだめだ。

「ネッドさんの……飛んでるところ……あんた知らないでしょ」

俺は一生、真木には敵わない……。真木が乗っていたら、あいつらが真木のクルーだったら、こんなことを、あいつらにさせたりはしなかった。俺のふがいなさ、やつらを潰した……。

「何もかも分かったような顔して、彼を見たことがあるって言うの？」

惨めだな……。ウェイ……。俺はぶざまだ……。

「ネッドさんは、ネッドさんは、すごいんだからあつっ」

ネッドの情けない顔を振り落として、ソヨンは叫んだ。

「すごい男が弱虫だっていいじゃないですか……」

「弱虫で、いいじゃないですか……ですって？」

「ええ。そう思いませんか？ あんなすごいフライトができる人が、優しく……弱くて……ついでに、自分に厳しすぎて、馬鹿どもの争いを止めようとしなかっただけで自分を責めすぎて、学校止めちゃうなんて……勿体ないですよ。」

学校が……思いはあっても動けないなら、私たちが動きましょ。多分ね、時間がたつていうのは、それだけで薬なんですよ。ネッドさんは、自分から真木さんから逃げ出して、置いてったくせに、追いかけてもらえなかったことで、真木さんには、結局は自分は不要なんだって、いじけるかもしれないよ。男って、何だかんだ言って自分勝手だから、泣かせてるはずの真木さんに捨てられた気であるかもしれない。ね、迎えに行つて引つ張り出しましょうよ。ウェイさん、見当ぐらいついてるんでしょう。ネッドさんの居場所……」

「私は知らないわ。知ってるのは……ミスター川瀬だけよ」

最後は、やっぱりそこに行くしかないのか。斉藤はうんざりと思つた。自分がミスタ川瀬の、クルー組みのデータを弄っているのだ。どの面さげて、ネッドさんの居場所を教えてくださいと顔を出せるだろう。

直接おとがめこそ来ていないが、ミスタ川瀬ぐらいの人ならば、多分犯人が私だと見当をつけてるだろう。というかはた迷惑なウィルスばらまくぐらいならともかくとして、マザコンのデータにちょっかい出した時点で、ネタは割れいてる。

でも、その理由までは、見当もついてないはず。

きっかけは佐久間教官の宿題だったとはいえ、その中で、今回こんな無茶をやらしたのは、好奇心がはみ出して、一度でいいから空つてもんを飛んでみたかったからに過ぎない。経験のない飛竜をコマンダーに据えて、ネット・ソノホに脅しをかけようとしているぐらいは、多分把握しているだろうけれど、なぜ、フライト・クルーに自分が入っているのか、見当もなんかつくはずがない。自分にしてからが、その場の思いつき以外のナニモノでもないのだから。ミス・ウィーが私を管制室から出す気が毛ほどもないのは、私が一番よく知ってる。

月育ちで、肉体酷使系は柄じゃないという、基本仕様のにも、青い宝石、人類の故郷、地球の濃い大気の中を飛べるチャンスはどこにもない。

やれるときに、やりたいことは、やっとなかないとね。

タカが笑う。

人間って、結構、簡単に死んじゃうからね……。

タカ。おまえと出会ってなかったら、僕は、子供っぽいつてことを罪だと信じたままだったと思う。誰かのひどい迷惑になりさえしなかったら、やりたいことをやってみるのは凄く自然なこと、や

ろうつしない言い訳を探してる方がどんなにか、見苦しい。

ここに来た。おまえがいた。これって、私のラックだよな。

空というのは、雲があつて、大気圏があつて、重力が『がん』とあつて、全てが濃いテラにしかないから。目をつけたのが航空科のS評価のチームというのも、別に他意はない。A評価よりS評価の人たちが飛ばす船のクルーに、一介の荷物としてはなりたいってのが人情だ。自分がSクラスの乗船クルーとして、役不足なのは分かってる。

そこをつつこまれたら、言い訳の一つもできない。三日三晩ぐらい、川瀬デスクの前で正座させられるぐらいの、悪のりだ。幾ら、危険や経験がそれほど要らないポジションだろうとはた迷惑な悪戯に違いない。

うちの学校では、いろいろな能力のひとをごちゃまぜにするんじやなしに、ほぼ同じようなレベルを集めて、チームをつくって、課題そのものの難易度を変えてくる。

航空科でもBクラスあたりの評価の連中だと、周回衛星軌道に乗かって、いきなり突入、「はい、お終い」ってそっけなさだ。どうせなら、一生に一度くらい地球^{テラ}まで散歩に行きたいじゃないか。
(悪のりだつて言うなら、その通り)

ミスタ佐久間に乗せられて、ネッド・ソンホに興味を持って、あのフライトの真実を知りたくて……。シェリル真木さん、あなたを……巻き込んだ。

ネッド・ソンホさんの居場所は、川瀬教官が知っている。川瀬教官が……。

そのとき、ピンと音がするぐらい唐突に、斉藤は小賢しく思い立った。

……ひょっとして、うまくすると、真木さんの成績人質計画は、川瀬教官向けのオドシって、そういうことにできない？

川瀬教官は、飛竜をコマンダーに据えた私の意図を、ネッド・ソンホを引つ張り出すために、真木さんの真っ白な成績表に黒いシミをつけさせなくなったら、「ネッド・ソンホ、さっさと出てこい」ってメッセージを、ネッド向けに発しようとしているって、その辺までは読んでるはずだ。ただ、どうやって自分が川瀬自身の力を借りずに、ネッド・ソンホに行き着くのか、お手並み拝見とばかりに静観しているのだろう。真木さんが自分が人質として機能していることを、把握してるかどうかは曖昧なままにしろ……だ。

ということは……ここは、一つ強気に押し出して、自分がオドシをかけようとしているのは学校と、ミスタ川瀬と……そういうことにしたら、いいんじゃない？

なんとなく上手くいきそうな気がしてきて、斉藤はうきうきとしてきた。できるものなら、スキップをしてみせたいくらいだ。生活に困らないから問題はないが、実は、右と左をどのタイミングで二回踏んだらいいのか、悩んでしまっただ、斉藤はスキップという高度な歩行技術を習得していない。

Sランクを頂戴している面々が、離棧すらできずに、後期の成績軒並み評価付かずで黒星ゲットというのは、学校として由々しき事

態だ。学校は……ついでにミスタ川瀬も、今年はたった一つしか組んでいないスクールが発進できないことを望んでいないに決まっている。

……うふふ、川瀬教官を引つ掛けるのが駄目だったら、仕方ない、素直に土下座でも何でもして、ネッドさんの居場所教えてもらおう。正座三日ぐらいの覚悟はして。

勘違いしてくれてる可能性は、ゼロじゃないよね。かなり勝算ありだ。ここに来てから、いろんな意味でついてるからな。強運が信じられるときは、多少の無茶をするのも、芸のうちかな。

上手くいったら上手くいったで、これじゃ、私は、凄くいやな奴だけど……。

ハッター百パーセントでミスタ川瀬に、ぶつかってみる……か。

「ウェイさん、ありがとうございます。やるべきことの方角性が見えましたっ。このまま勢いで、ちよつと、川瀬教官、脅かしてきます」

「え？」

荘厳な雰囲気をもとって、重々しく話していたはずの斉藤が、いきなり、見るからにうきうきとした調子に激変して、それだけでも呆れていたのに、言うに事欠いて、ミスタ川瀬を脅す？　この子が？

「ミスタS……、正気？」

「ええ、残念ながら」

それだけ言い残すと斉藤は、くるりと方向を変え、右と左が微妙

にタップを打つような感じで、非常に不思議な歩き方でソヨンの前から遠ざかっていく。

まさかとは思うけど、アレ……スキップのつもり？

ソヨンは斉藤の背中が通路のどんつきで曲がって見えなくなるまで、ぼうつと見送っていた。

* * *

「私の所に顔をだせるとは良い根性だな……ミスタ斉藤」

川瀬教官の執務室は、思い切りレトロな感じた。二十世紀風の調度。マホガニーを真似た仕上げでどっしりとした印象になっている。執務机は、大きな窓を背負っている。

つまり、思い切りの逆光なので、川瀬教官の顔は訪問者からは、影で締められて曖昧なままだけれど、訪問者の方の顔は、僅かな変化までくつきり光の中に曝されるという、基本的にイケズな構成になっている。

「すみません……。ご不快でしたか？」

すみませんの含有量五パーセント未満の声色で斉藤が言ったので、冷静がウリの川瀬はさすがにきれそうになった。直情径行の対極にあるミスタ川瀬は、

そんな聞くな。当たり前だろうが。

と、いつものように腹の中で叫んだ。

「シムサップ川瀬の悪魔ぶりは、だいぶ好評ですね。まあ、ウェイさんもクロスフィールドさんもやつかまれて当然の人たちですからね、実習一年坊主に、一チームしかないSランククルーのCDRなんて凄い配置をされましたからね。お見事です。案の定、公衆の面前で切れてるあの人たちを見て、溜飲をさげるようなチンケ諸氏も多かったみたいですねえ。さすがです。この先、あなたを手本に精進していくことにします、私は」

この棘がある言い方も……どーにかならんか？ 可愛くない……。

「で……、チンケの親玉の私としては、ご希望通り私のしたことにしておいたが、どうだ、お前の思惑は……うまく行きそうなのか？ とにかく、私は金輪際、君に協力するつもりはない。何か用があるなら、是非とも協力したいと私に言わせるほどの理由を述べてくれたまえ……？」

「ええ……。川瀬教官が御寛大にもだまっけてくださったおかげで、いろいろなことがちゃんと見えてきました。ですから、とっておきのご用ができたということですよ」

にやりと……斉藤が笑った。

本当にあるのか？ そんなものが。ネッドの居場所が分からなければ、真木を人質にとったオドシの効力が発動しないから、どこにいるのか教えてくれと、泣きつきに来たぐらいがせいぜいじゃない

いのか？

そんなことを考えた川瀬の目の前で、斉藤が尊大に腕組みをした。

「あなたのご自慢のパーフェクト真木。そして、去年のアレの所為でなますを吹きまくって、今回チームしかできなかった、Sチームクルー。あの人達の成績表に軒並み黒星が並ぶのを……見たいですか？ ミスタ川瀬。あの人たちの輝ける成績を黒くしたいと望みでないなら……ネッド・ソンの居場所……教えてもらいましょうか」

何だって？ こいつは……この私を脅しているのか？

川瀬は呆れる。

「あなたは知ってるはずだ。彼がどこに引きこもってるのかね……。そして、真木さんはともかくとして、ウェイ・ソヨン……あの人に負い目みたいなものを感じる程度のデリカシーがあるからこそ……、一つしか作らなかったSクルーのCDRを、能力うんぬんの問題じゃなくて、仲間割れトラブル・バーゲンの種になるという旨味もあって、亮二クロスフィールドさんじゃなくて、ウェイ・ソヨンさんにした……のでしょう？」

川瀬は頭が瞬間で真っ白になった。斉藤はしゃべり続ける。

「通信系統の本当のトラブル。音声制御がやられて、ボイス・レコードは残っていませんが、私はフライト・レコードは読みました」「どこから？ あれはホストから削除したはずだ。幾ら君でも入手は不可能だろう」

「ご想像にお任せします。さてと、先進みましょうか。ネッド・ソ

ンホは……最後まで操縦桿を握ってましたね。多分。機体の扱いに、彼の癖が顕著に出ています。他の誰でも、多分ウェイさんでも、あんな風には翼は扱えない……」

その、通りだ。お前に答える義務は無いがな。だけど、お前は飛ぶ人間じゃない。フライト・レコード・トレースなんか他人にやらせたくせに……偉そうなやつだ。

「そうすると、彼を追いつめたのは……、事故そのものじゃない。あのフライトの時のコックピットクルーを見ると、あなたが仕掛けた方のトラブルの種が何だったか、それが、思惑でない方向に暴走し過ぎたってことぐらい……誰だってわかります」

「想像力……豊かだな」

「想像ではありません。条件が結果に及ぼす当然の法則にしたがつて考察を重ねただけですよ。私は。……結論だけ申し上げます。川瀬教官。あなたは……というより、学校は……と申し上げますよ。うか。心を病んだ優秀な学生が犯罪者として罰を受けるのを望まなかった。それは教育者として当然でしょう。辛い人死にもなし、怪我人もなし。犯罪者として弾劾して、未来を奪うことを……よしとしなかった。そして、守ろうと決めたとき、その守るための刃が、何の罪もないそれ以外の当事者たちを傷つけることなど……あなたたちにとっては、当然の方便でしかなく、必要悪ですらなかった」

こわい……子どもだ。

川瀬はにこりともしないで語る斉藤をまじまじと見つめた。

ウインスレイ女史は、こんな化け物に、まだ力を与える気でいるのか……。あの人は、こんなのに、もっと力を与えて、どうする

気だ……。

『管制室の神に』

川瀬の中で……斉藤と同じように腕組みをしたミズ・ウィーが告げた。

「はん……。私も衰えたな……。そういうことか」

驚いた。こいつは……。呆れたタマだ。痛いところをグサグサついできやがる。

「ええ、そういうことです」

驚いたな。こいつのこの手の込んだやりようは、私を隠れ蓑にして何かやらかそうというのじゃなくて、紛れもなく私自身がターゲットだった……。って、そういうわけか。

ふっふつと、川瀬の肩がふるえてくる。そして、少しだけ怒ろうか悩んで、川瀬はやめた。どんなにがんばっても、軍配はやつにあってる。

「……久しぶりだよ……」

「何がですか？」

「何かが怖いって感じるのがだ……」

「その割に、楽しそうに見えるのですけど……」

斉藤歩……お前みたいな子どもがどんな大人になるのか、どこまでいってしまうのか。川瀬はその漸く漲らせていた緊張感を綻ばせ

たようにみえる斉藤を観察した。小柄で、細身で、神経質そうな外見を裏切って、繊細かつ大胆。

本当にここまで斉藤を偉そうにふるまわせているのが、ホストから隔離した事件記録のデータだけなのだとしたら、その情報の切れ端をここまで見事につなぎ合わせるだけでも、あっぱれ見事だと言えない。

斉藤、だけどな……。若い内からこんなふうに、物が見え過ぎるというのは……。多分……。とても……。可哀相なことだ。お前のことを理解して、そのままのお前を赦して受け入れる誰かに、お前は巡り合うことが……。できるのか？

高みから全てを見透かすような、お前のその目を怖がらない誰かを斉藤、お前は苦しいほど欲しているはずだ。

求めて……。求めて……。求めているんじゃないか？

ネットには……。空と翼がある……。

斉藤、お前はその才能を引き受ける代償に、ちゃんと、何かを受けとってきたか？

「彼を……。引きずり出して……。どうするつもりだ？」

笑いたくなるのを堪えて、精いっぱい難しい顔をつくらって、川瀬は聞いた。

「川瀬教官。あなたは真木さんとネット・ソンホに期待をかけるあまり、一つ大切なことを見逃してらっしゃいます」

「……私は、何を見ていなかった？」

私に見えていなかった何かが、この子どもには見えるのだろうか。歴然とした事実として。

「飛ぶ鳥にも……とまり木が必要だって……ことをです。何千キロ、何万キロを物ともせずには飛び抜ける渡り鳥も、更なる飛翔のために、大地や水、木におりて羽を休める必要があるって、そういうことを……です……よ。」

鳥は当然羽ばたくもの。間違っではいけませんよ。先生。飛ぶことでしか、癒せない痛みも、多分あるんでしょうね。飛ぶことを定められた人たちは、私のような翼を持たない石に過ぎない人間とは、別の生き物ですから……。

あなたが超然としているということは、彼はたぶん飛ぶことを止めてはいない。そして、どこかで飛んでるんでしょう……？

間違っていますか？」

ああ、ネッドが飛んでいることまで、こいつは、確信しているのだ。

「あなたも、多分、翼が傷ついても羽ばたき続けようとする鳥だから……、気付かないんですよ……。とまり木も必要だってことをね……。逃げるように飛び続けることで、時間がネッド・ソンホをいやすと確信しているのでしょうか……違いますよ。彼の痛みは、あのときのCDRが真木さんだったら……事件自体が起こるはずもなかっただろうことに、絶望して逃げようとしてたんですよ。飛ぶことに失敗した鳥ならば、大空に解放つことで癒せるでしょうけど、……今の彼に必要なのは……、空じゃなくて……とまり木の方

です……」

「……そうか……で、やつのとまり木は……真木か？」

「……多分」

多分か。それで行動できるというのは、強いのか。単に若くて、挫折というものを知らない故の無謀なのか。

「真木もどつちかつていうと、鳥だぞ」

「……女は器用なんですよ。私たちとは違ってね。それで……とまり鳥が帰って来ないことに……とまり木は耐えて待つしかできない。とまり木に羽根はありませんからね。どこに飛んで迎えにいけばいいのかわからないし、待つしかない……。でも、それが、寂しくないなんて……いくらあなたでも……思っ
てないでしょう？」

……完敗だな……。たいしたもんだ。

「真木さんに……返してあげてください。……あの人を」

「……だよ。ネッド・ソンホがいるのは。そうだな、ヤツはちょっと……飛び過ぎたかもな。やすみどきだ。迎えに行つてやれ……」

斉藤は川瀬に礼をするのもそこそこに、川瀬部屋を飛び出した。斉藤が廊下を走つてるとのこと自体が、珍しいのに、こんなときでも普通に走るしか能がない自分に、若干失望しながらも、斉藤は上機嫌だった。

やった！ ネット・ソンの居場所をゲットした！

本当に、冗談みたいなあっさりした展開だ。こんなに簡単に、ハッタリに、あのミスタ・カワセがひっかかるとは……まったく、驚くな……。あの事故のフライト・レコードを持っているかどうかの確認すらしないなんて、川瀬教官にしては間抜けてるな。

ふふっ。 まったく、ついてる。

どんな馬鹿げたことでも、やってみるもんだなあっ……

走り慣れない哀しさで、途中から歩いていたけれど、それでも十分に軽い足どりで斉藤は、トレーニング・ルームに飛び込んだ。斉藤の勘では、飛竜がタカか、あるいはその両方が一番いる確率のたかいところ。

元気よく足を踏み入れると、そこにいたのは高柳で、彼は斉藤を見つけて手を大きくふった。

「おー、斉藤！ なんだあ？ 珍しく元気いっぱいじゃん。Gアップ・自主トレ忘れないとは、優秀優秀。いい子には優しく付き合うぜっ」

Gアップ？

えっと、そんなことは、とりあえずおいておいて。斉藤は叫んだ。

「タカっ…… エウレカだっ！」

「ああ……」

タカはポンと掌を打ち合わせた。

「そっちの方が。やったな。さすが、データマン。……で、どこ？」

「ネッド・ソンホの居場所は……モグラの巣だ」

「モグラの巣……？　なんだそりゃ」

27・モグラの巣

北半球にある極東アジア国籍のコロニーの季節は、当然、カレンダーに合わせて冬だけれど、南半球にあるオーストラリアの季節は、夏。

僕たち船舶運航専攻の運転手候補生にとって、三年次から始まる総合実習のときに、どんなクルーに組み込まれて、どんな航路を体験できるのか、それは大げさにいえば今後の人生をも占えるぐらいの一大事だ。

ずっと楽しみに、半ば不安も抱えて待っていた。クルー組み発表のあのときから、僕の孤独といえば孤独、平穩といえば平穩な日常は踏みにじられたとっていいぐらい変わった。クルー組みの発表はクリスマス・イブだったから、まだ一週間ぐらいしか経ってないのに、顔見知りしかいなかったはずの僕の時間に当然の顔をして踏み込んで来る連中がいつのまにか湧いて出ている。もっと困ったことに、それを僕は嫌がってない。振り回されている自覚はあるんだけど、それが嬉しい……みたいなの？

コロニーでは地球育ちの特権ともいうべき筋肉貯金の多さと、訓練量で鍛えていたはずなのに、久々の地球はどこまでも重い。体を制御する感覚が衰えていて、真っ直ぐ歩こうと思ってても曲がったりするわけで、当然車なんか運転してはいけないと、入地球管理の役人にクギをさされたけど、さもありなん。

重力に半ば辟易しながら、あの斉藤のスカした顔を思い浮かべる。

「今回は、別に意図した訳じゃないのに、いろいろと都合よく物事

が回るんだ。飛竜がラッキーを運んでるのかな」

斉藤にラッキー・アイテム扱いされるのは心外だ。

「とにかく、モグラの巣に行つて、真木さんの命が可愛けりや、十五日にたまどん食いに来いつて言うただけだから、飛竜が身体制御方向にしか才能なくて、多少頭悪かったとしてもだな、何とかなるさあつ。構えないでいつてこいよ」

斉藤にならともかく、タカからも頭は期待されてないつて、どういふことだ？

「……そんなに、上手くいくもんか？」

斉藤に説得されると、どうしても『まるめこまれた』感がぬぐえないのはどうしてだろう。どういう暗躍があつたのか、あいつが何をどういじくりまわして得た情報かは知らないけれど、地球にあるモグラの巣にネッドさんがいることが判明したそうだ。さて、携帯端末のコールコードを変えてしまっている彼のコールコードを探すより、居場所が分かるなら直接ぶつかつたほうがいいと……それもまあ、納得できないわけでもない。

だけど、そのお使いに、なんで僕が出向かなきゃならないんだとは……思う。

「うちのゴールデンたまごどんぶりクルーのCDRサマが、『幸いなる少数』だというのも、神の采配としか思えないほどのラックですからね。利用しないテはないでしょう」

幸いなる少数つていうのは、地球に居住権を持っている人間というただけ……、斉藤がにっこり笑つて言うこの場合に限り、不

幸なる単数って感じた。

難物であることは間違いないネッド・ソンホという人を説得して、少なくとも、たまどんの日に、うちに来させなきゃいけないっていう課題を単独任務でこなせというのは……どうにも気が進まない。役割分担として不公平じゃないか？ 少なくとも斉藤は働いたんだろ。ネッドさんの場所を探り当てたんだから殊勲賞だ。タ力はじやあ何をした？

「総合実習の課題は出てないけど、これだけ航空専攻がそろってるんだから、どう考えても地球行きあると思って間違いないだろうから、まあ、久しぶりの地球^{テラ}Gならしだと思えば、ネッドさん説得できずに終わっても、最低限無駄足じゃないしね」

タ力が気楽そうに言ったとき、割り込んできた斉藤が、悪魔的とは思えない表情で言った。

「説得されたがっている人を説得するんだから……簡単ですよ。余程の致命的ミスを重ねなければ、失敗する方が難しいですね」

結局、その日に僕はネオ・シャングン・コロニーを出発して、地球へのシャトル・シップが離発着するライダー・プールと呼ばれる場所に移動した。そこは地球^{テラ}G環境の支配地だから、検疫留め期間をぶらぶら過ごしているだけで、Gアップトレーニングをしていることに同じだ。それからパッセンジャー・シャトル・シップの座席を霧島の息子特権を乱用して確保して、漸く地球に降り立った僕は、そのまま強行軍で飛行機を乗り継いで、モグラの巣にやってきていた。

真木さんのためにネッドさんを説得して、たまどんパーティーに呼びつける。検疫期間を考えれば十五日に彼がネオ・シャングンに

来るためには、彼にそんなにたくさん時間を悩んでいてもらっては困るのだ。

状況をよく分かっている斉藤や、ノーテンキな先天性強運でもって、物事をすいすいこなしていきそうな高柳じゃなくて、要領の悪さに定評がある僕が……なんで？ まあ、地球の居住権を持っているのを呪うしかない。

だいたい、正月休み前で、座席を確保するのも大変だったし……。今年の終わりはさんざんだ。

文句を言っても仕方ない。文句は、何を考えているのか僕なんかにCDRを割り振った川瀬に対してするしかない。斉藤だって第一管で、明日のCFD^{スター}へ向かったの経験を積みたがっているはずだから、招集日へメンバーを揃えるために、最大限の妥協でもって協力してくれているのだから、どう考えても、斉藤は悪くはない。

とにかく、ここのモグラの巣にやっと辿り着いた。クリスマス休暇ぐらいで、年越しにはそれほど気合いが入っていないらしくて三箇日を過ぎたばかりにも関わらず通常のタイムテーブルで仕事が行われているらしい。事務仕事をしている職員さんが、パイロットに用ならば、気長に待つてれば、そのうちみんな帰ってくるからというので、僕はネッド・ソンホ・アフマドさんに会いたいのだからだけ告げて、こんなところで馬鹿みたいに空を見上げてるだけだ。空が高くて、雲の流れが速い。

ネッド・ソンホさんが乗ってるモグラが、一機でも早く巣に帰ってくることを、悪魔的にしている斉藤にでも祈るしかない。

北半球の季節は冬だけど、オーストラリアの大地はただっぴろくて、暑くて、まさに夏。土地柄か乾いた空気が心地よい。

モグラというのは、モーターグライダーのことだ。無駄なエネルギーを使わないために、地球では例えば船なら帆を持ちながら、モーターも併せ持って、風を最大限に利用しながら航海するのが普通だ。

モーターグライダーというものもそんな乗り物と同じように、一際大きな翼で風を捕まえながら、高度が下がりすぎたらちよつと動力で高度を稼いで、また風を探して省エネルギーで飛ぶものだそうだ。

そしてこの愛称『モグラの巣』では、重量物を運ぶのにまったく適していないモーターグライダーの泣きどころを克服し、その積載量をふやすべく日夜研究している施設……ということらしい。

登校拒否なんていうと、部屋でどんよりしているイメージだったけど、なんか、こんな爽やかな大地で、風と対話しながら飛び続けているなんて、憎たらしいくらい楽しそうじゃないか。飛竜の目の前で、機体に対して圧倒的な量の翼をもったモグラが、もう既に何度か離発着をしている。

騒がしいレシプロ音を立てて飛んで行くモグラはともかくとして、滑るようにして帰ってくるモグラときたら、驚くほど静かで、土の中でもつつさりしているイメージがある動物がニッケネームの割に、いかにも空の貴婦人というべき優雅さだ。

真木さんは、ネッド・ソンホさんが、こんなところで楽しく飛んでいると知ったら……怒るのだろうか、泣くのだろうか。それとも……。

ダメだ。まったく想像できないや。

「俺の客だって言うわりに、きつちり知らない顔だな」
突然、背後から声が降ってきた。

振り返ると、真木さんの彼氏という属性から想像していたより、遥かにスリムで小柄な（小さくはないけど、真木さんより少し低いぐらいじゃないか？）人が、すつくという雰囲気であっていた。
しゃんとした背筋。それでいて風が吹き抜けていくような重さを感じさせない印象。見るからに重量級の真木さんの横に並んだら、華奢に見えちやいそうなぐらいの体つきなのに、それでいて、光そのものに存在感があるような種類の独特の質量があった。
「ネッド・ソンホさん？」

「……俺の顔も知らない客とは……驚くな。で、一体どういう用件だ？」

「あの……。真木さんの……」

僕が真木さんと言ったとたんに、ネッドさんの顔が曇った。

「真木……？ あいつに頼まれたのか？ あいつは俺がここに居るの知っているのか？」

「いえ、まだ……あなたを見つけたこと言ってませんから、……知らない筈です」

ひょおと、ばかりに息を吐き出して、ネッドさんは露骨に安堵した様子になる。

「驚かせるな……。あいつに見つかったら、殺される」

「殺される……って」

「真木は俺があいつに何も相談せずに学校を止めたの、怒ってるだ

る……」

ネッドさんは……学校をやめた気にいるのか。そう思うところか不思議な気分だった。

「……あなたは、学校やめて……ませんよ」

「馬鹿いえ。うちは黒星三つで放校じゃないか。前期中間考査と期末考査。それから実習クルー組み直前の後期中間考査で確実に黒三つ。アドレス変えちまったから、多分学費督促メールも突っ返したことになるだろうし、まあ、どう考えてもとくに学籍なんて消えてるだろ？ 連絡一つまともに取れない人間に、そんなに甘いところじゃないだろ？ あそこは」

なんか予想に反して、非常に明るいネッドさんには助かったけど、すっかり学校とも真木さんともさっぱり縁が切れてますみたいな、サバサバした勢いに、僕は途方に暮れる。

「ネッド・ソンホ・アフマドという人の学籍なら、まだあります」

ぶつと彼は面白い冗談を聞いたというふうに噴き出す。

「なんで？ ありえないだろ。そりゃ、ここ紹介してくれたミスタ川瀬にも、学校の事務にもちゃんとやめるって言ってないけど、どっちにしろ半年も行ってなきゃウチの場合は追い出されるから、わざわざネオ・シャンガンまで出掛けていく手間かけなくてもいいだろ、普通。第一、俺、後期分の学費も払ってないし」

は、話しかかみ合う隙がない。この人は、さっさと学校から足を洗った気にいるんだ。だけど、真木さんはどうなるんだ？ ウェイさんに黙ってけって無責任な事言うから、あなたのために涙を流し

てたのに。あなたを待つてる真木さんの気持ちはどうなる？

あなたに言われて、黙っていたウェイさんの気持ちは？

「真木さんとは……もう会わないおつもりですか？」

「……逢いたいけどなあ……。正直、合わせる顔がないって奴」
そう言っただけで微笑んだソンホさんは、どこまでも明るくて……。

「俺は、あいつみたいなマネはできない。人の気持ちを察して、心配するってるふうでもなくさりげなく気を回して、人と人が上手い事やってけるように動ける。真木は本当に凄いよ。俺みたいなできそこないに……つきあわされて気の毒だった。あいつにはあいつに相応しい器量の男が合うだろうさ……。ところで、お前、見た感じから行くと、今年、現場実習お初ぐらい？ ミスタ川瀬、あれでいて相当エグいからがんばれよ」

「エグいのは承知してます。なにせ、本物のコックピットに座ったこともないのにCDRで、真木さんもウェイさんも『あなた』も、僕のクルーになってるんですから」

「へ……俺がお前のクルーだって？ ……冗談？ それとも……力ワセ、とうとう狂った？」

……狂ったとしたら、あなたの所為じゃないんですか？ あなたがミスタ川瀬の期待の星だったっていうのは、みんなが知ってること。

「ま、まいったなあ。俺、二度とクルー組んで飛ばなきゃならないようなことしないって決めたんだけど……。俺にできるのはここで

やってみるたいなソロ・プレイがせいぜいだ。……だけど、俺が行かないと、真木もソヨンも黒星ゲットか？ シムサップってどこまで悪魔野郎なんだかなあ。そんなに、エグい手使って、今更、俺を引っ張りだす気か？……」

同感です。僕にCDR割り当てて、あなたみたいな天才を補助席に座らせて……。

「お前、名前は？」

そりゃ、こっちはフルネームで知ってて、向こうは何も知らないというのはフェアじゃない。

「霧島飛竜といえます。操船技術部航空科、三年次履修生で……、シミュレータでしか飛んだことがない、危険なCDRです」

「へ……え」

ネッドさんの瞳が笑みを含んだものになった。

「あれだ……、ヒリュウ・キリシマ……、つまりミスタ御曹司。キリシマの看板背負ってる癖に、飛びたくて家出したっていう……」

「なんで……御存じなんですか？」

僕が親父と大喧嘩して家を飛び出して、仕送りゼロ、奨学金をやりくりして何とか学費を捻出してることは、学校の誰にも言っていない。

実際、長姉が気前よく部屋を借りてくれて（豪華なところが何ともあの人らしいんだけど）住むところの心配をしなくて済むのには、めっちゃくちゃ感謝してる。

「ここは霧島も資金を出してるからね……。霧島の親父さんも……」

たまに顔をだしてくれるよ……。年越しをご家族でしたら、多分、顔を出しにきてくれるんじゃないかな……」

げっ。知らなかった。ここって、あの人が出沒する危険地域だったのか。

ナチュラルフェチで自然オタクなあの人のことだ、母なる地球の助けになるような技術開発に出資するのに対して、金に糸目なんてやつは金輪際つけないに違いない。

僕としては他の会社を受けたらたぶん母さんが泣くだろうから、ちゃんと自力で卒業して、一般枠でウチの入社試験を受けるつもりでいるのも、誰にもナイショだ。

最終試験に何が残っても残って、キリシマ名物社長面接に辿り着くまで、あの人の顔を見ないことに決めている。

オヤジが来るかもしれないと思うと、尻がそわそわして、途端に落ち着かなくなる。ネッドさんが、浮足立ちそうになる僕を見て、くすりと笑った。

「その様子じゃ、ここが霧島の息がかりって知らなかったみたいだな」

「……いやなところ、きちゃいました……」

ネッドさんは、しばらく僕の方を物問いたげに見て、それから決心したように口を開いた。

「真木は知らないといったな。じゃあ、ソヨンに頼まれてか？」

僕は首を振る。

「初フライトなんです。何がなんでも……。飛んで失策して黒なら

あきらめも付くけど、飛ばないで指をくわえて他の連中が離棧するのを見送るなんて、絶対に嫌です。僕は飛んでみたい。自分の乗り組む船で。だから、僕は僕のために、あなたが十五日に来るって言うまで、帰りませんから」

「十五日？ そりやまた、エラく中途半端だな。招集日はいつも二月頭だろ？」

ネッドさんが鼻の頭に皺を寄せる。

「えっと、詳しく簡単に説明しますと……」

「どっちだよ……」

言いかけたところを即座に突っ込まれて、僕は次の言葉が喉に詰まる。ネッドさんが、肩を震わせて笑う。

「悪い。ここの連中という間に、言葉尻とつかまえるのが習慣になっちまってるな……。じゃあ十五日つてのはオフィシャルCDRさまの自主招集日？」

「そんなようなもんです。ちょっとなんか食べながら、まず親睦を図ろうかと……」

ネッドさんが呆れたような顔になる。

「じーさん臭いこと考えるんだな」

心外です、それ考えたのは僕じゃあないんだけど。

「オーケー。こうしよう。ミスタ御曹司。今からシムサップ川瀬と事務局にちゃんと連絡して、正式な退学手続きをとる。そしたら、クルーリストから俺の名前は無事抹消される。俺が行かなくても、何も問題はない」

僕の頭の中に、操縦桿を握りしめて泣いている真木さんの顔が突然甦った。真木さんにあれほど冷たく当たられても、秘密を抱え続けなくて済んだとさっぱりした笑顔になったウェイさんの、きれいな笑顔も。

「そんなん、真木さんたちが可哀相すぎる。逃げるのは貴方の勝手かもしれないけど、あの人たちを泣かせているのに、あなたは気付かないんですか？」

「真木と……ソヨンが……。あいつらが、泣いてるのか？ 俺なんかのために？」

そう呟いたネッドさんは、少し俯いて考えているふうだった。それから、どこか遠い目になって、顔をあげ……青空をしばらく眺めていた。そして、ぽつりと言った。

「テスト機だから、突然落ちるってこともあるけど、俺の横……乗ってみるか？」

テ、テスト機って、そういうもんなのかな？（相当違う気がする……）。ネッドさんは僕を見ていない。ただ、空を見ている。鳥人が飛ぶというなら、それを間近に見るチャンスは逃してなるものか。乗る……男は度胸だ。

「お願いします」

ちよつとだけネッドさんは僕を見て、口の端をふつとつり上げて笑った。

いい度胸だ。

多分、そんな言葉を言ってる目だった。

* * *

モグラの扉がどっかりと落ちる。蓋をされて閉じ込められた気分だ。

外と完全に隔てられているオービター（軌道船）室内と違って、外の臭いが紛れ込んでくる。エンジンの始動音と共に、焼け焦げたような、ちよつと鼻につく臭いが鼻孔を刺激する。

機体全体が震えている。

モグラの一際でつかい翼についたプロペラが最初がつつんがつつんと、それから連続した小気味い音につながっていく。

運転席にいるネッドさんを見る。

僕に気付いたネッドさんは、ゆっくりと親指を立てる。そして、前を向く。

それから機体が動き出す。本日は風少なく、晴れ。平らに整備されたはずの滑走路ですら、ゴツゴツしていることが加速されていくにつれ大きくなる振動で分かる。それから突然ふわっと浮遊感がやってきて、モグラは地面との摩擦から解放された。

空が近くなる。……本日は晴天なり。……雲、少々多し……。薄
い機体の外から、エンジン音は易々と進入してきて、正直思った以
上にうるさい。このまま、風を見つけるまで、プロペラで飛ぶのだ
ろうか。

そう思った瞬間に、突然の静寂がやってきた。けれど、それはエ
ンジン音から解放されたための錯覚で、渺々とした空で激しく流れ
ている空気の流れが機体をなぶっていく音は、そのまま続いている
のだった。

あつ……。

動作音とともに、プロペラが格納されていくのが見えた。ここか
ら、まったく動力なし?! そう思うと、震えがくるような気がし
た。

静かだ……。風の音が、力強く確かな存在そのものとして……聞
こえる……。

* * *

体育館とマシン・ジム・ルームを大きく周回するように、ランニ
ング・コースが定められている。真木はいらいらしてくる。十歩ほ
ど後を、さっきからずっと高柳が走っているのだ。その前、筋ト
レをマシンでしているときは、二つぐらい向こうのマシンで汗を流

していた。

ついと止まると、隣にやってきた高柳が足踏みをしながら言った。

「真木さん、いきなりとまると、体に悪いよ」

それを無視して真木は言った。

「優美」。お前はなんで、あたしのあとついて走ってんだよ」

「ただの金魚のフン」。気にしない、気にしない」

「気になる。第一、鬱陶しい。リアル地球Gに潰される前に、あたしが伸し餅にしたろうか？」

凄む真木に、高柳は即答した。

「真木さんになら喜んで」

「オドシじゃないよ」

にこにここと、高柳は真木の凝視を受け止めているだけだ。真木は肩をわざとらしくすくめて見せた。

「あーっ もう止めた止めたっ」

真木はタオルで汗を抑えると、更衣室に向かって歩きだした。

「もうやめちゃうの？ 真木さんにしては、軽めの調整だね」

真木が着替えて更衣室を出て来ると、既に着替えている高柳が大荷物を背負って通路であぐらをかいていた。無視して通りすぎようとすると、少しだけ間をおいて追って来る。距離を詰めてこない代わりに、別の方向に向かう気配もない。完全なストーカー・モードだ。

「お前……。一体、どこまでついてくんだよ。だいたい、なんだその荷物は！」

業を煮やした真木は高柳の胸ぐらをトツつかまえて揺すった。

「ん？ これ？ 普通に寝袋だけど……」

「なんでよ！」

「これさえあれば、どこでも眠れるでしょ。斉藤から指令とんでるから。十五日、一番逃亡の可能性が高いのは真木さんだから、目を離すなって……」

「あのドS野郎。で、……優美。あんた、いつからあいつの手先になった？」

「俺は別にやつのために動いてるんじゃないよ。黒星くらって、人殺し部隊に配置変換されたら困るからね。あいつが離棧に向けてやってる動いてる限り、最大限協力するってだけ。真木さんについての、訓練としても悪いメニューじゃないし、なんて言ったっけ、えーと、漁夫の利？」

真木が拳を握りしめる。

「それを言うなら一石二鳥だろうが、わざわざ難しい方に間違えるな。それに十五日までって、あたしに半月近くも付きまとう気なの？」

高柳は自信タツプリに請け合った。

「大丈夫。トイレとお風呂は覗かないから」

とたん、真木のアッパが顎に炸裂して、小さくは決してないはずの高柳が吹っ飛ばされた。

「ま……真木さん…… ナイス、パンチ……」

懲りずに立ち上がって来る高柳を冷やかに見つめながら、真木は言った。

「斉藤に伝えな、余計なお世話だって……。尾っぽ巻いて逃げるほ

ど、可愛くないよ」

「……真木さん。ネッドさんと会うの怖くない？」

真木が、ふんと一つ鼻を鳴らした。

「あたしが？」「冗談でしょ」

* * *

高度が下がってくると、プロペラを出して高さを稼ぎ、十分に風をつかむと紙飛行機みたいに静かになる。

モーターの音が響いているときは風の音は遠くて、モーターが黙ると、耳元ではねるように躍る。長い……。いったいこんなふうにして、いつまで飛んでるんだ？

* * *

「よおっ御曹司んトコのお二人さん！」

「何よ」

MSの結城と、ソヨンはたまたま学食の入り口で鉢合わせをして、まあ、お互い気楽なお一人様だったので、一緒に食べようかとそんなふうな勢いになったとき、いきなり声をかけられた。

「おたくらんとこの、リクエスト・エムブレム変わってんな〜。うちら、エムブレム・デザイン同好会は、こういう斬新なネタを待っていたんだ?」

クルー組みが発表になると、このデザイン好きが集まっている同好会に、実際のプロのクルーが使うようなエムブレムをリクエストして付けるのが定番だ。

特に規則があるわけでも何でもないが、エムブレム・デザイン同好会は、あのチーフ・フライト・ディレクターの星型エムブレムを作り出した由緒ある同好会だ。同じエムブレムを胸に掲げていれば、仲間意識が自然に育つし、気分も盛り上がる。

「斬新ってなんだよ〜。俺たちまだ聞いてないぜ」

リクエスト・エムブレムは、大体がCDRが意匠を決めるから、流星やシャトル、土星や月、星雲など、まあありふれた柄がほとんどだ。

「普通はシャトルとか、衛星とか、星とか翼だよね……」

そう、飛ぶ人達だから、大気圏を飛んだことがなくても翼も人気のシンボルの一つだ。

「そうそう。俺たちだってそういうデザインは好きだけどさ、いつもそんなのばかりだと、飽きるじゃん。いいよ。めっちゃ変わってて」

「で、うちとこの御曹司が出してきた意匠は……なんなの?」

そいつは、ぶくくつといかにも楽しそうに笑った。

「どんぶりと箸だって。おたくらんとこ、ミッション不発最有力候補だけど、それにしだって、自暴自棄のぶつとび加減がいいよなあ。

そういう、冗談が通じるタイプにみえなかったけどな。あの御曹司。メール読んで笑わせてもらったよ」

「どんぶりと……」

ソヨンが言くと、結城が続けた。

「箸いゝゝっ?」

「でさ、コールコード、重複なかったから申請受理な。普通CDRの頭文字が多いけどさ、おたくらんとこのGTKって何の頭文字?」

「なんだそれ」

聞かれても困る。結城は眼球が彷徨うように動いた。

「どんぶり……箸。……招待状。あ……あたし、わかつちゃった……」

ソヨンが無然とした表情になった。

「何? 俺は見当もつかねえ」

結城が聞くと、ソヨンは断言した。

「GOLDENTAMADON こーるでんたまどん WO を TABERUKAI たべる じゃない? ……最低」

* * *

……長い。こんなに長く、飛び続けられるものなんだ。

ずっと……風の音を、この人は聞いていたんだろうか。

オービターは大気圏突入体勢に入ると、途端に乗り心地が最悪になる。

* * *

ソヨンの奴……。

亮二は一人で一発大気圏突入プログラムをこなした後、大きく溜め息をついて、シミュレータのCDRシートに深く寄り掛かった。ソヨンが、あのガキと何を話してたかしらねえけど、なんだか艶かしいぐらいにきれいだった。

あーっ　　むっ　　ちゃ腹立つ。

『こちら管制。^{タワー}　　亮二さん聞こえます？』

誰だっけ。こいつ。えっと……。

管制官の練習生から、たまにこうやって声を掛けられることはあるけれど、直接の知り合いでもなければ、こんなふうに馴れ馴れしく呼んできたりしない。声に覚えがないわりに、向こうは随分親しげだ。

『実習が始まったらフライト・クルーなんですけど、今はこっちか

「らおじゃまです」

……たしか、あの、印象の薄そうな……ほそっこい女の子。亮二がひと言も返事をしなくても、気にするふうでなく女の子の声は、どんだん続きを言う。

『なべてこともなし、ばっかりじゃあ、なんだか詰まりませんよね』

別に、俺は普通に飛べれば十分楽しいけど。亮二は心の中でだけ返事をする。

『えっと、あなたがたにお馴染みの、ミスターと名乗る不審人物からの指令です。コックピットの計器がぶっ飛んだときの、普通の人の反応を知りたいので、がんばってくださいとのことですよ』

言うが速いか、さっき大気圏突入を果たして、無事にランディングしたとこなのに、上からガガガッと押さえ込まれるような重力が襲ってきた。心の準備も何もない。さすがに亮二は声に出して文句を言った。

「ちよつ、ちよつと待ったあ！ てめえ何しやるっ」

『前に私等のCDRが真木さんと、ウェイさんと飛んだフライト・レコードです。参考までに味わってもらってくださいとのことですよーバー。えっと百聞は一見にしかず……ですって』

なんだってえ。あいつら、普通に飛んでたんじゃなくて、レコード・トレースしてたんか？ 亮二は焦る。トレースってやつぱり、事故記録からの抜粋だよな……？ 事故って、いつの？

げっ……。計器が……死んでく?!

亮二の目の前で、綺麗にお行儀よく、計器さまたちがお休みにな
っていった。

「うわおおおを¥。ぐだ……えええ」

亮二の喉から、声にならない悲鳴が絞り出されていった。

* * *

どれほどの長い時間を飛んでいたかわからないけれど、空と雲と、
眼下の地上と海とが、通りすぎていくのを、僕はずっと見ていた。

「聞こえるか?」

ヘルメットの中にスピーカーが内臓されているらしく、耳元でネ
ッドさんの声が聞こえた。

「……俺は、何もしなかった。自分が……飛ぶこと、もっともつと
スマートに操作できるようになることだけに捕らわれていて……ク
ルーが病み、荒んで、壊れていたのに気付かなかった……」

僕の耳に聞こえるネッドさんの言葉に、記憶の中の斉藤の言葉が
かぶる。

* * *

飛竜……。ネッド・ソンホが消えた理由……。多分、分かりましたよ。私の妄想半分なんですけど、ネッドさんに会う前に、あなたは知っておいた方がいいかもしれない……。あのフライトの時、ネッド・ソンホに仕掛けられた罠は複合トラップです。単純なトラブル・バーゲンでも十分だったのに、シムサップ・川瀬は仲間割れの要素を咬ませた。

訓練の間もトリップの間も、ネッド・ソンホはたぶん、深刻化しているのを、見ていたけれど、何もしなかったんだと思うんですよ。もちろん、勝手な憶測の域を出ないんですけどね。

知っていて、見ていて、彼は放置した。長いトリップといったって、たかがひと月以内に実習訓練は終わります。

特別に行動を起こさなくても、やり過ごせると、普通の人間が思ったとしても……。それを罪だというのは酷なことです。

あの人は……。たぶん、もの凄く繊細な人だと思います。だから、コックピットの計器が次々と行儀よく死んでいくのを目の当たりにして、原因が即断できたんでしょうね。

そして、何もしようとしなかった自分を恥じた……。

人と人との関わりを大切にする、パーフェクト真木の横に立つことが耐えられないと思うほどに……。恥じた。真木さんだったら、彼らが人生の全てを棒に振ってまで、そんなことをしようと思ひ詰め

る前に、何らかの行動を起こして適切な対処ができていたと確信してしまっただけでしょうね。それで……あの人は真木さんから逃げた……。

いいですか。彼は自分から逃げたんじゃない。ましてや学校から逃げたんでもない。

真木さんの恋人であるという場所から逃げたんですよ……。

男のプライド。確かにアホくさいですけどね……。私は分かりませんよ。彼の気持ちはなんとなく。単なる事象から妄想をたくましくしているだけかもしれません。だけどね……。そうでなくては彼の雲隠れの理由が曖昧になる。

あるいは彼が打ちのめされたのは、自分なろうとしていたものにそれほど魅力を感じていないことに気付いてしまったこと……。かもしれない。真木さんと、技術を研鑽しあう中で意気投合して始まった関係なら、その進む道に魅力を感じない自分は、真木さんを裏切っているのだと感じてしまったのかもしれない。その辺は、何とも。私はネッド・ソンホじゃないのでいい加減ですけど、その辺りじゃないかなと思うんです。

たかが技術的なもので躓いたなら、彼は乗り越えようと努力したでしょう。

でも、そうやって人間が密集したコックピットの支配者には、本当はなりたくないという自分を発見してしまっただけ……？

一人だけで風と対話する方が好きな自分に気付いてしまったら？

飛竜……あなたなら……どうしますか。

宇宙船で長期ミッションに携わるということは、密室と呼んではいぐらいの閉鎖空間に、いろんなことを考えてる人間が押し込まれて、なんとか上手くやっていく必要があるでしょう？

彼はそれがたぶんできないだろう自分に気付いて、そして、その対極にあるかのような真木さんを……あの時点でたぶん見たくはなかった。

なろうとしていたもの……、それになりたくないということに気付いたら？

* * *

「斉藤という男から、伝言です」

彼の名前は、ネットさんにとっては意味がないだろうけれど。

『斉藤？ だれだそれは……。俺の記憶にはないが？』

「FD候補生ですよ。今回あなたの居場所を、小細工を弄してミスタ川瀬から引き出した張本人です」

『小細工？ 真っ向勝負はしてないってことか？ はっ。ミスタ川瀬らしくもなく、お前たちみたいなガキンちょに一本とられたのかふふん、川瀬が慌てふためくところ、俺一度でいいから見たかった

なあ
』

だれだって、川瀬教官があわてふためくところを見たいんだ。僕はちよつとだけ嘖き出す。そんな些細なことで、ネッドさんに親近感がまつたりと湧いて来る。

「なりたいものと、なろうとしたものが違っていたことなどで、恥じる必要はありません。もし、あの人たちを愛しむ心があるならば、そろそろ、ちゃんと向き合ってもいい頃では？……だそうです」

『ちよつと……長く、飛びすぎたかな……』

……斉藤節を上手く再現できたかは不明だけど、ネッドさんはそう言った。このほとんど一年近くになるモグラの巣での生活をそう言ったのか、それともこのフライトだけについて、そう言ったのかは分からない。でも、大きな翼を持つモグラも……そろそろ、地に降り立つことを、必要としている。それは補助シートにも付いている計器で分かった。

『そろそろ帰ろうか……』

言つな否や、機体は大きく傾いて、方向が変わる。飛び立ってきただけの巣へと、その鼻先が向けられる。何事もなかったかのように悠然と……。

『霧島……、お前、真木をどう思う？』

「どつって言われても……」

『あいつに相応しい器の男は……俺なんかじゃない』

でも、僕は知ってる。真木さんが、あの真木さんが僕なんかの前で泣き崩れるぐらいに、あなたを欲しがってることを……。だから……言った。

「器は知りませんが……、でも、真木さんはあなたを想うこと、全然やめてませんよ……」

『……15日だな。考えておくよ』

風の音で途切れがちな声は……、けれど確かにそう言っていた。

風の上を滑っている大きな翼が巣へと戻っていかうとしてるのが、僕には分かった。

* Golden crew part 2 『たまごどんぶり』 完
* part 3 『トラブル・バーゲン』へつづく…。

27・モゲラの巣（後書き）

ここまでお読みいただいた皆様、お付き合いありがとうございました。

もちろん、彼らの総合実習がともに終わるわきやござんせん。ゆるゆるですが、必ず書きますので是非お楽しみに。

では、できましたら『トラブル・バーゲン』でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4237m/>

たまごどんぶり

2011年10月3日06時15分発行